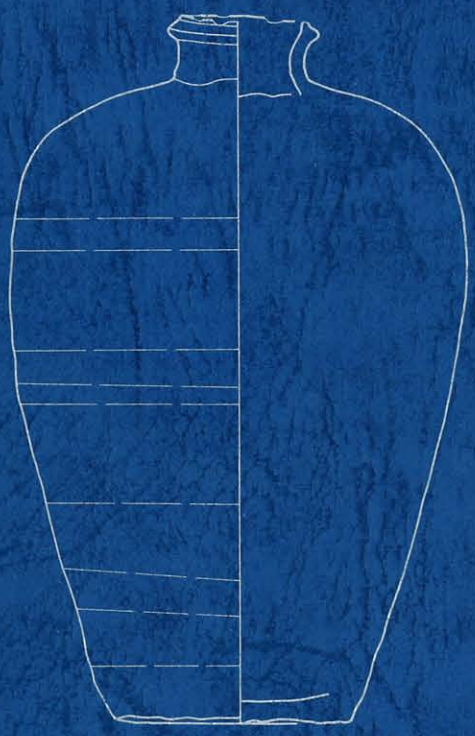
仙台市文化財調査報告書第230集

柳生台畑遺跡

－（仮称）柳生小学校建設関係発掘調査報告書－



1998年

仙台市教育委員会

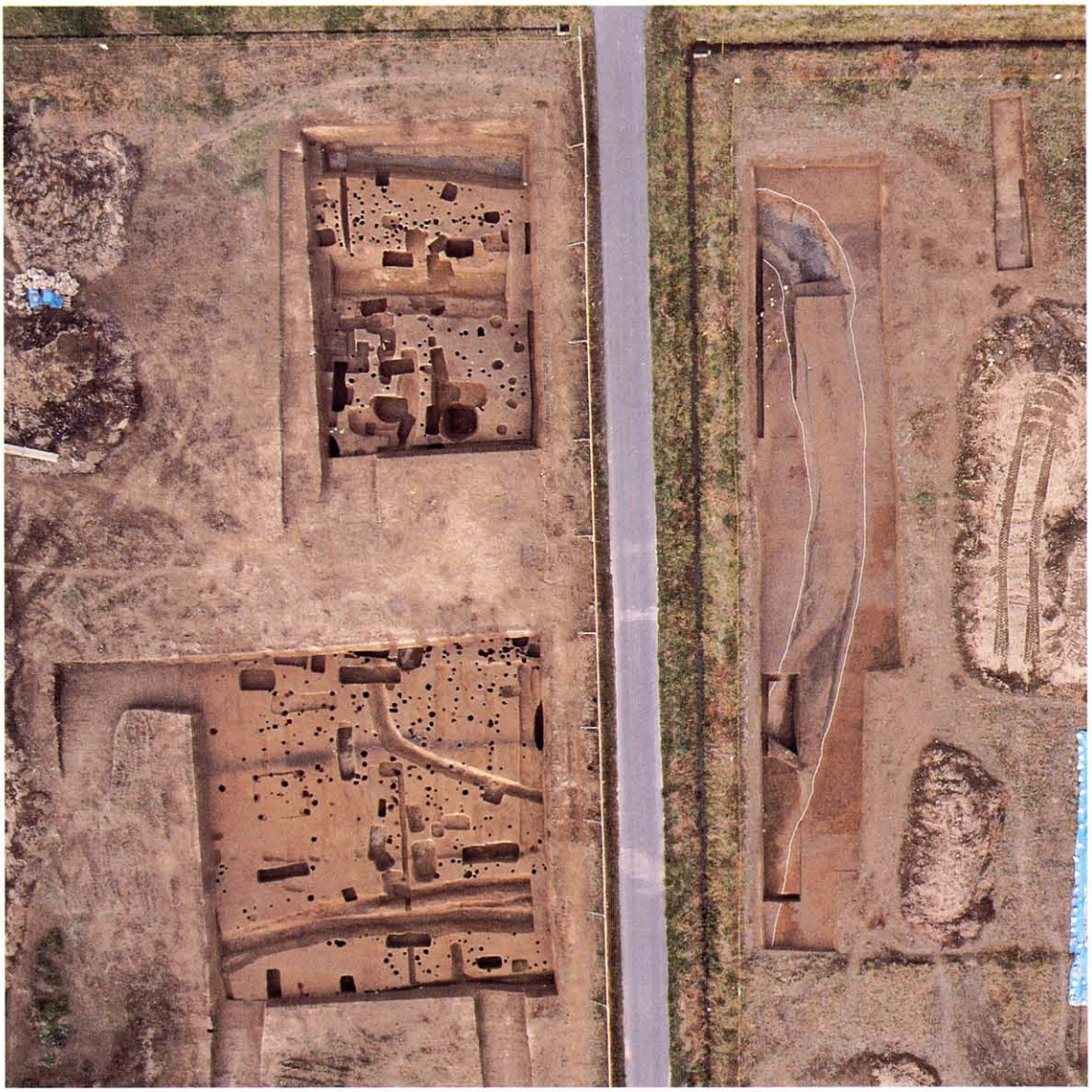
仙台市文化財調査報告書第230集

柳生台畑遺跡

－（仮称）柳生小学校建設関係発掘調査報告書－

１９９８年

仙台市教育委員会



1・2・4区

34号ピット出土
古瀬戸瓶子

序　　文

日頃、仙台市の文化財行政におきまして多大なるご理解、ご協力をいただき、誠にありがとうございます。

柳生台畑遺跡のあります柳生・西中田地区は、近年開通しました都市計画道路「川内－柳生線」と名取川に架かる「太白大橋」により仙台市中心部と直結し、多くの店舗やマンションなどが立ち並び、これに伴い、当地区の人口はここ数年増え続けています。

このため、西中田小学校では地区の児童を一校のみで対処しているのが現状で、多くの児童が長い間にわたりプレハブ校舎による学校生活を余儀なくされるという厳しい状況におかれています。このような理由から、当教育委員会では柳生地区に小学校を新設する計画を立て、その前段階として学校用地内に所在します柳生台畑遺跡の調査に着手することとなったものであります。

遺跡は昭和57年の土地改良事業の際に発見され、当初は古墳時代と平安時代の遺跡と認識されていましたが、この度の発掘調査の結果、それらに加えて中世の屋敷跡や墓地跡が発見されました、墓地跡は一般庶民が葬られたとみられる土坑墓とよばれるものが密集して発見され、屋敷跡に関係するものとしては古瀬戸の瓶子が完全な形で埋められていたなど、極めて貴重な発見がありました。それらはいまだ十分に解き明かされていない中世という時代を理解する上で重要な発見であると考えられています。

私たちは『温故知新』の言葉のとおり、単にいにしえの人々の暮らしを知るのみならず、調査により得た成果を学校教育や社会全般において多くの市民の皆様が活用することで、皆様の将来の暮らし全般に何かしら役立つことがあるものと考えており、本書がその一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査やこの報告書の作成にご協力を賜りました地元の皆様や関係機関各位に心より感謝申し上げる次第です。

平成10年３月

仙台市教育委員会

教育長　堀　籠　克　彦

例　　言

1．本書は仙台市による、（仮称）柳生小学校建設に伴い、平成９年８月から10年１月にかけて実施した仙台市太白区柳生に所在する柳生台畑遺跡の発掘調査の成果を収録したものである。また本書の内容は既に公表している平成９年11月に実施した柳生台畑遺跡現地説明会の内容に優先するものである。

2．本書の作成作業は文化財課調査第一係の佐藤　淳と調査第二係の伊藤孝行が行い、本文執筆・編集は佐藤が行った。なお陶磁器の鑑定に際しては同課職員の佐藤　洋の協力を得た。

3．検出遺構および出土遺物については次の方々から助言をいただいた。（敬称略）

　　井上喜久男、飯村　均、千葉孝弥。

4．写真図版１の『名取郡北方柳生村絵図』は仙台市太白区の柳生寺が収蔵するもので、寺の御好意により写真撮影し、掲載させていただいた。

5．調査および報告書作成に関する諸記録、出土遺物などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．第１図は国土地理院発行の1/25,000の地形図「仙台南西部」・「仙台東南部」を縮小して使用した。

2．第２図は仙台市都市計画課作成の都市計画基本図（平成５年・1/2,500）、第３図は都市計画図（昭和53年・1/2,500）を縮小して使用した。

3．土層注記に記載している土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1997）に基づいて認定した。

4．写真図版１の空中写真は昭和31年に米軍が撮影したものを使用した。

5．調査に関する平面基準は平面直角座標第Ｘ系を使用している。

6．全体図・遺構図

(1)　遺構名については以下の略号を使用し、略号に続く番号は調査時の検出順に付けている。

　　ＳＩ－竪穴住居跡・竪穴建物跡　　ＳＫ－土　坑

　　ＳＤ－溝　跡　　ＳＸ－性格不明遺構

　　ＳＢ－掘立柱建物跡　　ＳＡ－柱列跡

　　Ｐ（ピット）－柱穴・小穴

　　※掘立柱建物跡については室内整理作業時にピットの組合わせから建物を推定復元している。

(2)　層位名は基本層位をローマ数字、遺構内堆積土層位を算用数字で表記し、細分層についてはその後にアルファベットの小文字を付けている。

(3)　遺構図内の焼面や柱痕跡などについてはスクリントーンで示した。

(4)　遺構配置図・溝跡平面図については1/120、その他の遺構図については1/60の縮尺を基本としている。

7．遺物図

(1)　遺物の法量で（　）で示した数値は復元値である。

(2)　土師器図中のスクリントーンは黒色処理を示している。

(3)　遺物図は実寸で作成したものを以下の縮尺で掲載している。

　　土　器：１／３、石製品：１／３、土製品：１／３、鉄製品：１／３、剥片石器：２／３、古銭：２／３

本文・写真目次

序　文
例言・凡例
本文・写真目次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査要項……1
　第３節　遺跡の地理的・歴史的環境……2
　第４節　調査の方法と経過……5
第２章　調査成果……9
　第１節　試掘調査……9
　　１．検出遺構と出土遺物……9
　　（１）土　坑……9
　　（２）溝　跡……11
　　２．基本層出土遺物……17
　第２節　本調査（１～６区）……17
　　１．基本層位……17
　　２．１・２・４区の検出遺構と出土遺物……25
　　（１）竪穴住居跡・竪穴建物跡……25
　　（２）土坑・陶器埋設遺構ほか……29
　　（３）溝　跡……55
　　（４）掘立柱建物跡・柱列跡・ピット……62
　　（５）その他……65
　　（６）基本層出土遺物……66
　　３．３区の検出遺構と出土遺物……68
　　（１）溝　跡……68
　　（２）小溝状遺構群……70
　　（３）基本層出土遺物……71
　　４．５・６区の検出遺構と出土遺物……71
　　（１）溝　跡……71
　　（２）基本層出土遺物……71
　　５．遺構確認調査……71
第３章　自然科学分析……75
　第１節　リン酸分析……75
　第２節　プラント・オパール分析、
　　花粉分析……78
第４章　遺物・遺構の検討……83
　第１節　遺物の検討……83
　第２節　遺構の検討……91
　第３節　遺構の変遷……99

参考・引用文献……104
遺構写真図版……105
遺物写真図版……124

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

太白区西中田、柳生地区は都市計画道路の開通等に伴い、人口が急増している地区であり、当地区は現在西中田小学校の学区となっているが、西中田小学校は市内でも有数の過密校で、これを仮設の校舎で対応している状況である。このことから地域の強い要望を受け、仙台市教育委員会では平成６年８月に柳生地区に小学校を分離新設することを決定した。

平成７年８月、最終的に選定された約19,000㎡の用地予定地には昭和57年の区画整理工事の際に竪穴住居跡が発見され、新たに遺跡登録した柳生台畑遺跡が所在し、加えて、農業振興地域の農用地であることから、その指定除外の必要性が生じることとなった。また平成８年12月に行われた、文化財課、都市計画課、学校施設課をはじめ、関係各課による立地適正調整会議においては、遺跡範囲は予定地の北半部が中心とみられていたことから、校舎等の建設により遺跡が破壊される部分を予定地南半部にしたいという文化財課の希望もあったが、用地内での各施設の配置上、校舎、屋体、プールなどの施設は用地北側を中心に配置される案が提示された。

当初、学校建設に関わる柳生台畑遺跡の発掘調査は平成９年４月開始の予定であったが、農振除外申請についての許可が平成９年以降となること、用地取得交渉が平成９年１月より開始し、５月をもって終了し、のち仮契約へ移行することとなったこと、また施設配置が未決定なことなどの理由から、当遺跡の発掘調査は平成９年８月より開始することが決定した。

第２節　調査要項

１．遺跡名称　柳生台畑（やなぎゅうだいはたけ）遺跡

（宮城県遺跡地名登載番号 01363・仙台市文化財登録番号Ｃ－ 363）

２．調 査 地　仙台市太白区柳生字台畑

３．調査主体　仙台市教育委員会

４．調査担当　仙台市教育委員会文化財課調査第一係

担当職員　佐藤　淳・伊藤孝行

５．調査期間　平成９年８月１日～平成10年１月20日

６．調査面積　調 査 対 象 面 積　約６，５００㎡（校舎・屋体・プール・付け替え道路部分）

試 掘 調 査 面 積　約６２０㎡

本 調 査 面 積　約１，２７０㎡

遺構確認調査面積　約３１０㎡（確認のみ）

７．調査協力　壱岐勝利　名取土地改良区

８．調査参加者

発掘調査参加者

青木　吉次	浅見　禮子	阿部すえ子	阿部美枝子	阿部みのる	阿部美代寿	阿部　洋子
板橋　静江	井筒　孝子	伊藤　　薫	伊藤　清子	伊深みつ子	入間川きみ	遠藤いな子
大久保あき子	大沼みさほ	小田嶋祥子	小野　辰雄	小野寺達重	小畑　和子	加嶋みえ子
菊地　　進	工藤きく子	小林　国子	昆野コトジ	斉藤　慶子	佐々木志津子	佐藤とき子
佐藤　利子	佐藤　久栄	佐藤よしゑ	志賀ひろみ	庄子　弘子	須賀　栄子	菅井きみ子
菅井　君子	鈴木　いし	鈴木　峰子	鈴木みよ子	相馬みち子	竹森　光子	多田　葉子

田中さと子　知野　千鶴　千葉　恭子　早坂みつえ　福山　幸子　本郷　正　三浦　貢
山田千代子　目黒　成一　渡辺　純子　渡辺　洋子　渡部　麗子

整理作業参加者

青山　諒子　泉　美恵子　伊藤　幸子　伊藤　房江　佐藤とき子　佐藤　久栄　鈴木　峰子
関谷　栄子　高橋　勝恵　高橋　美香　千葉　恭子　渡辺　純子

第３節　遺跡の地理的・歴史的環境

柳生台遺跡は仙台市太白区柳生字台畑に所在し、ＪＲ南仙台駅より西へ約１㎞の、仙台市でも南端部に位置する遺跡である。遺跡の規模は東西約400m、南北約320mで、標高は10～12mである。遺跡の北側約600mのところには山形県境に源をもつ名取川が東流し、東方約７㎞のところで太平洋へ注いでいる。仙台市太白区山田地区と名取市熊野堂地区を過ぎた名取川は川幅を増し、南側では段丘面の形成はみられなくなる。柳生・西中田地区の地形は自然堤防と低湿部が入組んでみられ、低湿部には中小様々な旧河道が確認できる。この状況はさらに東側の太白区中田地区や名取市北部にも及んでいるが、その中でも本遺跡の立地する柳生地区の状況は顕著である。

遺跡周辺をみると、周辺より１m程度高くなっている微高地の間に西及び北西方向から延びる旧河道とみられる低位部が横切っており、現況では微高地部が畑、低湿部が水田という土地利用がなされている。遺跡範囲の東側では旧河道と後背湿地による低湿部が広がっており、この状況は今回の調査対象地内でも確認できる。

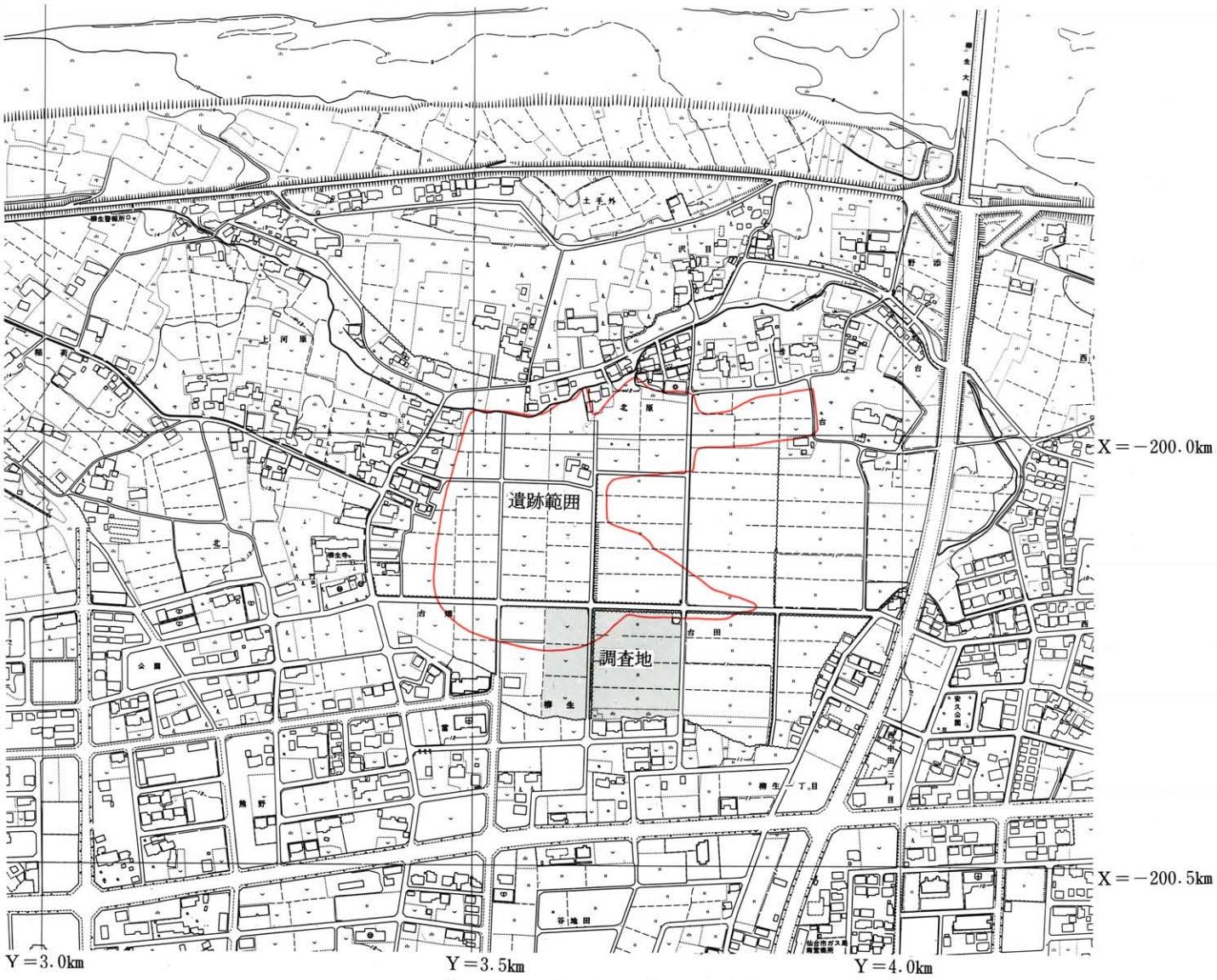
調査地内の地形をみると、現在は近年の区画整理により旧地形が改変されているが、本来登録されている遺跡範囲は調査地北端部に僅かに張出した微高地部のみであった。調査の結果、この微高地に沿った南側には東西方向の旧河道がみられ、これは東端部でより広い低湿部となっていく。また調査地南西部ではさらに南に隣接する旧河道とみられる地区との間であることから、北端部ほどの比高差はないが、やや高まった地形となっている。

周辺の遺跡を概観してみると、遺跡の分布密度は高く、丘陵部を除いた遺跡の立地はほとんどが微高地上を中心にみられる。名取川南岸で旧石器時代の遺跡は確認されておらず、また縄文時代においても安久遺跡で後期の遺物が出土するなど僅かである。この傾向は弥生時代になっても同様で、自然堤防がより発達し、これらの時代の遺跡数が多い北岸部とは異なり、南半部は名取川による土砂の供給は多分に受けながらも、それ以外の中小河川の流路が一定しないことから、人々の活動が活発になるには、まだしばらくの時間を要するものと考えられる。

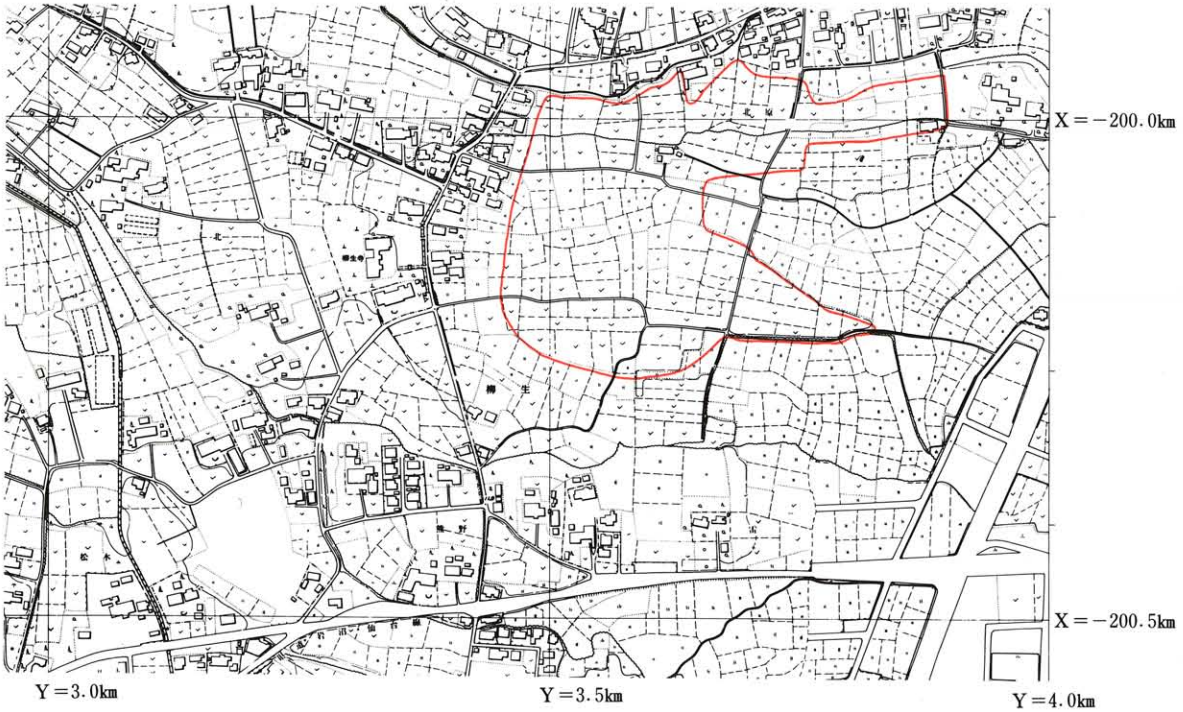
次に周辺の主だった遺跡をみてみると、安久東遺跡では弥生時代前期の土器を含む層のほか、古墳時代前期の前方後方形の周溝墓とその周辺には同時期の竪穴住居跡や平安時代の集落も発見されている。中世では15～17世紀の中で新旧二時期の堀によって方形に区画された屋敷跡が発見され、時代を追って遺跡の変遷がとらえられる遺跡である。また西側に隣接する安久遺跡でも平安時代の竪穴住居跡と中世の堀跡が発見されている。栗遺跡は古墳時代末の７世紀を中心とする集落跡で、40軒以上の竪穴住居跡が発見され、『栗囲式』土師器の標識遺跡となっている。中田南遺跡は縄文時代から中世までの複合遺跡で、主なものでは古墳時代末から奈良時代前半にかけての竪穴住居跡30軒前後のほか、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが多数発見されている。また鎌倉時代と室町時代の屋敷を囲む溝跡や堀跡が発見され、これらの屋敷跡は当時の有力農民層のものである可能性が考えられている。松木遺跡は本遺跡の南西約400mに位置し、本遺跡との関わりも考えられる遺跡である。中世では鎌倉時代の屋敷跡と考えられる掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡が発見された。またここでは近世の建物跡や溝跡、土坑なども発見されており、これらは多量に出土した陶磁器から、16～19世紀のもので、この中で遺構は３時期の変遷があることがわかった。

No.	遺跡名	種別	立地	年代	No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	北前遺跡	集落跡	段丘	旧石器・縄文・古墳・古代・近世	28	鹿野東遺跡	包含地	沖積地	縄文・弥生・古墳・古代
2	山田上ノ台遺跡	集落跡	段丘	旧石器・縄文・古代・近世	29	川上遺跡	包含地	沖積地	縄文・弥生・古代
3	山田条里遺跡	条里遺構	段丘	縄文・古代・近世	30	八ツ口遺跡	包含地	自然堤防	古代・中世・近世
4	上野遺跡	集落跡	段丘	縄文・古代	31	舞台中遺跡	集落跡	旧河道	古代
5	三神峯遺跡	集落跡	段丘	縄文・古代	32	乗馬遺跡	集落跡	自然堤防	古代
6	鍛治屋敷A遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・古代	33	高畑遺跡	包含地	沖積地	弥生・古墳・古代
7	鍛治屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・古代	34	今熊野遺跡	集落跡・貝塚	丘陵	縄文・弥生・古墳・古代
8	富沢館跡	城館跡	自然堤防 後背湿地	中世	35	松木遺跡	集落跡	自然堤防	古代・中世・近世
9	富沢遺跡	水田跡　他	後背湿地	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世	36	関場遺跡	包含地	自然堤防	古墳・古代
10	山口遺跡	集落跡	自然堤防 後背湿地	縄文・弥生・古墳・古代・中世	**37**	**柳生台畑遺跡**	**屋敷跡・墓地跡**	**自然堤防**	**古墳・古代・中世・近世**
11	下ノ内浦遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古代・中世	38	雷遺跡	包含地	自然堤防	古代
12	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古代・中世	39	雷東遺跡	包含地	自然堤防	古代
13	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・近世	40	安久遺跡	集落跡	自然堤防 後背湿地	縄文・弥生・古代・中世
14	大野田古墳群	古墳群　他	自然堤防	古墳・古代・中世	41	安久東遺跡	集落跡・古墳群	自然堤防	弥生・古墳・古代・中世・近世
15	元袋遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古代・中世・近世	42	栗遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・古代
16	大野田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代	43	清水遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・古代
17	王ノ壇遺跡	古墳・集落跡他	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世	44	原遺跡	包含地	沖積地	縄文・弥生・古墳・古代
18	皿屋敷遺跡	集落跡	自然堤防	古代・中世	45	前田遺跡	館跡	自然堤防	中世
19	郡山遺跡	官衙跡・水田跡地	自然堤防 後背湿地	縄文・弥生・古墳・古代	46	北遺跡	包含地	自然堤防	古代
20	北目城跡	城館跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代	47	中田南遺跡	集落跡・館跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世
21	欠ノ上Ⅰ遺跡	包含地	自然堤防	古墳・古代・中世	48	上余田遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・古代
22	小館(古館)遺跡	城館跡	丘陵	中世	49	沢目遺跡	包含地	自然堤防	弥生・古墳・古代
23	熊野堂大館跡	城館跡	丘陵	中世	50	後河原遺跡	水田跡	自然堤防	弥生・古代・中世・近世
24	熊野那智神社	神社跡	丘陵中腹	中世・近世	51	下余田遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・古代
25	高館城跡	城館跡	丘陵	中世	52	中田畑中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・古代
26	大館山館跡	城館跡	丘陵	中世	53	戸ノ内遺跡	集落跡・城館跡	自然堤防	弥生・古墳・古代・中世
27	桑島館跡	城館跡	丘陵	中世	54	四郎丸館跡	集落跡・城館跡	自然堤防	古墳・古代・中世・近世

第１図　柳生台畑遺跡周辺の遺跡



第２図　遺跡の位置と範囲（現在）



第３図　遺跡の位置と範囲（区画整理前）

第４節　調査の方法と経過

［調査区の設定］

小学校建設予定地は東西約160m、南北約120m、面積が19,200㎡で、この中には校舎とこれと独立して屋内運動場とプールを建設する計画であった。また現在、予定地中央にある市道を西端に移し替えることとなったため、これらの構造物全体が地下遺構を損なう恐れが生じた。しかし調査準備段階での７月時点では市道部分についての位置は確定していたが、建物部分については各々の配置が決定しておらず、唯一提示されたのは調査の必要性がないとみられる校庭部分が予定地南東部ということのみであった。このため当初、調査はまず遺構、遺物の有無を確認するための試掘調査を実施する計画であったことから、試掘区の設定に関しては市道部分に加え、建物配置が予想される北及び西半部全域を対象とすることにより、建物配置に対応せざるを得ない状況となった。

試掘トレンチは長さ15m、幅2.5mを基本とし、１～５トレンチは幅９mの市道部分、６～10トレンチは現市道の西側、11～17トレンチは現市道の東側北半部に合計で17か所設定した。次に試掘結果を踏まえ、より広範囲な調査の必要性があると認められた４つの地区について本調査区を設定した。１区は６トレンチ東側に19×13m、２区は８トレンチを中心に22.5×21.5m、３区は14トレンチの西側に14×12.5mの規模で設けたが、４区については当初、11・12トレンチをつなぐ形で東側に拡張する考えであったが、最終的には両トレンチ間が建物配置部分から外れたことから、11トレンチを中心とした22×８mを４Ａ区、12トレンチを中心とした18×6.5mを４Ｂ区とし、この間については遺構検出のみに止め、掘り込みは行っていない。以上の調査区とは別に予定地内にポンプ施設２か所と倉庫等の建物が新たに提示されたことから、予定地北西及び北東隅のポンプ施設をそれぞれ５区、６区とした。またこれまでの調査区で検出した溝跡の延長を確認するために、18～29の計12の遺構確認トレンチを従来の調査区間に配置した。これらの規模は任意で、ここでの遺構の掘り込みは行っていない。

［調査の経過］

調査予定地は現況は西半部が畑、東半部が水田となっており、特に畑部分では除去すべき表土が厚いことから、調査はまず重機を使用しての表土剥ぎから開始した。試掘ということもあり、掘削は現耕作土および区画整理前の耕作土の除去に止め、これより下層は人力により掘り下げた。１～10トレンチでは１トレンチ以外で溝跡、土坑等が検出されたが、これらの時期や性格が不明なことから、基本的に試掘時検出の遺構は全て掘り込み、図化している。続く11～17トレンチでは11・12トレンチ検出の溝跡や、小溝状遺構、土坑は掘り込んでいるが、この地区は旧河道上で、水田作土とみられる層や自然層が厚く堆積していることから、後の作業工程上、13～16トレンチについては面積を半分程度に止め、残りは本調査と並行して行うこととした。試掘調査終了時には18～29トレンチでの遺構検出作業を行った。

試掘調査の結果を踏まえて設定した本調査区は１～４区で、調査はまず１・２区を重機により表土除去した後、遺構の検出・掘り込み作業を並行して行った。２区ではⅤ層面での調査終了後、一部に下層調査区を設け、調査を終了したが、１区については北半部はⅤ層面、南半部はⅡ層面で検出した溝跡や多数の土坑を掘り込んだ後、Ⅱ層水田跡やⅢ・Ⅳ層面でも僅かであるが土坑が検出されたため、これらを掘り込んだ。また南半部ではⅤ層中より竪穴住居跡が検出されたことから、周囲のⅤ層を掘り下げると同時に北側のⅤ層面での段差部分での下層調査を行った。１区調査の終盤には４区に入り、ここではまず４区を縦断する溝跡の検出作業を行った後、４Ａ・４Ｂ区の拡張部を含めた溝跡や土坑を掘り込み、Ⅴ層面を出し、４Ａ区北端部で下層調査を行った。４区と並行して行った３区では、幾つかの溝跡と小溝状遺構が検出され、これを調査した後に北壁際にトレンチ状の下層調査区を設け、基本層位の把握に努めた。５区では溝跡調査の後、東壁際に下層調査を行い、６区では遺構は検出されなかったが、西半部を掘り下げたところ、縄文土器を包含する層がみられたことから一部拡張した。最後に13・15・16トレンチの未掘部分の掘り下げを再開したが、16トレンチで小溝が検出された以外、遺構はみられず、１月20日、これをも

って全ての調査を終了した。

［検出遺構の記録］

調査区及び検出遺構を図化するため、まず調査地内での基準点の設置を㈱アジア航測に委託した。基準点は名取市田高にある国土地理院設置の三等三角点を使用し、ここよりＧＰＳを用いて移設した５つの点を調査地周辺に配した。各試掘トレンチはこの基準点からトレンチ四隅の座標数値を求め、後日復元した。トレンチ内での図化は中央に任意のラインを設定し、これを基に簡易遣り方測量を行った。１～４区の図化にあたっては、同基準点を基に平面直角座標第Ｘ系に沿い、１区周囲に14点、２区内部に９点、３区周囲に14点、４区周囲に12点を10ないし５ｍ間隔の座標杭を設置した上で、これを基に簡易遣り方測量により1/20及び1/10の遺構平面・断面図を作成した他、各区ごとに1/20で基本層位の断面図を作成した。グリットラインは国土座標数値をそのまま呼称し、遺物取上げは各遺構ごとに取上げ、基本層中のものは各区、トレンチごとに行った。

写真による記録は主に35㎜カメラにモノクロ、カラーリバーサルフィルムを使用した他、６×７判カメラにモノクロフィルムを併用した。また11月28日には㈱シン技術コンサルに委託し、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、カメラは６×６判でモノクロ、カラーリバーサル、カラーネガフィルムを使用した。

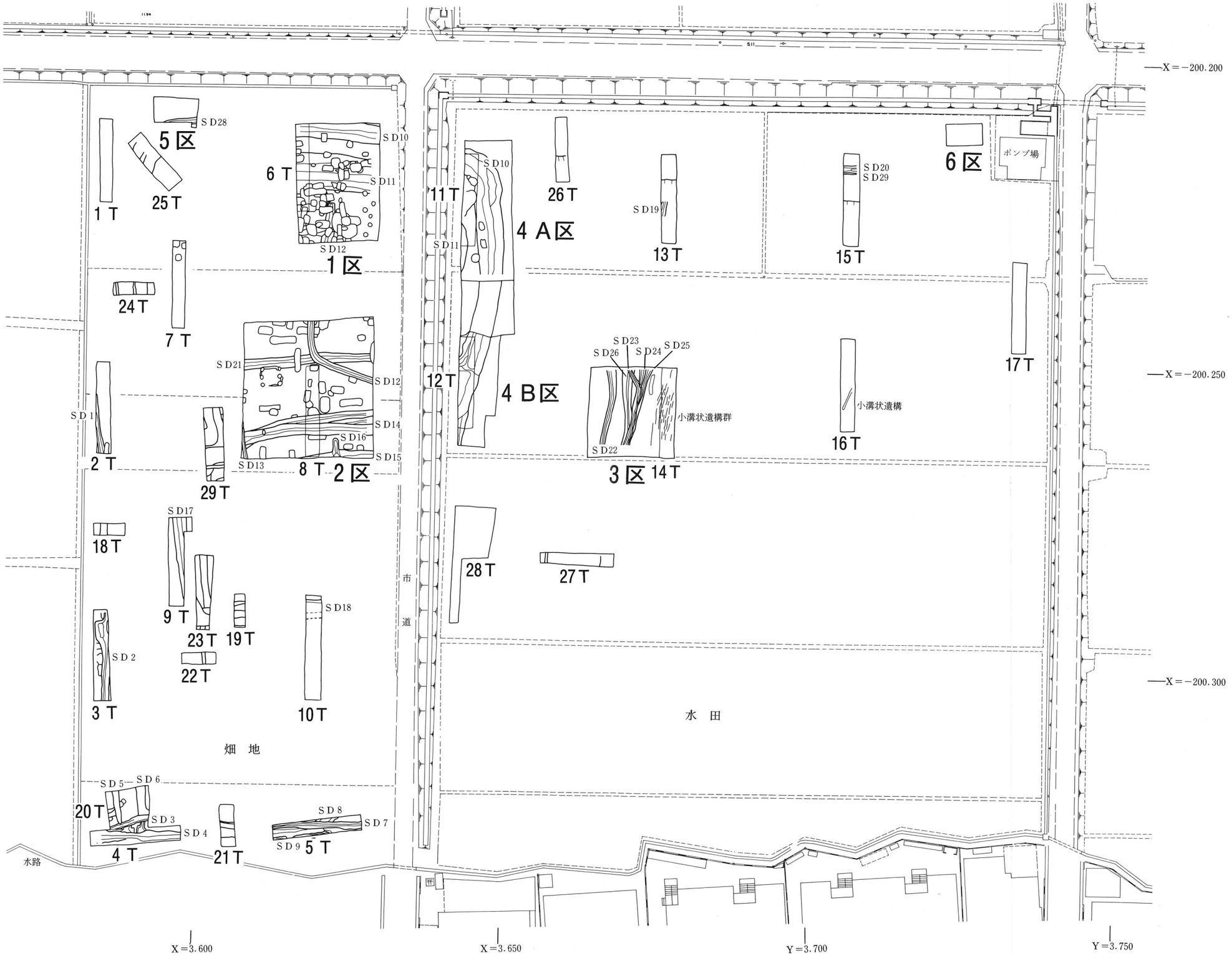
［その他］

１区・４区では水田跡に伴う擬似畦畔が検出された他、東半部のトレンチでは水田作土の可能性のある層が確認され、また３区や16トレンチでは畑跡に伴うとみられる小溝状遺構が検出されたことから、これらを検証すべく、１区・３区・15トレンチ・16トレンチにおいてプラント・オパール分析試料と３区では花粉分析試料の採取を行い、㈱古環境研究所に分析依頼し、また土坑墓とみられる１・２区の土坑中の土壌を採取し、㈱パリノ・サーヴェイにリン酸の分析依頼をした。

普及啓発作業では１・２・４区で発見された中世の屋敷跡と考えられる遺構群や土坑墓群の資料的価値が高いことから、11月27日には報道発表を行い、11月29日には一般市民を対象とした現地説明会を開催した。

トレンチ番号	規模（ｍ）	面積（㎡）	検出遺構	備考
1	13.5×2.2	29.70	なし	
2	15.0×2.4	36.00	ＳＫ１、ＳＤ１	
3	14.8×2.6	38.48	ＳＫ５・６・７・８・９、ＳＤ２	
4	14.8×2.4 6.3×1.3	43.71	ＳＤ３・４・５・６	
5	14.7×2.5	36.75	ＳＤ７・８・９	
6	14.6×2.2	32.12	ＳＫ10・11・12・16・17・18・19・38・123、ＳＤ10・11・ピット	本調査１区
7	14.6×2.2	32.12	ＳＫ２・３・４	
8	14.7×2.2	32.34	ＳＫ13・14・15・20・21・22、ＳＤ14、ピット	本調査２区
9	14.5×2.6	37.70	ＳＤ17	一部拡張
10	17.1×2.7	46.17	ＳＤ18	
11	14.8×2.4	35.52	ＳＤ10	本調査４区北
12	14.9×2.4	35.76	ＳＤ10	本調査４区南
13	14.5×2.5	36.25	ＳＤ19	
14	15.0×2.3	34.50	小溝状遺構群	本調査３区
15	15.0×2.7	40.50	ＳＤ20・29	
16	15.2×2.4	36.48	小溝状遺構	
17	15.0×2.3	34.50	なし	

第１表　試掘トレンチ一覧



第4図　調査区位置・遺構全体図

第２章　調査成果

第１節　試掘調査

１．検出遺構と出土遺物

ここで報告するのは、当初、試掘調査区として設定した17か所のうち、後に本調査区として拡張した６・８・11・12・14トレンチを除いたトレンチにおいて検出された遺構・遺物であり、検出遺構には土坑、溝跡などのほか、畑跡に伴うとみられる小溝がある。

（１）土　坑

ＳＫ１　土坑

２Ｔ、Ⅴ層上面で検出し、ＳＤ１を切る。形態は溝状を呈する長楕円形とみられるが、堆積土の状況から溝跡とは区別した。規模は長軸180cm以上、短軸67cm、深さ41cm以上である。長軸方向はＮ－８°－Ｅである。断面形は舟底状で、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は１層で、自然堆積とみられる。出土遺物は美濃（志野）産の菊皿が１点で（９図10）、口縁部を打ち欠いたのちに擦っており、また畳付も擦っている。

ＳＫ２　土坑

７Ｔ、Ⅴ層上面で検出した。形態は隅丸正方形で、規模は長軸113cm、短軸 100cm以上、深さ73cmである。長軸方向はＮ－５°－Ｗである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ３　土坑

７Ｔ、Ⅵ層上面で検出した。形態は不明で、規模は長軸119cm、短軸75cm以上、深さ34cmである。長軸方向は不明である。底面はやや中央が窪むがほぼ平坦で、壁面は直立する。堆積土は１層で、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ４　土坑

７Ｔ、Ⅳ層上面で検出した。形態は不明で、規模は長軸135cm以上、短軸110cm以上、深さ63cmである。長軸方向は不明である。断面形は舟底状を呈し、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は４層で、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ５　土坑

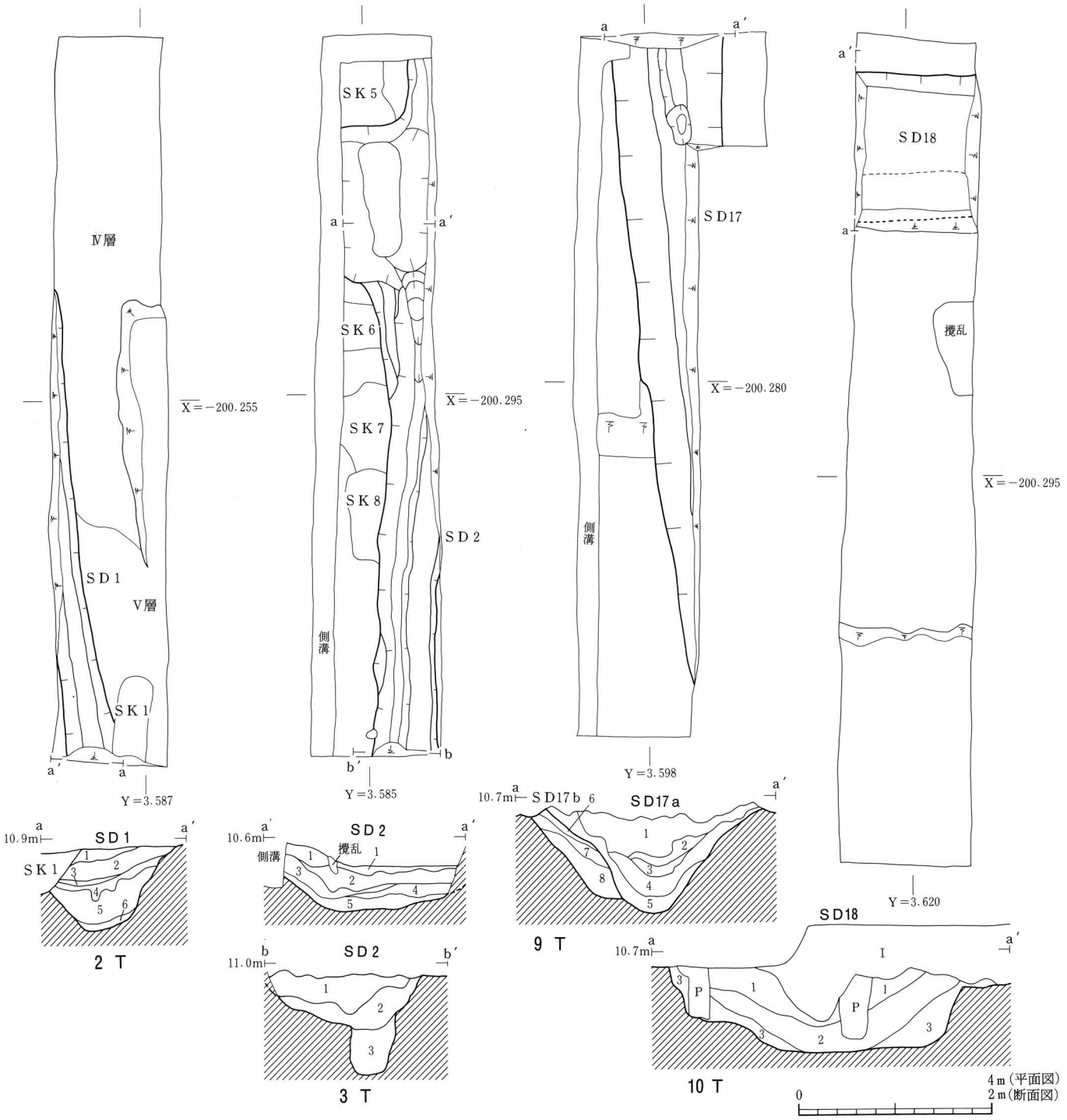
３Ｔ、Ⅴ層上面で検出し、ＳＤ２に切られる。形態は一部がややくびれる長楕円形で、規模は長軸415cm以上、短軸125cm、深さ82cmである。長軸方向はＮ－Ｓである。底面は平坦で、壁面はオーバーハング気味に直立する。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物は土師器１点がある。

ＳＫ６　土坑

３Ｔ、Ⅴ層上面で検出し、ＳＤ２に切られる。形態は長楕円形とみられ、規模は長軸120cm以上、短軸100cm、深さ44cm以上である。長軸方向はＷ－Ｅである。底面はほぼ平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ７　土坑

３Ｔ、Ⅴ層上面で検出し、ＳＤ２に切られる。形態は不整形で、規模は長軸200cm、短軸190cm以上、深さ68cmである。長軸方向は不明である。底面は傾斜があるが平坦で、壁面は一部でオーバーハングしながら直立する。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物は土師器１点がある。



トレンチ	遺構	層位	土色	土性	備考
2T	SD1	1	褐色 10YR4/4	シルト	酸化鉄斑を全体に含む
		2	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	暗灰黄色ブロックを少量含む
		3	にぶい黄褐色 2.5Y5/4	シルト	
		4	オリーブ褐色 2.5Y4/3	シルト	褐色シルトブロックを多量含む
		5	黄褐色 2.5Y5/3	シルト	酸化鉄斑を全体に多量含む
		6	黄褐色 2.5Y5/3	シルト	黄褐色砂質土を層状に挟む
3T	SD2（中央部）	1	黄褐色 10YR5/6	砂質シルト	にぶい黄褐色シルトブロック、酸化鉄斑を全体に少量含む
		2	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質シルト	炭化物ブロックを少量含む
		3	灰黄褐色 10YR6/2	シルト	酸化鉄・マンガン斑を全体に含む
		4	灰黄褐色 10YR5/2	シルト	灰黄褐色土を層状に挟み、酸化鉄斑を多量含む
		5	灰黄褐色 10YR5/2	シルト	にぶい黄橙色シルトブロックを少量、酸化鉄斑を多量含む
	SD2（南壁）	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	にぶい黄橙色小ブロックを全体に含む
		2	灰黄褐色 10YR5/2	シルト	酸化鉄斑を全体にまばらに含む
		3	灰黄褐色 10YR5/2 にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト シルト	＞ 互層

トレンチ	遺構	層位	土色	土性	備考
9T	SD17a	1	褐色 10YR4/4	砂質シルト	灰黄褐色シルトブロックを層下半に含む
		2	灰黄褐色 10YR5/2	シルト	酸化鉄斑を全体に含む
		3	灰黄褐色 10YR6/2	粘質シルト	酸化鉄斑を全体に含む
		4	灰黄褐色 10YR5/2	シルト	酸化鉄斑を全体に含む
		5	灰黄褐色 10YR5/3	シルト	層下半に一部砂質シルトブロック、酸化鉄斑を全体に含む
	SD17b	6	にぶい黄橙色 10YR6/4	粘質シルト	酸化鉄斑を全体に含む
		7	灰黄褐色 10YR6/2	粘質シルト	
		8	灰黄褐色 10YR5/2 灰黄褐色 10YR6/2	シルト 粘質シルト	＞ 互層
10T	SD18	1	灰黄褐色 10YR5/2	砂質シルト	Ⅴ層・にぶい黄褐色土小ブロック、炭化物粒を少量含む
		2	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質土	層下半はにぶい黄橙色砂質土との明瞭な互層となる
		3	黄褐色 2.5Y5/3	砂質土	一部にぶい黄褐色砂質土との不明瞭な互層となる

第5図　試掘トレンチ（1）

ＳＫ８　土坑

３Ｔ、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ２に切られる。形態は楕円形とみられ、規模は長軸205cm、短軸103cm以上、深さ48cmである。長軸方向はＮ－Ｓである。底面は平坦で、壁面は南端部で抉られオーバーハングするが、壁面の崩落によるものとみられる。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物は土師器３点がある。

ＳＫ９　土坑

３Ｔ、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ２に切られる。調査区壁面を中心とした僅かな検出のため、形態は不明で、規模は長軸280cm以上、短軸27cm以上、深さ20cm以上とみられる。長軸方向は不明である。また堆積土の全体は明らかでないが、確認できる状況から人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

（２）溝　跡

ＳＤ１　溝跡

２Ｔで検出し、検出面は北半部がⅣ層、南半部がＶ層上面である。調査区南端部でＳＫ１に切られている。確認長は約10ｍで、溝幅は断面からみて150cm程とみられるが、北側ではやや狭くなっている。深さは80～90cmである。方向はＮ－８°－Ｗである。底面幅は狭く、壁面はそれほど急ではない。堆積土は６層で、全体にブロック土も含むが、最下層は砂質土を層状に挟む層で、自然堆積とみられる。ＳＤ１は南下し、18Ｔで検出された溝跡や、３Ｔ検出のＳＤ２に続くものとみられる。出土遺物は無い。

ＳＤ２　溝跡

３Ｔで検出し、検出面はＶ層上面である。調査区北半部でＳＫ５・９、中央部でＳＫ６～８を切っている。またこの溝跡は西側に張出す部分がみられる。確認長は約15ｍで、溝幅は160cm程、張出し部で250cm、深さは１ｍ前後とみられる。方向はＮ－５°－Ｅである。断面形は下半部が狭く、上端幅50cm以内で、底面幅は狭く、壁面が直立しているが、上半部は壁面の立上がりが緩やかで、溝全体からみると、東側がテラス状に平坦面を形成している。堆積土は３層で、張出し部分では５層に分層されたが、いづれも自然堆積とみられる。ＳＤ２は南下して４Ｔ、20Ｔで検出されたＳＤ５、或いはＳＤ６に続き、ＳＤ４に合流するものとみられる。出土遺物は土師器２点、須恵器２点、燻し瓦１点がある。

ＳＤ３　溝跡

４Ｔと北側の20Ｔで検出し、検出面はＶ層上面である。ＳＤ４・５・６を切っている。確認長は約９ｍで、溝幅は広いところで90cm、深さ20～30cmである。方向はＮ－74°－Ｅである。底面幅は狭く、起伏がみられ、壁面は緩やかに立上がっていく。堆積土は１層で、全体が細砂で占められ、底面には粗砂がみられることから、短時間に埋まった自然堆積とみられる。ＳＤ３は東流して21Ｔで検出され、重複関係や位置関係から５ＴのＳＤ７に続くものとみられる。出土遺物は須恵器２点、在地産の中世陶器の甕２点、燻し瓦１点がある。（９図13）は甕の口縁部破片で、受口状を呈する。

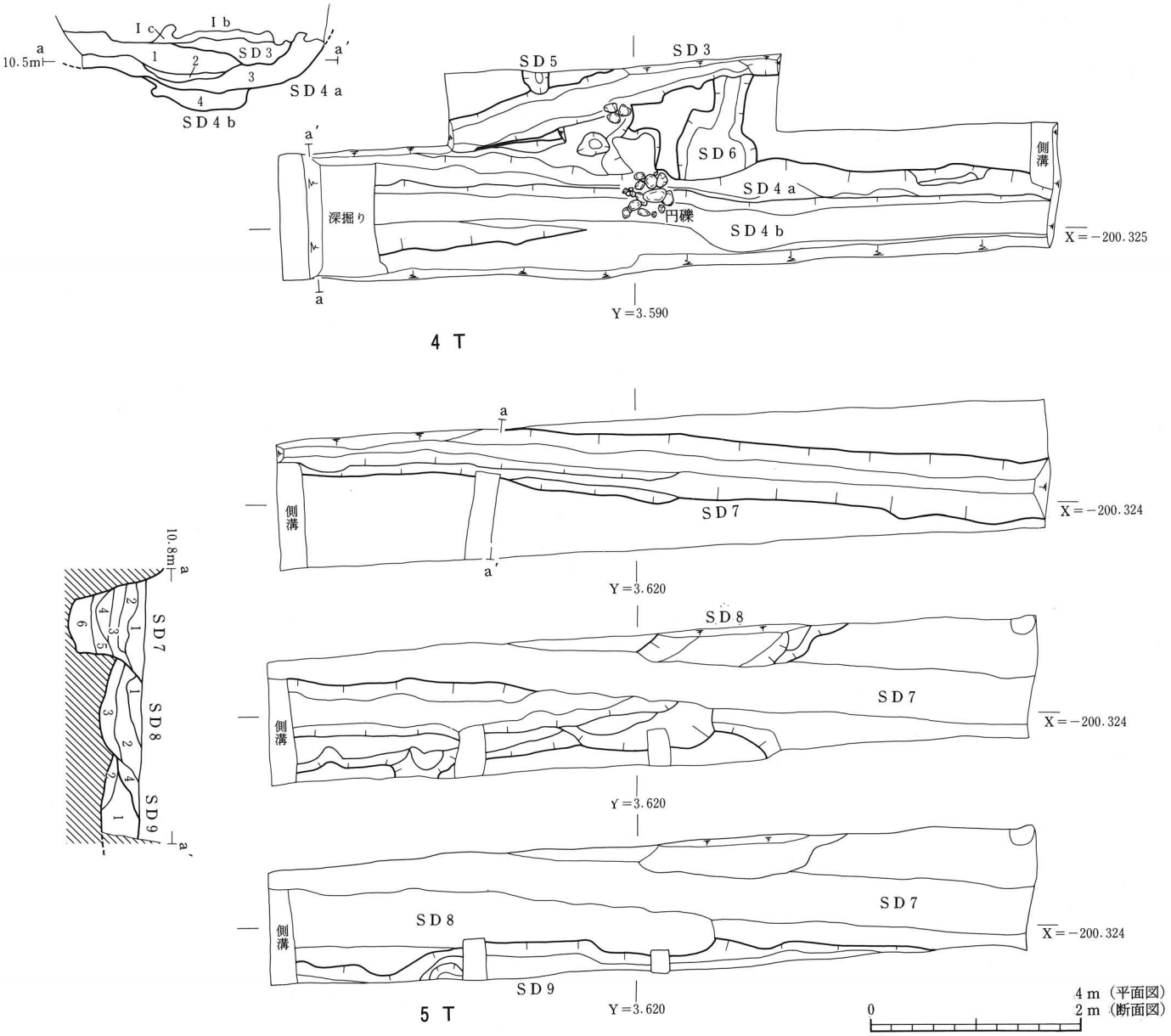
ＳＤ４ａ・４ｂ　溝跡

４Ｔで検出し、検出面はＶ層上面である。ＳＤ３に切られるが、北側でみられるＳＤ５・６とは接続部の状況からみて、同時存在していたものと考えられる。確認長は約14ｍで、底面や断面の状況から、古い段階のＳＤ４ｂと、それが一部埋まった後に掘り直したとみられるＳＤ４ａに分けられる。ＳＤ４ａの溝幅は250cm以上、深さ50～60cm、ＳＤ４ｂは幅１ｍ前後、深さは20cm程の残存となっている。方向はいづれもＮ－88°－Ｗ程度である。断面形はＳＤ４ａは緩やかな舟底状で、底面幅は広く、壁面の立上がりは緩やかである。ＳＤ４ｂは下半部のみの残存であるが、底面幅は狭く、壁面は急に立上がるものである。堆積土はＳＤ４ａが３層、４ｂが下部に粗砂を含む１層のみが確認され、いづれも自然堆積とみられる。ＳＤ４は21Ｔで確認され、５Ｔの中でも最も古いＳＤ９に続くものとみられる。出土遺物はＳＤ4ａから須恵器１点、在地産の中世陶器の甕など６点、瀬戸・美濃産の小皿１点、

美濃（志野）産の丸皿１点、器種不明の瓦質土器１点、燻し瓦１点がある。（９図11）は底部が欠損している。同一層からは（９図８）が出土しており、底部は削り込んだ碁笥底である。

ＳＤ５　溝跡

４Ｔ・20Ｔで検出し、検出面はＶ層上面である。ＳＤ３に切られるが、南下してその南端部でＳＤ４に接続している。確認長は約6.5ｍで、溝幅は広いところで１ｍ程度であるが、ＳＤ４との接続部ではプランも不明瞭で、浅くなり、幅は広くなりながらＳＤ４へと続いていく。深さ、全体の断面形は不明である。20Ｔでみた方向はＮ－５°－Ｗである。出土遺物は在地産の中世陶器の甕１点がある。



トレンチ	遺構	層位	土色	土性	備考
4Ｔ	ＳＤ３	1	褐色 10YR4/6	砂質土(細砂)	下部に一部粗砂、底面に酸化鉄斑を含む
	ＳＤ４ａ	1	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質シルト	酸化鉄斑を多量含む
		2	灰黄褐色 10YR6/2	粘質シルト	酸化鉄斑を少量含む
		3	褐灰色 10YR4/1	粘質シルト	下部に細砂を層状に挟み、酸化鉄斑を少量含む
	ＳＤ４ｂ	4	黒褐色 10YR3/2	粘質シルト	灰黄褐色ブロックを多量、下部に細砂・酸化鉄斑を少量含む
	ＳＤ５	注記なし			
	ＳＤ６	注記なし			
5Ｔ	ＳＤ７	1	にぶい黄褐色 10YR5/3	シルト	にぶい黄褐色シルトブロックを層上半に含む
		2	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	酸化鉄斑を多量含む
		3	灰黄褐色 10YR5/2	粘質シルト	酸化鉄斑を全体に少量含む
		4	褐灰色 10YR5/1	粘質シルト	酸化鉄斑を全体に少量含む
		5	灰黄褐色 10YR5/2	粘質シルト	酸化鉄斑を全体に少量含む
		6	にぶい黄色 2.5Y6/4	砂質土	
	ＳＤ８	1	にぶい黄褐色 10YR5/3	シルト	酸化鉄斑を全体に含む
		2	灰黄褐色 10YR6/2	砂質シルト	酸化鉄斑を全体に含む
		3	灰黄褐色 10YR5/2	砂質シルト	酸化鉄斑を全体に含む
		4	黒褐色 10YR3/2	シルト	にぶい黄褐色砂質シルトを層状に数枚挟む
	ＳＤ９	1	灰黄褐色 10YR6/2	砂質シルト	黄褐色砂質土を層状に挟む
		2	にぶい黄色 2.5Y6/4	砂質土	灰黄褐色砂質シルトをブロック状に含む

第６図　試掘トレンチ（２）

ＳＤ６　溝跡

４Ｔ・20Ｔで検出し、検出面はＶ層上面である。ＳＤ５同様にＳＤ３に切られるが、南下してその南端部でＳＤ４に接続している。確認長は約７ｍで、溝幅は20Ｔで150㎝程で一定しているが、ＳＤ３と４との間で幅が狭くなり、再び広がりながらＳＤ４に取付いている。深さ、全体の断面形は不明である。20Ｔでみた方向はＮ－２°－Ｗで、ＳＤ５とほぼ平行関係にある。またＳＤ６は20Ｔ南東部で東へ分岐するプランが確認されており、これは５ＴのＳＤ８に続く可能性がある。出土遺物は無い。

ＳＤ７　溝跡

５Ｔで検出し、検出面はＶ層上面である。南側でほぼ平行して東流するＳＤ８を切っている。確認長は14.5ｍで、溝幅は100～120㎝、深さは70㎝程である。底面は幅が狭く、壁面は全体に立上がりは急であるが、上半部がやや緩やかになる箇所もみられる。方向はＮ－85°－Ｗである。堆積土は６層で、最下層は砂質土だが、全体に粘性が強く、自然堆積とみられる。ＳＤ７はこのトレンチに限っては重複するＳＤ８・９に比べて溝幅が狭く、深さはあり、断面形状からみても異なるものであるが、この溝が東側にどのように延びるかは不明である。出土遺物は美濃（志野）産の丸皿１点、古銭１点がある。

ＳＤ８　溝跡

５Ｔで検出し、検出面はＶ層上面である。ＳＤ８はトレンチ中央で交差するＳＤ７に切られ、また南側に平行して走るＳＤ９を切っている。確認長は約11ｍで、溝幅は２ｍ以上とみられるが、ＳＤ７に切られていることから全体は不明である。深さは全体に浅く、40㎝である。断面形は緩やかな舟底状を呈し、壁面へとつながる。方向は西半部ではＳＤ７・９同様に東へ向うが、トレンチ中央部で方向を変え、北東方向へ延びている。またこの屈曲部分から東側に段差がみられ、反対側の立上がりはＳＤ７に切られ不明であるが、浅いながらも東方向へ向う流れの可能性があることも考えられる。堆積土は４層で、全体にシルト質であるが、南側にみられる４層はシルト質層が数枚、層状に重なる層で、断面形状からみて、溝の掘り直し前に堆積した層である可能性が強い。出土遺物は無い。

ＳＤ９　溝跡

５Ｔで検出し、検出面はＶ層上面である。北側でほぼ平行して東流するＳＤ７に切られている。確認長は約12.5ｍで、溝幅は南壁が調査区外のため不明であるが、1.5ｍ以上はあるものと推定され、深さは40㎝以上とみられる。断面形はＳＤ８同様に舟底状を呈し、底面に明瞭な平坦面はみられず、壁面はかなり緩やかに立上がるものとみられる。方向はＷ－Ｅである。確認できる堆積土は２層で、砂質土を主体としている自然堆積層である。ＳＤ９は４Ｔで検出されたＳＤ４とみられ、ＳＤ４の状況からみると、ＳＤ９は後世の耕作により残存が極めて悪いものとなっているが、溝上半については本来は幅の広く、より深いものであったとみられる。しかしながら、５ＴについてはＳＤ４が新旧２時期に分かれるような状況は確認できなかった。出土遺物は無い。

ＳＤ１７ａ・１７ｂ　溝跡

９Ｔで検出し、検出面はＶ層上面である。他遺構との重複はみられないが、断面・底面形状からみて、ほぼ同位置に新しいＳＤ17ａと僅かに西側にずれる古い17ｂの新旧２時期があることがわかった。確認長は約13ｍで、溝幅は約２ｍ、深さは１ｍ程度と、溝幅のわりには深いものである。ＳＤ17ａの形状は断面形は底面幅はなくＶ字形を呈し、壁面は変化なく立上がって行き、西壁の上半部の一部で傾斜がやや緩やかになっている。ＳＤ17ｂについては規模、形状、深さ共に17ａと同様のものとみられるが、詳細は不明である。方向はＮ－７°－Ｗで直線的に南へ延びていく。堆積土は17ａが５層、17ｂが３層に分層され、全層とも自然堆積とみられるが、特に17ｂの最下層については、シルトと粘質シルトの互層となり、長い期間にわたり堆積したものとみられる。ＳＤ17については北側で24Ｔ検出の溝跡と、２区検出のＳＤ14のいづれかの続きである可能性が考えられる。また溝跡の南側については、東に隣接する23・19Ｔでのプラン確認状況から、ＳＤ17は23Ｔ南端部で方向を東へ変えることがわかった。出土遺

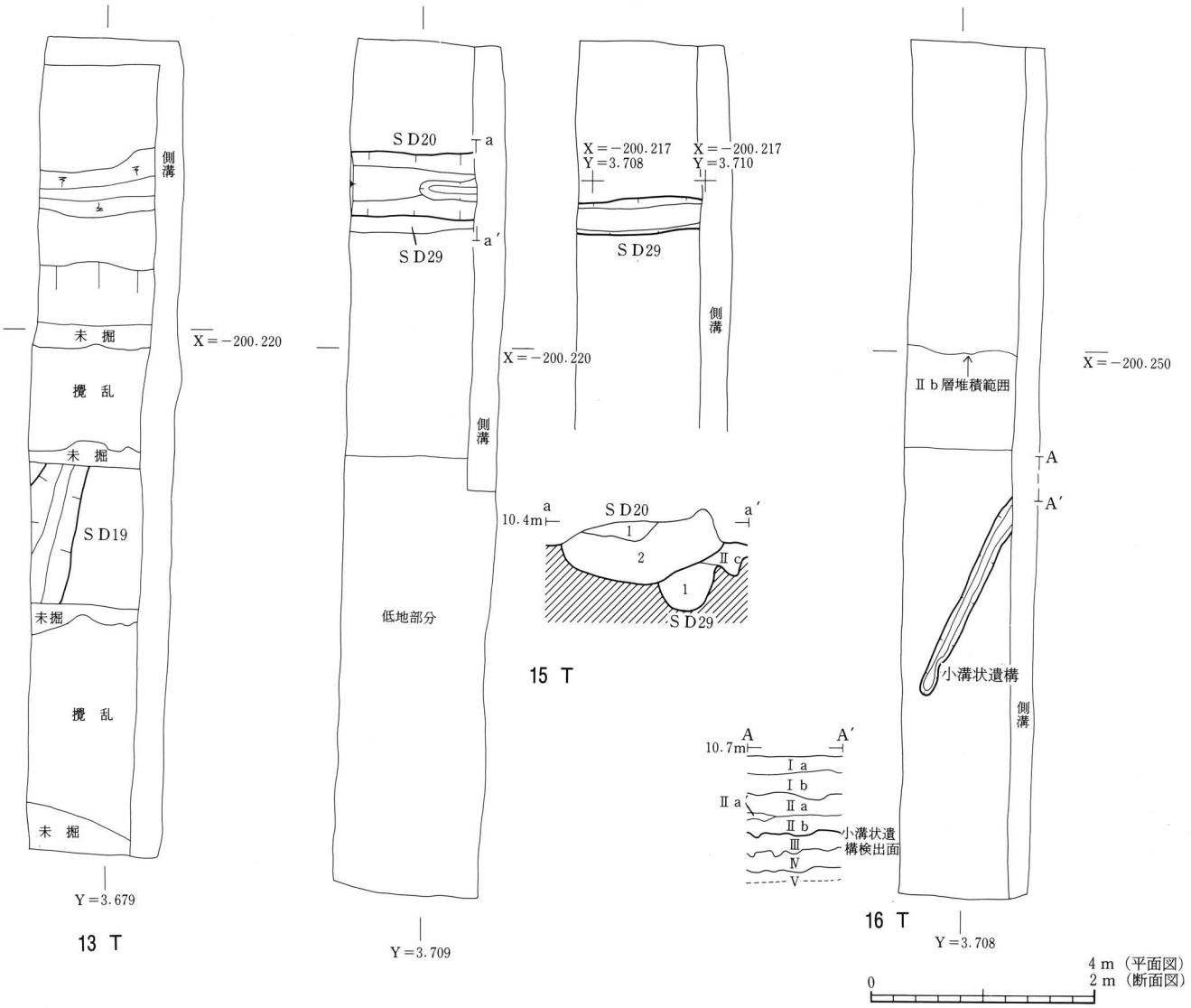
物は土師器３点、在地産の中世陶器の甕１点がある。

ＳＤ１８　溝跡

10Ｔで検出し、検出面はＶ層上面であるが、現代の耕作土であるＩ層を除去中に溝跡の南壁側を掘り過ぎている。他の遺構との重複は２つのピットに切られているが、ピットの性格は不明である。確認長はトレンチ幅の約2.5ｍで、溝幅は断面からみて約３ｍであるが、北側により広がる可能性もある。深さは80㎝程である。底面は幅160㎝と広く、わりと平坦面となり、壁面は北壁は急に立上がるが、南壁は底面から緩やかに立上がり、中位がテラス状となり、それより上半は急に立上がるものとみられる。このように底面幅の広い溝跡は本調査区にみられるＳＤ10・11などに類似し、他のトレンチ検出の溝跡の形状とは異なる。方向はほぼ東西方向である。堆積土は３層で、２・３層については明瞭な互層となることから、長い期間をかけて埋まっていったものとみられる。出土遺物は無い。

ＳＤ１９　溝跡

13Ｔで検出し、検出面はＶ層上面である。重複はない。両端部が攪乱を受けていることから、確認長は2.5ｍ程で、溝幅は北側で75㎝、南側で１ｍと差がある。深さは20㎝前後である。断面形は舟底状で、方向はＮ－12°－Ｅである。堆積土は不明である。ＳＤ19は付近の旧地形が北側から南側へ大きく傾斜する中でも、やや東斜面上に等



トレンチ	遺構	層位	土色	土性	備考
13T	ＳＤ19	注記なし			
15T	ＳＤ20	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質土(細砂)	

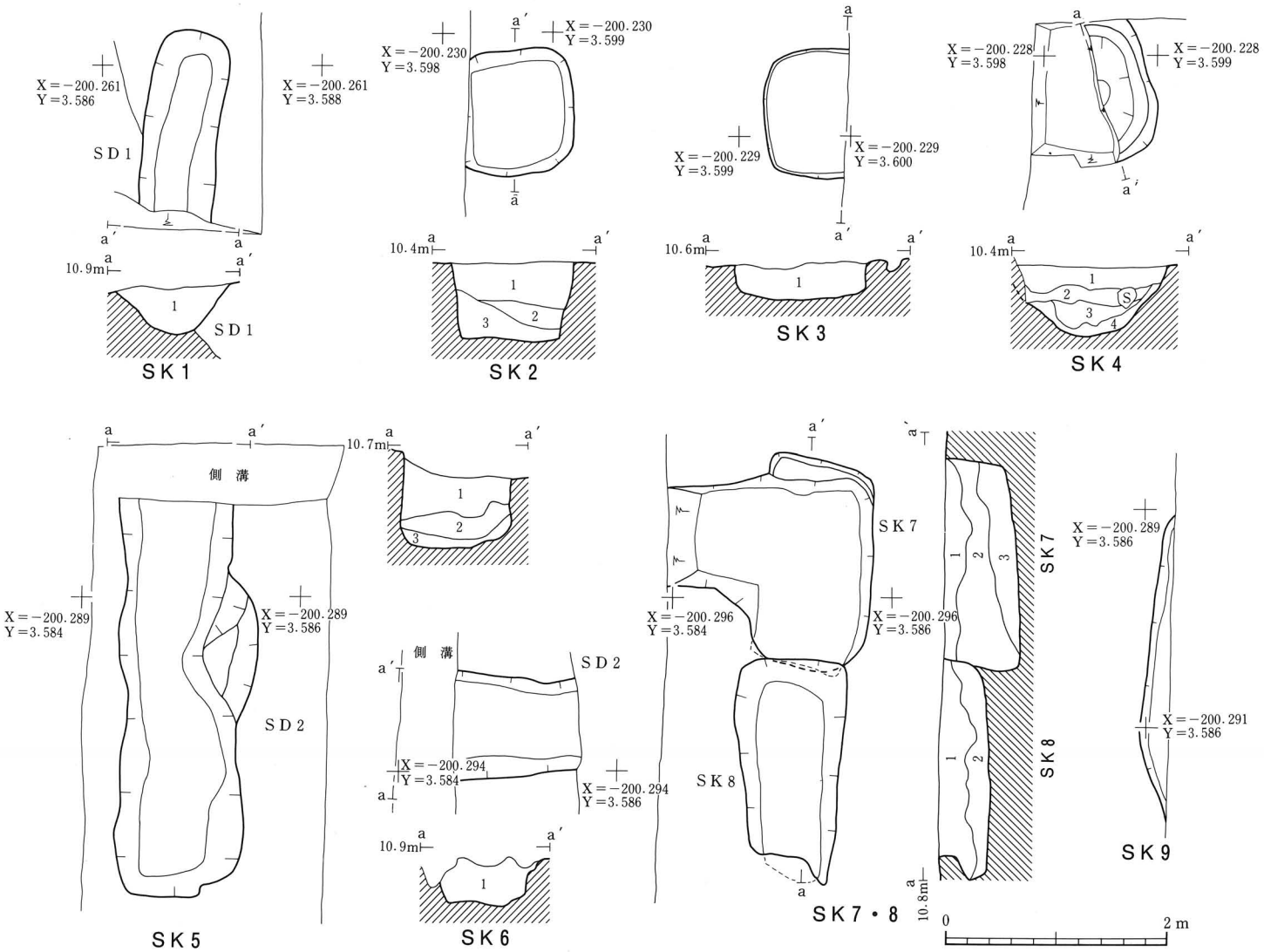
トレンチ	遺構	層位	土色	土性	備考
15T	ＳＤ20	2	褐灰色 10YR5/1	砂質土(細砂)	層全体にマンガン斑を含み、層下面は暗赤褐色粗砂となる
15T	ＳＤ29	1	灰黄褐色 10YR5/2	粘質シルト	黒色粘質シルトブロックを全体に多量含む

第７図　試掘トレンチ（３）

高線と平行して検出されており、僅かな確認のため、詳細は不明であるが、南側へ向って流れる溝とみられる。ただし北側延長方向の地区についてはこの溝跡は検出されなかった。出土遺物は土師器３点、須恵器４点がある。

ＳＤ２０　溝跡

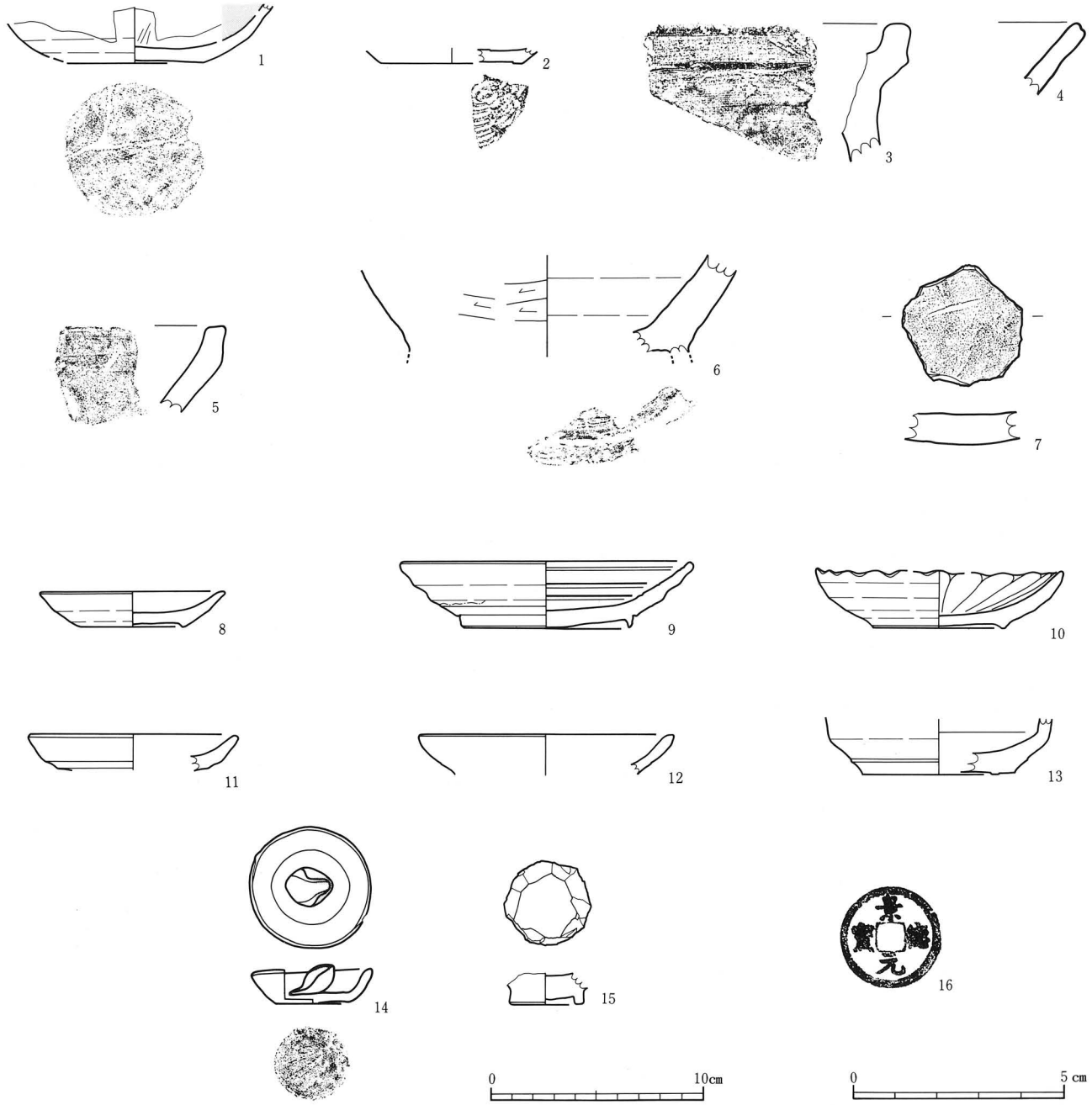
15Ｔで検出し、検出面はⅡｃ層上面である。南側でほぼ平行して走るＳＤ29を切っている。確認長はトレンチ幅である2.5m程で、幅は110～120cm、深さは50cm以上残存しているものとみられる。底面は平坦面をもたず、壁面との境が不明瞭なまま立上がっていく。方向はほぼ東西方向である。堆積土は２層で、いづれも細砂層で、自然堆積とみられる。出土遺物は須恵器１点がある。



遺　構	層位	土　色	土　性	備　考
ＳＫ１	1	褐　色 10YR4/4	粘質シルト	酸化鉄斑を全体に含む
ＳＫ２	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	Ⅴ層ブロックを多量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂　質　土	にぶい黄褐色小ブロックを少量含む
	3	にぶい黄褐色 10YR4/3 黄　褐　色 10YR5/6	砂質シルト シ　ル　ト	＞ 各ブロックの混合層
ＳＫ３	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	炭化物粒を少量含む
ＳＫ４	1	暗　褐　色 10YR3/4	砂質シルト	
	2	暗　褐　色 10YR3/4	砂質シルト	Ⅴ層ブロックを多量含む
	3	にぶい黄橙色 10YR6/4	シ　ル　ト	暗褐色砂質シルトブロックを全体に少量含む
	4	褐　色 10YR4/4	砂質シルト	にぶい黄橙色シルトブロックを含む

遺　構	層位	土　色	土　性	備　考
ＳＫ５	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	径１cm内のⅣ・Ⅴ層小ブロックを含む
	2	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	Ⅰ層に比べて小ブロックは目立たない
	3	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂　質　土	Ⅳ・Ⅴ層小ブロックを少量含む
ＳＫ６	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	径５cm内のⅤ層・暗褐色土ブロックを多量含む
ＳＫ７	1	褐　色 10YR4/4	砂質シルト	Ⅳ・Ⅴ層小ブロックを含む
	2	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	Ⅴ層大ブロックを多量含む　層下半は層状に堆積
	3	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	Ⅴ層大ブロックを多量含む　層下半は層状に堆積
ＳＫ８	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	Ⅴ・Ⅵ層小ブロックを多量、酸化鉄斑を全体に含む
	2	にぶい黄橙色 10YR6/4	砂質シルト	Ⅴ層大ブロック、Ⅳ層小ブロックを含む
ＳＫ９	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	径１cm内のⅣ・Ⅴ層小ブロックを含む

第８図　試掘トレンチ検出土坑



図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高(mm)	外面調整	内面調整	底部調整	備　　考	類型	写真図版番号
1	34	15T	ⅡC	土師器	坏	－×64×－	ロクロナデ	ロクロナデ→黒色処理・ヘラミガキ	ヘラケズリ		Ⅰ	18－15

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高(mm)	産地	時期	備　　考	写真図版番号
2	178	5T	Ⅰ	土師質土器	皿	－×(66)×－		中世？	底部回転糸切り　ロクロ成形	21－3
3	28	4T SD3	堆積土	中世陶器	甕	－×－×－	在地	13C後半～14C前半	内面剥落	21－11
4	157	15T	ⅡC	中世陶器	鉢	－×－×－	在地	13C後半～14C前半	口縁端部が凹む	23－10
5	165	17T	Ⅰ	中世陶器	鉢	－×－×－	在地	13C後半～14C前半		23－8
6	161	15T	ⅡC	中世陶器	鉢	－×－×－	在地	13C前半	内面磨耗　高台部欠損　外面ケズリ又はナデ調整	23－13
7	151	15T	Ⅱb	中世陶器	甕	－×－×－	在地	13C後半～14C前半	陶製円盤の可能性あり	21－16
8	34	4T SD4a	2	中世陶器	小皿	(88)×(48)×(17)	瀬戸・美濃	16C前半	全面施釉　碁笥底　トチン痕あり	25－4
9	147	15T	Ⅰ	中世陶器	皿	(139)×(79)×32	瀬戸・美濃	17C	灰釉　内面に2条1対の沈線が3本あり　体部下半以下露胎畳付を擦っている	25－5
10	1	2T SK1	1	近世陶器	菊皿	(116)×62×27	美濃(志野)	16C末～17C初	口縁端部　打欠き磨耗　畳付磨耗　高台内にピン跡	25－7
11	29	4T SD4a	2	近世陶器	丸皿	(100)×－×－	美濃(志野)	16C末～17C		25－9
12	39	5T SD7	6	近世陶器	丸皿	(120)×－×－	美濃(志野)	16C末～17C初		25－10
13	131	2T	Ⅰ	近世陶器？	鉢か香炉	－×(72)×－	堤？	近世？	灰釉　底部回転糸切り	26－8
14	176	27T	Ⅰ	陶器	灯明皿	56×35×16	堤	18～19C	鉛釉　底部露胎　底部糸切り→敷物圧痕　芯受けに煤付着	26－7
15	169	18T	Ⅰ	磁器(青磁)	碗	－×34×－	中国龍泉窯系	13C？	転用品　体部打ち欠きの円盤　高台内露胎	26－18

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	銭貨名	時代	初鋳年	備　　考	写真図版番号
16	12	5T SD7	1	銅製品	銅銭	景徳元寶	北宋	1004		28－1

第9図　試掘トレンチ出土遺物

ＳＤ２９　溝跡

15Ｔで検出し、検出面はＶ層上面である。北側でＳＤ20に切られているが、検出面が異なることから、ＳＤ20とは別の溝跡である。溝跡の立地はＳＤ20同様に北側微高地の南端部に位置している。確認長は2.5ｍで、溝幅は50㎝前後、深さは40㎝前後である。断面形はＵ字形で、壁面は急に立上がる。方向はほぼ東西方向である。堆積土は１層で、Ⅳ層とみられる粘質シルトブロックを含むが、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。

小溝状遺構

16Ｔ南半部で検出し、検出面はⅢ層上面である。重複は無い。確認長は約４ｍで、溝幅は16～35㎝、深さは10㎝以内の浅いものである。方向はＮ－25°－Ｅで、堆積土には基本層であるⅡｂ層がみられる。このような溝跡の規模、堆積土の状況は３区検出の小溝状遺構群の個々の小溝と類似しており、小溝の数からみると、１条のみの検出ではあるが、いづれの溝跡は同様の性格を有すものと考えられる。また溝跡のみられない16Ｔの北半部においてはⅢ層上にはⅡａ′層が堆積することから、基本的に小溝状遺構はⅡｂ層との関わりにより形成されたものであると考えられる。

２．基本層出土遺物

試掘調査では１・４トレンチを除くトレンチから遺物が出土した。

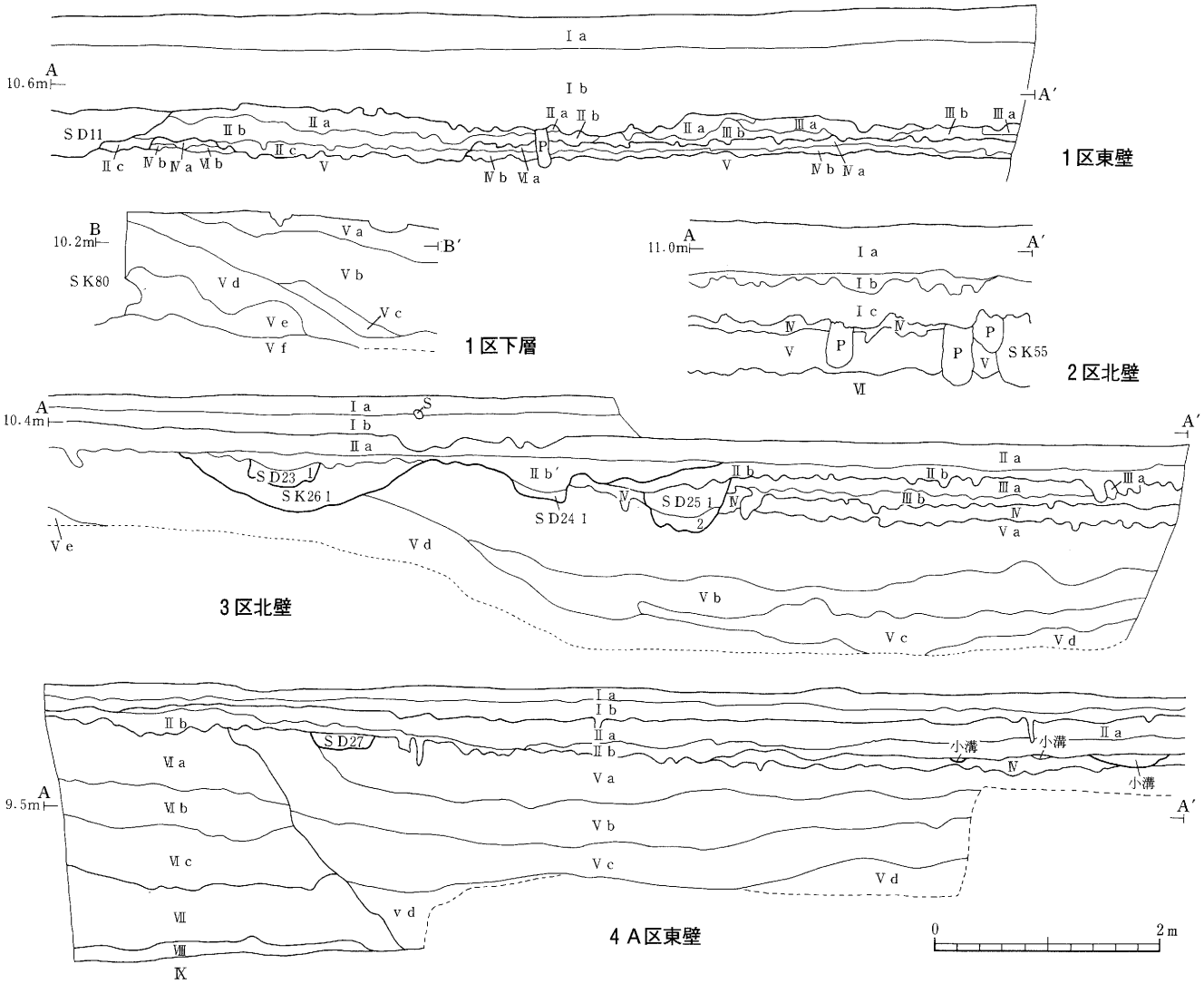
２トレンチではⅠ・Ⅳ層から遺物が出土し、Ⅳ層は須恵器が２点で、中近世の遺物はみられない。（９図13）は堤焼の可能性のある鉢か香炉で、全面に灰釉が掛かっている。３トレンチでは鉄滓１点、飯坂岸窯系の香炉がⅠ層から出土している。５トレンチではⅠ層から土師質土器の皿２点が出土し、（９図２）はロクロ成形で底部は回転糸切りである。７トレンチではⅠ・Ⅳ層から遺物が出土し、Ⅳ層は須恵器のみの出土である。９・10トレンチではⅠ層からロクロ土師器が出土したのみである。13トレンチではⅠ・Ⅲ・Ⅳ層から遺物が出土し、Ⅲ・Ⅳ層はロクロ土師器のみの出土である。15トレンチではⅠ・Ⅱａ・Ⅱｂ・Ⅱｃ・Ⅳ層から遺物が出土し、Ⅱ層からは中世以降の遺物が出土していない。またⅣ層はロクロ土師器のみの出土である。（９図１）はロクロ使用の土師器坏で、内面は黒色処理・ヘラミガキ、底部は手持ちヘラケズリ調整を施している。（９図９）は瀬戸・美濃産の灰釉皿で、畳付を擦っている。（９図７）は在地産の甕で、体部破片の周縁を打ち欠いた円盤の可能性がある。16トレンチではⅠ・Ⅱａ・Ⅱａ′・Ⅱｂ・Ⅲ・Ⅳ層から遺物が出土し、Ⅱａ層に在地産の中世陶器１点がある以外は全てロクロ土師器・須恵器である。Ⅱａ層からは北宋銭とみられる銅銭１枚が出土した。17トレンチではⅠ・Ⅱｃ・Ⅱｄ・Ⅲ層から遺物が出土し、これらの中には中世以降の遺物は含まれない。

第２節　本調査（１～６区）

１．基本層位

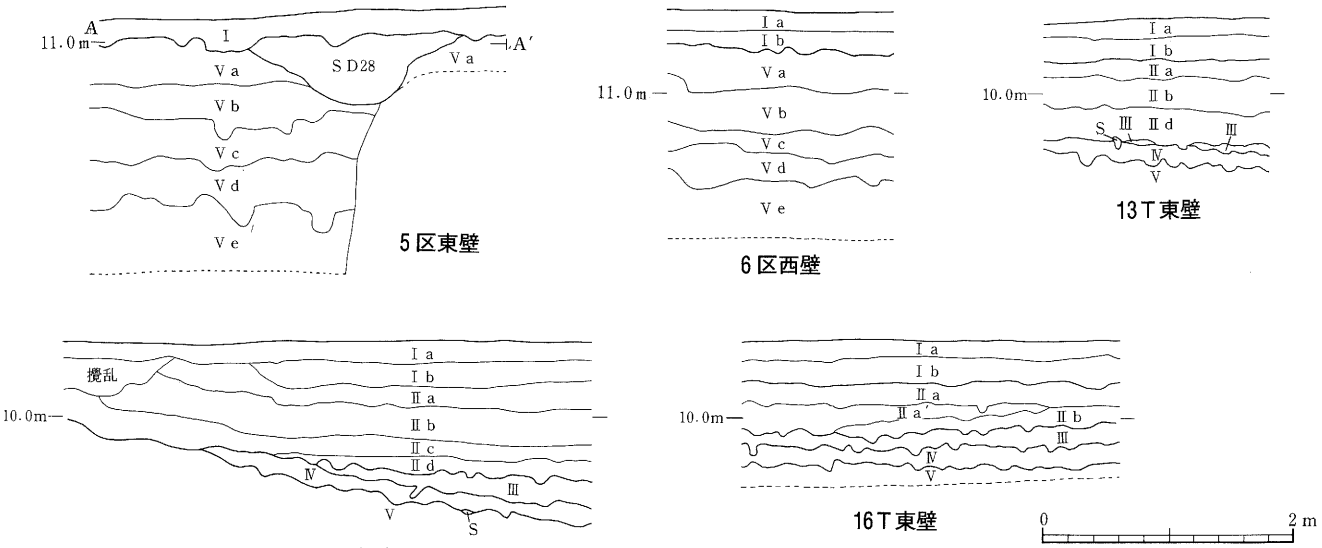
調査範囲が広範なことに加え、旧地形の違いによる堆積層の違い、近年の耕作等による堆積層の残存状況の違いなどから、今回の調査区を統一した基本層位で認識することはできなかった。これは主として調査対象地北半部に東西方向の旧河道が存在することに起因すると考えられ、旧河道上に位置する１区や、東側の３・４区、13～17トレンチにおける堆積層の多い状況と、旧河道からそれる西側の２区、１～10トレンチの状況は異なったものとなっている。

このことから、調査を進めるにあたっては、なるべく各区での層の対比を行ったが、最終的には本調査区でも１区、２区と４区の一部に加え、１～10トレンチを原則として同一層位で把握し、これとは別に東半部の中でも旧河道北岸を中心に位置する13・15・17、それに畑跡の存在が確認された14トレンチを含む３区と16トレンチをそれぞ



地区	層位	土色	土性	備考
1区東壁	Ⅰa			現耕作土
	Ⅰb			区画整理前の耕作土
	Ⅱa	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	炭化物粒・焼土粒・径3cm内のV層ブロックを全体に少量含む
	Ⅱb	灰黄褐色 10YR5/2	砂質シルト	層下面に明瞭なラインをもたない酸化鉄斑が集積している
	Ⅱc	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	灰黄褐色砂質シルトとⅣ・V層がブロック状に攪拌された層
	Ⅲa	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質土	Ⅳa層小ブロックを全体に含む
	Ⅲb	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質土	Ⅳa層小ブロックを全体に含む
	Ⅳa	黒褐色 10YR2/2	シルト	
	Ⅳb	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	
	V	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘性シルト	
1区東壁深掘区	Va	褐色 10YR4/4	粘質シルト	炭化物粒・マンガン斑を少量含む
	Vb	褐色 10YR4/4	シルト	マンガン斑を多量含む
	Vc	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	マンガン斑を少量含む
	Vd	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	マンガン斑を少量含む
	Ve	暗褐色 10YR3/3	粘質土	炭化物粒を僅か、マンガン斑を少量含む
	Vf	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	マンガン斑を少量含む
2区北壁	Ⅰa	暗褐色 10YR3/4	シルト	現畑耕作土
	Ⅰb	黒褐色 10YR2/2	シルト	現畑耕作土
	Ⅰc	暗褐色 10YR3/3	シルト	現畑耕作土
	Ⅳ	黒褐色 10YR3/1	シルト	Ⅰc層により攪拌されている
	V	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	
	Ⅵ		砂質土	砂層
3区北壁	Ⅰa	暗灰黄色 2.5Y5/2	砂質シルト	現耕作土
	Ⅰb	黄灰色 2.5Y5/1	砂質シルト	区画整理前の耕作土
	Ⅱa	にぶい黄褐色 10YR5/3	シルト	全体にマンガン斑を多量含む　層下半に酸化鉄斑の集積層
	Ⅱb′	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	一部に径3cm内のⅣ層ブロックを、全体にマンガン斑を多量含む
	Ⅱb	褐色 10YR4/4	シルト	全体にマンガン斑を多量含む　層下面が乱れている
	Ⅲa	にぶい黄橙色 10YR6/4	砂質シルト	
	Ⅲb	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	全体にⅣ層小ブロックを含む　層下面が乱れている
3区北壁	Ⅳ	黒褐色 10YR3/2	シルト	一部にV層を巻き上げている。層下面が乱れている
	Va	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘質シルト	
	Vb	にぶい黄橙色 10YR6/4	粘質シルト	
	Vc	にぶい黄橙色 10YR6/4	粘質シルト	浅黄橙色粘質シルトブロックを含む
	Vd	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質土(粗砂)	
	Ve	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質土(粗砂)	
SD22	Ⅰ	にぶい黄褐色 10YR5/3	シルト	明黄褐色砂質土を層状に幾層か挟む
SD23	Ⅰ	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	黒褐色土を粒状に含み、にぶい黄橙色砂質土層を挟む
SD24	Ⅰ	灰黄褐色 10YR4/2	粘質シルト	にぶい砂質ブロックを少量含む
SD25	Ⅰ	褐色 10YR4/4	砂質シルト	層上半にぶい黄橙色細砂層を多量、層下半に褐灰色シルト層を一部挟む
	2	暗褐色 10YR3/4	粘質シルト	にぶい黄橙色ブロックを含む
SD26	Ⅰ	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	径2mm内の粒を含む
4A区東壁	Ⅰa	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	現耕作土
	Ⅰb	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	区画整理前の耕作土
	Ⅱa	黒褐色 10YR3/1 灰黄褐色 10YR5/2 にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質土 砂質シルト 砂質土(粗砂)	＞ 互層　SD10埋土と同じ層とみられる
	Ⅱb	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物を僅かに含む
	Ⅲ	黄褐色 10YR5/6	砂質シルト	
	Ⅳ	黒色 10YR2/1	シルト	
	Va	にぶい黄褐色 10YR5/3	粘質シルト	
	Vb	灰黄褐色 10YR4/2	粘質土	
	Vc	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質土(細砂)	
	Vd	褐色 10YR4/6	砂質土	
	Ⅵa	暗褐色 10YR3/4	シルト	
	Ⅵb	褐色 10YR4/4	シルト	
	Ⅶ	黒色 10YR2/1	粘質土	しまりが非常に強い
	Ⅷ	暗褐色 10YR3/3	粘質シルト	しまりが非常に強い
	Ⅸ		砂礫層	

第10図　基本層位（1）



地区	層位	土色	土性	備考
5区東壁	I			現耕作土
	Va	黄褐色 10YR5/6	粘質シルト	
	Vb	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘質シルト	炭化物粒を僅かに含む
	Vc	黄褐色 10YR5/6	粘質シルト	炭化物粒を僅かに含む
	Vd	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘質シルト	炭化物粒を僅か、黄褐色粘質シルトブロックをやや多量含む
	Ve	にぶい黄橙色 10YR6/4	粘質シルト	
SD28	I	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	層下半にV層小ブロックを含む
6区西壁	Ia			現耕作土
	Ib			区画整理前の耕作土
	Va	にぶい黄橙色 10YR6/4	粘質シルト	全体にマンガン斑を少量含む
	Vb	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘質シルト	全体にマンガン斑を少量含む
	Vc	にぶい黄橙色 10YR6/3	粘質シルト	全体に酸化鉄斑を少量含む
	Vd	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘質シルト	
	Ve	暗緑灰色 7.5GY4/1	砂質シルト	グライ化顕著
13T東壁	Ia			現耕作土
	Ib			区画整理前の水田耕作土及び盛土
	IIa	灰黄褐色 10YR6/2	砂質シルト	部分的に灰白色細砂質、全体にマンガン斑を多量含む
	IIb	灰黄褐色 10YR5/2	砂質シルト	全体にマンガン斑を少量含む
	IId	褐灰色 10YR5/1	砂質シルト	層中に一部III層砂質土・褐灰シルトブロック、全体に酸化鉄斑を少量含む
	III	にぶい黄橙色 10YR6/4	砂質土(細砂)	下面が乱れている

地区	層位	土色	土性	備考
13T東壁	IV	黒色 10YR2/1	粘質土	
	V	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘質シルト	
15T東壁	Ia			現耕作土
	Ib			区画整理前の耕作土
	IIa	灰黄褐色 10YR5/2	砂質シルト	上面に酸化鉄層の集積あり
	IIb	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質シルト	
	IIc	灰黄褐色 10YR5/2	砂質シルト	＞ 互層となる自然層
		褐灰色 10YR4/1	シルト	
	IId	褐灰色 10YR5/1	砂質シルト	層下半にIII層・褐灰色シルトブロックを含む
	III	灰黄褐色 10YR5/2	砂質土	層下面ににぶい黄褐色砂質シルト層がみられる
	IV	黒褐色 10YR2/2	粘質シルト	層下半は色調が薄く、V層に移っていく
	V	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘質シルト	
16T東壁	Ia			現耕作土
	Ib			区画整理前の耕作土
	IIa	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	層上面に酸化鉄層の集積あり
	IIa′	暗褐色 10YR3/3	シルト	層全体にマンガン斑、層下面に酸化鉄斑を含む
	IIb	暗褐色 10YR3/3	シルト	全体にマンガン斑を含む　層下面が乱れている
	III	にぶい黄褐色 10YR5/3	シルト	V層小ブロックを巻き上げている　層下面が乱れている
	IV	黒褐色 10YR2/2	粘質シルト	層下半は色調が薄く、V層に移っていく
	V	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘質シルト	

第11図　基本層位（2）

れ独立した基本層位とした上で調査を進めていった。

まず、全調査区の基本層を概観すると、V層は1区検出の竪穴住居跡を除き、基本的に遺構の最終調査面となっている。下層調査でもわかるようにV層は上半は粘性のあるシルト質であるが、下半は砂質土、砂礫となることなどから洪水堆積層とみられ、付近一帯を厚く覆う層となっている。このV層中からは1区で灰白色火山灰層が検出されたのに加え、3区ではVc層から在地の中世陶器が出土し、また5・6区のVd層からは縄文土器がいくつか出土するなど、この層に関しては各区同一時期のものとは理解できない。IV層は1～4区及び多くのトレンチに存在するが、地区により土色、土質が異なっている。特に1・2区をはじめ西側のトレンチと東側の低位部での違いは顕著であるが、これらは基本的に同一層とみられる。III層はにぶい黄褐色の砂質土及び砂質シルトで、1・3・4区の一部と旧河道上にのみ確認できる層である。一部では攪拌されているような箇所もみられるが、本来はIII層もまたある時期の洪水堆積層と考えられる。II層は西側では1区のみ、東側では各調査区で確認された層で、この層についてはIII層堆積後の土地利用の違いにより成因が異なることから、全調査区を同一層として認定していない。

［1・2区ほか］

西側の中でもより多くの堆積層がみられる1区を中心にみてみると、調査区中央の11号溝跡を境に北側では現在の畑耕作土直下はV層となるが、南側ではII～IV層の大別3層、細別7層がみられる。IIa層は南半部全域にみられ、V層ブロックや炭化物・焼土粒を含む状況からみて、人為的に盛られた整地層と考えられる。層厚は層上面が

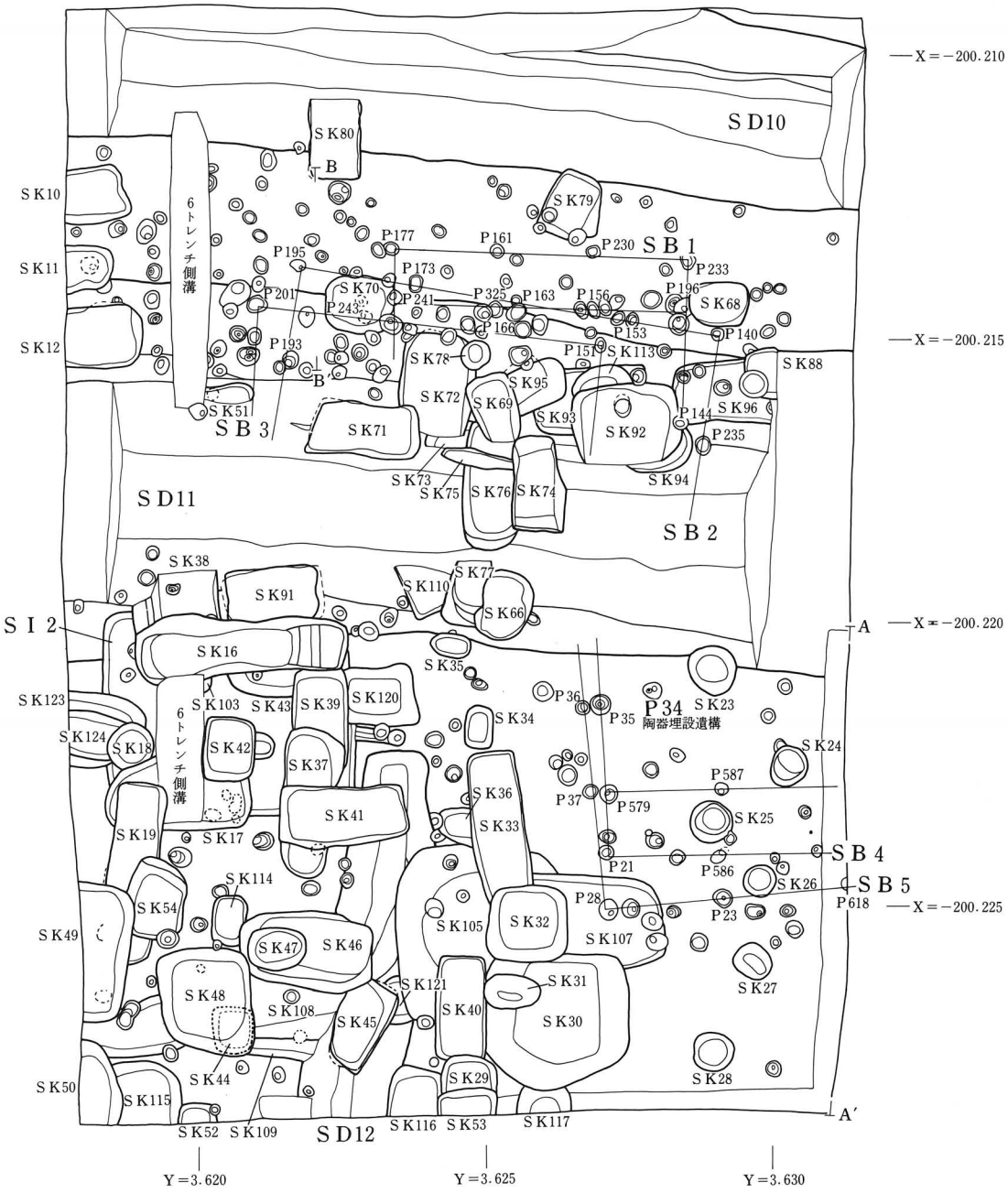
耕作土のため様々であるが、厚いところで30cm以上、薄いところで10cm程である。竪穴住居跡や一部の土坑を除く大部分の土坑、溝跡はこの層から掘り込まれたものとみられる。Ⅱａ′層は西壁近くにのみみられ、Ⅱａ層同様に整地層とみられる。層厚は３～18cmと幅がある。断面観察からⅡａ′層上面においても掘り込まれた土坑、ピットが僅かに確認できることから、ある時期の遺構掘り込み面とみられる。Ⅱｂ層は灰黄褐色砂質シルトで、層下面に酸化鉄斑の集積層がみられる。南東コーナーを除く南半部全域にみられ、下層のⅡｃ・Ⅳａ層上面にⅡｂ層による段差がみられ、段差の北側はレベルが低くなっていることから、Ⅱｂ層は水田作土の可能性が強い。層厚は５～20cm程である。Ⅱｃ層は北東部分にのみみられる灰黄褐色土で、Ⅳａ層ブロックを含んでおり、層厚は５～15cm程である。この層は色調的にはⅣ層に類似するが、南にみられるⅣ層とのレベル比からみて、Ⅳ層が攪拌された層の可能性がある。Ⅲａ・Ⅲｂ層はいづれもにぶい黄褐色の砂質土で、南東部を中心にみられる。Ⅲｂ層については、その北側にⅡｂ層がみられ、両者の底面レベルの差が無いことから、Ⅲｂ層はⅡｂ層の水田土壌の母材層である可能性があるが、中にはⅣａ層をブロック状に含む層であることから、本来の成因は不明である。Ⅳ層は１区の南半部全域にみられ、黒褐色シルトのⅣａ層と、灰黄褐色シルトのⅣｂ層に分けられる。１区東壁側での層厚はいづれも４～10cm程であるが、西壁側では一部で厚みを増す部分がある。Ⅳ層は２区において部分的に僅か残存する以外は、６・８トレンチをはじめ、２・３・７トレンチにおいて確認されており、いづれの調査区においても検出された遺構はこのⅣ層面を切っている。Ⅴ層は洪水堆積層で、１区北側の高位部での下層調査によると、全体に傾斜しながら南側の旧河道へと落ち込んでいることから、Ⅴ層もまた旧河道による低地部へ堆積した層であることがわかる。

［３区ほか］

14トレンチを含む３区及び16トレンチについては、北側に位置する旧河道の中心よりややレベルが高いこともあってか、１・２区とは異なった層位をみせる。Ⅱａ層は付近全域にみられ、水田作土と考えられる。Ⅱｂ′層は３区北西部の一部にみられる。Ⅱｂ層は褐色シルトで、Ⅴ層上面が西側が高く、東側に傾斜し低くなっていることから、東半部のみにみられる層である。下層のⅢａ層上面においてⅡｂ層の入った小溝状遺構群がみられることから、Ⅱｂ層については畑作土である可能性が強い。Ⅲａ・Ⅲｂ層はいづれもにぶい黄褐色土の砂質シルトで、Ⅲｂ層は全体にⅣ層小ブロックを含んでいる。Ⅳ層は黒褐色シルトで、層下面が乱れている。Ⅴ層上面をみると、３区中央を境に西半部が高く、東側に低く傾斜している地形で、これは北側の13・15トレンチでもみられるような旧河道部分との境に相当するものとみられる。

［13・15・17トレンチ］

調査地北辺に位置する13・15・17トレンチについては、共に旧河道の北岸近くに位置することから、共通の層位を付すことができた。13・15トレンチでは北端部が微高地上に位置し、表土下にはⅤ層がみられるのに対し、南側はⅤ層上にⅡ～Ⅳ層が厚く堆積している。Ⅱａ層は灰黄褐色砂質シルト、層厚は10～20cmで水田作土の可能性が強い層である。Ⅱｂ層は地区により色調が異なるが、灰黄褐色土砂質シルトである。層厚は22～30cmと全体に厚い。Ⅱｃ層は15・17トレンチにみられ、灰黄褐色土砂質シルトと褐灰色シルトの互層で、自然堆積層である。Ⅱｄ層は褐灰色砂質シルトである。Ⅲ層はにぶい黄橙色を基調とする細砂層で、層下面が乱れる箇所もある。Ⅳ層は黒色及び黒褐色の粘性の強い層で、層厚は10～20cmである。Ⅴ層はにぶい黄褐色粘性シルトで、以下Ⅴ層は砂層へと移行していく。



※各遺構のラインの切り合いは、新旧関係を示す
但し、SD10・11・12は他の全ての遺構より新しい

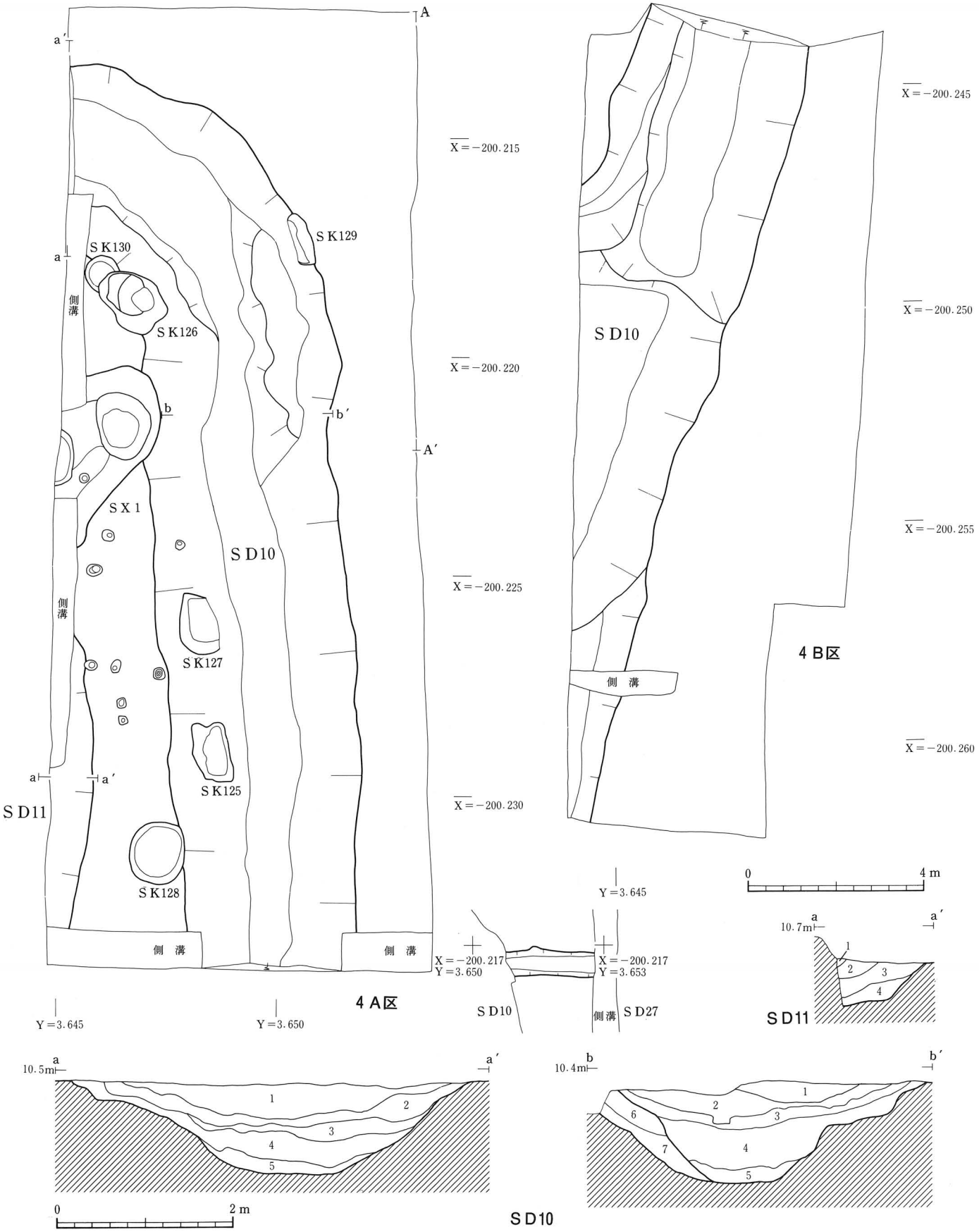
0　4 m

遺構名	ピット番号	径(cm)	深さ(cm)	柱痕跡の有無	他遺構との重複
SB1	177	26	30	有	
	161	22	31	有	
	230	23×20	16	有	
	233	30×23	13	無	
	241	26	41	無	SK70に切られる
	325	27	19	無	
	156	27×19	16	無	
	146	33	－	有	SK68に切られる
	144	23	45	－	
SB2	195	29×20	50	無	

遺構名	ピット番号	径(cm)	深さ(cm)	柱痕跡の有無	他遺構との重複
SB2	173	29×22	27	有	
	163	18	24	無	
	153	25×20	21	有	
	140	23	16	無	
	193	21×17	10	無	
	235	32×26	17	無	
SB3	201	37×30	60	有	
	243	25	30	無	SK70に切られる
	166	25	16	無	
	151	30×21	17	無	

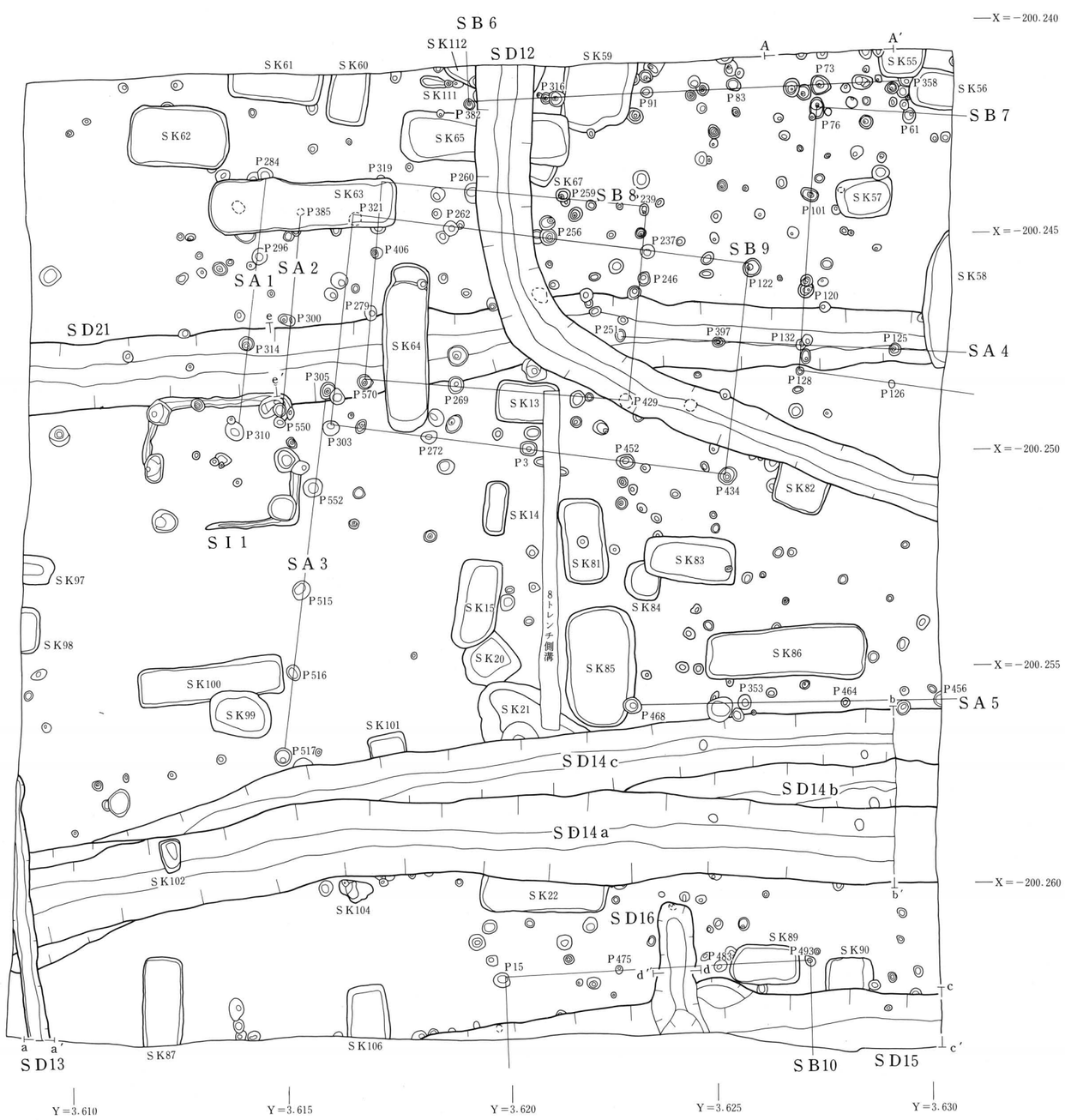
遺構名	ピット番号	径(cm)	深さ(cm)	柱痕跡の有無	他遺構との重複
SB4	35	36	30	有	
	579	34×30	27	有	
	587	23	43	無	
	31	26	32	無	
	586	30×20	38	無	
SB5	36	23	35	無	
	37	25	32	無	
	28	32	60	無	SK107を切る
	23	32	29	無	
	618	12	35	－	

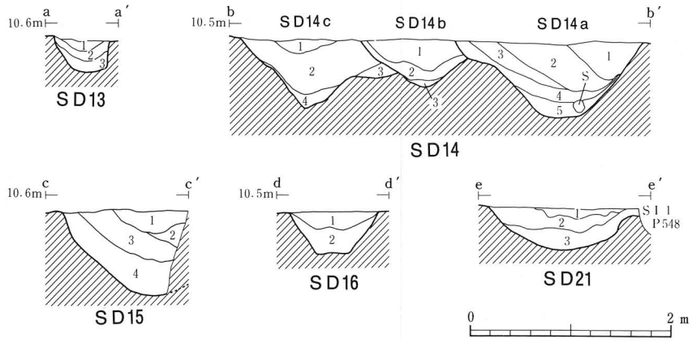
第12図　1区遺構配置図



遺構	層位	土色	土性	備考
4A区 SD10 (中央部)	1	暗灰黄色 2.5Y5/2	砂質土	層中に黄褐色粗砂を挟む
	2	褐灰色 10YR4/1 灰色 5Y4/1	砂質シルト 砂質シルト	極めて薄い層の互層
	3	褐灰色 10YR4/1	シルト	層中に褐灰色シルト層を挟む
	4	灰色 7.5Y4/1	粘質土	層中に褐灰色細層をラミナ状に多数挟み、植物遺体を多数含む
	5	オリーブ黒色 10Y3/1 灰色 10Y4/1	粘質土 粘質土	各径5cm程のブロックの混合層
	6	褐灰色 10YR5/1	シルト	(掘り直し前の溝の堆積土)
	7	灰色 5Y4/1	砂質シルト	植物遺体を多量含む (掘り直し前の溝の堆積土)
4A区 SD10 (西壁)	1	黒褐色 10YR2/3	シルト	酸化鉄斑を多量含む
4A区 SD10 (西壁)	2	褐灰色 10YR4/1	シルト	黒褐色シルトを層状、酸化鉄斑を多量含む
	3	褐灰色 10YR5/1 にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト シルト	互層 酸化鉄斑を多量含む
	4	灰色 7.5Y4/1	粘質土	植物遺体・酸化鉄斑を少量含む
	5	オリーブ黒色 10Y3/1 灰色 10Y4/1	粘質土 粘質土	各径5cm程のブロックの層
SD11	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	
	2	褐灰色 10YR5/1	シルト	砂質土を層状に挟み、酸化鉄斑を多量含む
	3	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	一部に砂質土、酸化鉄斑を少量含む
	4	黒褐色 10YR3/2	砂質シルト	酸化鉄斑を少量含む

第13図　4区遺構配置図





遺構	層位	土色	土性	備考
SD13	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	
	2	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	V層ブロックを少量含む
	3	黒褐色 10YR3/2	シルト	炭化物を僅かに含む
SD14a	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	
	2	黒褐色 10YR3/2	シルト	V層・暗褐色ブロックを多量含む
	3	暗褐色 10YR3/3	シルト	
	4	黒褐色 10YR3/2	シルト	
	5	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	酸化鉄斑を含む
SD14b	1	黒褐色 10YR3/2	シルト	V層大ブロックを少量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	下層に黒褐色ブロックを含む
	3	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	
SD14c	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	
	2	暗褐色 10YR3/3	シルト	
	3	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	V層・暗褐色ブロックを多量含む
	4	黒褐色 10YR3/2	粘質シルト	
SD15	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	
	2	黒褐色 10YR3/2	シルト	
	3	灰黄褐色 10YR4/2	粘質土	酸化鉄斑を多量含む
	4	暗褐色 10YR3/3 暗褐色 10YR2/2 褐灰色 10YR4/1	粘質シルト シルト 砂質シルト	＞ 互層
SD16	1	黒褐色 10YR3/1	シルト	V層小ブロックを多量含む
	2	褐灰色 10YR4/1	砂質シルト	V層小ブロックを少量、黒褐色小ブロックを僅かに含む
SD21	1	黒褐色 10YR2/2	シルト	下半ににぶい黄褐色シルトブロックを少量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	細砂を含む
	3	灰黄褐色 10YR5/2	シルト	炭化物を僅かに含む

遺構名	ピット番号	径(cm)	深さ(cm)	柱痕跡の有無	他遺構との重複
SB6	382	22	18	無	
	316	36	20	有	
	91	29×25	14	無	
	83	35×29	12	無	
	73	46	52	有	
	358	36	19	有	SK55・56に切られる
SB7	76	48×32	22	有	
	61	35×27	36	無	
	101	41×27	26	有	
	120	33	34	有	
	128	20	14	無	
	126	17×14	10	無	
SB8	319	32	46	無	SK63に切られる
	260	39	57	無	SD12に切られる
	259	31	35	無	
	239	24×20	17	無	
	406	27	40	無	
	279	32×27	35	無	SD21を切る
	246	31×29	57	有	
	570	35	30	有	SD21を切る
	269	37×35	33	有	SD21を切る
	429	35×30	40	無	SD12に切られる
SB9	321	30×27	24	無	SK63に切られる
	262	30	40	有	
	256	43×35	51	有	
	237	32	39	無	
	122	43×40	43	有	
	281	39	24	無	
	303	37	36	無	

遺構名	ピット番号	径(cm)	深さ(cm)	柱痕跡の有無	他遺構との重複
SB9	272	39×31	38	無	
	3	40×34	39	無	
	452	45×30	49	有	
	434	41	43	有	
SB10	15	38×35	30	無	
	475	19×16	18	無	
	483	29×24	32	無	
	493	28×22	22	無	
SA1	284	34	32	無	SK63に切られる
	296	38×33	36	無	
	314	32	15	有	SD21を切る
	310	47×40	49	無	SI1と重複
SA2	385	20×17	12	無	SK63に切られる
	300	36×20	21	無	SA3−P299を切る
	550	27	22	−	SI1と重複する
SA3	305	41×30	44	有	SD21を切る
	552	44	33	−	
	515	45×39	28	無	
	516	36×30	39	無	
	517	40	59	有	
SA4	251	30×23	17	無	SD21を切る
	397	28×20	39	有	SD21を切る
	132	24	16	無	SD21を切る
	125	25	22	有	SD21を切る
SA5	468	44×39	47	無	SK85を切る
	353	34×30	38	無	
	469	20	38	無	
	456	34	23	無	

※各遺構のラインの切り合いは、新旧関係を示す

第14図　2区遺構配置図・SD断面図

2．1・2・4区の検出遺構と出土遺物

（1）竪穴住居跡・竪穴建物跡

ＳＩ１　竪穴建物跡

［位置・検出面］２区北西部で検出した。現代の耕作が深く、削平が著しいことから、Ｖ層中での検出であった。本来は掘り方を伴った竪穴状のものであったと考えられる。

［重　複］土坑や溝跡との重複は無かったが、幾つかのピットと重複している。但しＳＩ１の柱穴や周溝との重複からみたピットとの新旧関係は不明瞭であった。

［形態・規模・方向］周溝からみた規模は東西にやや長い方形で、規模は東西360cm、南北310cm程度のものとみられる。深さは掘り方が無いことから不明である。方向はＮ－５°－Ｗである。

［堆積土］残存せず、不明である。

［壁　面］残存せず、不明である。

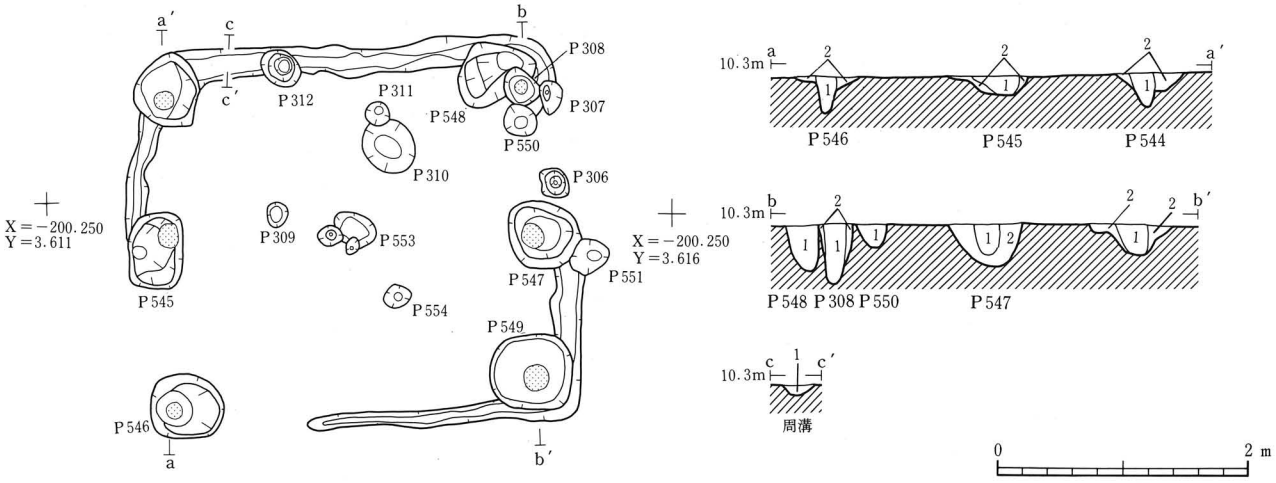
［床　面］周溝や柱穴の残存状況からみて、床面はかなり削平されているものとみられる。貼床があったかどうかは不明である。

［柱　穴］ＳＩ１の周溝範囲内に検出されたピットは多かったが、これらの中でもＳＩ１に伴うものとみられるピットはＰ544～549の６つがある。Ｐ544、545、546は西壁際の周溝と重複して検出された。形態はＰ544と546がほぼ円形、Ｐ545が楕円形気味である。規模は掘り方径が60cmと大きいが、深さは残存が悪く、15cm程度である。Ｐ547、548、549は東壁際にやはり周溝と重複して検出された。形態は円形、楕円形である。規模はＰ549の掘り方径が65cmと最も大きく、深さも西壁際の３つに比べ、深いものである。またＰ548を除く５つに柱痕跡が確認された。

［周　溝］断続的ではあるが、東西南北の各面にみられる。北側の周溝は広い所で幅25cm程度で、これに比べて南・西側は狭い。断面形は底面近くのためか壁面は緩やかである。深さは北側で10cmを測るにすぎない。

［その他］ＳＩ１に付随するようなカマドや炉などの焼面、或いは土坑などの内部施設はみられない。

［出土遺物］柱穴、周溝からの出土遺物は無い。



遺構	層位	土色	土性	備考
P546	1	黒褐色 10YR3/2	砂質シルト	（柱痕跡）
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	暗褐色ブロックを多量含む
P545	1	暗褐色 10YR3/4	砂質シルト	Ｖ層小ブロックを少量、黒褐色ブロックを僅かに含む（柱痕跡）
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	暗褐色ブロックを多量、黒褐色ブロックを僅かに含む
P544	1	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	（柱痕跡）
	2	暗褐色 10YR3/4	砂質シルト	Ｖ層ブロックを多量含む
P548	1	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	

遺構	層位	土色	土性	備考
P308	1	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	（柱痕跡）
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	暗褐色小ブロックを多量含む
P547	1	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	（柱痕跡）
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	暗褐色小ブロックを多量含む
P549	1	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	マンガン斑を僅かに含む（柱痕跡）
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	暗褐色小ブロックを多量含む
周溝	1	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	Ｖ層小ブロックを多量含む

第15図　ＳＩ１　竪穴建物跡

ＳＩ２　竪穴住居跡

［位置・検出面］１区南西部で検出した。Ｖａ層上面では不明瞭であったことから、全体に掘り下げたところ、Ｖ層中でプランを確認した。住居内堆積土中には灰白色火山灰を含むＶａ層がみられることから、検出面はＶｂ層とみられる。

［重　複］Ⅱｂ層上面の検出のＳＫ16・17・18・19・37・38・39・41・42・43・91、Ⅱｃ層上面検出のＳＫ20、Ⅳ層上面検出のＳＫ123・124に切られているが、ＳＩ２より古い遺構は無い。

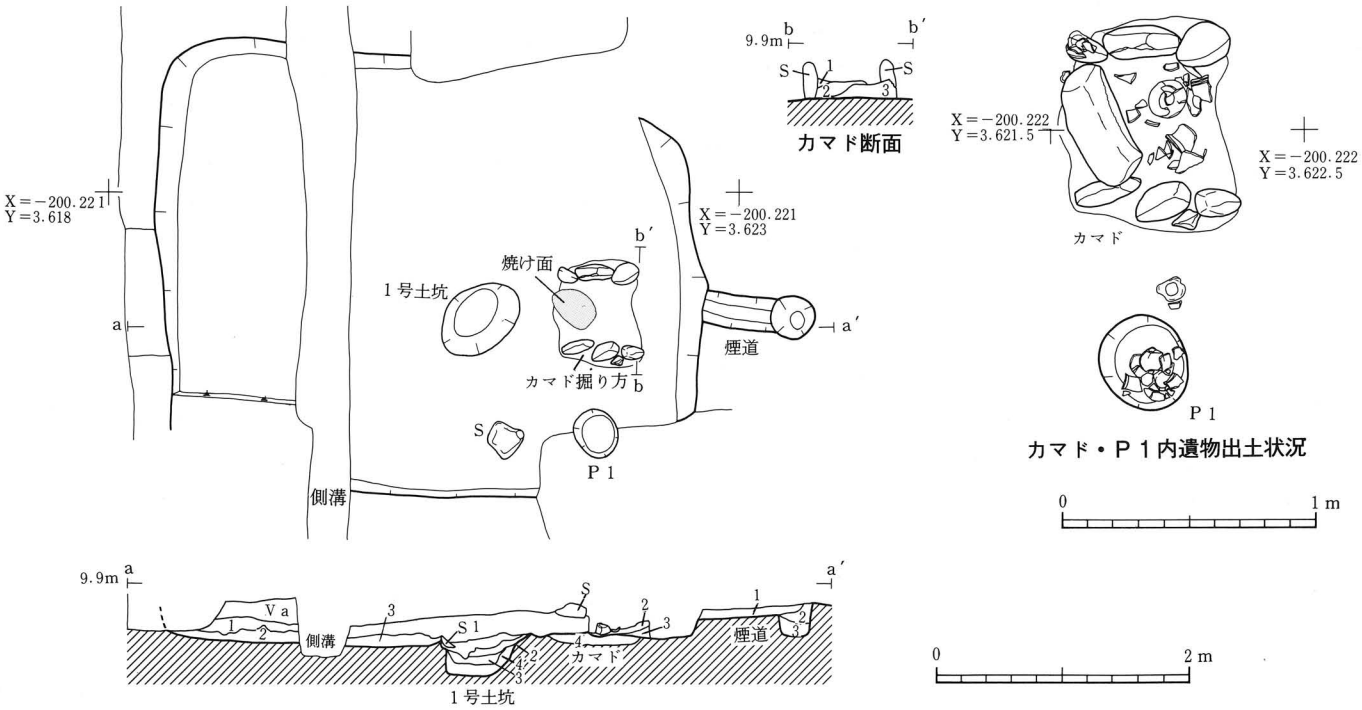
［形態・規模・方向］形態は東西にやや長い隅丸長方形で、規模は東西435cm、南北355cm、深さは残存の良い箇所で35cmである。方向はほぼ方角に合っている。

［堆積土］５層が確認された。最上層は灰白色火山灰をブロック状に含むＶａ層とみられ、この層は基本層として住居外にも堆積している。またその下の１～３層は住居掘り方内のみの堆積土で、４層はカマド部分の掘り方内堆積土である。Ｖａ層中にみられる灰白色火山灰は明瞭な層を形成してはいない。１～３層は粘性が強いＶ層に類似した層で、２層中には底面近いこともあって、焼土ブロックを多量含む箇所もみられた。火山灰を挟んだ上下の堆積層については、洪水などにより埋没したものである可能性が強い。

［壁　面］土坑により失われているところ以外は全体に確認された。東壁は残りが良く22cmで、わりと急な立上がりであるが、他の壁面については検出作業時にプランが不明瞭なことから多少削り過ぎたこともあってか、10cmも無く、特に西壁は僅かな残存状況であった。

［床　面］Ｖ層中を床面としており、貼床は認められない。全体に傾斜はなく、平坦である。

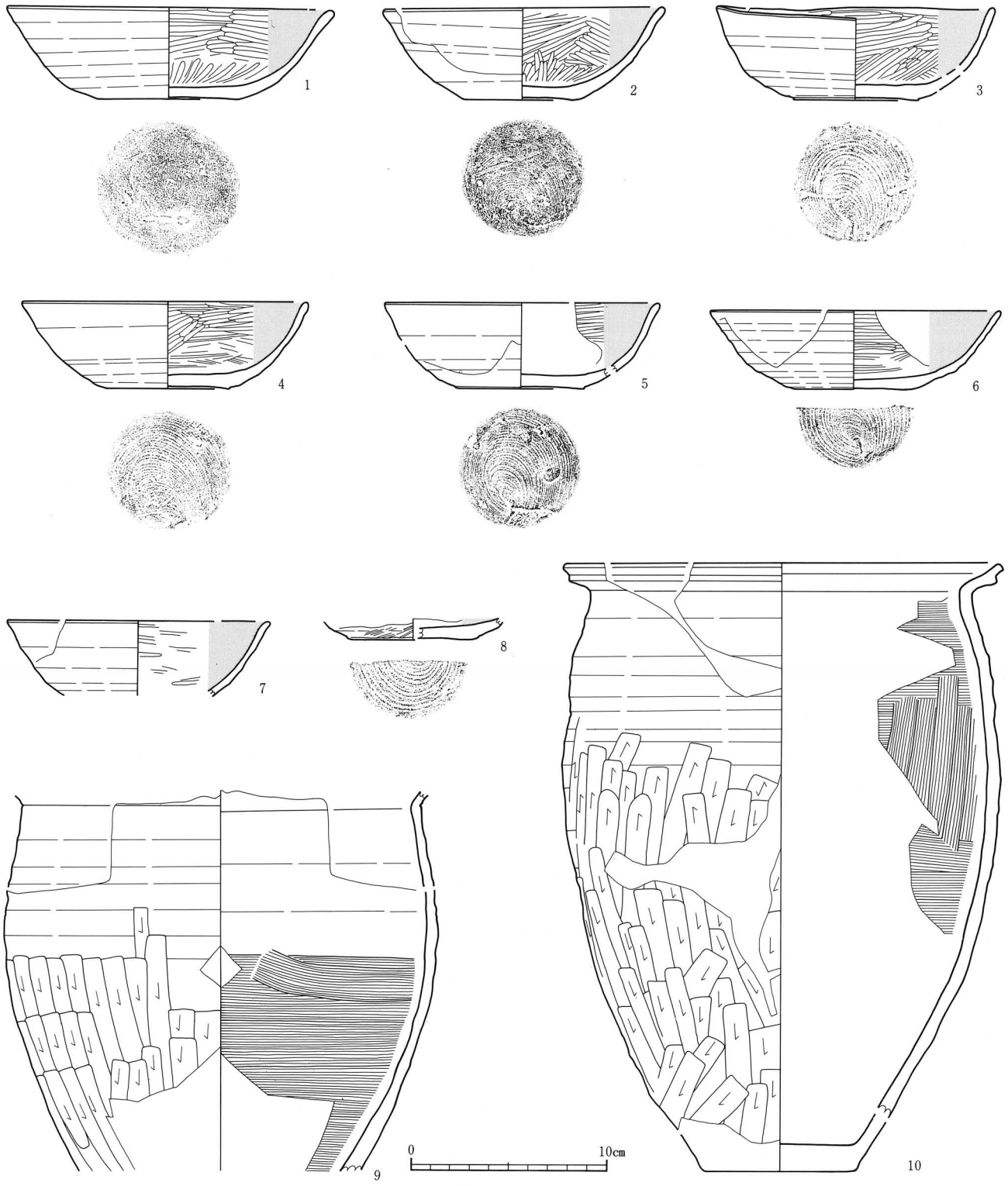
［柱　穴］カマドの南側にピット１つを検出した。径は長軸40cm、短軸34cmのもので、柱痕跡は無く、中には土師器坏と甕がみられた。位置的なことからも柱穴の可能性も考えられるが、遺物の状況からみて、住居に付随する土



遺構	層位	土色	土性	備考
住居掘り方	1	褐色 10YR4/4	粘質シルト	炭化物・焼土粒を少量含む
	2	にぶい赤褐色 5YR4/4	粘質シルト	径１cm内の焼土ブロックを多量、炭化物粒を少量含む
	3	黄褐色 10YR5/6	粘質土	炭化物・焼土粒を僅かに含む
	4	灰黄褐色 10YR5/2	粘質シルト	炭化物・焼土粒を僅かに含む（カマド掘り方埋土）上面が焼土化
１号土坑	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	炭化物粒を僅かに含む
	2	灰黄褐色 10YR4/2	粘質シルト	炭化物ブロックを少量含む

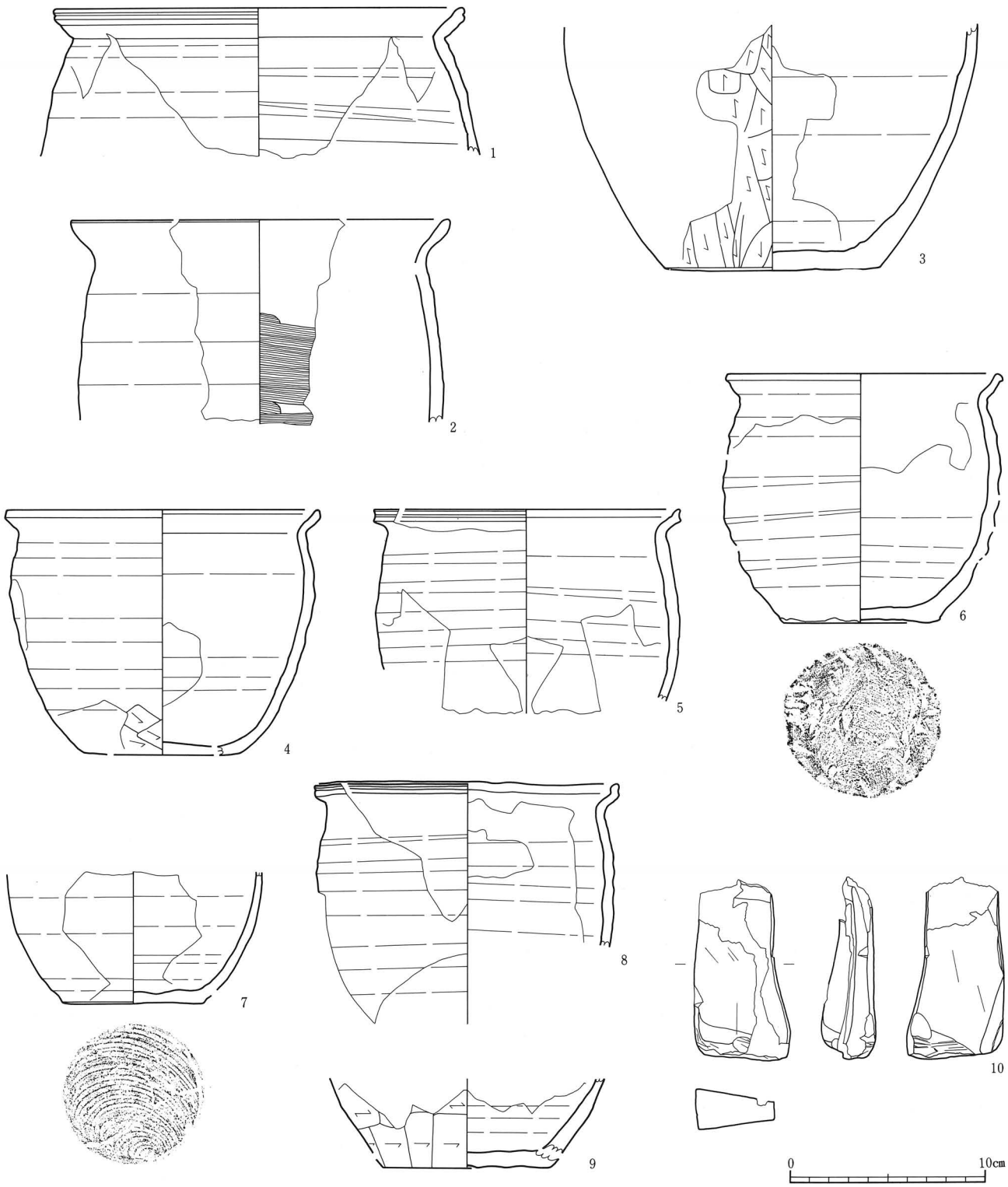
遺構	層位	土色	土性	備考
１号土坑	3	にぶい黄褐色 10YR5/3	粘質シルト	焼土ブロックを少量、炭化物粒を僅かに含む
	4	にぶい黄橙色 10YR6/4	粘質シルト	炭化物粒を僅かに含む
煙道	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	炭化物粒を僅かに含む
	2	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物ブロックを少量含む
	3	褐色 10YR4/4	シルト	炭化物ブロックを少量含む
Ｐ１	注記なし			

第16図　ＳＩ２　竪穴住居跡



図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高(mm)	外面調整	内面調整	底部調整	備　　考	類型	写真図版番号
1	2	ＳＩ２	1	土師器	坏	166×72×48	ロクロナデ	ロクロナデ→黒色処理・ヘラミガキ	ヘラケズリ		Ⅰ	18－７
2	10	ＳＩ２	カマド底面	土師器	坏	143×60×48	ロクロナデ	ロクロナデ→黒色処理・ヘラミガキ	回転糸切り→底部周縁ヘラケズリ		Ⅰ	18－９
3	1	ＳＩ２	1	土師器	坏	142×64×48	ロクロナデ	ロクロナデ→黒色処理・ヘラミガキ	回転糸切り		Ⅰ	18－６
4	9	ＳＩ２	床面	土師器	坏	145×62×45	ロクロナデ	ロクロナデ→黒色処理・ヘラミガキ	回転糸切り		Ⅰ	18－８
5	18	ＳＩ２	Ｐ１堆積土	土師器	坏	(140)×64×(45)	ロクロナデ	ロクロナデ→黒色処理・ヘラミガキ	回転糸切り		Ⅰ	18－11
6	17	ＳＩ２	Ｐ１堆積土	土師器	坏	(152)×(60)×(41)	ロクロナデ	ロクロナデ→黒色処理・ヘラミガキ	回転糸切り		Ⅰ	18－10
7	8	ＳＩ２	3	土師器	坏	(134)×－×－	ロクロナデ	ロクロナデ→黒色処理・ヘラミガキ	－		Ⅰ	18－12
8	15	ＳＩ２	1号土坑３層	土師器	坏	－×(60)×－	ロクロナデ	ロクロナデ→黒色処理・ヘラミガキ	回転糸切り	内面磨滅	Ⅰ	18－13
9	12	ＳＩ２	カマド底面	土師器	甕	－×－×－	ロクロナデ→体部下半ヘラケズリ	ロクロナデ→体部下半ヘラナデ	－		Ⅰ	19－４
10	4	ＳＩ２	1	土師器	甕	224×－×(314)	ロクロナデ→回転ハケメ？→ヘラナデ	ロクロナデ→体部下半ヘラケズリ	－		Ⅰ	19－１

第17図　ＳＩ２出土遺物（１）



図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高(mm)	外面調整	内面調整	低部調整	備　考	類型	写真図版番号
1	11	ＳＩ２	カマド底面	土師器	甕	(206)×－×－	ロクロナデ	回転ヘラナデ→ロクロナデ	－		Ⅰ	19－3
2	7	ＳＩ２	3	土師器	甕	(192)×－×－	ロクロナデ	ロクロナデ→ヘラナデ	－		Ⅰ	19－2
3	16	ＳＩ２	1号土坑堆積土	土師器	甕	－×(110)×－	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラケズリ		Ⅰ	20－2
4	14	ＳＩ２	1号土坑3層	土師器	甕	(162)×(80)×126	ロクロナデ→体部下端ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラケズリ		Ⅱ	19－6
5	6	ＳＩ２	3	土師器	甕	(156)×－×－	ロクロナデ	ロクロナデ	－		Ⅱ	19－7
6	3	ＳＩ２	1	土師器	甕	(141)×78×128	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		Ⅱ	19－5
7	5	ＳＩ２	2	土師器	甕	－×72×－	ロクロナデ→ヘラナデ？	ロクロナデ	回転糸切り		Ⅱ	20－4
8	19	ＳＩ２	Ｐ１堆積土	土師器	甕	(156)×－×－	ロクロナデ	ロクロナデ	－		Ⅱ	20－1
9	13	ＳＩ２	1号土坑2層	土師器	甕	－×86×－	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ→一部ハケメ状のもの	ヘラケズリ		－	20－3

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	備　考	写真図版番号
10	1	ＳＩ２	2	石製品	砥石	(94)×38～49×17～28	(113)	一端部欠損 断面長方形	27－6

第18図　ＳＩ２出土遺物（２）

坑の可能性もある。

［周　溝］確認されなかった。

［カマド］東壁に付設されている。カマド本体はやや長めの円礫を左袖に３つ、右袖に４つを床面より立て、袖部の芯材としている。また最前列の左右の袖石にまたがって乗る形で、長さ50cm、幅20cm程の大型の礫があり、これは床面から13cmほどの高さにあったことから、本来はカマド焚口上部に渡した天井石であり、カマド内への土砂流入後に幾分落ちた可能性が考えられる。但し、奥の袖石と東壁との間は30cm程もあり、この部分については礫はみられず、床面にはカマド掘り方のプランは延びていないことから、本来この部分には礫は組まれなかったものと推定される。カマド底面には手前寄りに40×25cmの範囲で焼面がみられ、土師器坏と甕が数個体みられた。カマド掘り方は幅85cm、奥行き65cm、深さは10cm程で、周壁は緩やかで、袖石はその壁際に配置されていた。カマド内堆積土は住居全体にみられる２・３層が同様に流入しており、床面上に目立った焼土・炭化物層はみられない。

煙道は長さ90cm、幅26cm、深さ８cmで、奥に向かって緩やかに傾斜し、上っていくが、先端部はピット状に窪み、径は34cm、深さは25cmである。堆積土は３層に分層されたが、炭化物粒を少量含むのみで、壁面についても焼面はみられない。

［その他］カマドの西側の住居中央寄りに土坑を１基検出した。楕円形で、長軸72cm、短軸51cm、深さ30cm程である。壁面は急で、底面は平坦である。堆積土は４層で、全層に炭化物、３層中に焼土ブロックを少量含んでいる。

［出土遺物］土師器231点、須恵器31点、砥石１点がある。土師器の出土地点は１～３層中が111点、カマド底面が26点、１号土坑が43点、ピットが35点などとなっている。

土師器は全てロクロを使用しており、（17図１～８）は坏で、内面調整は全て黒色処理、ヘラミガキが施されている。底部切離し調整は（３～６・８）が回転糸切り無調整で、（１）は切離し不明で、手持ちヘラケズリ調整、（２）は回転糸切りのち周縁にヘラケズリが施される。（17図９・10、18図１～９）は甕で、（18図４～８）は中型、（17図９・10、18図１～３・９）はやや大型である。破片資料のため全体は明らかでないが、内外面の調整は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデのもの（17図10）、外面のみヘラケズリのもの、（18図３・４・９）、ロクロ調整のち無調整のもの（18図５～８）などがある。底部は回転糸切り無調整のもの（18図６・７）、ヘラケズリ調整のもの（18図３・４・９）がある。

（２）土坑・陶器埋設遺構ほか

ＳＫ１０　土坑

６Ｔ（１区）、Ｖ層上面で検出した。形態は楕円形とみられ、規模は長軸112cm以上、短軸96cm、深さ35cm以上である。長軸方向はＮ－86°－Ｅである。底面は平坦で、壁面はやや緩やかに立上がる。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器３点がある。

ＳＫ１１　土坑

６Ｔ（１区）、Ｖ層上面で検出した。形態は楕円形とみられ、規模は長軸80cm以上、短軸85cm、深さ27cm以上である。長軸方向はＷ－Ｅである。底面はやや起伏があり、壁面は緩やかに立上がるものとみられる。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器１点、渥美産の中世陶器の甕か壺１点がある。

ＳＫ１２　土坑

６Ｔ（１区）、Ｖ層上面で検出した。形態は楕円形とみられ、規模は長軸132cm以上、短軸110cm、深さ72cm以上である。長軸方向はＮ－88°－Ｅである。底面はやや起伏があるが平坦で、壁面はほぼ直立する。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器６点がある。

ＳＫ１３　土坑

８Ｔ（２区）、Ｖ層上面で検出した。形態は隅丸長方形で、規模は長軸150cm、短軸92cm、深さ41cmである。長軸

方向はN－86°－Wである。底面は平坦で、壁面はやや急に立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ１４　土坑

８Ｔ（２区）、Ｖ層上面で検出した。形態は隅丸長方形で、規模は長軸123cm、短軸55cm、深さ60cmである。長軸方向はN－６°－Ｅである。底面はやや高低差があるが平坦で、壁面はほぼ直立する。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ１５　土坑

８Ｔ（２区）、Ｖ層上面で検出し、ＳＫ20を切っている。形態は不整長方形で、規模は長軸204cm、短軸102cm、深さ62cmである。長軸方向はN－８°－Ｅである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ１６　土坑

６Ｔ（１区）、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＤ11に切られ、ＳＫ38・39・43・91を切っている。形態は隅丸長方形で、規模は長軸370cm、短軸120cm、深さ89cmである。長軸方向はN－88°－Ｅである。底面はほぼ平坦で、東側長軸端部が段状になる可能性がある。壁面は直立するが、長軸側の下端はやや緩やかに立上がる。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器５点、産地不明の陶器の壺とみられるもの１点、鉄滓11点がある。

ＳＫ１７　土坑

６Ｔ（１区）、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ19・42に切られ、ＳＫ18を切っている。形態は不整楕円形で、規模は長軸250cm、短軸130cm以上、深さ41cmである。長軸方向はN－85°－Ｅである。底面は平坦で、壁面は底面際はやや緩やかだが、上部は直立する。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器２点、土師質土器の皿１点、鉄滓４点があり、鉄滓のうち１点は碗形滓とみられる。（30図４）は土師質土器の皿で、小破片であるがロクロ成形で、底部に丸みを持っている。

ＳＫ１８　土坑

６Ｔ（１区）、Ⅳ層上面で検出し、ＳＫ17に切られる。形態は円形で、規模は長軸82cm、短軸80cm、深さ31cmである。底面は狭く、やや平坦で、壁面は急である。堆積土は１層で、自然堆積とみられる。出土遺物は鉄滓５点がある。

ＳＫ１９　土坑

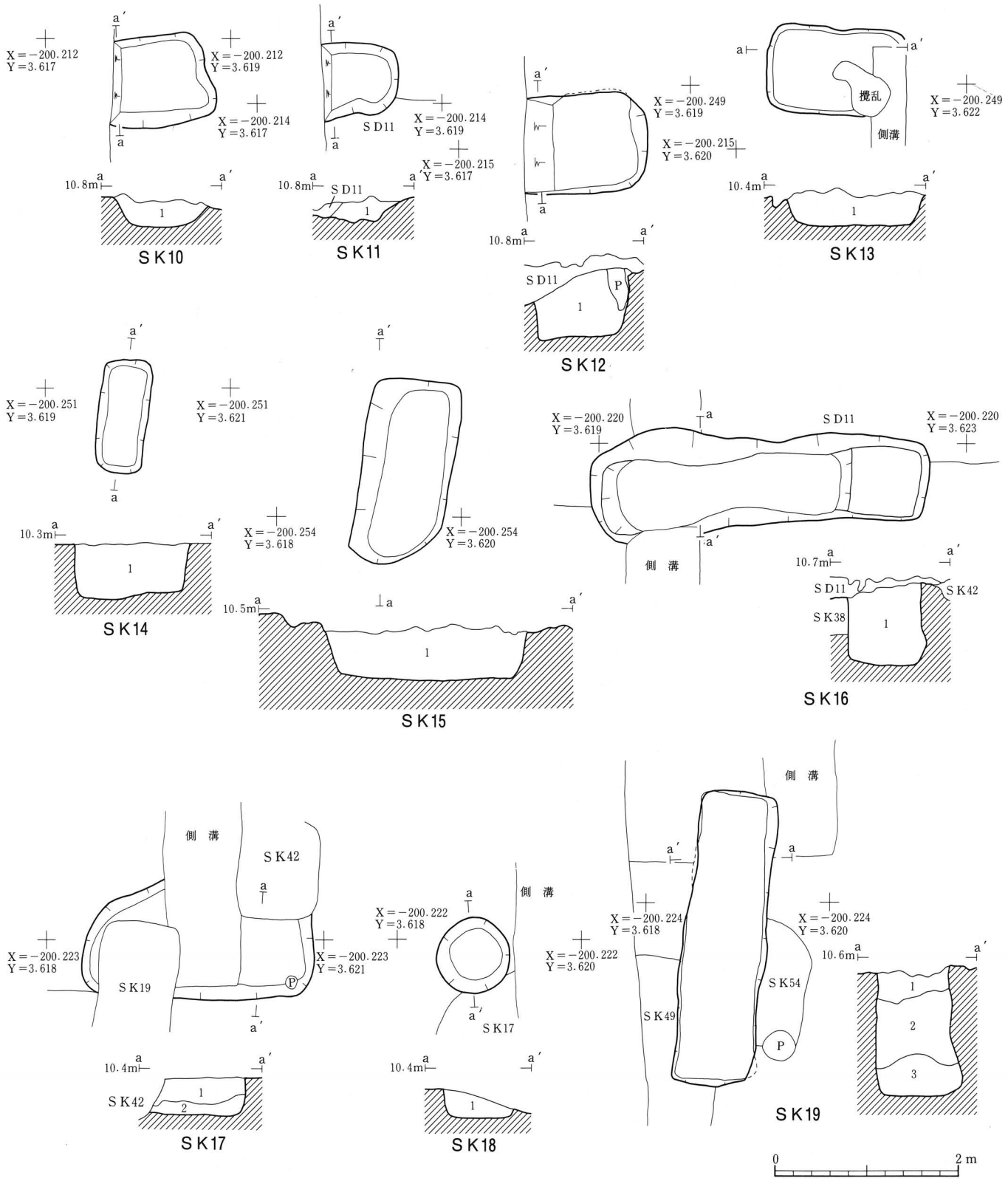
６Ｔ（１区）、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ49・54に切られ、ＳＫ17を切っている。形態は長方形で、規模は長軸320cm、短軸90cm以上、深さ140cmである。長軸方向はN－５°－Ｅである。底面は傾斜があるがほぼ平坦で、壁面は直立し、一部でオーバーハングする。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器１点、須恵器５点、刀子１点がある。

ＳＫ２０　土坑

８Ｔ（２区）、Ｖ層上面で検出し、ＳＫ15・21を切っている。形態は隅丸方形で、規模は長軸120cm、短軸106cm以上、深さ63cmである。断面形は摺鉢状で、底面は狭く、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は３層で、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ２１　土坑

８Ｔ（２区）、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ14ｃに切られ、ＳＫ20を切っている。形態は不整形で、規模は長軸265cm以上、短軸175cm、深さ40cmである。長軸方向はN－51°－Wである。断面形は舟底状で、底面は狭く、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は３層で、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。



遺構	層位	土色	土性	備考
SK10	1	褐 色 10YR4/4	砂質シルト	炭化物粒を少量、径2㎝内のⅤ層ブロックを多量含む
SK11	1	褐 色 10YR4/4	砂質シルト	炭化物粒を少量、径2㎝内のⅤ層ブロックを多量含む
SK12	1	黒 褐 色 10YR3/2	シルト	炭化物粒を少量、径5㎝内のⅤ層ブロックを多量含む
SK13	1	褐 色 10YR4/4	砂質シルト	Ⅴ層大・小ブロックを多量含む
SK14	1	褐 色 10YR4/4	砂質シルト	Ⅴ層大・小ブロックを多量含む
SK15	1	褐 色 10YR4/4	砂質シルト	径1㎝内のⅣ・Ⅴ層小ブロックを多量含む
SK16	1	褐 色 10YR4/4	砂質シルト	炭化物粒を少量、径2㎝内のⅡ・Ⅴ層ブロックを多量含む
SK17	1	暗 褐 色 10YR3/3	シルト	炭化物を少量、径1㎝程のⅡ・Ⅳ・Ⅴ層小ブロックをまばらに含む

遺構	層位	土色	土性	備考
SK17	2	褐 色 10YR4/4	シルト	炭化物ブロック・焼土粒・Ⅳ層小ブロックを少量含む
SK18	1	灰 黄 褐 色 10YR4/2	シルト	炭化物粒を少量含む
SK19	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	径2㎝内のⅤ層ブロックを層下半に含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3 黄 褐 色 10YR5/6	砂質シルト 粘質シルト	＞ 各径5㎝内のブロック層
	3	にぶい黄褐色 10YR4/3 黄 褐 色 10YR5/6	砂質シルト 粘質シルト	＞ 互層

第19図　SK（1）

ＳＫ２２　土坑

８Ｔ（２区）、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ14ａに切られる。形態は長方形で、規模は長軸305cm、短軸95cm、深さ73cmである。長軸方向はＮ－87°－Ｗである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器１点、須恵器１点、中国龍泉窯系の青磁碗とみられるもの１点がある。

ＳＫ２３　土坑

１区、Ⅱｂ層上面で検出し、ＳＤ11に切られる。形態は円形で、規模は長軸86cm、短軸82cm、深さ24cmである。底面は狭く、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ２４　土坑

１区、Ⅱｂ層上面で検出した。形態は円形で、規模は長軸70cm、短軸66cm、深さ28cmである。底面は狭く、壁面は急に立上がる。堆積土は２層で、１層は縦に細長い層であるが、柱痕跡とは異なる。人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器１点がある。

ＳＫ２５　土坑

１区、Ⅱｂ層上面で検出した。形態は円形で、規模は径73cm、深さ39cmである。底面は狭く、壁面はやや急に立上がる。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ２６　土坑

１区、Ⅱｂ層上面で検出した。形態は円形で、規模は長軸60cm、短軸55cm、深さ７cmと残存状況は悪い。底面は狭く、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ２７　土坑

１区、Ⅱｂ層上面で検出した。形態は楕円形で、規模は長軸70cm、短軸59cm、深さ23cmである。長軸方向はＮ－44°－Ｗである。底面は狭く、壁面はやや急に立上がる。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器１点、釘１点がある。

ＳＫ２８　土坑

１区、Ⅱｂ層上面で検出した。形態は円形で、規模は長軸70cm、短軸68cm、深さ22cmである。底面は狭く、壁面はやや急に立上がる。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ２９　土坑

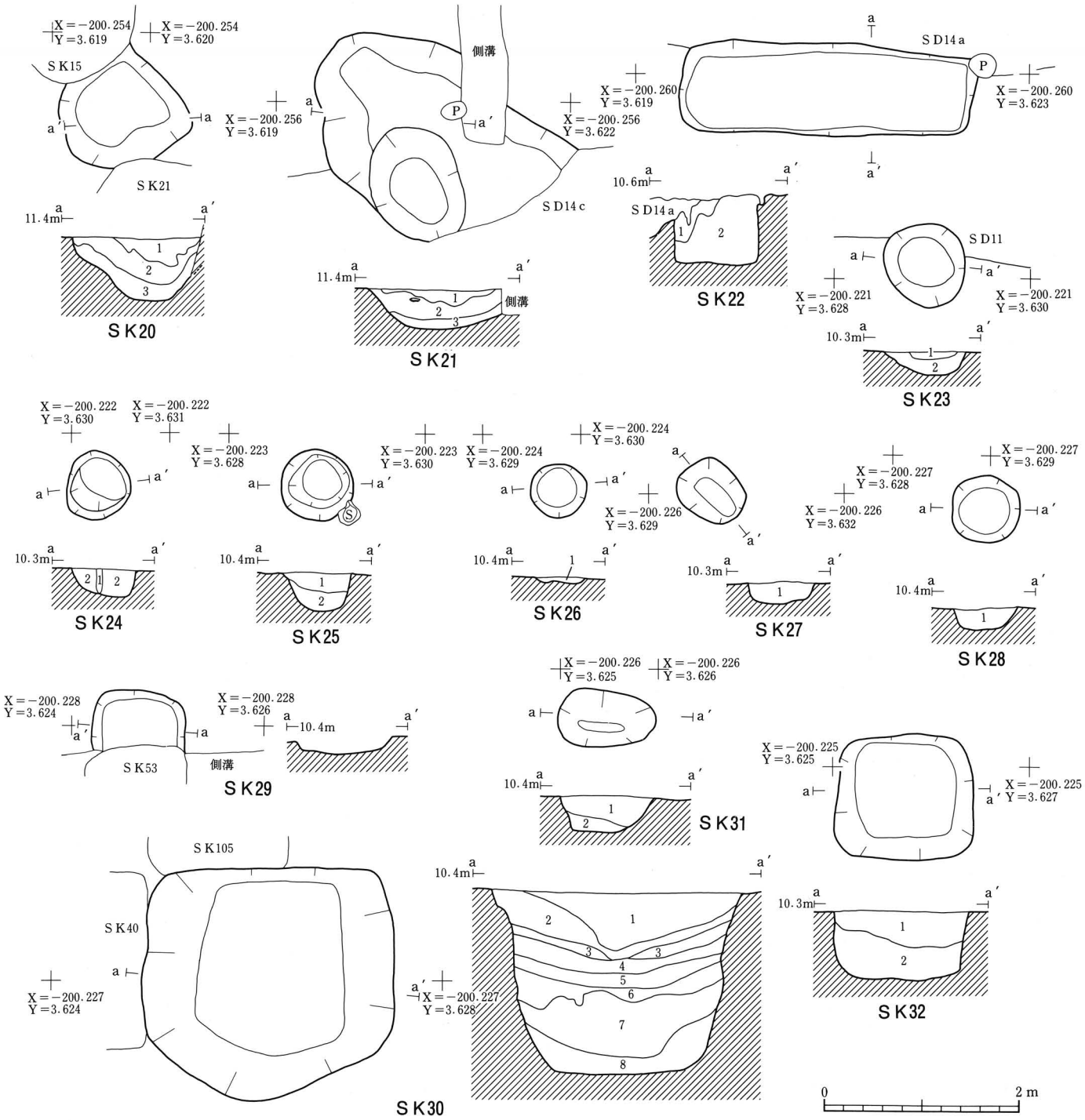
１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ53に切られ、ＳＫ40・116を切っている。形態は不明で、規模は長軸96cm以上、短軸75cm以上、深さ15cm以上である。底面はほぼ平坦で、壁面は残存が悪く不明である。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ３０　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ31・32に切られ、ＳＫ40・105・107・117を切っている。形態は五角形で、井戸跡の可能性が考えられる。規模は長軸255cm、短軸240cm、深さ185cmである。底面もやはり五角形を呈し、平坦で、壁面は全体に急に立上がる。堆積土は８層で、このうち最下層の８層と６層がシルト質層を挟む自然堆積層であるのに対し、７層が壁面の崩落層、５層より上層が人為堆積とみられることから、井戸としての機能停止後に埋め戻されたものとみられる。出土遺物はロクロ土師器２点、須恵器１点、在地産・常滑産・渥美産の中世陶器の甕が各１点、石核１点、土製品１点、鉄滓１点がある。（30図２）は常滑産の甕とみられ、底部付近のみの残存である。

ＳＫ３１　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ30・40を切っている。形態は楕円形で、規模は長軸100cm、短軸60cm、深さ37cmである。長軸方向はＮ－83°－Ｗである。底面は狭く、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は２層で、人為堆積と



遺構	層位	土色	土性	備考
SK20	1	黒褐色 10YR3/2	シルト	炭化物粒を少量、にぶい黄褐色小ブロックを多量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物粒を僅かに含む
	3	褐色 10YR4/4	シルト	Ⅵ層ブロックを含む
SK21	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	炭化物粒を僅かに含む
	2	褐色 10YR4/4	砂質シルト	炭化物粒を僅かに含む
	3	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質土	
SK22	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	にぶい黄澄色砂質ブロックを多量、酸化鉄斑を少量含む
	2	褐色 10YR4/4	砂質シルト	にぶい黄褐色砂質シルトを多量、一部層状に挟む
SK23	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	炭化物粒・Ⅴ層小ブロックを少量含む
	2	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	炭化物粒・Ⅴ層小ブロックを少量、Ⅱ層小ブロックを多量含む
SK24	1	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質シルト	ピット？
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物粒・Ⅴ層小ブロックを少量含む
SK25	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物粒を少量、Ⅴ層ブロックを多量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物粒・Ⅴ層ブロックを多量含む
SK26	1	にぶい黄褐色 10YR5/3	シルト	炭化物粒を少量、焼土粒を僅かに含む
SK27	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	Ⅳ・Ⅴ層ブロックを多量含む

遺構	層位	土色	土性	備考
SK28	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	Ⅳ層ブロックを少量、Ⅴ層ブロックを僅かに含む
SK29	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層ブロックを含む
SK30	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	炭化物ブロックを僅か、径3cm内のⅤ層ブロックを多量、Ⅳ層ブロックを少量含む
	2	にぶい黄澄色 10YR6/4	砂質土	径2cm内のⅤ層ブロックを多量含む
	3	灰黄褐色 10YR5/2	シルト	Ⅴ層・にぶい黄橙色砂質ブロックを多量含む
	4	にぶい黄橙色 10YR6/4	砂質土	層中に径1cm内のⅤ層ブロックを層状に含む
	5	褐灰色 10YR4/1	シルト	炭化物粒を少量、径10cm内のⅤ層ブロックを多量含む
	6	にぶい黄橙色 10YR6/4	砂質土	灰黄褐色シルトを層状に数条挟む
	7	にぶい黄褐色 10YR5/4 にぶい黄褐色 10YR4/3	粘質土 粘質土	＞ 互層
	8	にぶい黄橙色 10YR6/3	砂質土	にぶい黄褐色シルトを層状に挟む
SK31	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質土	Ⅴ層小ブロックを少量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質土	Ⅴ層小ブロックを多量含む
SK32	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	炭化物小ブロック・焼土粒・Ⅴ層小ブロックを少量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	径5cm内のⅤ層ブロックを多量含む

第20図　SK（2）

みられる。出土遺物はロクロ土師器１点、渥美産の中世陶器の壺とみられるもの１点がある。

ＳＫ３２　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ30・33・105・107を切っている。形態は隅丸方形で、規模は長軸140cm、短軸130cm、深さ70cmである。底面はほぼ平坦で、壁面は直立する。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器13点、須恵器４点、瀬戸産の中世陶器の壺か瓶子１点、土師質土器の皿１点がある。

ＳＫ３３　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ32に切られ、ＳＫ36・105・107を切っている。形態は長方形で、規模は長軸270cm以上、短軸95cm、深さ78cmである。底面は平坦で、壁面は直立する。長軸方向はＮ－９°－Ｗである。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器17点、須恵器２点がある。

ＳＫ３４　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出した。形態は楕円形で、規模は長軸75cm、短軸47cm、深さ25cmである。長軸方向はＮ－１°－Ｅである。底面は狭いが平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ３５　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＤ11に切られる。形態は楕円形で、規模は長軸70cm、短軸43cm、深さ12cmである。長軸方向はＮ－82°－Ｗである。底面は狭いが平坦で、壁面は残存が悪いため不明である。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ３６　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ33に切られる。形態は楕円形とみられ、規模は長軸75cm以上、短軸65cm、深さ21cmである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。長軸方向はＮ－83°－Ｗである。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器１点がある。

ＳＫ３７　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ41に切られ、ＳＫ39を切っている。形態は不整楕円形で、規模は長軸265cm、短軸103cm、深さ42cmである。長軸方向はＮ－２°－Ｅである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器２点、須恵器１点、砥石２点がある。

ＳＫ３８　土坑

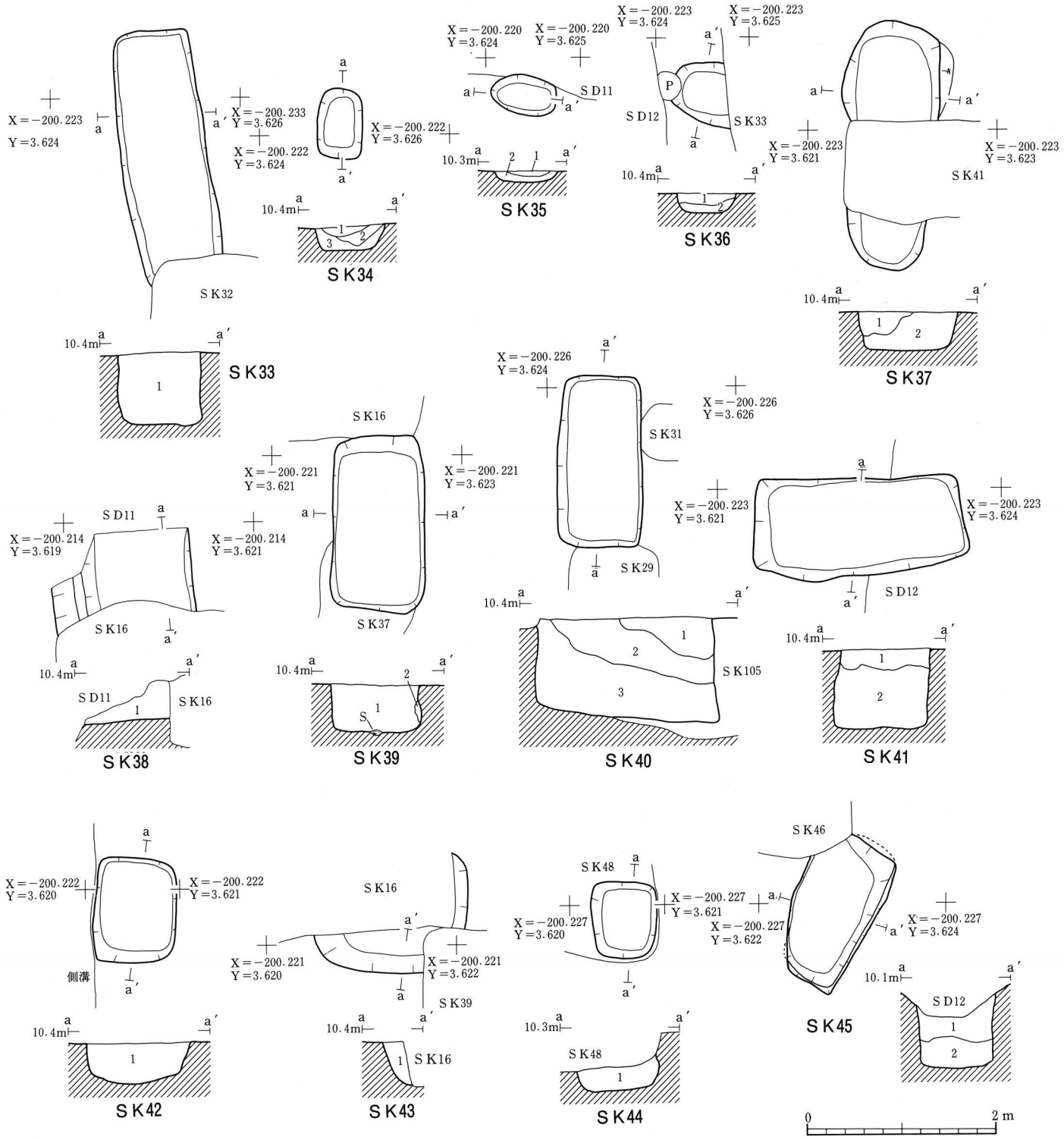
６Ｔ（１区）、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＤ11・ＳＫ16に切られる。形態は不明で、規模は長軸150cm以上、短軸95cm以上、深さ40cm以上である。確認できる限りでは底面は平坦で、壁面は急とみられ、西壁側に段がみられる。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ３９　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ16・37に切られ、ＳＫ43を切っている。形態は長方形で、規模は長軸190cm、短軸98cm、深さ50cmである。底面は平坦で、壁面は直立する。長軸方向はＮ－Ｓである。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器13点がある。

ＳＫ４０　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ29・31に切られ、ＳＫ30・105を切っている。形態は長方形で、規模は長軸185cm、短軸90cm、深さ111cmである。長軸方向はＮ－Ｓである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。各層の違いは明瞭で、層は全体に北側に向って傾斜しているのがわかる。出土遺物は縄文土器１点、ロクロ土師器３点、須恵器１点、古銭１点がある。



遺構	層位	土色	土性	備考
SK33	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物粒を僅か、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層ブロックを含む
SK34	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物粒・焼土粒を少量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物を層状に挟む
	3	にぶい黄褐色 10YR5/3	粘質シルト	
SK35	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物粒・焼土粒を僅かに含む
	2	にぶい黄褐色 10YR5/3	シルト	Ⅴ層小ブロックを僅かに含む
SK36	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物小ブロックを少量、Ⅴ層ブロックを多量含む
	2	褐色 10YR4/4	シルト	Ⅱ層ブロック・酸化鉄斑を多量含む
SK37	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	径1cm内のⅡ・Ⅳ・Ⅴ層ブロックを全体にまばらに含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	径3cm内のⅡ・Ⅳ・Ⅴ層ブロックを全体に多量、焼土小ブロックを少量含む
SK38	1	黒褐色 10YR3/2	砂質シルト	
SK39	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	炭化物・Ⅳ層ブロックを少量、径2cm内のⅤ層ブロックをやや多量含む

遺構	層位	土色	土性	備考
SK39	2	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	Ⅴ層の崩落層　Ⅰ層ブロックを少量含む
SK40	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	炭化物・焼土粒を僅か、Ⅴ層ブロックをまばらに含む
	2	褐色 10YR4/4	砂質シルト	炭化物少量、径2cm内のⅤ層、Ⅱ・Ⅳ層ブロックを多量含む
	3	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質土	炭化物少量、径2cm内のⅤ層、Ⅱ・Ⅳ層ブロックを多量含む
SK41	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物・Ⅴ層ブロックを少量含む
	2	灰黄褐色 10YR4/2	粘質シルト	Ⅳ・Ⅴ層ブロックを多量、酸化鉄ブロックを少量含む
SK42	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	炭化物小ブロックを少量、Ⅳ・Ⅴ層ブロックを多量含む
SK43	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	炭化物粒、Ⅴ層ブロックを僅かに含む
SK44	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	炭化物粒を僅か、径2cm内のⅤ層ブロックを多量含む
SK45	1	褐色 10YR4/4	砂質土	径1cm内のⅤ・Ⅵ層小ブロックを多量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質土	径5cm内のⅤ層、にぶい黄褐色シルトブロックを多量含む

第21図　SK（3）

ＳＫ４１　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＤ12に切られ、ＳＫ37を切っている。形態は長方形で、規模は長軸220cm、短軸110cm、深さ85cmである。長軸方向はＮ－87°－Ｅである。底面は平坦で、壁面は直立し、一部でオーバーハングする。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器12点、須恵器２点、中国龍泉窯系の青磁碗１点、古銭１点がある。（30図５）は青磁碗の口縁部破片である。

ＳＫ４２　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ17を切っている。形態は長方形で、規模は長軸112cm、短軸88cm、深さ43cmである。底面はほぼ平坦であるが、緩やかな湾曲をもち、壁面は直立気味である。長軸方向はＮ－３°－Ｅである。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ４３　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ16・39に切られる。形態は隅丸方形で、規模は長軸160cm以上、短軸125cm以上、深さ47cm以上である。ＳＫ16に大部分を切られるために底面状況は不明で、壁面は残存部分からみると急に立上がる。堆積土は１層で、自然堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器１点、鉄滓１点がある。

ＳＫ４４　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ48に切られる。形態は隅丸方形で、規模は長軸82cm、短軸70cm、深さ26cmである。底面は平坦で、壁面は直立気味である。長軸方向はＮ－１°－Ｅである。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は古銭２点がある。

ＳＫ４５　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＤ12・ＳＫ46に切られ、ＳＫ108を切っている。形態は長方形で、規模は長軸160cm、短軸90cm、深さ77cmである。長軸方向はＮ－27°－Ｅである。底面は壁際を除きほぼ平坦で、壁面は直立する。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器２点がある。

ＳＫ４６　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＤ12・ＳＫ47・48に切られ、ＳＫ45・108・114を切っている。形態はやや隅丸の長方形で、規模は長軸232cm、短軸140cm、深さ169cmである。底面は壁際を除きほぼ平坦で、壁面は直立し、一部オーバーハングする。長軸方向はＮ－85°－Ｗである。堆積土は４層で、人為堆積とみられる。土坑が深く掘込まれているためか、堆積土は地山である砂質土が主体となっている。出土遺物は底面より刀子１点がある。

ＳＫ４７　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ46を切っている。形態は楕円形で、規模は長軸102cm、短軸75cm、深さ41cmである。長軸方向はＮ－83°－Ｅである。底面は狭く舟形状で、壁面は急に立上がる。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ４８　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ44・46・108・109・114を切っている。形態は不整方形で、規模は長軸190cm、短軸160cm、深さ40cmである。長軸方向はＮ－２°－Ｗである。底面は平坦で、緩やかに立上がりながら急な壁面となっている。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器４点、古銭３点がある。

ＳＫ４９　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ19・54を切っている。形態は隅丸長方形とみられ、規模は長軸240cm、短軸95cm以上、深さ40cm以上である。長軸方向はＮ－８°－Ｅである。底面は平坦で、断面からみた壁面はかなり緩やかに立上がるもので、他の土坑とは様相を異にする。堆積土は１層で、人為堆積とみられるが、全体に混入ブロックは目立たない。出土遺物はロクロ土師器１点、在地産の中世陶器の鉢とみられるもの１点がある。

ＳＫ５０　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ115を切っている。形態は不明で、規模は長軸150cm以上、短軸75cm以上、深さ174cm以上である。確認できる限りでは底面は平坦とみられ、壁面は直立する。堆積土は６層で、人為堆積とみられ、４・６層間は混入するブロック土による堆積土の違いが明瞭である。出土遺物はロクロ土師器２点、土師質土器の皿と不明品が各１点ある。

ＳＫ５１　土坑

１区、Ⅴ層上面で検出し、ＳＤ11に切られる。形態は不明で、規模は長軸85cm以上、短軸40cm以上、深さ21cm以上である。底面状況は不明で、壁面は直立するものとみられる。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ５２　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ115を切る。形態は不明で、規模は長軸68cm以上、短軸36cm以上、深さ35cm以上である。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ５３　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ29・116を切る。形態は不明で、規模は長軸103cm以上、短軸47cm以上、深さ127cm以上である。底面は断面形をみる限りは平坦ではなく、壁面は上半部で直立する。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ５４　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ49に切られ、ＳＫ19を切る。形態は隅丸長方形で、規模は長軸148cm、短軸102cm、深さ51cmである。長軸方向はＮ－12°－Ｅである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ５５　土坑

２区、Ⅴ層上面で検出し、ＳＫ56を切る。形態は不明で、規模は長軸108cm以上、短軸66cm以上、深さ64cm以上である。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ５６　土坑

２区、Ⅴ層上面で検出し、ＳＫ55に切られる。形態は長方形で、規模は長軸105cm以上、短軸90cm以上、深さ56cmである。長軸方向はＮ－81°－Ｗである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ５７　土坑

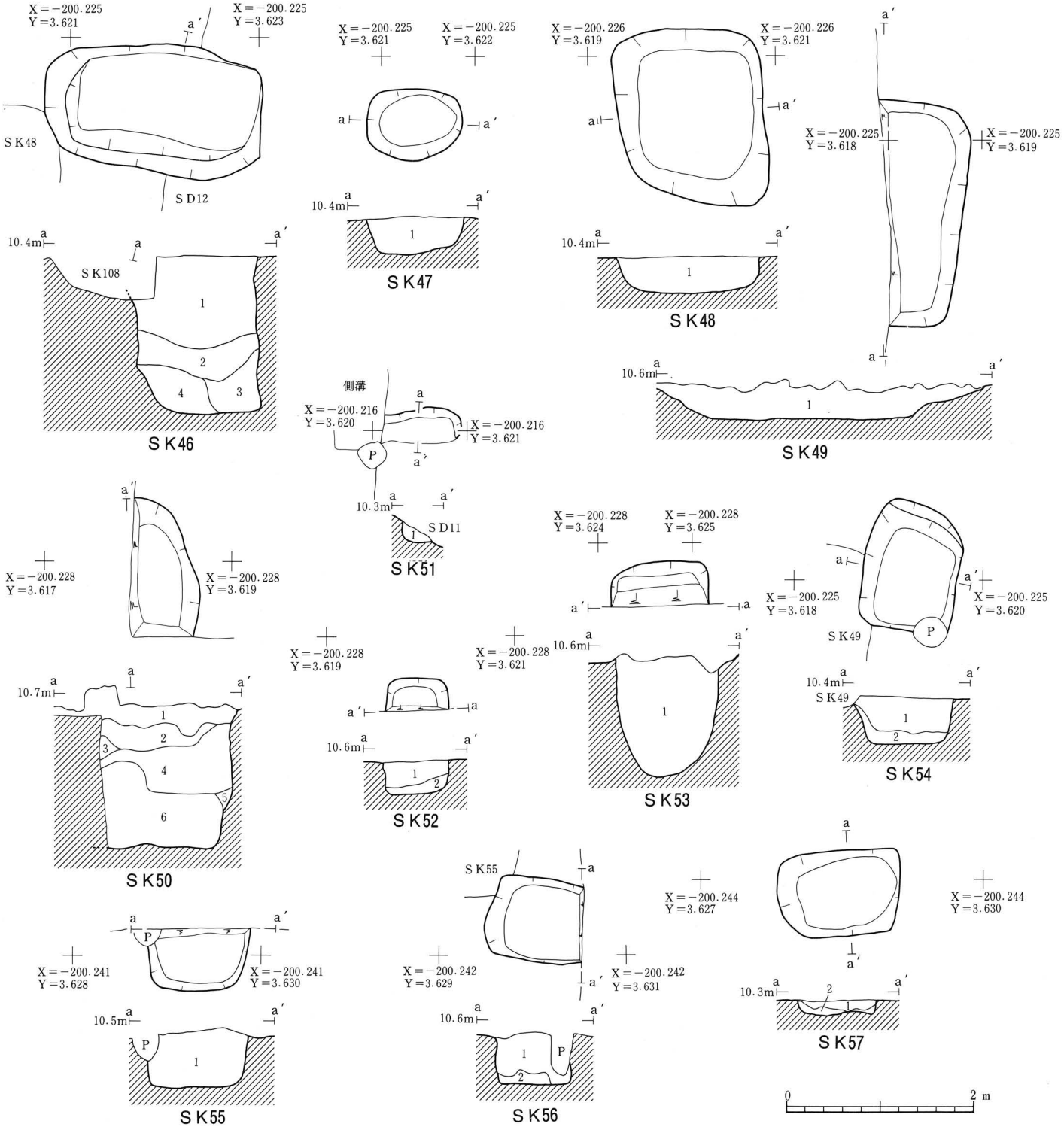
２区、Ⅴ層上面で検出した。形態は隅丸長方形で、規模は長軸132cm、短軸90cm、深さ16cmである。長軸方向はＮ－85°－Ｅである。底面は多少の起伏があるが、全体に平坦で、壁面は急に立上がるものとみられる。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ５８　土坑

２区、Ⅴ層上面で検出し、ＳＤ21を切る。形態は不明で、規模は長軸335cm以上、短軸65cm以上、深さ125cm以上である。底面状況は不明で、壁面は直立気味に立上がる。堆積土は５層で、人為堆積とみられる。この土坑は全体形は不明であるが、規模のわりには他の土坑形状とは異なったものである。出土遺物は須恵器２点、在地産の中世陶器１点がある。

ＳＫ５９　土坑

２区、Ⅴ層上面で検出し、ＳＫ65に切られる。形態は不明で、規模は長軸170cm以上、短軸155cm以上、深さ102cm以上である。長軸方向はＮ－６°－Ｅである。底面は多少の起伏と傾斜があり、壁面は直立する。堆積土は３



遺構	層位	土色	土性	備考
SK46	1	褐色 10YR4/4	砂質土	炭化物ブロックを少量、径2cm内のⅡ・Ⅴ層ブロックを多量含む
	2	褐色 10YR4/4	砂質土	径5cm内のⅤ層ブロックを多量、Ⅱ層を少量含む
	3	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質土	黒褐色粘質シルト小ブロックを少量含む
	4	褐色 10YR4/4	砂質土	炭化物ブロックを少量、径2cm内のⅡ・Ⅴ層ブロックを多量含み、Ⅵ層を一部層状に挟む
SK47	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	炭化物ブロック・Ⅴ層小ブロックを少量含む
SK48	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物・Ⅴ層小ブロックを少量含む
SK49	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物・焼土・Ⅴ層小ブロックを少量含む
SK50	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	焼土粒を僅かに含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	Ⅴ層小ブロックを僅かに含む
	3	褐色 10YR4/4	シルト	炭化物粒を少量、Ⅴ層大ブロックを多量含む
	4	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	炭化物ブロック、Ⅴ層小ブロックを少量含む
	5	黄褐色 10YR5/6	砂質土	Ⅵ層の崩落土

遺構	層位	土色	土性	備考
SK50	6	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	焼土ブロックを僅か、炭化物・Ⅴ層小ブロックを少量含む
SK51	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	Ⅴ層ブロックを多量含む
SK52	1	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	炭化物粒を僅か、Ⅳ・Ⅴ層ブロックを少量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物粒を僅かに含む
SK53	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層ブロックを含む
SK54	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物・径2cm内のⅤ層小ブロックを少量含む
	2	褐色 10YR4/4 灰黄褐色 10YR4/2	粘質シルト シルト	＞ 各ブロックの混合層
SK55	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	Ⅴ層小ブロックを多量、黒褐色ブロックを少量含む
SK56	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	Ⅴ層小ブロックを多量、黒褐色ブロックを少量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	Ⅳ層ブロックを多量含む
SK57	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物を少量、褐色シルト小ブロックを多量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	暗褐色シルト小ブロックを少量含む

第22図　SK（4）

層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ６０　土坑

２区、Ｖ層上面で検出し、ＳＫ61を切る。形態は長方形で、規模は長軸116cm以上、短軸94cm、深さ68cmである。長軸方向はＮ－９°－Ｅである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物は土師器１点がある。

ＳＫ６１　土坑

２区、Ｖ層上面で検出し、ＳＫ60に切られる。形態は長方形とみられ、規模は長軸220cm、短軸70cm以上、深さ54cmである。長軸方向はＮ－84°－Ｗである。底面は平坦で、壁面は直立し、長軸東側端部で段が付く可能性があるが、断面のみの観察のため定かではない。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器３点がある。

ＳＫ６２　土坑

２区、Ｖ層上面で検出した。形態は隅丸長方形で、規模は長軸232cm、短軸140cm以上、深さ40cmである。長軸方向はＮ－86°－Ｗである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器４点、土師質土器の皿１点がある。

ＳＫ６３　土坑

２区、Ｖ層上面で検出した。形態は隅丸長方形で、規模は長軸435cm、短軸123cm、深さ24cmである。長軸方向はＮ－88°－Ｅである。底面は平坦で、壁面は急であるが上半部は不明である。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器１点、須恵器１点がある。

ＳＫ６４　土坑

２区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ21を切る。形態は隅丸長方形で、北側長軸端部が段状になる可能性がある。規模は長軸390cm、短軸106cm、深さ60cmである。長軸方向はＮ－１°－Ｅである。底面は平坦で、壁面はほぼ直立する。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器６点がある。

ＳＫ６５　土坑

２区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ12に切られ、ＳＫ59・67を切る。形態は隅丸長方形で、規模は長軸397cm、短軸118cm、深さ54cmである。長軸方向はＮ－87°－Ｗである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ６６　土坑

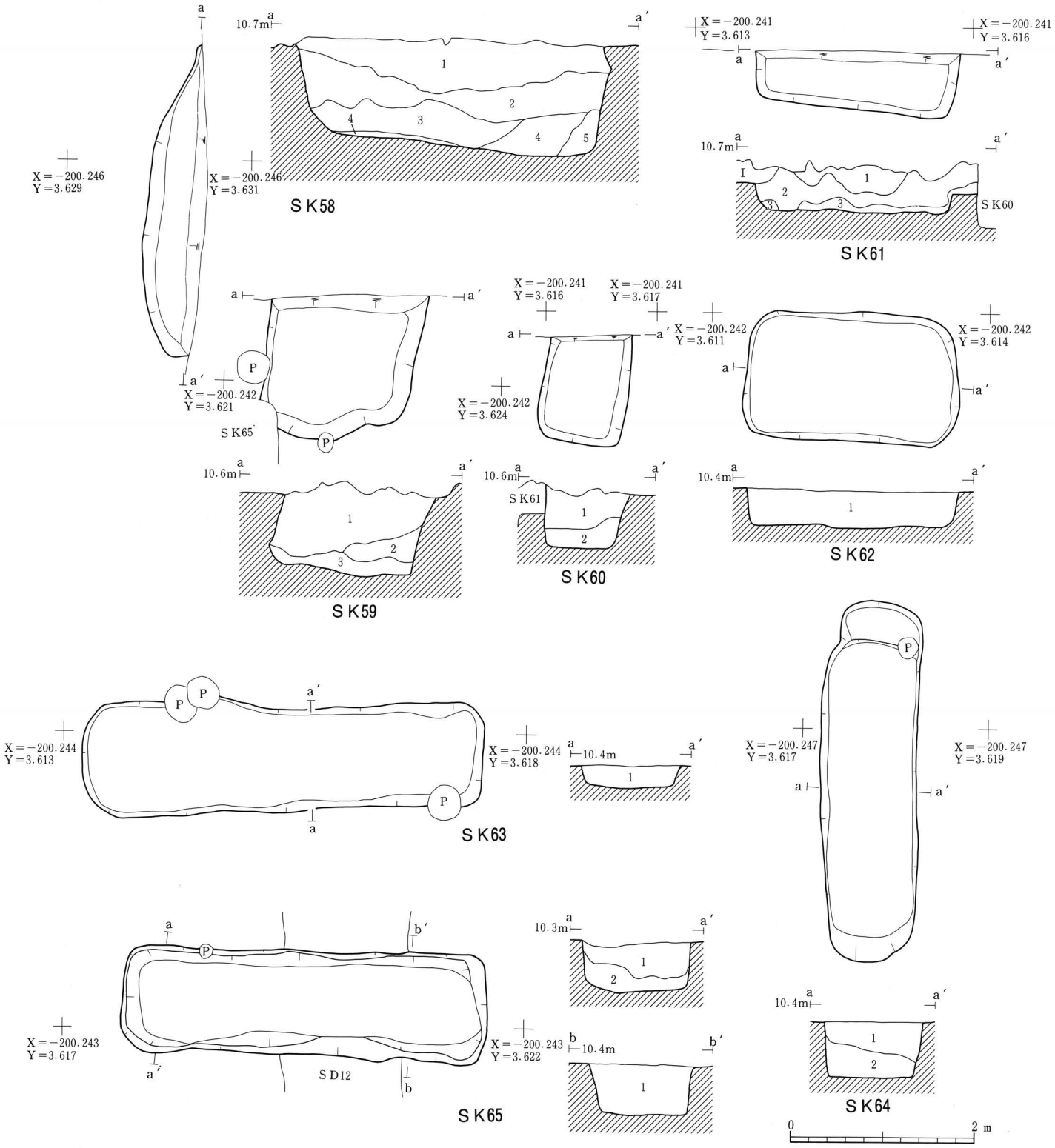
１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11に切られ、ＳＫ77を切る。形態は楕円形で、規模は長軸125cm、短軸97cm以上、深さ65cmである。長軸方向はＮ－12°－Ｅである。底面は起伏があり、壁面は直立する。堆積土は２層で、人為堆積とみられるが、底面上の２層は黒褐色粘性シルトの薄い層で、自然堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器２点がある。

ＳＫ６７　土坑

２区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ12・ＳＫ67に切られる。形態は不明で、規模は長軸71cm以上、短軸52cm以上、深さ23cm以上である。底面は狭く平坦で、壁面は直立する。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ６８　土坑

１区、Ｖ層上面で検出した。形態は楕円形で、規模は長軸103cm、短軸77cm、深さ42cmである。長軸方向はＮ－88°－Ｅである。底面は壁際は傾斜があるがほぼ平坦で、壁面は直立し、一部でオーバーハングする。堆積土は４層で、人為堆積とみられる。底面近くに炭化木が数本みられたが、壁面及び底面に焼け面は認められず、また堆積土中に焼土もみられないことから、これらは自然炭化したものとみられる。出土遺物は無い。



遺構	層位	土色	土性	備考
SK58	1	黒褐色 10YR3/2	砂質シルト	Ⅳ・Ⅴ層小ブロックを多量含む
	2	暗褐色 10YR3/3	砂質土	Ⅴ層・黒褐色小ブロックを少量含む
	3	黒褐色 10YR3/2	粘質シルト	Ⅴ・Ⅵ層大ブロックを多量、Ⅳ層を部分的に少量含む
	4	暗褐色 10YR3/3	砂質土	Ⅴ層大ブロックを多量、黒褐色粘質シルト小ブロックを少量含む
	5	暗褐色 10YR3/3	砂質土	暗褐色粘質シルト大ブロックを多量含む
SK59	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	Ⅴ層・黒褐色小ブロックを多量含む
	2	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物粒を僅か、Ⅴ層・黒褐色大ブロックを少量含む
	3	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質土(粗砂)	Ⅴ層・黒褐色小ブロックを少量含む
SK60	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	黒褐色シルトブロックを多量含む
	2	褐色 10YR4/4	シルト	黒褐色シルトブロックを少量含む
SK61	1	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	黒褐色シルト・褐色シルト小ブロックを多量含む
	2	黒褐色 10YR3/2	砂質シルト	黒褐色シルト・褐色シルト小ブロックを多量含む
	3	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	黒褐色シルトブロックを少量含む
SK62	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物を僅か、Ⅳ・Ⅴ層小ブロックを多量含む
SK63	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	黒褐色シルト・褐色シルト小ブロックを多量含む
SK64	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	黒褐色粘質シルト・褐色シルト小ブロックを多量含む
	2	暗褐色 10YR3/3	シルト	砂質土を層状に多量、黒褐色粘質シルト小ブロックを少量含む
SK65	1	黒褐色 10YR3/2	シルト	炭化物を少量、暗褐色シルトブロックを多量含む
	2	暗褐色 10YR3/4	シルト	黒褐色シルト小ブロックを少量含む

第23図　SK（5）

ＳＫ６９　土坑

１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11に切られ、ＳＫ72・76・95を切る。形態は長方形で、規模は長軸130cm以上、短軸79cm、深さ20cmである。長軸方向はＮ－20°－Ｗである。底面は平坦だが南側に向って傾斜し、壁面は直立する。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ７０　土坑

１区、Ｖ層上面で検出した。形態は隅丸方形で、規模は長軸118cm、短軸100cm、深さ23cmである。長軸方向はＮ－85°－Ｗである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ７１　土坑

１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11・ＳＫ72に切られる。形態は長方形で、規模は長軸200cm、短軸95cm、深さ110cmである。長軸方向はＮ－85°－Ｗである。底面は平坦で、壁面はほぼ直立する。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物は縄文土器１点、ロクロ土師器４点、在地産の中世陶器の甕１点、古銭１点、釘１点がある。

ＳＫ７２　土坑

１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11・ＳＫ69・78に切られ、ＳＫ71・73を切る。形態は隅丸長方形で、規模は長軸157cm以上、短軸130cm、深さ69cmである。長軸方向はＮ－６°－Ｅである。底面は平坦であるが、北側に向ってやや傾斜する。壁面は直立し、北壁はオーバーハングしながら立上がる。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器２点、在地産の中世陶器の鉢１点、古銭１点、鉄滓１点がある。

ＳＫ７３　土坑

１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11・ＳＫ69・75・76に切られる。形態は不明で、規模は長軸85cm以上、短軸50cm以上、深さ19cm以上である。底面は僅かの残存とみられ、壁面ともに形状は不明である。堆積土は１層で、人為堆積の可能性がある。出土遺物は無い。

ＳＫ７４　土坑

１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11に切られ、ＳＫ75・76を切る。形態は長方形で、規模は長軸170cm、短軸90cm、深さ104cmである。長軸方向はＮ－３°－Ｗである。底面は中央がややくぼみ、壁際は傾斜し、多少の起伏もみられあまり平坦ではない。壁面は南壁以外は直立する。堆積土は４層で、人為堆積とみられる。４層は掘り方底面に予め敷かれた層である可能性が強い。出土遺物は須恵器１点がある。

ＳＫ７５　土坑

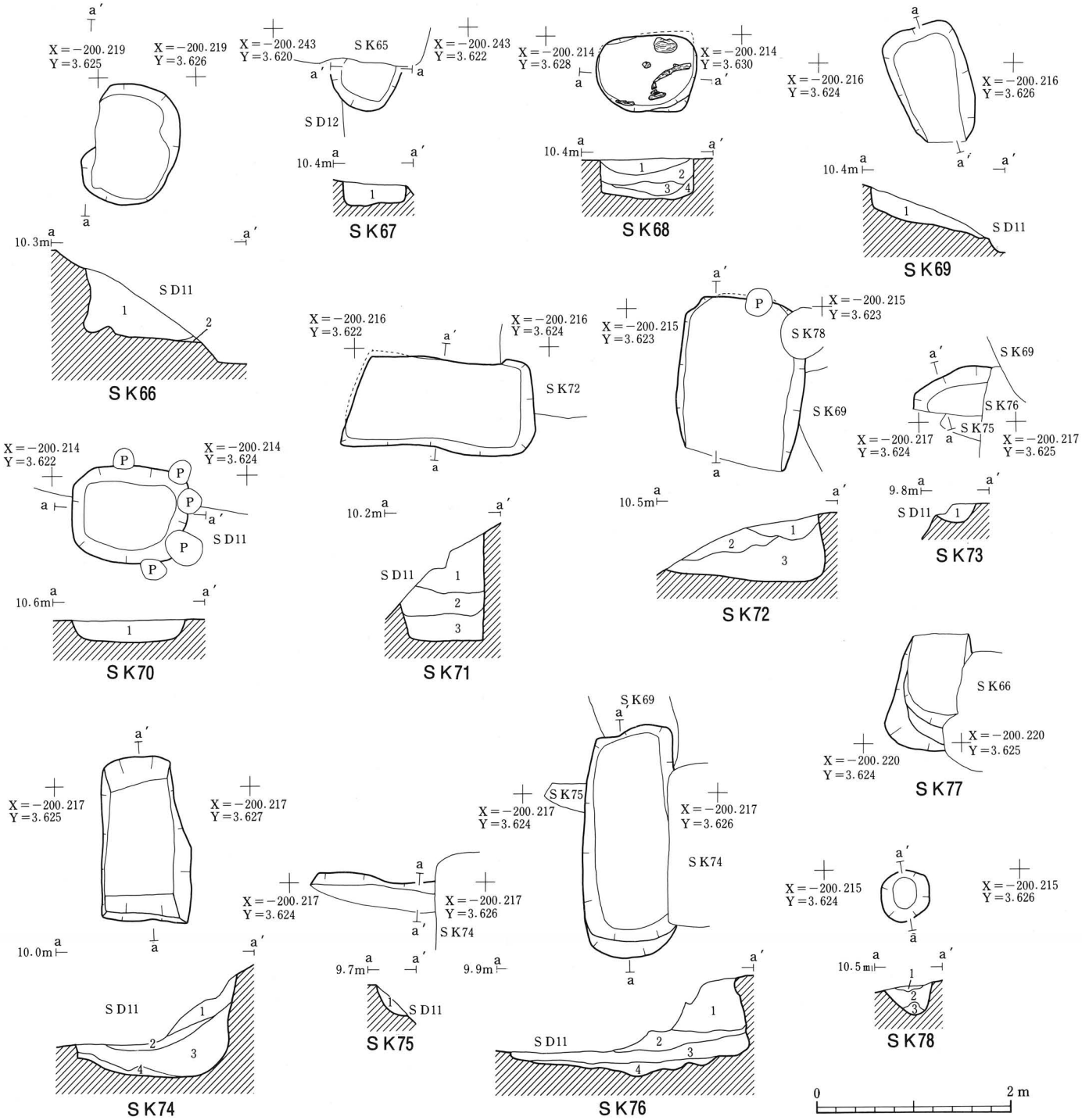
１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11・ＳＫ74に切られ、ＳＫ73・76を切る。形態は不明で、規模は長軸130cm以上、短軸33cm以上、深さ31cm以上である。残存が極めて悪く、底面状況は不明であるが、壁面はほぼ直立して立上がるものとみられる。長軸方向はＮ－82°－Ｗである。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は中国龍泉窯系の青磁碗とみられるもの１点がある。

ＳＫ７６　土坑

１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11・ＳＫ69・74・75に切られ、ＳＫ73を切る。形態は隅丸長方形で、規模は長軸240cm、短軸95cm以上、深さ100cmである。長軸方向はＮ－３°－Ｗである。掘り方底面は全体に平坦であるが起伏が著しく、４層上面は平坦である。壁面は直立し、北壁はオーバーハングして立上がる。堆積土は４層で、人為堆積とみられる。平坦面を形成する４層はＳＫ74同様に、予め掘り方底面に敷かれた層とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ７７　土坑

１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11・ＳＫ66に切られ、ＳＫ110を切る。形態は隅丸長方形とみられ、規模は長軸122cm以上、短軸65cm以上、深さ82cmである。底面はほぼ平坦で、壁面は急で、南壁には段がみられる。長軸方向はＮ－８°－Ｅである。堆積土は不明である。出土遺物は無い。



遺構	層位	土色	土性	備考
SK66	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	炭化物粒を少量、V層ブロックを多量含む
	2	黒褐色 10YR3/1	粘質シルト	炭化物小ブロックを多量含む
SK67	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	V層小ブロックを多量、黒褐色小ブロックを少量含む
SK68	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	炭化物ブロックを僅か、V層ブロックを少量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR5/3	シルト	炭化物ブロックを僅か、V層ブロックを多量含む
	3	黒褐色 10YR3/1	シルト	V層ブロックを多量含む
	4	にぶい黄褐色 10YR5/3	粘質シルト	V層のブロック層
SK69	1	黒褐色 10YR3/2	シルト	炭化物・V層小ブロックを多量、焼土ブロックを僅かに含む
SK70	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	炭化物ブロックを僅か、V層ブロックを多量含む
SK71	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘質シルト	炭化ブロックを少量、径2㎝内のV層ブロックを多量含む
	2	黒褐色 10YR3/2	粘質シルト	炭化物ブロックを少量、径4㎝内のV層ブロックを多量含む
	3	灰黄褐色 10YR6/2	粘質シルト	V層を多量、黒褐色ブロックを少量含む
SK72	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	径5㎜内のV層小ブロックを少量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	径1㎝内のV層ブロックを少量含む
	3	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	径2㎝内のV層ブロックを多量（層下半部に多め） 径10㎝内の灰黄褐色シルトブロックをいくつか含む

遺構	層位	土色	土性	備考
SK73	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘質シルト	炭化物粒を少量含む
SK74	1	暗灰黄色 2.5Y4/2	シルト	径2㎝内のV層小ブロック、SK75埋土ブロックを多量含む
	2	暗灰黄色 2.5Y4/2	シルト	径2㎝内のV層小ブロックを多量含む
	3	褐灰色 10YR5/1	砂質シルト	径1㎝内のV層小ブロックを多量含む 一部明黄褐色砂質土との互層とみられる箇所あり
	4	にぶい黄橙色 10YR6/4	砂質土(細砂)	V層小ブロックを少量含む
SK75	1	褐灰色 10YR5/1	シルト	炭化物・径2㎝内のV層ブロック、酸化鉄斑を多量含む
SK76	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	炭化物小ブロックを少量、径2㎝内のV層ブロックを多量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質シルト	径2㎝内のV層・褐灰色粘質シルトブロックを多量含む
	3	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質シルト	径2㎝内のV層ブロックを含む
	4	黄褐色 10YR5/6	砂質土	径3㎝内のV層ブロックを少量含むが砂質土が主体
SK77	注記なし			
SK78	1	黒褐色 10YR3/1	シルト	炭化物ブロックを多量、V層小ブロックを少量含む
	2	黒褐色 10YR3/2	シルト	炭化物・V層ブロックを少量含む
	3	黒褐色 10YR3/2	シルト	V層ブロックを多量含む

第24図　SK（6）

ＳＫ７８　土坑

１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11に切られ、ＳＫ72を切る。形態は円形で、規模は長軸53cm、短軸51cm、深さ33cmである。断面形はＵ字形で、壁面はやや急に立上がる。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ７９　土坑

１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ10に切られる。形態は長方形で、規模は長軸119cm、短軸105cm、深さ47cmである。長軸方向はＮ－27°－Ｅである。底面は平坦で、壁面はほぼ直立する。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ８０　土坑

１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ10に切られる。形態は長方形で、規模は長軸143cm以上、短軸86cm、深さ101cmである。長軸方向はＮ－Ｓである。底面は平坦で、壁面は直立し、底面との境が明瞭である。堆積土は３層で、人為堆積とみられるが、底面には自然堆積層とみられる薄い黒褐色シルト層がみられる。出土遺物は鉄製品１点がある。

ＳＫ８１　土坑

２区、Ｖ層上面で検出した。形態は隅丸長方形で、規模は長軸199cm、短軸102cm、深さ38cmである。長軸方向はＮ－７°－Ｗである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は２層で、１層については人為堆積とみられるが、２層はＶ層の砂質土を層状に挟む自然層とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ８２　土坑

２区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ12に切られる。形態は隅丸方形で、規模は長軸153cm、短軸134cm、深さ44cmである。長軸方向はＮ－20°－Ｅである。底面は平坦で、壁面はほぼ直立する。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ８３　土坑

２区、Ｖ層上面で検出し、ＳＫ84を切る。形態は隅丸長方形で、規模は長軸214cm、短軸109cm、深さ23cmである。長軸方向はＮ－84°－Ｗである。底面は平坦で、壁面はほぼ直立するものとみられる。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ８４　土坑

２区、Ｖ層上面で検出し、ＳＫ83に切られる。形態は隅丸方形で、規模は長軸87cm、短軸83cm、深さ26cmである。長軸方向はＮ－９°－Ｅである。底面はやや傾斜し、壁面は直立する箇所と緩やかに立上がる箇所がある。堆積土は２層で、１層については人為堆積とみられるが、２層は底面上にみられる自然層とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ８５　土坑

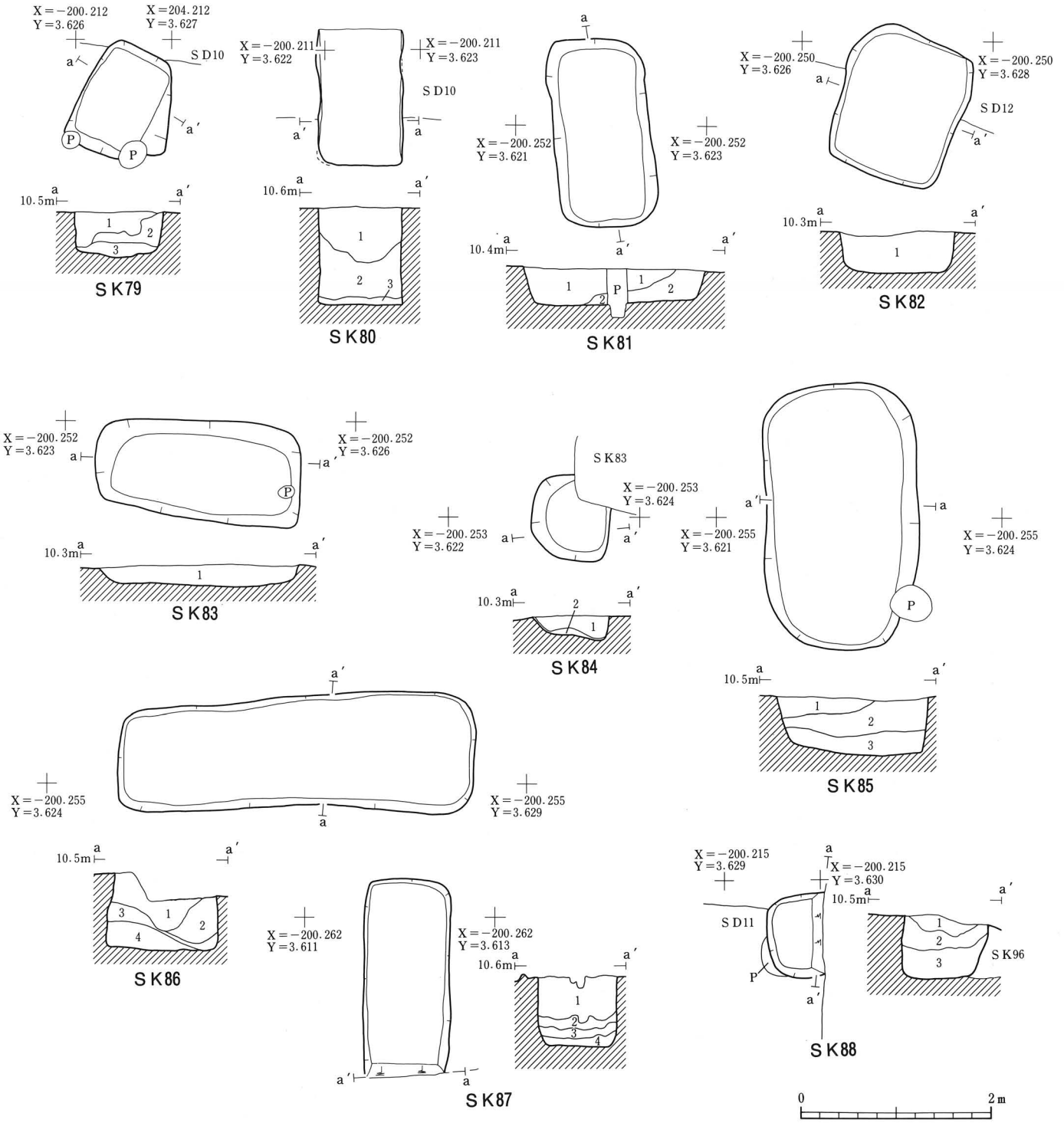
２区、Ｖ層上面で検出した。形態は楕円形で、規模は長軸279cm、短軸161cm、深さ57cmである。長軸方向はＮ－３°－Ｗである。底面はやや傾斜はあるが平坦で、壁面はかなり急に立上がる。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器２点がある。

ＳＫ８６　土坑

２区、Ｖ層上面で検出した。形態は隅丸長方形で、規模は長軸372cm、短軸125cm、深さ80cmである。長軸方向はＮ－88°－Ｅである。底面は平坦で、壁面はオーバーハング気味に直立する。堆積土は４層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ８７　土坑

２区、Ｖ層上面で検出した。形態は長方形で、規模は長軸206cm以上、短軸92cm、深さ74cmである。長軸方向はＮ－２°－Ｅである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は４層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。



遺構	層位	土色	土性	備考
SK79	1	にぶい黄褐色 10YR4/3 にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト シルト	＞ 各ブロックの混合層 炭化物小ブロックを少量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	Ⅴ層ブロックを多量含む
	3	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	にぶい黄褐色砂質シルトを少量含む
SK80	1	褐色 10YR4/4	シルト	Ⅴ層ブロックを多量、上半部にⅡ層ブロックを多量含む
	2	褐色 10YR4/4	シルト	Ⅴ層ブロックを多量含む
	3	灰色 5Y5/1	シルト	Ⅵ層ブロックを多量、底面に黒褐色シルト層をのせる
SK81	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物を僅か、Ⅴ層小ブロックを多量含む
	2	黒褐色 10YR2/2	シルト	Ⅴ層を層状に多量含む
SK82	1	黒褐色 10YR3/2	砂質シルト	炭化物・Ⅵ層ブロックを少量、Ⅴ層部を多量含む
SK83	1	黒褐色 10YR3/2	シルト	Ⅴ層小ブロックを多量、Ⅵ層を少量含む
SK84	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物を僅か、Ⅴ層ブロックを多量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	暗褐色シルトを少量含む
SK85	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	Ⅴ層・暗褐色砂質ブロックを多量、黒褐色ブロックを少量含む

遺構	層位	土色	土性	備考
SK85	2	褐色 10YR4/4	粘質シルト	Ⅵ層・暗褐色ブロックを多量含む
	3	褐色 10YR4/4	シルト	粗砂・黒褐色ブロックを多量含む
SK86	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	Ⅴ層・黒褐色小ブロックを多量含む
	2	暗褐色 10YR3/3	シルト	黒褐色ブロックを少量含む
	3	黒褐色 10YR2/3	シルト	Ⅴ層大ブロックを少量含む
	4	黒褐色 10YR3/2	シルト	
SK87	1	黒褐色 10YR3/2	シルト	Ⅴ層・にぶい黄褐色ブロックを多量含む
	2	暗褐色 10YR3/4	シルト	Ⅴ層・にぶい黄褐色・黒褐色ブロックを少量含む
	3	暗褐色 10YR3/4	シルト	Ⅴ層・にぶい黄褐色ブロックを少量、黒褐色ブロックを多量含む
	4	暗褐色 10YR3/4	シルト	Ⅴ層・にぶい黄褐色・黒褐色ブロックを少量含む
SK88	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物・焼土ブロックを少量、Ⅴ層ブロックを僅かに含む
	3	にぶい黄褐色 10YR4/3 にぶい黄褐色 10YR5/3	シルト シルト	＞ 各ブロックの混合層

第25図　SK（7）

ＳＫ８８　土坑

１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11に切られ、ＳＫ96を切る。形態は不明で、規模は長軸90cm以上、短軸60cm以上、深さ67cm以上である。底面はほぼ平坦で、壁面は直立気味に立上がる。堆積土は３層で、人為堆積とみられるが、他の土坑に比べてブロックが極めて少ない。出土遺物はロクロ土師器２点、土製品１点、鉄滓１点がある。

ＳＫ８９　土坑

２区、Ｖ層上面で検出した。形態は隅丸長方形で、規模は長軸164cm、短軸90cm、深さ84cmである。長軸方向はＮ－88°－Ｗである。底面はやや起伏はあるが平坦で、壁面はオーバーハング気味に直立する。堆積土は４層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ９０　土坑

２区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ15に切られる。形態は隅丸方形で、規模は長軸111cm、短軸98cm、深さ40cmである。長軸方向はＮ－89°－Ｅである。底面はやや平坦気味な舟底状で、壁面はやや急に立上がる。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器４点、常滑産の中世陶器の甕１点がある。

ＳＫ９１　土坑

１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11・ＳＫ16に切られる。形態は長方形で、規模は長軸156cm、短軸100cm、深さ102cmである。長軸方向はＮ－85°－Ｅである。底面は平坦で、壁面はオーバーハング気味に直立する。堆積土は３層で、人為堆積とみられ、３層は壁面の崩落層とみられる。出土遺物は古銭１点の他、層上半の１層中から内外面の漆の被膜のみが残存する漆器の椀が出土したが、この土坑に伴うものではないとみられる。

ＳＫ９２　土坑

１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11に切られ、ＳＫ93・94・113を切る。形態は方形で、規模は長軸184cm、短軸144cm以上、深さ62cmである。長軸方向はＮ－86°－Ｅである。底面は平坦で、壁面はほぼ直立し、底面との境が明瞭である。堆積土は４層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ９３　土坑

１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11・ＳＫ92・95・113に切られる。形態は隅丸方形で、規模は長軸182cm、短軸117cm、深さ140cmである。長軸方向はＮ－87°－Ｅである。底面はほぼ平坦で、壁面は直立する。堆積土は３層で、人為堆積とみられ、３層については予め掘り方底面に敷かれた層とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ９４　土坑

１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11、ＳＫ92・93に切られる。形態は楕円形で、規模は長軸121cm、短軸90cm、深さ41cmである。長軸方向はＮ－85°－Ｗである。底面は壁際が傾斜するがほぼ平坦で、壁面は残存部分ではやや緩やかに立上がる。堆積土は４層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ９５　土坑

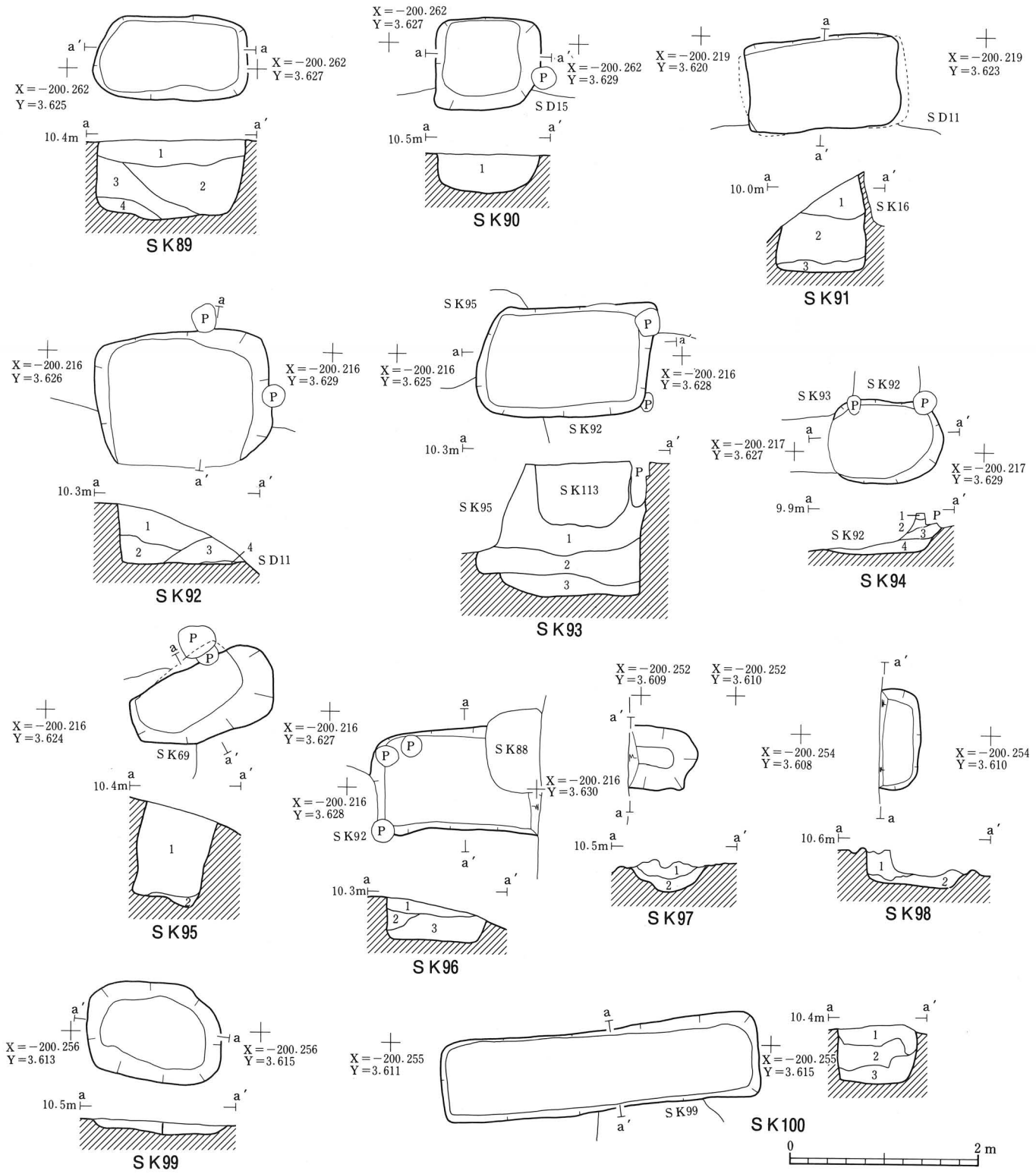
１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11、ＳＫ69に切られ、ＳＫ93を切る。形態は楕円形で、規模は長軸158cm、短軸81cm、深さ98cmである。長軸方向はＮ－61°－Ｅである。底面はやや起伏があるが平坦で、壁面は全体に南側に傾斜しながら直立する。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ９６　土坑

１区、Ｖ層上面で検出し、ＳＤ11、ＳＫ88・92に切られる。形態は長方形で、規模は長軸180cm以上、短軸109cm、深さ44cmである。長軸方向はＷ－Ｅである。底面は平坦で、壁面はほぼ直立する。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ９７　土坑

２区、Ｖ層上面で検出した。形態は楕円形とみられ、規模は長軸73cm以上、短軸66cm、深さ32cm以上である。長



遺構	層位	土色	土性	備考
SK89	1	黒褐色10YR3/2	シルト	炭化物を僅か、V層・暗褐色小ブロックを多量含む
	2	にぶい黄褐色10YR4/3	砂質シルト	暗褐色小ブロックを少量含む
	3	にぶい黄褐色10YR4/3	砂質シルト	暗褐色小ブロックを多量含む
	4	にぶい黄褐色10YR4/3	砂質シルト	暗褐色小ブロックを僅かに含む
SK90	1	灰黄褐色10YR4/2	シルト	炭化物を僅か、V層小ブロックを多量、暗褐色土を少量含む
SK91	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	炭化物粒を僅か、径1cm内のV層ブロックを多量含む
	2	灰黄褐色10YR4/2	シルト	径5cm内のV層ブロックを多量含む
	3	灰黄褐色10YR6/2	粘質土	灰黄褐色シルトブロックを少量含む
SK92	1	灰黄褐色10YR4/2	シルト	炭化物粒・焼土粒を少量、径2cm内のV層ブロックをやや多く含む
	2	灰黄褐色10YR4/2	シルト	炭化物粒・焼土粒を少量、径2cm内のV層ブロックを多量含む
	3	灰黄褐色10YR4/2	シルト	炭化物粒・焼土粒を少量、V層ブロックをやや多く含む
	4	にぶい黄橙色10YR6/3	粘質シルト	灰黄褐色ブロックを少量含む
SK93	1	暗灰色10YR4/1 にぶい黄褐色10YR5/4	シルト 粘質シルト	＞ 各径5mm程のブロックの混合層
	2	褐灰色10YR4/1 にぶい黄褐色10YR5/4	シルト 粘質シルト	＞ 各径2cm内のブロックの混合層
	3	明黄褐色10YR6/6	砂質土	径2cm内のV層・褐灰色土を層上半にやや多く含み、下半は少ない

遺構	層位	土色	土性	備考
SK94	1	黒褐色10YR3/2	砂質シルト	酸化鉄斑を多量含む
	2	黒褐色10YR3/2	シルト	径1cm内のV層ブロックを少量含む
	3	黒褐色10YR3/2	シルト	V層ブロックをほとんど含まない
	4	黒褐色10YR3/2	シルト	径3cm内のV層ブロックを少量含む
SK95	1	灰黄褐色10YR4/2	砂質シルト	炭化物粒を少量、径3cm内のV・Ⅵ層ブロックを多量含む
	2	灰黄褐色10YR6/2	シルト	Ⅰ層を少量含む
SK96	1	灰黄褐色10YR4/2	砂質シルト	径1cm内のV層小ブロックをやや多く含む
	2	褐灰色10YR4/1	砂質シルト	径1cm内のV層小ブロックをやや多く含む
	3	褐灰色10YR4/1	砂質シルト	炭化物小ブロックを少量、径3cm内のV層ブロックを多量含む
SK97	1	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト	径5mm程のV層ブロックを少量含む
	2	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト	V層・にぶい黄褐色シルトブロックをやや多く含む
SK98	1	褐色10YR4/4	シルト	黒褐色シルトブロックを少量含む
	2	褐色10YR4/4	砂質シルト	にぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量含む
SK99	1	灰黄褐色10YR4/2	シルト	径1cm内のⅣ・V層ブロックを多量含む
SK100	1	暗褐色10YR3/3	シルト	炭化物を僅か、V層小ブロックを多量、黒褐色土を少量含む
	2	暗褐色10YR3/3	シルト	V層小ブロック・黒褐色大ブロックを少量含む
	3	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト	暗褐色ブロックを多量、黒褐色小ブロックを少量含む

第26図　SK（8）

軸方向はN－84°－Wである。底面状況は不明で、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ９８　土坑

2区、Ⅳ層上面で検出した。形態は不明で、規模は長軸106cm以上、短軸44cm以上、深さ35cm以上である。長軸方向はN－1°－Eである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は2層で、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ９９　土坑

2区、Ⅴ層上面で検出し、ＳＫ100を切る。形態は楕円形で、規模は長軸148cm、短軸106cm、深さ12cmである。長軸方向はN－77°－Wである。底面は壁際で傾斜があるがほぼ平坦で、壁面状況は不明である。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ１００　土坑

2区、Ⅴ層上面で検出し、ＳＫ99に切られる。形態は長方形で、規模は長軸336cm、短軸86cm、深さ62cmである。長軸方向はN－84°－Eである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ１０１　土坑

2区、Ⅴ層上面で検出し、ＳＤ14ｃに切られる。形態は方形で、規模は長軸100cm、短軸85cm、深さ65cmである。長軸方向はN－11°－Wである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器2点、須恵器1点、常滑産とみられる中世陶器の甕か壺1点がある。（30図3）は体部破片で、台形を呈し、側面が全体に磨耗していることから、砥石に転用されたものと考えられる。

ＳＫ１０２　土坑

2区、Ⅴ層上面で検出した。唯一溝跡より新しい土坑で、ＳＤ14ａを切っている。形態は楕円形で、規模は長軸76cm、短軸49cm、深さ14cmである。長軸方向はN－10°－Wである。底面は緩やかな舟底状で、境が不明瞭なまま壁面が緩やかに立上がる。堆積土は2層で、2層は炭化物層である。この土坑は一般に焼土土坑と呼ばれるものであるが、出土遺物が無かったことから、性格は不明である。

ＳＫ１０３　土坑

1区、Ⅱｂ層上面で検出した。形態は不明で、規模は長軸40cm以上、短軸15cm以上、深さ22cm以上である。底面は緩やかな舟底状で、壁面も緩やかに立上がる。堆積土は3層で、3層は基本層Ⅱｂ層が焼けたものである。残存が悪く詳細は不明である。出土遺物は無い。

ＳＫ１０４　土坑

2区、Ⅴ層上面で検出した。形態は不整形で、規模は長軸82cm、短軸49cm、深さ49cmである。長軸方向はN－70°－Wである。底面は狭く、壁面は約45°の角度で立上がる。堆積土は2層で、人為堆積の可能性がある。出土遺物は無い。

ＳＫ１０５　土坑

1区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＤ12・ＳＫ30・32・33・40に切られる。形態は不整円形で、規模は長軸300cm、短軸300cm、深さ129cmである。底面はほぼ円形で、中央部が低く、壁際は傾斜する。壁面は約60°の角度で全周して立上がる。堆積土は6層で、5層は自然堆積であるが、上半部は人為堆積で、井戸跡の可能性がある。底面近くには人頭大の円礫が数個まとまって検出された。出土遺物はロクロ土師器36点、須恵器5点がある。

ＳＫ１０６　土坑

2区、Ⅴ層上面で検出した。形態は長方形で、規模は長軸125cm以上、短軸100cm以上、深さ84cm以上である。長

軸方向はN－6°－Wである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は5層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ１０７　土坑

1区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ30・32・33に切られ、ＳＫ105を切る。形態は長方形で、規模は長軸230cm以上、短軸155cm以上、深さ66cm以上である。長軸方向はN－88°－Wである。底面は平坦で、壁面はオーバーハングしながら直立する。堆積土は6層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器1点、須恵器3点、土師質土器の皿1点、刀子とみられるもの1点がある。

ＳＫ１０８　土坑

1区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＤ12・ＳＫ46・48に切られ、ＳＫ109を切る。形態は不明で、規模は長軸160cm以上、短軸110cm以上、深さ41cm以上である。底面は平坦とみられ、壁面は残存部分をみる限りは急に立上がる。堆積土は1層で、人為堆積の可能性がある。出土遺物は無い。

ＳＫ１０９　土坑

1区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＤ12・ＳＫ48・108に切られる。形態は不明で、規模は長軸120cm以上、短軸30cm以上、深さ16cm以上である。底面は平坦とみられ、壁面は残存部分をみる限りは急に立上がる。堆積土は1層で、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ１１０　土坑

1区、Ⅴ層上面で検出し、ＳＤ11・ＳＫ77に切られる。形態は不明で、規模は長軸105cm以上、短軸85cm以上、深さ65cm以上である。長軸方向はN－23°－Wである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。また底面にはむしろ状の敷物の痕跡らしきものが確認された。出土遺物は無い。

ＳＫ１１１　土坑

2区、Ⅴ層上面で検出した。形態は楕円形で、規模は長軸58cm以上、短軸26cm、深さ16cmである。長軸方向はN－79°－Wである。底面は狭く、壁面は急に立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ１１２　土坑

2区、Ⅴ層上面で検出し、ＳＤ12に切られる。形態は不明で、規模は長軸240cm以上、短軸62cm以上、深さ89cm以上である。底面は平坦であるが壁際は緩やかに傾斜し、壁面は急に立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器1点がある。

ＳＫ１１３　土坑

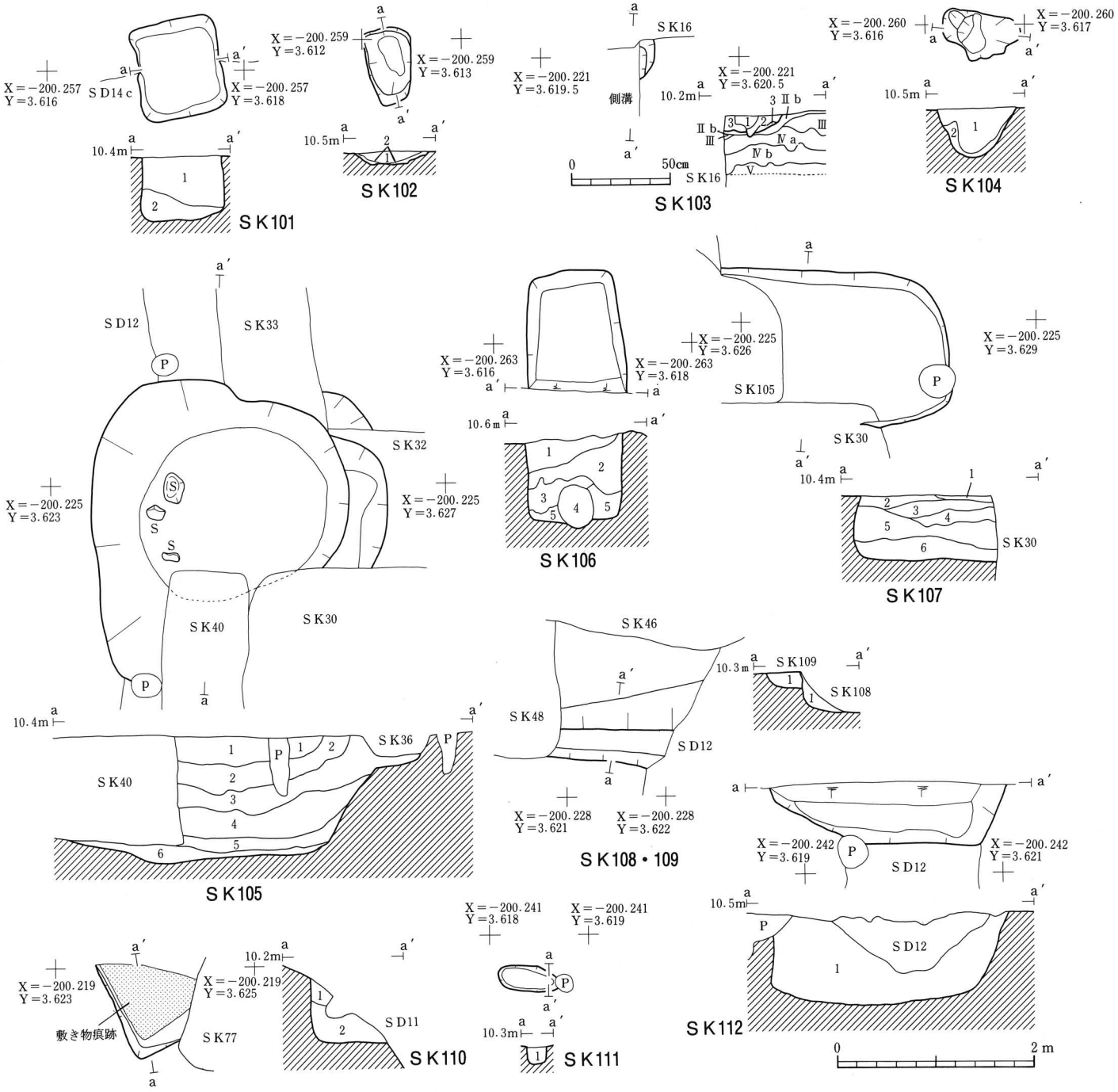
1区、Ⅴ層上面で検出し、ＳＤ11・ＳＫ92に切られ、ＳＫ93を切る。形態は不明で、規模は長軸105cm以上、短軸35cm以上、深さ70cm以上である。長軸方向はN－75°－Eである。底面は残存が少なく不明で、壁面は下半部はやや緩やかだが、上部は直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器1点がある。

ＳＫ１１４　土坑

1区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ46に切られる。形態は楕円形で、規模は長軸86cm、短軸59cm、深さ35cmである。長軸方向はN－8°－Eである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は2層で、1層は人為堆積層で2層は底面上にみられる自然層とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ１１５　土坑

1区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ50・52に切られる。形態は不明で、規模は長軸120cm以上、短軸112cm以上、深さ92cm以上である。底面は平坦で、壁面は直立し、一部でオーバーハングする。堆積土は5層で、人為堆積とみられるが、最下層の5層は壁面の崩落層とみられる。出土遺物は鉄滓1点がある。



遺構	層位	土色	土性	備考
SK101	1	暗褐色 10YR3/4	シルト	V層小ブロックを多量、黒褐色ブロックを少量含む
	2	褐色 10YR4/4	シルト	暗褐色ブロックを多量、黒褐色ブロックを少量含む
SK102	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物・V層小ブロックを少量含む
	2	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物を多量含む
SK103	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物・焼土小ブロックを少量含む
	2	黒褐色 10YR3/2	シルト	炭化物・焼土小ブロックを多量含む
	3	黒色 10YR2/1	砂質シルト	全体に赤色化　地山の焼土化したもの
SK104	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	V層小ブロックを少量含む
	2	褐色 10YR4/4	砂質シルト	暗褐色小ブロックを少量含む
SK105	1	黄褐色 10YR5/6 黒褐色 10YR3/2	砂質シルト シルト	＞ 各径3cm内のブロックの混合層
	2	黄褐色 10YR5/6 黒褐色 10YR3/2	砂質シルト シルト	＞ 各径7cm内のブロックの混合層
	3	黄褐色 10YR5/6 黒褐色 10YR3/2	砂質シルト シルト	＞ 各径10cm内のブロックの混合層
	4	黄褐色 10YR5/6 黒褐色 10YR3/2	砂質シルト シルト	＞ 各径1cm程の小ブロックの混合層 (径10cm内のブロックをまばらに含む)
	5	黒褐色 2.5Y3/1	粘質土	黒褐色粘質土と暗褐色砂質土を挾む
	6	暗灰黄色 2.5Y4/2	砂質シルト	Ⅳ・V層ブロックや隅に暗灰黄色砂質土を挾む

遺構	層位	土色	土性	備考
SK106	1	黒褐色 10YR3/2	シルト	炭化物を僅か、V層小ブロックを多量、酸化鉄斑を含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	暗褐色ブロックを多量、黒褐色ブロックを少量、酸化鉄斑を含む
	3	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	灰黄褐色粘質ブロックを多量、暗褐色ブロックを少量、層下半に褐灰色土を含む
	4	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	
	5	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	暗褐色ブロックを少量含む
SK107	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	径1cm程のV層ブロックを多量含む
	2	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	V層小ブロックを少量含む
	3	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	径2cm内のV層ブロックをやや多く含む
	4	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	径1cm程のV層ブロックを僅かに含む
	5	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	径1cm程のV層ブロックをやや多く、灰黄褐色シルトブロックを少量含む
	6	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	径3cm内のV層ブロックを多量含む
SK108	1	褐色 10YR4/4	シルト	炭化物・焼土粒・径5mm内のV層ブロックを僅かに含む
SK109	1	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質シルト	酸化鉄斑を多量含む
SK110	1	にぶい黄橙色 10YR6/3	粘質シルト	褐灰色シルトブロックを多量含む
	2	にぶい黄橙色 10YR6/3	粘質シルト	径2cm内の褐灰色シルトブロックを少量含む
SK111	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	V層小ブロックを少量含む
SK112	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物を僅か、V層・黒褐色小ブロックを多量含む

第27図　SK（9）

ＳＫ１１６　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＤ12・ＳＫ29・53に切られる。形態は不明で、規模は長軸103cm以上、短軸90cm以上、深さ109cm以上である。長軸方向はＮ－５°－Ｅである。底面はやや傾斜するが平坦とみられ、壁面は直立気味に立上がる。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物は鉄滓１点がある。

ＳＫ１１７　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ30に切られる。形態は不明で、規模は長軸95cm以上、短軸50cm以上、深さ124cm以上である。底面は狭く、平坦面はみられず、壁面は下半部でやや緩やかに立上がり、上半部は直立する。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ１１８　土坑

１区、Ⅱａ層上面で検出した。断面のみの確認のため、形態は不明である。規模は長軸190cm以上、短軸は不明、深さ50cm以上である。断面のみからみると、底面は平坦で、壁面はやや緩やかに立上がるものとみられる。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器１点がある。

ＳＫ１１９　土坑

２区、Ⅴ層上面で検出した。形態は円形で、規模は長軸68cm、短軸61cm、深さ44cmである。断面形はＶ字形で、明瞭な底面はみられない。堆積土は１層で、自然堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器２点がある。

ＳＫ１２０　土坑

１区、Ⅱｃ層上面で検出した。形態は長方形で、規模は長軸134cm、短軸106cm、深さ55cmである。長軸方向はＮ－87°－Ｅである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は４層で、１～３層は人為堆積とみられるが、最下層の４層は暗褐色シルトの自然層とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ１２１　土坑

１区、Ⅲ層上面で検出した。形態は不明で、規模は長軸110cm以上、短軸65cm以上、深さ26cmである。底面は傾斜はあるが平坦で、壁面は上半部がやや緩やかに立上がる。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ１２２　土坑

１区、Ⅴ層上面で検出した。形態は不明で、規模は長軸165cm以上、短軸110cm以上、深さ22cmである。長軸方向はＮ－80°－Ｅである。底面は平坦で、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は２層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器１点がある。

ＳＫ１２３　土坑

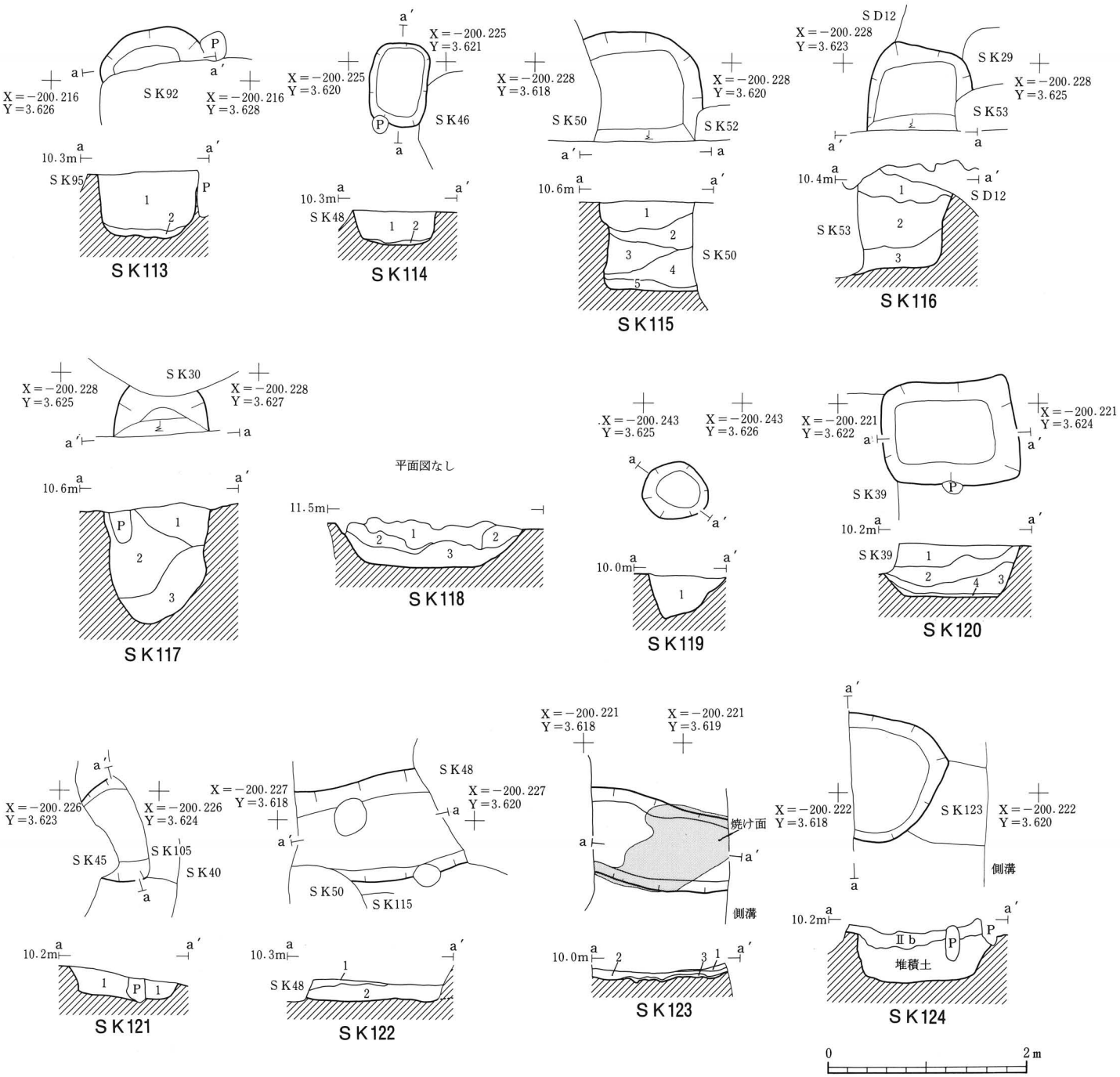
１区、Ⅳ層上面で検出し、ＳＫ124を切る。形態は楕円形とみられ、規模は長軸140cm以上、短軸90cm以上、深さ20cmである。長軸方向はＮ－79°－Ｗである。短軸側の断面形状は底面はやや平坦だが、壁際では傾斜し、壁面は残存が悪いために不明である。堆積土は３層で、最下層の３層は焼土層である。堆積土中からは鉄滓や鍛造剥片が多く出土した。

ＳＫ１２４　土坑

１区、Ⅳ層上面で検出し、ＳＫ123に切られる。形態は不明で、規模は長軸130cm以上、短軸100cm以上、深さ53cmである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は不明である。出土遺物は縄文土器１点がある。

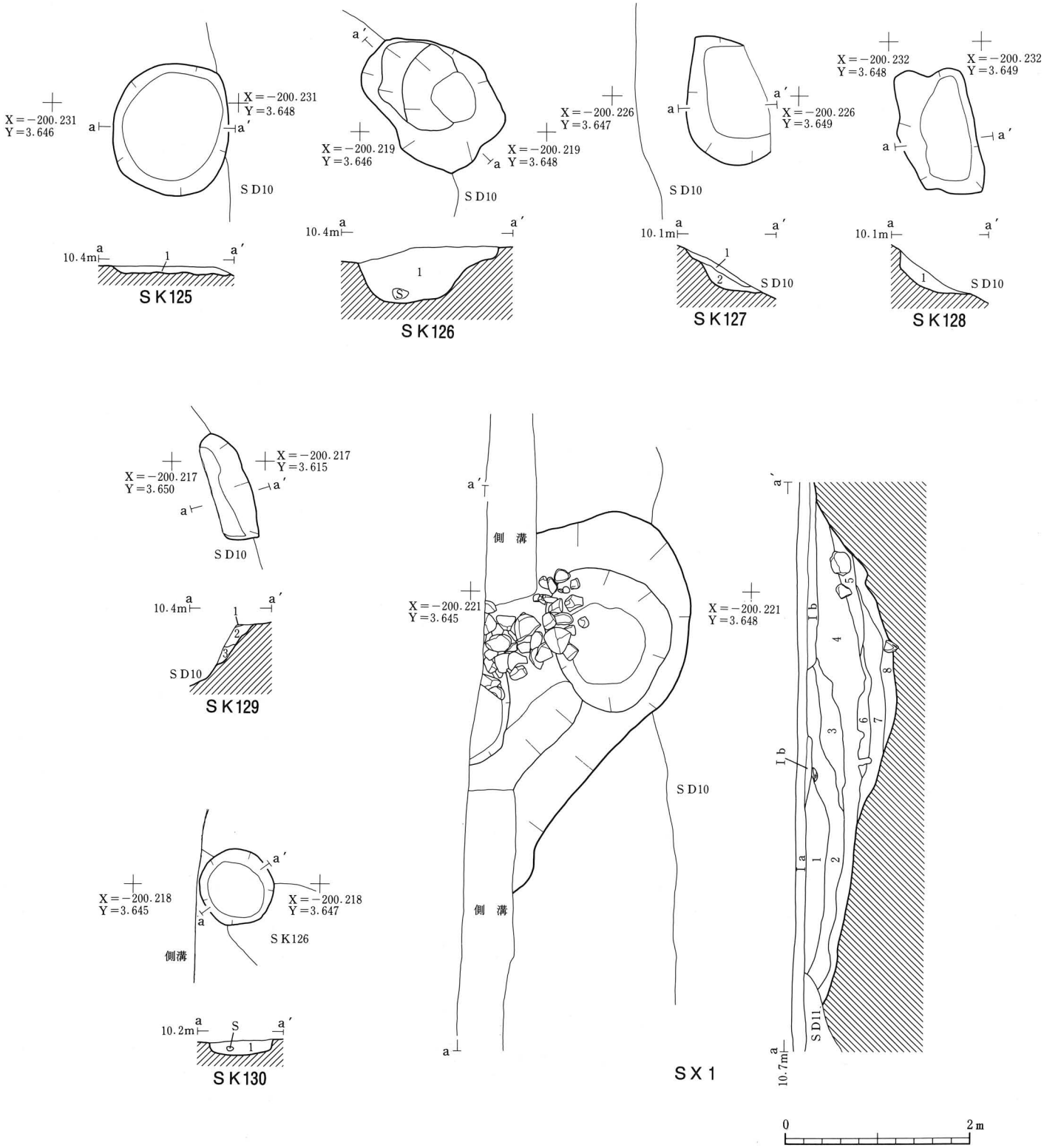
ＳＫ１２５　土坑

４Ａ区、Ⅱｃ層上面で検出し、ＳＤ10に切られる。形態は円形で、規模は長軸144cm以上、短軸124cm以上、深さ８cmである。長軸方向はＮ－21°－Ｅである。底面は平坦で、壁面は残存が悪く不明である。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。



遺構	層位	土色	土性	備考
SK113	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	径5mm内の炭化物ブロックを少量、径1cm内のV層ブロックをやや多く含む
	2	にぶい黄褐色 10YR5/4 褐灰色 10YR4/1	シルト 砂質シルト	＞ 各径2cm程のブロックの混合層
SK114	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物粒・焼土粒を少量、径2cm内のⅡ・V層ブロックをやや多く含む
	2	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘質シルト	
SK115	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物粒を僅かに含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物粒を僅か、径1cm内のV層ブロックをやや多く含む
	3	黒褐色 10YR3/2	シルト	径3cm内のV層ブロックをやや多く含む
	4	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質シルト	径3cm内のV層ブロックを少量含む
	5	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質土	径2cm内のV層ブロックを僅かに含む
SK116	1	黒褐色 10YR3/2	粘質シルト	炭化物粒・V層ブロックを僅かに含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	径3cm内のV層ブロックを多量、径1cm内のⅣ層ブロックを少量含む
	3	黄褐色 10YR5/6	粘質土	ほとんどがV層ブロックにより占められている
SK117	1	褐色 10YR4/4	砂質シルト	径1cm内のV層ブロックを多量含む
	2	褐色 10YR4/4	砂質シルト	径5cm内のV層ブロックを多量、径5cm内のⅣ層ブロックを少量含む
	3	褐色 10YR4/4	粘質土	径3cm内のV層ブロックを小量、径3cm内のⅣ層ブロックを僅か含む
SK118	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物ブロックを僅か、V層ブロックを少量含む
SK118	2	褐色 10YR4/4	シルト	V層ブロックを多量、灰黄褐色ブロックを少量含む
	3	褐色 10YR4/4	シルト	V層ブロック・灰黄褐色ブロックを多量含む
SK119	1	褐色 10YR4/4	シルト	細砂を少量含む
SK120	1	黄褐色 10YR5/6 にぶい黄褐色 10YR4/3	粘質シルト シルト	＞ 各大きめのブロックの混合層　黄褐色粘質シルトの方が多い　炭化物ブロック少量含む
	2	黄褐色 10YR5/6 にぶい黄褐色 10YR4/3	粘質シルト シルト	＞ 各大きめのブロックの混合層　にぶい黄褐色シルトの方が多い　炭化物ブロック少量含む
	3	黄褐色 10YR5/6 にぶい黄褐色 10YR4/3	粘質シルト シルト	＞ 各大きめのブロックの混合層　黄褐色粘質シルトの方がやや多い　炭化物ブロック少量含む
	4	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物ブロックを少量含む
SK121	1	褐色 10YR4/4	シルト	径3cm内のⅣ・V層ブロックにより構成
SK122	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	V層ブロックを少量含む
	2	黄褐色 10YR5/6 にぶい黄褐色 10YR5/4	粘質シルト 砂質シルト	＞ 各ブロックの混合層
SK123	1	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	炭化物ブロック・焼土ブロック・鍛造剥片を多量含む
	2	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	径1cm内の暗褐色及びにぶい黄橙色ブロックにより構成
	3			焼面及び焼土ブロック層
SK124	注記なし			

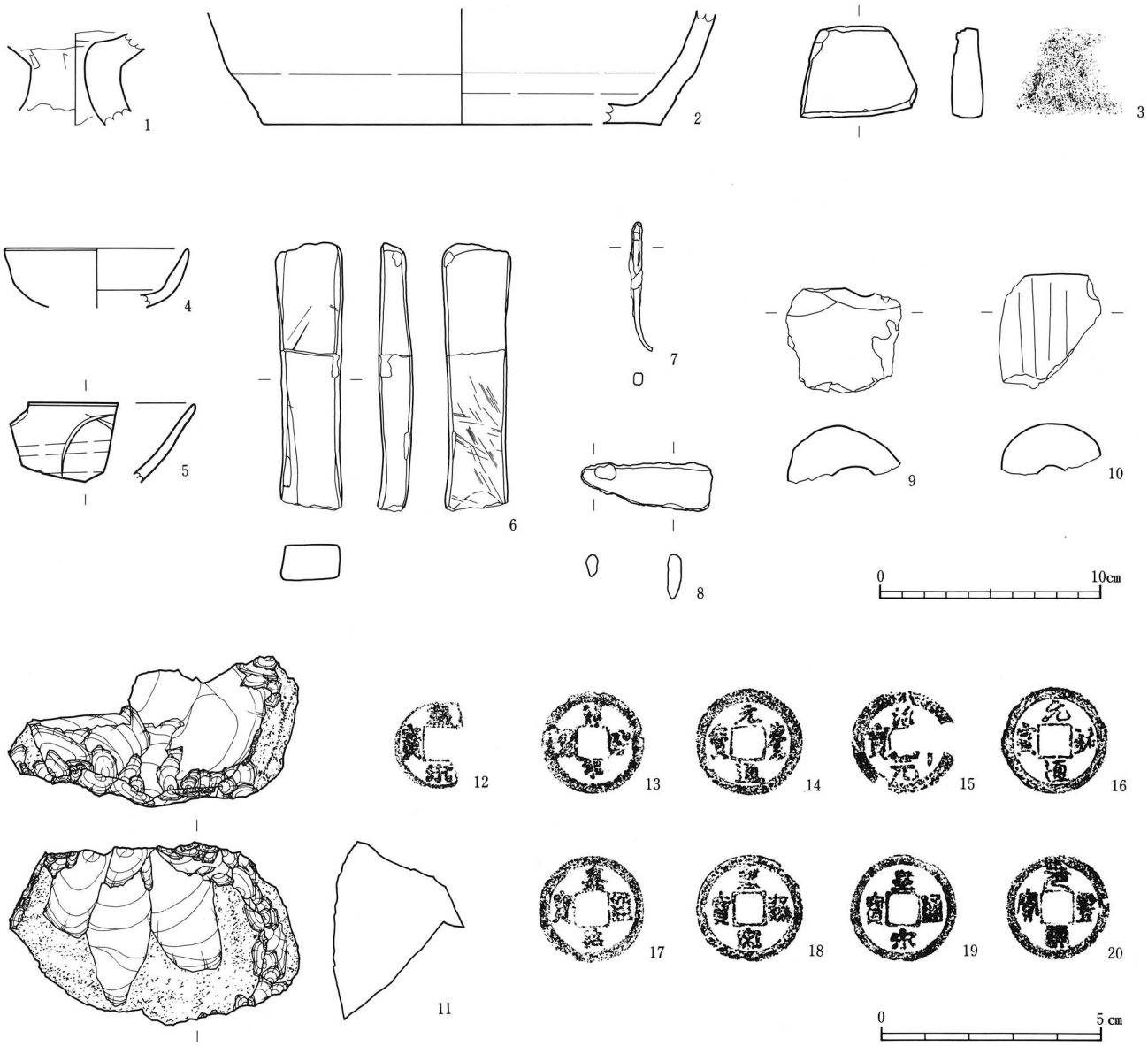
第28図　SK（10）



遺構	層位	土色	土性	備考
SK125	1	褐灰色10YR4/1	シルト	黒褐色大ブロック・暗褐色小ブロックを少量、酸化鉄斑を多量含む
SK126	1	黒褐色10YR2/1	粘質シルト	炭化物粒・V層小ブロックを多量、酸化鉄斑を少量含む
SK127	1	黒褐色10YR3/1	シルト	炭化物を少量含む
	2	黒褐色10YR3/1	粘質シルト	V層と炭化物層を層状に挟む
SK128	1	灰黄褐色10YR4/2	砂質シルト	黒褐色シルトを層状、黒色粘質シルト小ブロックを少量含む
SK129	1	暗褐色10YR3/4	砂質土	
	2	にぶい黄褐色10YR5/3	砂質シルト	灰黄褐色シルト大ブロック・酸化鉄斑を少量含む
	3	黒褐色10YR3/1	シルト	酸化鉄斑を少量含む
SK130	1	黒褐色10YR3/1	シルト	炭化物を少量、V層・黒色ブロックを多量含む

遺構	層位	土色	土性	備考
SX1	1	にぶい黄褐色10YR5/3	シルト	炭化物粒を僅か、酸化鉄斑を含む
	2	灰黄褐色10YR4/2	シルト	炭化物粒を少量含む
	3	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト	
	4	褐灰色10YR4/1	シルト	炭化物粒を僅かに含む
	5	灰黄褐色10YR5/2	シルト	炭化物粒を僅か、褐色小ブロックを多量含む
	6	黒褐色10YR5/4	シルト	灰黄褐色シルトブロックを多量含む
	7	灰黄褐色10YR4/2	シルト	
	8	黒褐色10YR3/1	シルト	

第29図　SK・SX



図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高(㎜)	外面調整	内面調整	底部調整	備　考	類型	写真図版番号
1	29	4区 SX1	堆積土	土師器	器台	－×－×－	受部：ヘラケズリ 脚部：不明	摩滅のため不明	－	(非ロクロ)脚部に透しらしきもの1か所あり		18－5

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高(㎜)	産地	時期	備　考	写真図版番号
2	8	1区 SK30	堆積土	中世陶器	甕？	－×(180)×－	常滑	不明	ロクロナデ　内面灰被り	24－1
3	22	2区 SK101	堆積土	中世陶器	甕か壺	－×－×－	常滑？	不明	断面全体磨耗　砥石に転用か？	24－2
4	4	6T SK17	1	土師質土器	皿	(84)×－×－		13C以降	ロクロ成形　全体磨滅	21－1
5	12	1区 SK41	堆積土	磁器(青磁)	碗	－×－×－	中国龍泉窯系	14C	蓮弁文	26－13

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	長さ×幅×厚さ(㎜)	重量(g)	備　考	写真図版番号
6	2	1区 SK37	1	石製品	砥石	122×26～31×13～16	(97)	一端部欠損　断面台形	27－7
7	2	1区 SK27	1	鉄製品	釘	－×(5.5)×(4)	(4.3)	両端部欠損　先端部曲がり　断面長方形	27－13
8	6	1区 SK107	堆積土	鉄製品	刀子？	－×(22)×(6)	(16.3)	先端部	27－12
9	1	1区 SK30	堆積土	土製品	土錘	－×－×－	(15)		27－1
10	2	1区 SK88	堆積土	土製品	土錘	－×－×－	(13)		27－2

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	長さ×幅×厚さ(㎜)	重量(g)	石材	備　考	写真図版番号
11	1	1区 SK30	堆積土	剥片石器	石核	41×66×30	67.0	珪化凝灰岩	自然面残存	27－5

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	銭貨名	時代	初銭年	備　考	写真図版番号
12	1	1区 SK40	3	銅製品	銅銭	皇宋通寶	北宋	1038	欠損	28－2
13	2	1区 SK41	堆積土	銅製品	銅銭	一元寶	－	－		28－12
14	3	1区 SK44	1	銅製品	銅銭	元豊通寶	北宋	1078		28－8
15	4	1区 SK44	1	銅製品	銅銭	治平元寶	北宋	1064	欠損	28－7
16	5	1区 SK48	堆積土	銅製品	銅銭	元祐通寶	北宋	1086		28－10
17	6	1区 SK48	堆積土	銅製品	銅銭	嘉祐通寶	北宋	1056		28－5
18	7	1区 SK48	堆積土	銅製品	銅銭	皇宋通寶	北宋	1038		28－3
19	8	1区 SK71	堆積土	銅製品	銅銭	皇宋通寶	北宋	1038		28－4
20	9	1区 SK72	堆積土	銅製品	銅銭	元豊通寶	北宋	1078		28－9

第30図　SK出土遺物

ＳＫ１２６　土坑

４Ａ区、Ⅱｃ層上面で検出し、ＳＸ１に切られ、ＳＫ130を切る。形態は不整形で、規模は長軸160cm、短軸123cm、深さ60cmである。長軸方向はＮ－49°－Ｗである。上端に比べて底面は狭く、壁面は途中に平場をもちながら緩やかに立上がる。堆積土は１層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器２点、在地産の中世陶器の鉢１点がある。

ＳＫ１２７　土坑

４Ａ区、Ⅴ層上面で検出し、ＳＤ10に切られる。形態は楕円形で、規模は長軸136cm、短軸90cm以上、深さ46cmである。長軸方向はＮ－７°－Ｗである。底面は平坦で、壁面は緩やかに立上がり、一部に段がみられる。堆積土は２層で、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ１２８　土坑

４Ａ区、Ⅴ層上面で検出し、ＳＤ10に切られる。形態は不整形で、規模は長軸137cm、短軸84cm、深さ46cmである。長軸方向はＮ－10°－Ｗである。底面は平坦で、壁面は底面から緩やかに立上がるが、上半部は直立する。堆積土は１層で、自然堆積とみられる。出土遺物は中国龍泉窯系の青磁碗１点がある。

ＳＫ１２９　土坑

４Ａ区、Ⅴ層上面で検出し、ＳＤ10に切られる。形態は不明で、規模は長軸121cm、短軸42cm、深さ43cm以上である。長軸方向はＮ－17°－Ｗである。残存状況が極めて悪いため、底面状況は不明で、壁面は約45°で立上がる。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＫ１３０　土坑

４Ａ区、Ⅱｃ層上面で検出し、ＳＤ10に切られる。形態は不明で、規模は長軸121cm、短軸42cm、深さ43cmである。長軸方向はＮ－17°－Ｗである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は３層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

ＳＸ１　不明遺構

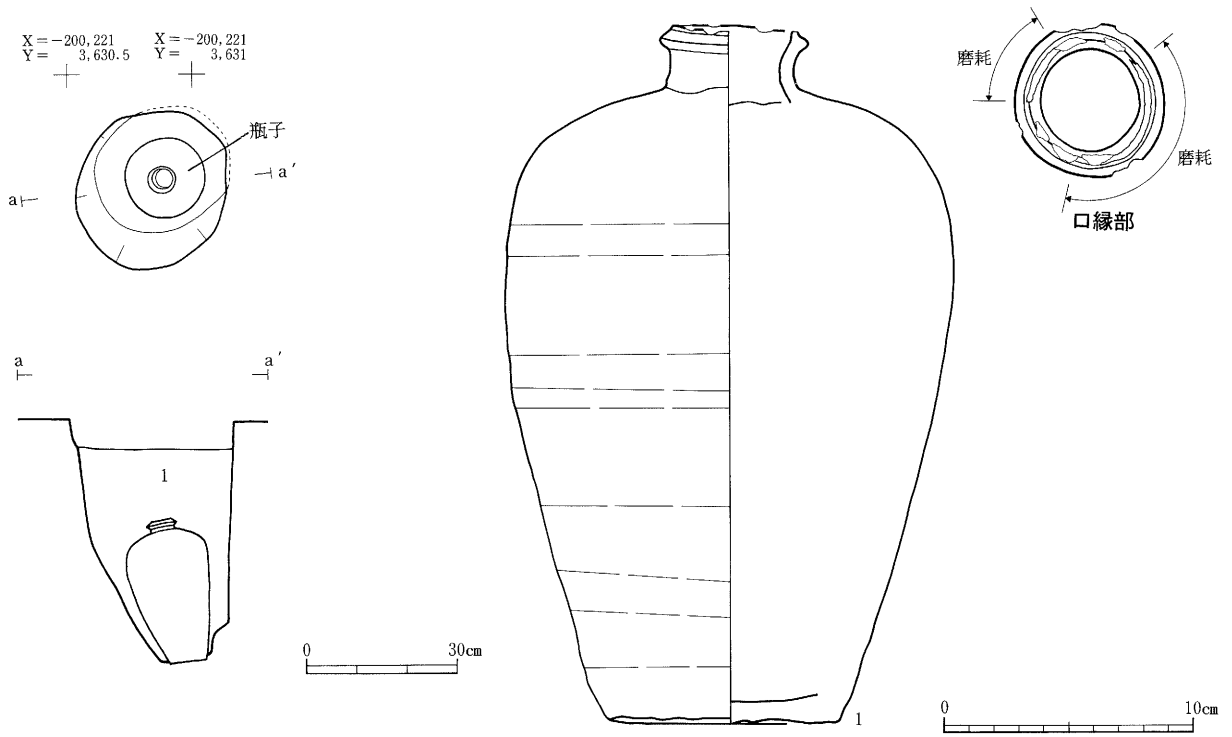
４Ａ区、Ⅱａ層上面で検出し、ＳＫ126を切る。形態は不整形で、規模は長軸400cm以上、短軸230cm以上、深さ86cm以上である。底面は先端部の円形のプランに溝状の底面が接続する形をみせ、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は８層で、多少のブロック土は混入するが、基本的に全層とも自然堆積とみられる。この遺構については形状・堆積土からみて溝跡の端部の可能性も考えられるが、これと隣接するＳＤ10・11との関係は不明である。出土遺物は土師器14点、在地産の中世陶器の鉢１点、砥石１点、古銭１点がある。（30図１）は非ロクロの土師器の器台で、台部、脚部とも欠損し、外面はヘラケズリが施されている。

Ｐ３４　陶器埋設遺構

１区Ⅱａ層上面で検出した。ＳＤ11の南側に位置し、直接的な重複関係はないが、他の遺構の状況からＳＤ10に切られているものと考えられる。当初、Ｐ34は他のピット同様に柱穴の可能性が考えられていたことから、柱痕跡の確認作業を行ったところ柱跡は検出されず、さらに掘り方南半分を掘下げたところ、検出面より約20cm下で口縁部が開口した状態の壺とみられるものを確認した。さらに壺の埋設状態をみるためにピット南側を大きく掘下げ、その断面状況をみると、古瀬戸の瓶子（31図１）が完全な形で、10°程度傾いてはいるが、ほぼ正立して据えられていることがわかった。

ピットの掘り方は直径が約30cmのほぼ円形で、東及び北側の壁は直立するが、底面近くに段がみられ、南側は上半部が急で下半部がやや緩やかになっている。検出面からの深さは48cmで、底面径は10cmと狭くなる。埋設土はにぶい黄褐色シルト質の単層で、他の多くの土坑のような明瞭なブロック土の混入はみられないが、人為堆積と考えられる。

瓶子の底部はピット底面から1cmほど下がっていたことから、ピット底面に置かれたものが自重により沈んだものとみられる。内部に遺物は全くみられず、本来内部に何も納められていなかったか、或いは何らかの固体か液体が残らなかったのかは不明である。また器内に埋土の流入がみられなかったことから考えると、瓶子の口は蓋のようなもので塞がれていたが、それが後に腐り、上部の埋土は固化し、器内に流入することなく今日に至ったものと推測される。しかしながら断面観察では口縁部上に蓋の痕跡らしいものは確認できなかった。掘り方は上半部が後世の削平によりかなり失われているとみられ、瓶子は穴の直径からすれば深く掘られた小穴の中に納められていたものと考えられる。



遺構	層位	土色	土性	備考
P34	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	マンガン斑を多量含む

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高(mm)	産地	時期	備考	写真図版番号
1	179	1区 P34		中世陶器	瓶子	60×93×280	瀬戸	13C後半	(古瀬戸) 灰釉	25−1

第31図 P34 陶器埋設遺構

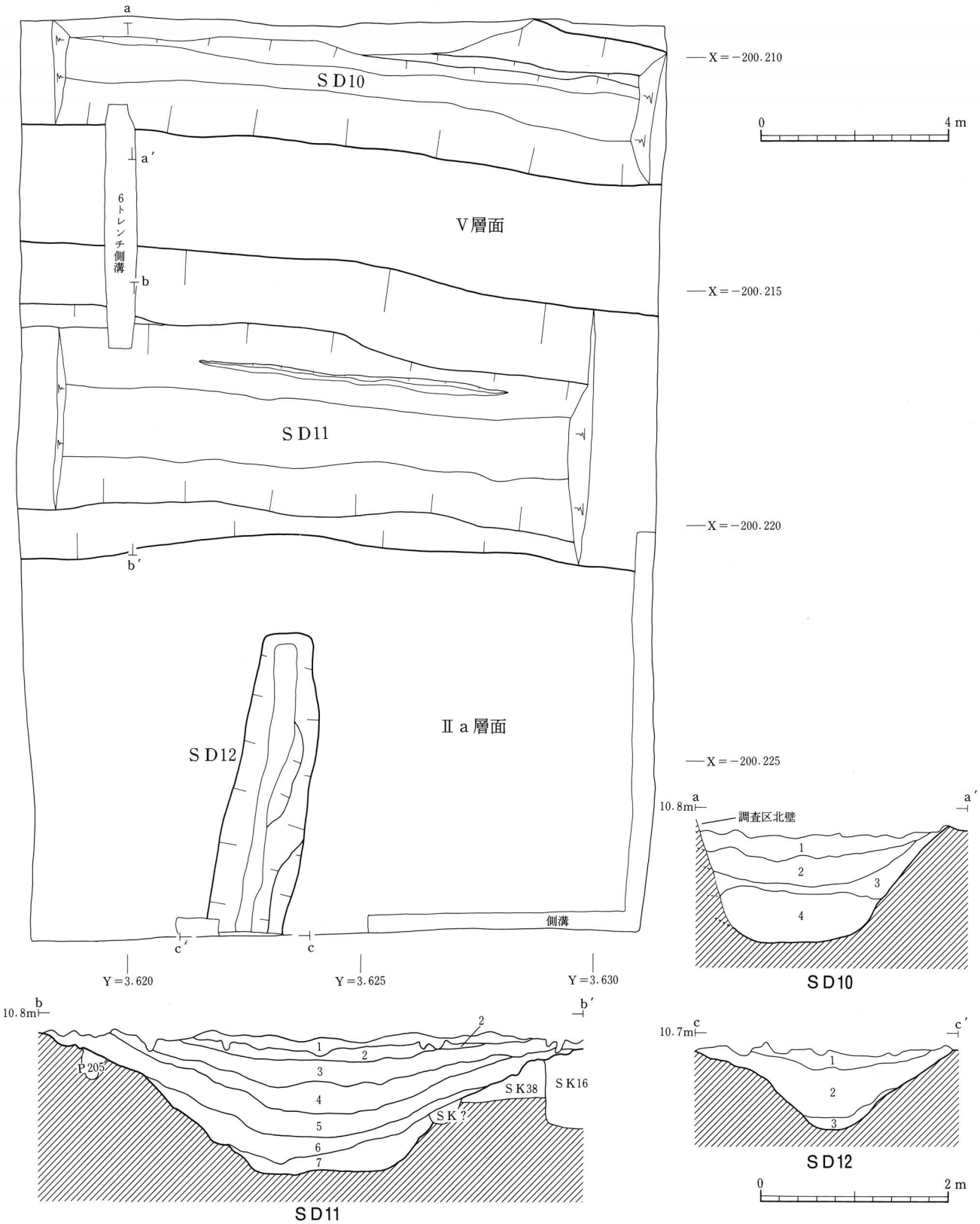
(3) 溝 跡

SD10 溝跡

1区北端部と4A区において幅のほぼ同じ溝跡を検出したが、これらは方向性、形状から同一のものとみられる。

1区での検出面はV層上面で、1区の中でも北半部の微高地上に位置している。重複はSK79・80を切っており、溝跡より新しいものはみられない。方向はN−82°−Wの東西方向で、確認長は約14mである。溝幅は北壁全体が調査区外となることから、詳細は不明であるが、1区東壁断面からみると約3m程である。底面幅は50〜100cmで、深さは110〜120cmである。壁面は50〜60°程で立上がり、途中に段などはみられず、底面は壁面との境は不明瞭であるがほぼ平坦である。堆積土は4層で、全体がシルト質で、4層は粘質シルトと砂質シルトの互層となるなど、いづれの層とも自然堆積土とみられる。

4A区では中央部では検出のみに止めたが、これより北側と南側において溝跡を掘込んでいる。4A区での検出面は微高地となる北端部ではV層であるが、それより南側ではⅡa層上面である。重複は4A区検出の全ての土坑



遺構	層位	土色	土性	備考
SD10	1	灰黄褐色 10YR5/2	シルト	全体にマンガン斑を多量、一部層下部ににぶい黄橙色ブロックを含む
	2	灰黄褐色 10YR5/2	シルト	全体にマンガン斑・酸化鉄斑を多量含む
	3	褐灰色 10YR5/1	シルト	全体に酸化鉄斑を含む
	4	褐灰色 10YR4/1	粘質シルト	層下半は全体に褐色がかっている　粘質シルトと砂質シルトとの互層となる
SD11	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	黄褐色シルトブロックを含む
	2	にぶい黄褐色 10YR5/3	シルト	全体に酸化鉄斑を含む
	3	灰黄褐色 10YR5/2	シルト	全体にマンガン斑を含む

遺構	層位	土色	土性	備考
SD11	4	灰黄褐色 10YR5/2	粘質シルト	層上半ににぶい黄澄色ブロック、全体にマンガン斑を含む
	5	褐灰色 10YR5/1	粘質シルト	層最深部はグライ化し、灰黄褐色を呈する。全体に酸化鉄斑を含む
	6	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	にぶい黄橙色細砂層を幾層か挟む。全体にグライ化
	7	灰黄褐色 10YR4/2	粘質シルト	にぶい黄褐色小ブロックを含む
SD12	1	褐色 10YR4/4	砂質シルト	炭化物粒・焼土粒を僅かに含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	炭化物粒を僅か、Ⅳ・Ⅴ層ブロックを多量含む
	3	暗灰黄色 2.5Y4/2	シルト	Ⅴ層ブロックを少量含む

第32図　1区SD

を切っており、溝跡より新しいものは認められない。方向は北側ではほぼ南北方向で、北端部では緩やかに西へカーブしながら1区へと続いており、南側ではN－20°－Eとやや方向が西側を向いている。4区全体での確認長は約44mであるが、これが4B区南端部でどのように延びるのかは不明である。溝幅は400～440cmで、ほぼ一定しており、底面幅は北端コーナー部で約170cmと広めなのに対して、60cmと狭くなる箇所もみられる。深さは100～120cmである。壁面は1区に比べて30～40°と緩やかで、一部にテラス状の段がみられ、底面は平坦である。南側の底面には溝方向と直交する土手状の高まりがあり、これを境に底面が分断される箇所がみられる。ここから溝跡の一部が西側へ分岐する様子もみられるが、調査区外のため詳細は不明である。また南端部では溝跡全体がやや西よりに曲っていく様子がみられるのに加え、その一部は浅くなりながらも南下している感のある箇所もみられる。堆積土は場所により異なるが、北端部西壁では5層で、最下層はブロック土の多く混入した層であるが、いづれも自然堆積土とみられる。また北半部では7層が確認され、1層は砂質土で、この層は溝跡全体に広くみられ、溝が僅かな窪みとして残存していた際に、多くの土砂が一時期に流入したものとみられる。5層はやはりブロック混じりの溝底面の層である。6・7層は溝跡西壁にみられる層であるが、1～5層との比較から、これらは当初、掘った溝に堆積したもので、SD10は後に掘り直されていることが考えられる。このような状況は南側の土層観察でも確認できた。

出土遺物は縄文土器4点、弥生土器1点、ロクロ土師器56点、須恵器9点、土師質土器の皿1点、白石窯系とみられる中世陶器の小壺1点、在地産の中世陶器の甕19点、鉢7点、美濃（志野）産の菊皿1点、瀬戸・美濃産とみられる小皿1点、大堀相馬産の小坏1点、筒形碗1点、中国龍泉窯系の青磁碗3点、茶臼1点、石臼1点がある。（33図6）は須恵器の高台付坏で、底部は回転ヘラケズリのち高台部を貼付けている。（33図12・13、34図1）は在地産の甕で、（12）は体部破片の周縁を打ち欠いた円盤の可能性がある。（34図2・5）は鉢で、（2）は高台があり、鉄分の噴出しが著しい。（33図10）は白石窯系とみられる小壺で、内外面とも体部ナデののち口縁部にロクロナデを施している。（34図6）は瀬戸・美濃産とみられる小型丸皿で、底部は削り込んで碁笥底で、高台部の釉を拭き取っている。（34図9～11）は青磁の碗である。以上の中世とみられるものの他に埋土上半からは（34図8）のような志野の菊皿など、近世の遺物が僅かに出土している。

SD11　溝跡

SD10同様に1区と4A区で検出したが、4A区では壁面の僅かな検出であった。

1区での検出面は北岸が微高地部のV層上面で、南岸は低位部に堆積するⅡa層上面で、溝跡はV層面でみれば70～80cmの比高差のある地形の境に掘られていることがわかる。重複は他の全ての土坑・ピットを切って検出されており、これより新しい遺構は全く確認できない。またSD10との直接的な重複は認められない。方向はN－82°－WとSD10と同方向を向いている。確認長は13.5mで、溝幅は壁面上端でかなり緩やかになるが、断面からみると640cmとかなりの幅をもっている。底面幅は110～150cmで、深さは140cmとSD10に比べても深い。壁面は下半部では45°程の立上がりをみせるが、上半部はかなり緩やかなものとなる。壁面には特に目立ったテラス状のものはみられないが、北壁側の下半部には長さ660cmにもわたり、幅10～30cmの狭い段状の抉りがみられる。底面は壁面との境はわりと明瞭で、ほぼ平坦である。堆積土は7層で、全てシルトか粘質シルトであるが、4層については層上半ににぶい黄橙色土が多量混入することから、SD11は下半部が自然堆積した後に人為的に埋め戻されたものと考えられる。

4A区での検出面はⅡa層上面で、ごく一部の検出であるが、ピットを切っている。方向は東側に位置するSD10とほぼ平行して走る南北方向とみられ、このことからSD11はSD10の内側を重複すること無く巡る溝とみられる。1区での両溝間の幅は約2.5mで一定しているが、4区においては1.7～2.7mとばらつきがあり、全体にやや狭い傾向がある。4A区での確認長は7.5m程である。溝幅は不明で、壁面は確認できる限りでは途中に段をもっ

ている可能性がある。底面状況は不明である。堆積土は４層で、１区でみられたような人為堆積とみられる層は確認できず、全て自然堆積土とみられる。

出土遺物は縄文土器２点、ロクロ土師器52点、須恵器５点、土師質土器の皿４点、在地産の中世陶器の甕９点、鉢３点、渥美産の壺４点、瀬戸産の瓶子１点、中国産の白磁とみられるもの１点、砥石１点、鉄鍋の底部分とみられるもの１点がある。（34図３・４）は在地産の鉢で、口縁部は直線状で、（４）の口縁端部には凹線が巡る。（35図１）は鉄鍋の底部から体部立上がり部分とみられ、底部径は15cmほどと推定される。

ＳＤ１２　溝跡

１区南部と２区北東部で検出した。

１区での検出面はⅡａ層上面で、重複は他の全ての土坑・ピットを切っており、これより新しい遺構は無い。方向はＮ－10°－Ｅで、１区でのＳＤ10・11に直交する方向を示している。確認長は6.5ｍで、溝幅は北端部が110cmである以外は180cm程で一定している。底面幅は25～50cmと狭く、深さは80cm程である。壁面は下半部に比べ上半部の傾斜が緩やかで、底面との境は不明瞭である。堆積土は３層で、大部分を占める２層中にはⅣ・Ⅴ層ブロックを多量含んでいることから、溝が自然に埋まり切る前に人為的に埋められた可能性が強い。

２区での検出面はⅤ層上面で、重複は１区同様、溝跡より新しい土坑・ピットは無い。溝跡は１区からのつづきがほぼ南北方向で６ｍほど南下した後に、南北方向にＮ－67°－Ｗの角度でコーナーをもって屈曲しており、約10ｍ確認されている。溝幅は90～120cmで、底面幅は25～40cmである。壁面は１区に比べやや急に立上がり、上半部の緩やかな傾斜は上部が削平されているためか、みられない。ＳＤ12は北端部ではＳＤ11の手前２ｍ程の箇所で止まるが、これが２区の東側でどのような延びをみせるかは不明である。

出土遺物はロクロ土師器28点、須恵器１点、土師質土器の皿１点、在地産の中世陶器の鉢とみられるもの１点、瀬戸産の折縁深皿１点、中国産の白磁とみられるもの２点がある。（33図２）はロクロ使用の土師器坏で、内面に黒色処理やヘラミガキを施している。

ＳＤ１３　溝跡

２区南西部で検出し、検出面はⅤ層上面である。ＳＤ14を切っている。確認長は約６ｍで、溝幅は50cm、底面幅は10～15cm、深さは35cm程である。方向はＮ－５°－Ｗで、直線的に延びている。壁面はわりと急に立上がり、底面は平坦で、その境は明瞭である。堆積土はシルト質土の３層で、いづれも自然堆積層とみられる。出土遺物は無い。

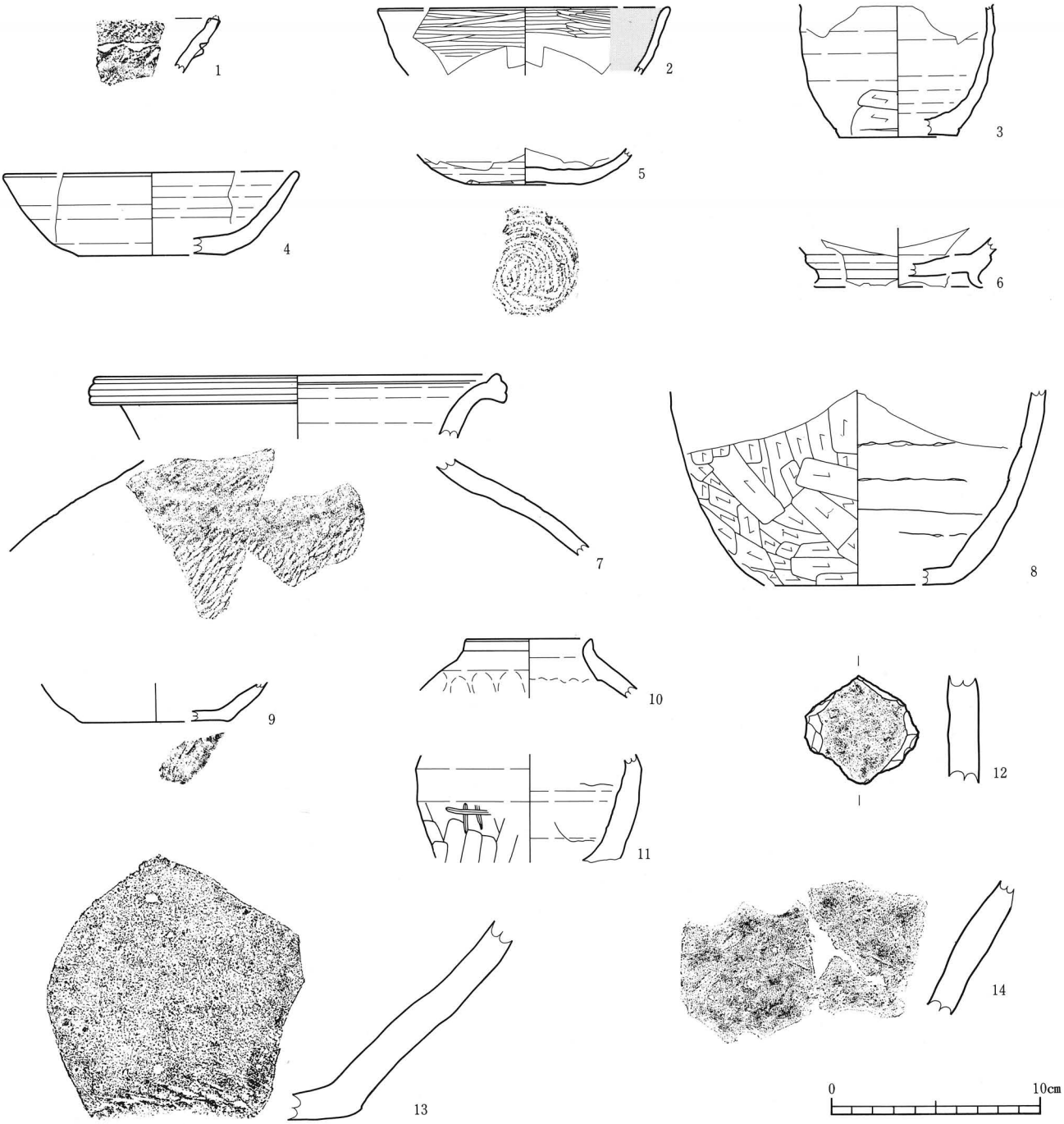
ＳＤ１４ａ・ｂ・ｃ　溝跡

２区南部で検出し、検出面はⅤ層上面である。ＳＫ21・22・101やピットを切っているが、ＳＫ102やいくつかのピットに切られている。今回検出された溝跡で土坑などに切られるのはこの溝跡のみである。

ＳＤ14には３時期の変遷が確認でき、南側のものが最も新しいＳＤ14ａ、中央のものが14ｂ、そして北側のものが最も古い14ｃで、三者は２区東側では多少の重複をもって並列しているものが、西側ではほとんどの部分で重複している。しかしながら、これらはほぼ同規模のものが同様の方向性をもつことからみても、目的を同じくした溝の改修などによる変遷と考えられよう。方向はＳＤ14ａが東半ではほぼ東西方向なのが、西半ではやや南に向いている。確認長は約21.5ｍで、全体が把握できるＳＤ14ａをみると、溝幅は180～210cm、底面幅は30～50cm、深さは70cmとＳＤ14ｂ・ｃに比べ最も深い。壁面の立上がりは45°程度で、一部に段がみられる。溝幅についてはＳＤ14ｃが14ａとほぼ同様であるが、14ｂは不明で、深さは14ｂが約45cm、14ｃが約65cmとなっている。

堆積土は14ａが５層で、そのうち２層がⅤ層や暗褐色土のブロックを多量含む人為堆積の可能性がある。また14ｂ・ｃについても一部にブロックを含む層がみられるが、基本的に自然堆積とみられる。

出土遺物はＳＤ14ａがロクロ土師器111点、須恵器33点、在地産の中世陶器の小壺１点、常滑産とみられる甕２



図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版番号
1	4	4 a区 SD10	5	弥生土器	壺か甕	口唇部：指押圧　口縁部上半：LR縄文　口縁部下半：交互刺突状文　頸部：無文	ナデ		18－3

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高(mm)	外面調整	内面調整	底部調整	備　考	類型	写真図版番号
2	21	2区 SD12	1	土師器	坏	(140)×－×－	ロクロナデ→ヘラミガキ	ロクロナデ→黒色処理 ヘラミガキ	－		Ⅰ	18－14
3	24	2区 SD14a	3	土師器	小型甕	－×(58)×－	ロクロナデ→体部下端回転ヘラケズリ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ		Ⅲ	20－5
4	23	2区 SD14a	堆積土	須恵器	坏	(142)×(70)×41	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		－	20－8
5	26	2区 SD21	2	須恵器	坏	－×(54)×－	ロクロナデ→体部下端回転ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切り		－	20－7
6	20	1区 SD10	1	須恵器	高台付坏	－×高台径(30)×－	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ→高台貼り付け		－	20－9
7	22	2区 SD14a	1	須恵器	甕	(200)×－×－	ロクロナデ→縄タタキ	ロクロナデ	－	図面合成	－	20－13
8	25	2区 SD14a	1	須恵器	甕	－×(92)×－	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラケズリ	内面：輪積痕明瞭 外面：自然釉	－	20－12

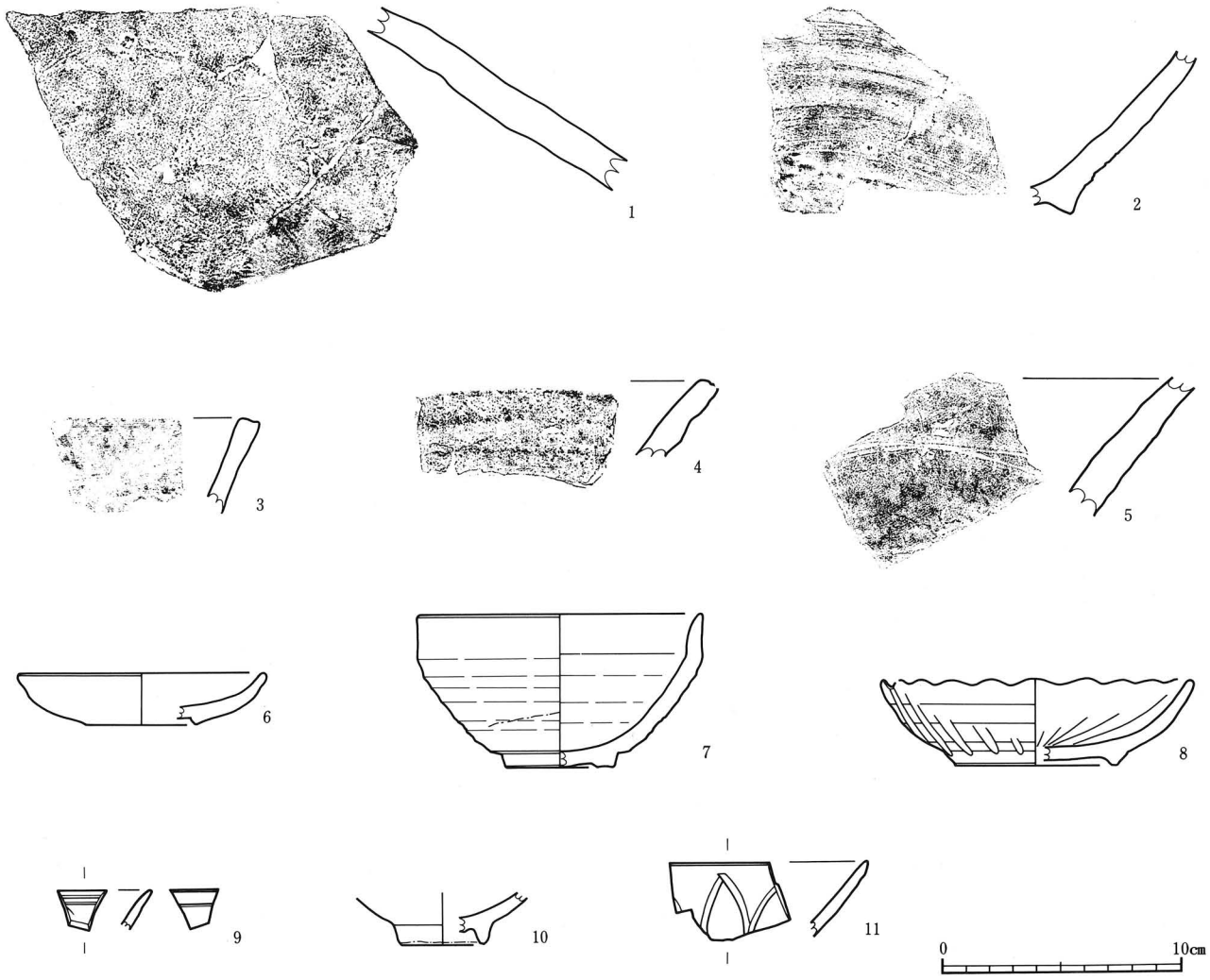
図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高(mm)	産地	時期	備　考	写真図版番号
9	177	1区 SD11	4	土師質土器	Ⅲ	－×(70)×－		中世？	底部回転糸切り　ロクロ成形	21－2
10	58	4区 SD10	4	中世陶器	小壺	(60)×－×－	在地(白石窯系)	13C後半～14C前半	内外面ナデのち口縁部ロクロ	21－9
11	102	2区 SD14a	4	中世陶器	小壺	－×－×－	在地(白石窯系)	13C後半～14C前半	(3区Ⅴc層と接合) 内面に鉄分付着　外面にヘラ記号あり？	21－10
12	67	4区 SD10	堆積土	中世陶器	甕	－×－×－	在地	13C後半～14C前半	陶製円盤の可能性あり	21－15
13	43	4区 SD10	1	中世陶器	甕	－×－×－	在地	13C後半～14C前半	内面磨耗　体部下端ヘラナデ	21－12
14	76	1区 SD11	3	中世陶器	甕	－×－×－	在地	13C後半～14C前半	(他SD11・SD12と接合)	21－14

第33図　SD出土遺物（1）

点、産地不明の中世陶器の甕１点で、ＳＤ14ｃがロクロ土師器４点、須恵器６点、瀬戸産の平碗１点、台石１点がある。（33図３）はロクロ使用の土師器の小型甕で、体部下端と底部に回転ヘラケズリが施されている。（33図４）は須恵器坏で、底部は回転糸切りである。（33図７）は須恵器甕で、残存する頸部から体部上半にかけて全体に縄叩き目がみられる。（33図８）は体部下半のみの残存で、外面・底面にヘラケズリが施される。（33図11）は白石窯系の小壺で、体部のみの残存であるが、外面にはヘラ描きによる記号状のものがあり、内面には鉄分が広範囲に付着している。

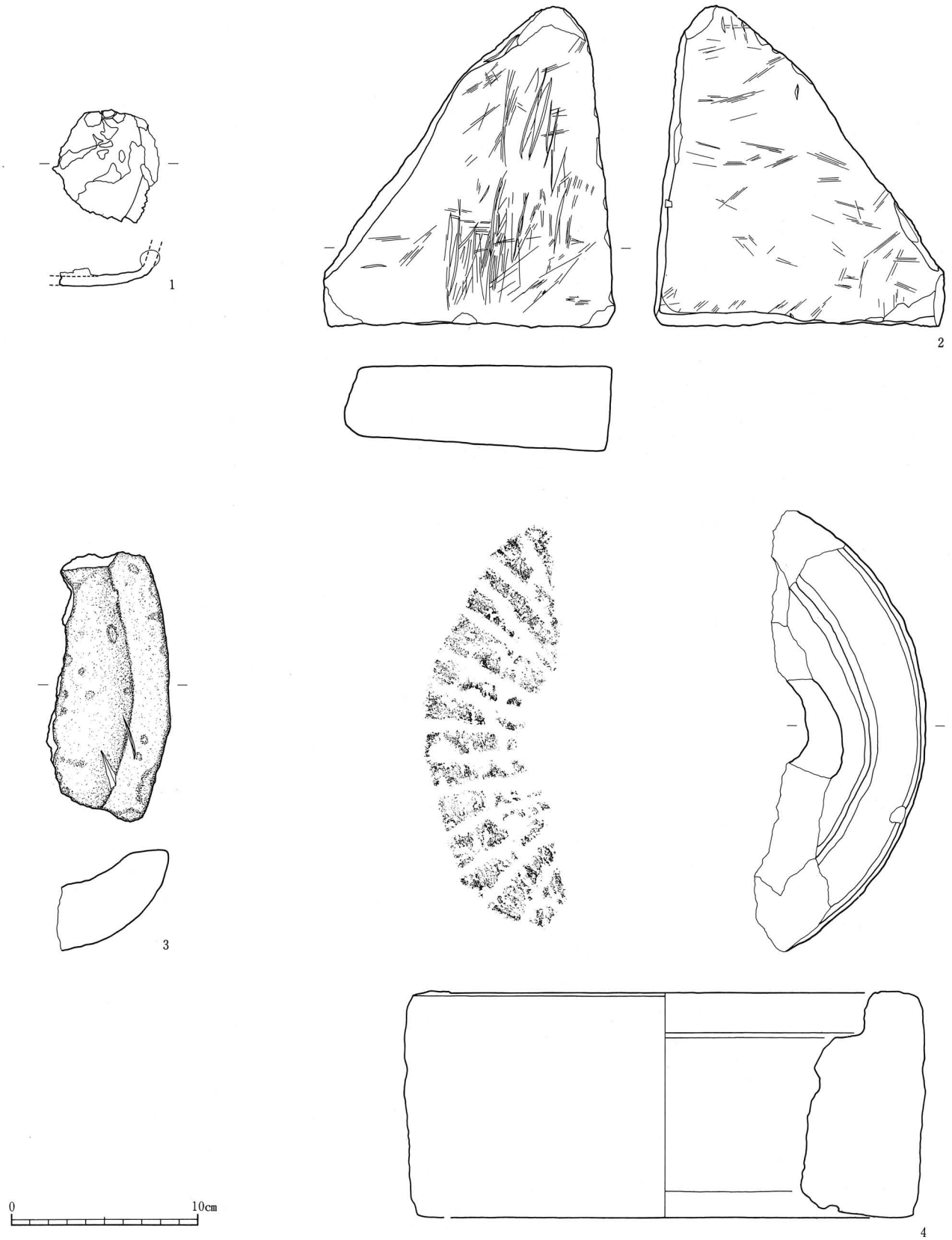
ＳＤ１５　溝跡

２区南端部で検出し、検出面はＶ層上面である。ＳＫ89・90やいくつかのピットを切っている。また検出当初、ＳＤ16と直交して重複しているものとみられたが、両者の堆積土に違いがみられないことから、同時に存在してい



図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高(mm)	産地	時期	備　　考	写真図版番号
1	53	1区 ＳＤ10	2	中世陶器	甕	－×－×－	在地	13C後半～14C前半	(他のＳＤ10出土品や４区Ⅱｂ層と接合)	21－13
2	45	4区 ＳＤ10	2	中世陶器	鉢	－×－×－	在地	13Ｃ前半	(１区Ⅱａ層と接合)高台あり　体部下端回転ヘラケズリ　鉄分の噴出しあり	23－12
3	85	1区 ＳＤ11	5	中世陶器	鉢	－×－×－	在地	13C後半～14C前半		23－９
4	75	1区 ＳＤ11	3	中世陶器	鉢	－×－×－	在地	13C後半～14C前半	口縁端部が凹む	23－５
5	63	4区 ＳＤ10	5	中世陶器	鉢	－×－×－	在地	13C後半～14C前半	内面磨耗	23－11
6	44	1区 ＳＤ10	2	中世陶器	小型丸皿	(105)×(46)×22	瀬戸・美濃？	16Ｃ中頃	灰釉？　生焼け　口縁端部欠損　碁笥底　高台部の釉拭取り？	25－２
7	105	2区 ＳＤ15	堆積土	中世陶器	天目茶碗	(120)×46×65	瀬戸・美濃	16Ｃ後半	鉄釉　ケズリ出し輪高台	25－６
8	70	11Ｔ ＳＤ10	堆積土(上半)	近世陶器	菊皿	(131)×(70)×36	美濃(志野)	16Ｃ末～17Ｃ初	高台内にピン跡　見込に目跡	25－８
9	42	1区 ＳＤ10	1	磁器(青磁)	碗	－×－×－	中国龍泉窯系	12C後半～13C前半	劃花文	26－16
10	55	4区 ＳＤ10	3	磁器(青磁)	碗	－×(36)×－	中国龍泉窯系	13Ｃ？	高台部施釉　畳付露胎	26－17
11	56	4区 ＳＤ10	3	磁器(青磁)	碗	－×－×－	中国龍泉窯系	13Ｃ～14Ｃ	(11ＴⅠ層と接合)蓮弁文	26－14

第34図　ＳＤ出土遺物（２）



図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	備　　考	写真図版番号
1	7	1区 SD11	4	鉄製品	鉄鍋		(39.3)		27－15
2	8	2区 SD14C	堆積土	石製品	台石	(173)×(151)×38～46	(1641)	表裏面に多数の擦痕あり　一部被熱	27－9
3	5	1区 SD10	2	石製品	茶臼		(497)	(下臼)	27－11
4	6	4A区 SD10	5	石製品	石臼	直径280×高さ121	(2666)	(上臼)縁高23mm	27－10

第35図　SD出土遺物（3）

た可能性が強い。確認長は約12mで、溝幅は130cm以上、深さは80cm以上とみられるが、南壁側が未検出であることから、全体規模は不明である。但し堆積土の状況からみると、溝幅、深さはＳＤ14と同等規模とみられる。方向はＮ－85°－Ｅである。確認できる限りでは、壁面はやや緩やかに立上がるが、底面状況は不明である。堆積土は４層で、最下層の４層は互層で、自然堆積の状況をみせる。

出土遺物は瀬戸・美濃産の天目茶碗があり（34図７）、鉄釉で削り出し輪高台のものである。

ＳＤ１６　溝跡

２区南端部で検出し、検出面はⅤ層上面である。ＳＤ15に取り付く溝跡である可能性が強い。確認長は約３ｍで、溝幅は80～90cm、底面幅は30～50cm、深さ40cmである。方向はほぼ南北方向である。壁面は直線的に立上がり、底面との境は明瞭である。底面はＳＤ15と未重複部分ではほぼ平坦であるのが、重複箇所では傾斜して低くなっている。堆積土は２層で、１層についてはブロック土を多量含むことから、途中で埋められている可能性がある。またＳＤ16の北端は急に立上がり止まっており、その先のＳＤ15との距離は僅かであり、かつて両者は重複或いはＳＤ16の急な止まりからみて、同時存在していたとも考えられる。出土遺物は無い。

ＳＤ２１　溝跡

２区北半部で検出し、検出面はⅤ層上面である。ＳＤ12・ＳＩ１・ＳＫ58・64やいくつかのピットに切られている。確認長は約21ｍで、溝幅は120～170cm、底面幅30～70cm、深さ約40cmである。方向はＮ－86°－Ｅの東西方向である。壁面は緩やかに立上がり、底面との境は全体に不明瞭で、底面は平坦面をもたず、他の溝跡とは形状が異なっている。また堆積土についても３層が確認されたが、全体に明るい色調で、粘性が少なく、やはり他のものとは明確に異なっている。堆積土に埋め戻された形跡はみられない。

出土遺物はロクロ土師器27点、須恵器６点がある。（33図５）は須恵器坏で、体部下端はヘラケズリ、底部は回転糸切りである。

ＳＤ２７　溝跡

４Ａ区で検出し、検出面はⅤａ層上面である。西側でＳＤ11に切られている。確認長は約２ｍで、溝幅は55～60cm、底面幅25～35cm、深さ28cmである。方向はほぼ東西方向である。底面は平坦で、壁面との境は明瞭であるが、残存が悪く、壁面状況は不明である。堆積土は黒褐色粘土質シルトの１層のみである。出土遺物はロクロ土師器８点がある。

（４）掘立柱建物跡・柱列跡・ピット

今回の調査では１区で239個、２区で368個、４区で９個のピットを確認した。１区では土坑同様にＳＤ10・11により数多くのピットが失われているとみられ、このため検出箇所は南半部と両溝間に限られ、特にＳＤ11の北岸に集中していることがわかる。検出面はⅡａ・Ⅱｂ層がほとんどであるが、本来は全て整地層であるⅡａ層面より掘り込まれているものとみられる。２区では北半部が南半部に比べて密度が高く、中でも北東部ではピットが集中する箇所もみられる。ピットはＳＤ12・14などＳＤ21以外の溝跡に全て切られており、検出面はⅤ層面である。

掘立柱建物跡や柱列跡の認定にあたっては、一部のものは調査中でのピットの組み合わせが可能であったが、最終的には調査終了後、平面図上での検討により決定している。これにより復元できた掘立柱建物跡は10棟、塀跡または柵跡とみられる柱列跡は５列であるが、中にはあくまでも推定復元の域を出ないものもあり、また調査区端検出のものについては両者間の判別が難しいことを予め述べておく。

ＳＢ１　掘立柱建物跡

１区、ＳＤ10とＳＤ11の間で検出した。東西３間、南北２間以上の東西棟と推定され、梁行間でも柱間が大きく異なることから、北側に廂のついた建物跡と考えられる。規模は桁行5.1ｍで柱間が160～180cm、梁行2.85ｍで柱間が205cm、廂部分の出が85～100cmで、南側はＳＤ11により失われている。廂部分の柱穴と身舎北辺の柱穴との大

きさの違いは特に認められない。方向はN－2°－Eである。ＳＢ２・３と重複しているが新旧関係は不明で、他にＰ146がＳＫ68に、Ｐ241がＳＫ70に切られている。出土遺物は無い。

ＳＢ２　掘立柱建物跡

１区、ＳＤ10とＳＤ11の間で検出した。東西４間、南北１間以上の東西棟と推定される。規模は桁行7.4mで柱間が175～205cm、梁行1.9m以上で柱間が185～190cmで、南側はＳＤ11により失われている。方向はN－10°－Eである。ＳＢ１・３と重複しているが新旧関係は不明である。出土遺物はＰ235から縄文土器片が１点出土した。

ＳＢ３　掘立柱建物跡

１区、ＳＤ10とＳＤ11の間で検出した。東西方向に４つのピットが並ぶ柱列跡であるが、おそらくは南側がＳＤ11により失われた東西３間、南北１間以上の建物跡と推定される。規模は桁行6.0mで柱間が185～210cmで、方向はN－7°－Eである。ＳＢ１・３と重複しているが新旧関係は不明で、他にＰ243がＳＫ70に切られている。出土遺物は無い。

ＳＢ４　掘立柱建物跡

１区南東部で検出した。東西２間以上、南北２間以上の建物跡と推定され、南側１間分の柱間が短いことから、南に廂が付くものと考えられる。規模は桁行４m以上で柱間が160cm、梁行2.65m以上で柱間が195cmで、廂部分の出が105～115cmで、北側がＳＤ11により失われているものと推定される。廂部分の柱穴と身舎南辺の柱穴との大きさの違いは特に認められない。方向はN－2°－Wである。ＳＢ５と重複しているが新旧関係は不明である。出土遺物はＰ31から須恵器片が２点出土した。

ＳＢ５　掘立柱建物跡

１区南東部で検出した。東西２間以上、南北２間以上の建物跡と推定される。規模は桁行4.2m以上で柱間が200～220cm、梁行3.55mで柱間が150～200cmで、北側がＳＤ11により失われているものと推定される。方向はN－7°－Wである。ＳＢ４と重複しているが新旧関係は不明で、他にＰ28がＳＫ107を切っている。出土遺物は無い。

ＳＢ６　掘立柱建物跡

２区北東端部で検出した。東西方向に６個の柱穴が並び、東西５間以上、南北は不明の東西棟と推定されるが、柱列跡の可能性もある。規模は桁行10.15m以上で柱間が200～210cmで、東西列からみた方向はN－3°－Wである。南西部でＳＤ12と重複しているが、おそらくはこれより古いとみられ、他にＰ358がＳＫ55・56に切られている。出土遺物はＰ358から土師器片が２点出土した。

ＳＢ７　掘立柱建物跡

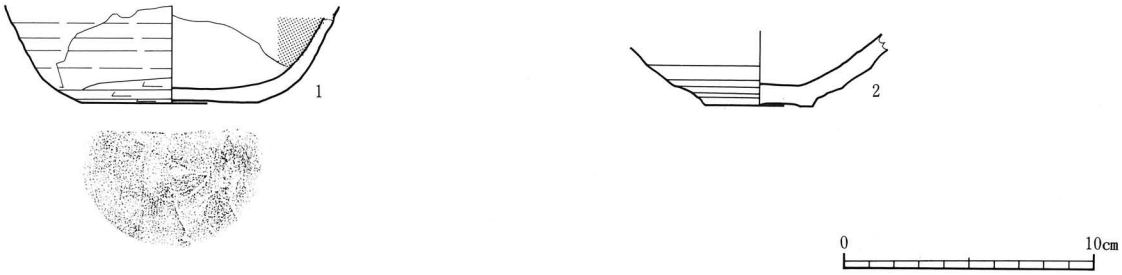
２区北東部で検出した。東西２間以上、南北３間の東西棟と推定され、規模は桁行6.15mで柱間が190～220cm、梁行の柱間が215～220cmである。方向はN－4°－Eである。南側でＳＤ21と重複しており、おそらくは溝跡より新しいものと考えられる。出土遺物は無い。

ＳＢ８　掘立柱建物跡

２区北半部で検出した。東西３間、南北３間の東西棟で、規模は桁行6.0mで柱間が195～210cm、梁行4.5mで柱間が140～160cmである。方向はN－5°－Eである。ＳＢ９と重複しているが新旧関係は不明である。東辺と南辺の検出できなかった柱穴各１個は、それぞれＳＤ12、ＳＫ13に切られているものとみられ、他の重複関係はＰ260・429がＳＤ12に切られ、Ｐ319がＳＫ63に切られ、Ｐ279・570・269がＳＤ21を切っている。出土遺物はＰ246から土師器片が１点出土した。

ＳＢ９　掘立柱建物跡

２区北半部で検出した。東西３間、南北３間の東西棟で、規模は桁行9.2mで柱間が225～240cm、梁行4.9mで柱間が160cm程度である。方向はN－7°－Eである。ＳＢ８と重複しているが新旧関係は不明である。西辺南側と東



図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高(㎝)	外面調整	内面調整	低部調整	備　　考	類型	写真図版番号
1	28	2区 P582	1	土師器	坏	－×70×－	ロクロナデ→体部下端回転ヘラケズリ	ロクロナデ→黒色処理・ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	内面磨滅	Ⅲ	18－18

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高(㎝)	産地	時期	備　　考	写真図版番号
2	107	1区 P47	堆積土	中世陶器	平碗	－×42×－	瀬戸	15C？	(古瀬戸)灰釉　ケズリ出し輪高台　体部下半ヘラケズリ	24－15

第36図　ピット出土遺物

辺北側の各1個の柱穴は検出できなかったが、おそらくは建物はＳＤ21より新しく、東辺南側のものについてはＳＤ12により失われているものとみられる。他にはＰ321はＳＫ63に切られている。出土遺物は土師器片がＰ321から2点、Ｐ256から1点、Ｐ122から須恵器片が1点出土した。

ＳＢ１０　掘立柱建物跡

2区南東端部で検出した。東西方向に4個の柱穴が並び、東西3間、南北は不明の東西棟と推定されるが、柱列跡の可能性もある。規模は桁行7.1mで柱間が210～270㎝とばらつきがあり、東西列からみた方向はＮ－3°－Ｗである。ＳＤ15・16と重複するが新旧関係は不明である。出土遺物は無い。

ＳＡ１　柱列跡

2区北西部で4個の柱穴が南北方向に並ぶのを検出した。長さは6.0mで柱間が190～210㎝、方向はＮ－7°－Ｅである。Ｐ284がＳＫ63に切られ、Ｐ314がＳＤ21を切り、Ｐ310がＳＩ１と重複している。並びからみて東側にあるＳＢ８・９の西側につくられた塀跡などの可能性がある。出土遺物は無い。

ＳＡ２　柱列跡

2区北西部、ＳＡ１とＳＢ９の間で3個の柱穴が南北方向に並ぶのを検出した。長さは4.9mで柱間が250・240㎝、方向はＮ－6°－Ｅである。Ｐ385がＳＫ63に切られ、Ｐ300がＰ299を切り、Ｐ550がＳＩ１と重複している。ＳＡ１同様、ＳＢ８・９の西側の区画施設である一方、Ｐ385はＳＢ９の北辺延長上、Ｐ550は南辺延長上に半間ほど離れていることから、ＳＢ９西側の廂部分の可能性もある。出土遺物は無い。

ＳＡ３　柱列跡

2区西半部、ＳＤ21とＳＤ14の間で5個の柱穴が南北方向に並ぶのを検出した。長さは8.6mで柱間が北側2間が各230㎝、南側2間が各200㎝で、方向はＮ－6°－Ｅである。北端のＰ305がＳＤ21を切っており、また南端ではＰ517の南側にＳＤ14があることから、もう1間分延びる可能性もある。出土遺物は無い。

ＳＡ４　柱列跡

2区北東部で4個の柱穴が全てＳＤ21を切って東西方向に並ぶのを検出した。長さは6.4mで柱間が195～230㎝、方向はＮ－87°－Ｗである。柱列はＳＢ８・９と重複しており、さらに西側へ1間および東側へも延びる可能性もある。出土遺は無い。

ＳＡ５　柱列跡

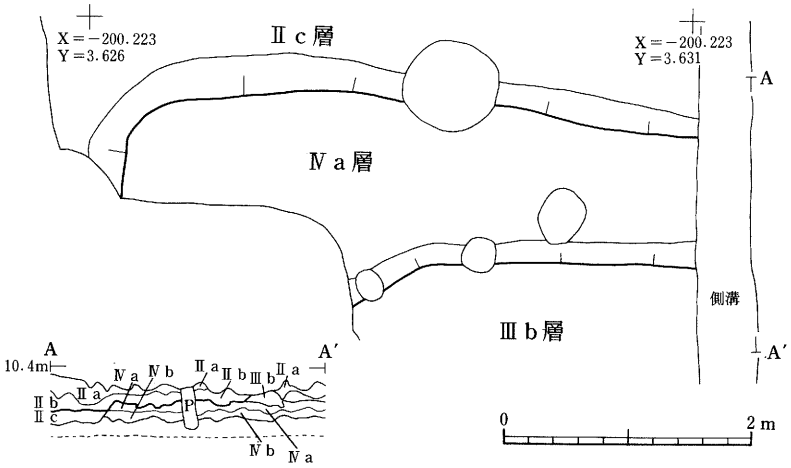
2区南東部で4個の柱穴が東西方向に並ぶのを検出した。長さは7.2mで柱間が220～260㎝、方向はＮ－89°－Ｅである。Ｐ468はＳＫ85を切っており、柱列はさらに西側へ1間および東側へも延びる可能性もある。出土遺物は無い。

（5）その他

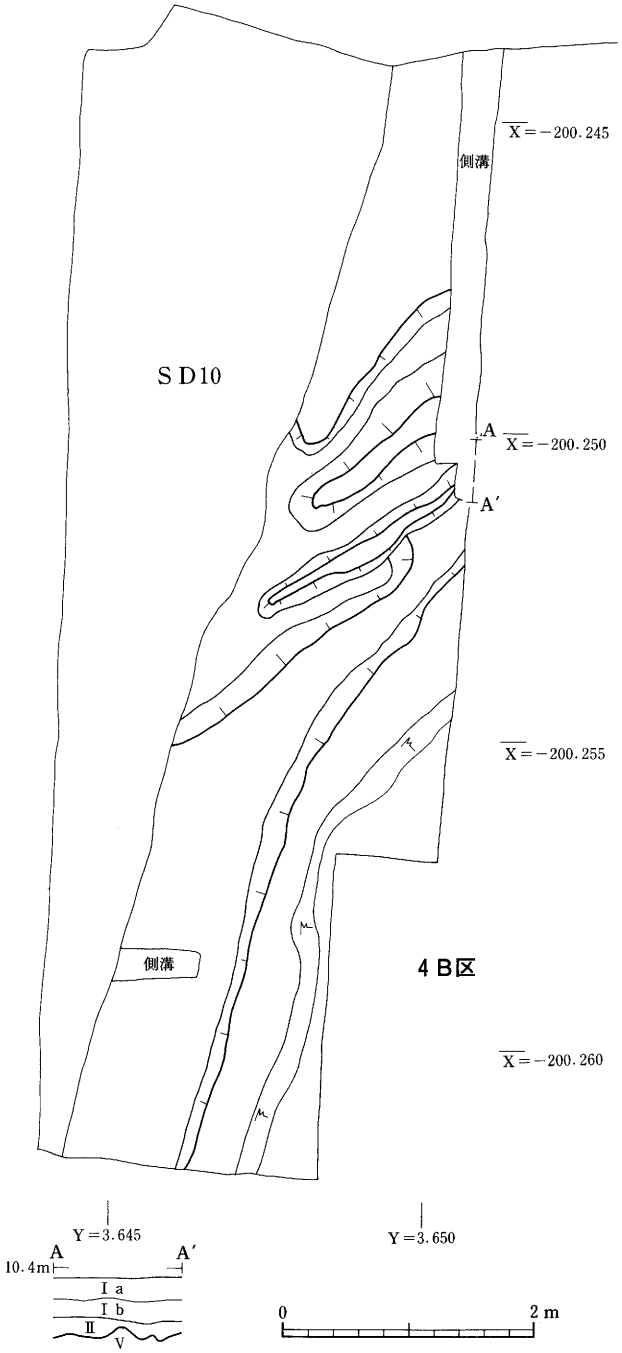
［1区Ⅱb層水田跡］

南東部でⅡa層を除去したところ、北側には灰黄褐色砂質シルトのⅡb層面、南側がにぶい黄褐色砂質土のⅢb層面が明瞭な違いをもって検出された。次にⅡb層を除去したところ、Ⅲb層との境には高さ7㎝程の段差がみられ、Ⅱb層下にはⅣa層が顔を出す状況となった。またこのⅣa層面においてはさらに北半でⅡb層が残ることから、これを完全に取り去ると、下にⅡc層が検出され、ここにおいても東西方向に走る段差が検出された。段差は7・8㎝程の高さである。いづれの段差ともほぼ東西方向で、南側のものは確認長2.8mで、西側でやや南へカーブし、北側のものは東西が4.5mで、やはり西側が南へ折れ、コーナーをもつ形状である。段差自体は直立することなく、各層の上面はⅢb・Ⅳa・Ⅱc層とも小さな起伏はあるがほぼ平坦で、Ⅳa層面に僅かな北方向への傾斜がみられる。1区東壁の状況から考えると、このいづれの段差もⅡb層が水田作土である場合の水田区画の一部とみられ、可能性としては両段差間にかつて作土を積み上げた畦畔が存在し、これより南側ではⅢb層がみられることから、耕作は行われず、北側では畦畔底面レベルより深く耕作が及んでおり、この場合畦畔は今回確認された東西方向のものがほぼ同様の幅で南へ折れるL字形をしていたものと考えられる。またもう一つの考えとしては、畦畔が南側段差の南のⅢb層上に作られ、それは後に整地作業時に失われ、これより北側に水田が広がっていたと考えられ、この場合、北側の段差はある時期に深度の異なる耕作がなされることによって生じた可能性がある。また東壁断面をみると、SD11と近接する箇所にⅡb層上面が他よりやや高まりをみせ、層厚も増す部分がみられたが、これを平面的に畦畔として検証することはできなかった。

Ⅱb層は1区南半部の低位部全域にみられるが、1区内では他の遺構により改変され、畦畔状プランなどの確認はできなかったのに加え、2区では現代の耕作によりⅣ層より上の層が削平されており、この水田の南及び西側への広がりは不明である。



第37図　1区Ⅱb層水田跡



第38図　4B区Ⅱ層水田跡

Ⅱｂ層からの出土遺物は縄文土器１点、ロクロ土師器10点、須恵器１点、渥美産の甕１点、用途不明の土製品１点がある。

［１区Ⅱｃ層による段差］

Ⅱｂ層水田跡の北側段差より北にはⅡｃ層が堆積し、Ⅱｂ層と段差を共有している。また東壁断面ではＳＤ11と近接する箇所にⅣａ・Ⅳｂ層が残存し、これらの層は自然堆積層とみられることから、Ⅱｃ層についても水田作土である可能性も考えられるが、これらを平面的に検証することはできず、またⅡｃ層中からイネのプラント・オパールは検出されなかった。

Ⅱｃ層からの出土遺物はロクロ土師器11点、須恵器１点がある。

［４区Ⅱ層水田跡］

４Ｂ区のＳＤ10東側の地区のⅡ層を多少下げたところ、ほぼ中央部でⅤ層が帯状に北東－南西方向へ延びるのを確認した。Ⅴ層は自然堆積層で、Ⅱ層下面が著しく乱れていることから、このプランはⅡ層を作土とした水田によるⅤ層面での擬似畦畔と考えられる。このプランは確認長が約４ｍ、方向はＮ－30°－Ｅ、幅が40～60㎝で、高さは10㎝以上のもので、南西部で終息し止まっている。さらに周囲のⅡ層を下げると、この北側に40㎝程離れて、ほぼ同方向で幅が80～130㎝以上の同様のプランが平行してみられ、これら２つの擬似畦畔とみられるものの北側と南側にはさらに30～130㎝の幅をもった溝状のプランを挟んでやや高い平坦面が広がっている。

全体の状況からみてこれらのプランはⅡ層水田面が西側で低く、東側で高い状況で、これらの境となる今回の南・北端部の段差上端には本来、畦畔があった可能性が考えられる。このことから当初検出した擬似畦畔については、東側のレベルの高いⅤ層面を北東方向へ延びる３条の水路状プランが存在し、各水路間に残る土手状の高まりであったものと考えられる。水路底面でのⅤ層レベルによる流水方向は特定できなかった。

ここにみられるⅡ層は北側の４Ａ区においては確認できず、そこでのⅡ層はＳＤ10堆積土上半にみられる洪水堆積層であることから、可能性としてはこの土壌を後に水田作土としていることも考えられる。

Ⅱ層からの出土遺物は無かった。

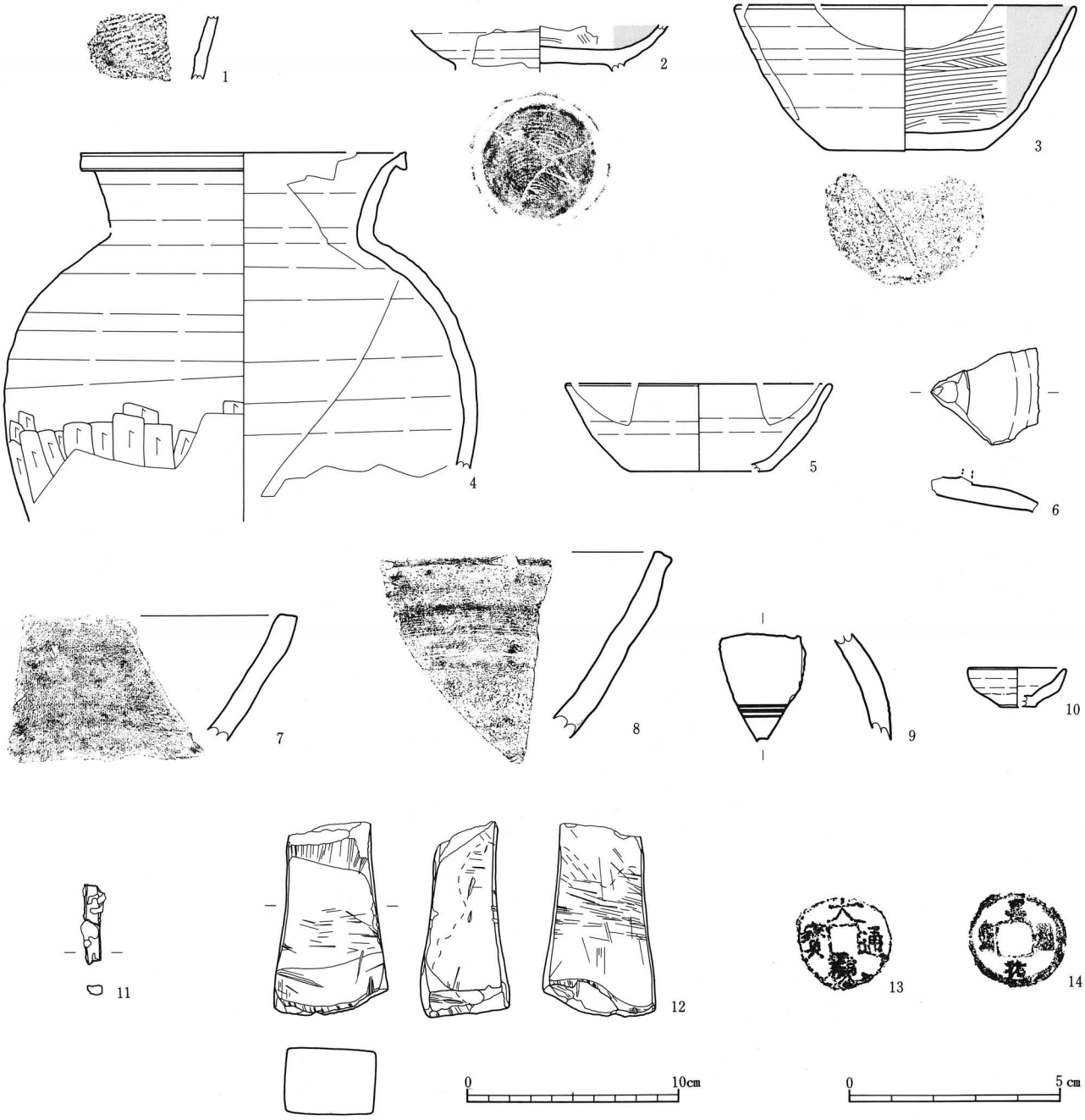
（６）基本層出土遺物

ここでは本調査区１・２・４区出土の遺物に加え、これと重複する試掘トレンチ出土のものも含んでいる。遺物の数量については後の集計表に記載している。

１区ではⅢａ層を除く全ての層から遺物の出土がみられた。土師器は全層にみられるほか、中世陶器はⅠ・Ⅱａ・Ⅱｂ層に限られる。整地層で遺構検出面であるⅡａ層からは中世以降の遺物の出土はない。Ⅲ層以下では縄文土器、ロクロ土師器、須恵器が出土している。Ⅳａ層の土師器の一部は２号竪穴住居跡堆積土中のものである可能性がある。またⅡａ・Ⅱｂ層から鉄滓が各４点、Ⅳ層から釘が２点出土している。（38図４）は須恵器の甕で、口縁端部の断面が三角形で、体部外面下半にはヘラケズリが施される。（38図２）はロクロ土師器の高台付坏で、口縁、高台部が欠損している。内面は黒色処理・ヘラミガキが施され、底部は回転糸切りのちに高台部を貼付けている。（38図10）は瀬戸・美濃産の小坏で、鉄釉で体部下半・底部が露胎である。（38図９）は古瀬戸の瓶子か壺の肩部破片である。

２区では後の耕作による削平が著しいことから、Ⅰ層とⅣ・Ⅴ層面からのみの出土である。Ⅴ層面からの遺物は全て土師器で、ほとんどはロクロを使用したものであるが、僅かに塩釜式期のものが含まれている。（39図３）はロクロ使用の土師器坏で、器高があり碗状のものである。内面は黒色処理・ヘラミガキ、底部は手持ちヘラケズリ調整を施している。（39図５）は須恵器坏で、底部は不明である。（39図６）は須恵器蓋で、径は不明でリング状のつまみである。

４区でも全層から遺物の出土があり、Ⅱａ・Ⅱｂ層からは中世陶器が出土しているが、Ⅳ層以下では縄文土器、



図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版番号
1	3	4 a区	Ⅱb	弥生土器	壺か甕	体部：ＬＲ縄文	ナデ		18－4

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高(mm)	外面調整	内面調整	底部調整	備　考	類型	写真図版番号
2	31	1区	Ⅴa	土師器	高台付坏	－×高台径(65)×－	ロクロナデ→ナデ	ロクロナデ→黒色処理・ヘラミガキ	回転糸切り→高台貼り付け		－	18－19
3	33	2区	Ⅴ層上面	土師器	坏	(162)×(76)×69	ロクロナデ	ロクロナデ→黒色処理・ヘラミガキ	ヘラケズリ		Ⅲ	18－16
4	30	1区	Ⅱc	須恵器	甕	(153)×－×－	ロクロナデ→体部下半ヘラケズリ	ロクロナデ	－		－	20－11
5	35	2区	Ⅰ	須恵器	坏	(126)×(66)×(42)	ロクロナデ	ロクロナデ	－		－	20－6
6	32	2区	Ⅰ	須恵器	蓋	－×つまみ径－×－	ロクロナデ	ロクロナデ	－	リング状つまみ	－	20－10

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高(mm)	産地	時期	備　考	写真図版番号
7	127	4区	Ⅱa	中世陶器	鉢	－×－×－	在地	13C後半～14C前半	胎土中に白色珪酸体を含む	23－7
8	139	11T	Ⅰ	中世陶器	鉢	－×－×－	在地	13C後半～14C前半	口縁端部が凹む	23－6
9	115	1区	Ⅱa	中世陶器	瓶子か壺	－×－×－	瀬戸	13～14C	(古瀬戸)　灰釉	24－16
10	109	1区	Ⅰ	中世陶器	小坏	(46)×(16)×19	瀬戸・美濃	中世	鉄釉　底部回転糸切り　体部下半・底部露胎	25－3

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	備　考	写真図版番号
11	10	1区	Ⅳ	鉄製品	釘	－×(7)×(4)	(3.5)	両端部欠損　断面長方形	27－14
12	9	1区	Ⅱa	石製品	砥石	(92)×40～54×28～42	(293)	一端部欠損　断面長方形　一部被熱	27－8

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	銭貨名	時代	初銭年	備　考	写真図版番号
13	14	14T	Ⅱa	銅製品	銅銭	大観通寶	北宋	1107	№13・15・16と密着して出土　欠損	28－11
14	15	14T	Ⅱa	銅製品	銅銭	嘉祐通寶	北宋	1056		28－6

第39図　基本層出土遺物

土師器、須恵器のみの出土である。(39図１）は弥生土器である。(39図７）は在地産の鉢で、口縁部が僅かに内傾し、胎土中には名取川流域出土の土器に特徴的にみられる白色珪酸体を含んでいる。

３．３区の検出遺構と出土遺物

(1) 溝　跡

ＳＤ２２　溝跡

３区西半部で検出し、検出面はＶｄ層上面である。他遺構との重複は無いが、溝跡上部のⅡａ層下面で溝跡の西際に段差がみられることから、この溝跡はⅡａ層により形成された何らかの区画に沿って掘られたものである可能性が強い。確認長は12.5mで、溝幅は中央部の広いところで105cm、南端部の狭いところで70cmで、北端部は溝自体は狭いが、東側に浅くテラス状になり、105cmを測る。底面幅は20～30cmで一定し、深さは30cm前後である。方向は南半部がＮ－12°－Ｅであるが、北側で僅かに西方向へ屈曲している。底面レベルは全体にほぼ同じである。壁面はやや急に立上り、底面はほぼ平坦で、その境は明瞭である。堆積土はシルト質の１層のみで、砂質土を層状に幾層か挟むことから、自然堆積とみられる。

出土遺物は須恵器２点がある。

ＳＤ２３　溝跡

３区中央部で検出し、検出面はＶａ層上面である。ＳＤ24・25・26と重複しており、いづれの溝跡をも切っている。確認長は13.4mで、溝幅は60～90cm、底面幅15～35cm、深さ25～45cmである。方向は北部で屈曲していることから、北側がＮ－40°－Ｗで、南側はＮ－13°－Ｅである。底面レベルは北側が低くなっている。壁面は緩やかな箇所とやや急な箇所があり、底面についても北半部が幅広で平坦なのに対し、南側は狭くなっている。また屈曲部を挟み、その底面両側には約４ｍにわたり、径が25～10cm程の不整形の窪みが列状に多数みられる。これについては溝を掘る際の鋤などの痕跡とみられる。堆積土は２層で、いづれも自然堆積とみられる。

出土遺物はロクロ土師器７点がある。

ＳＤ２４　溝跡

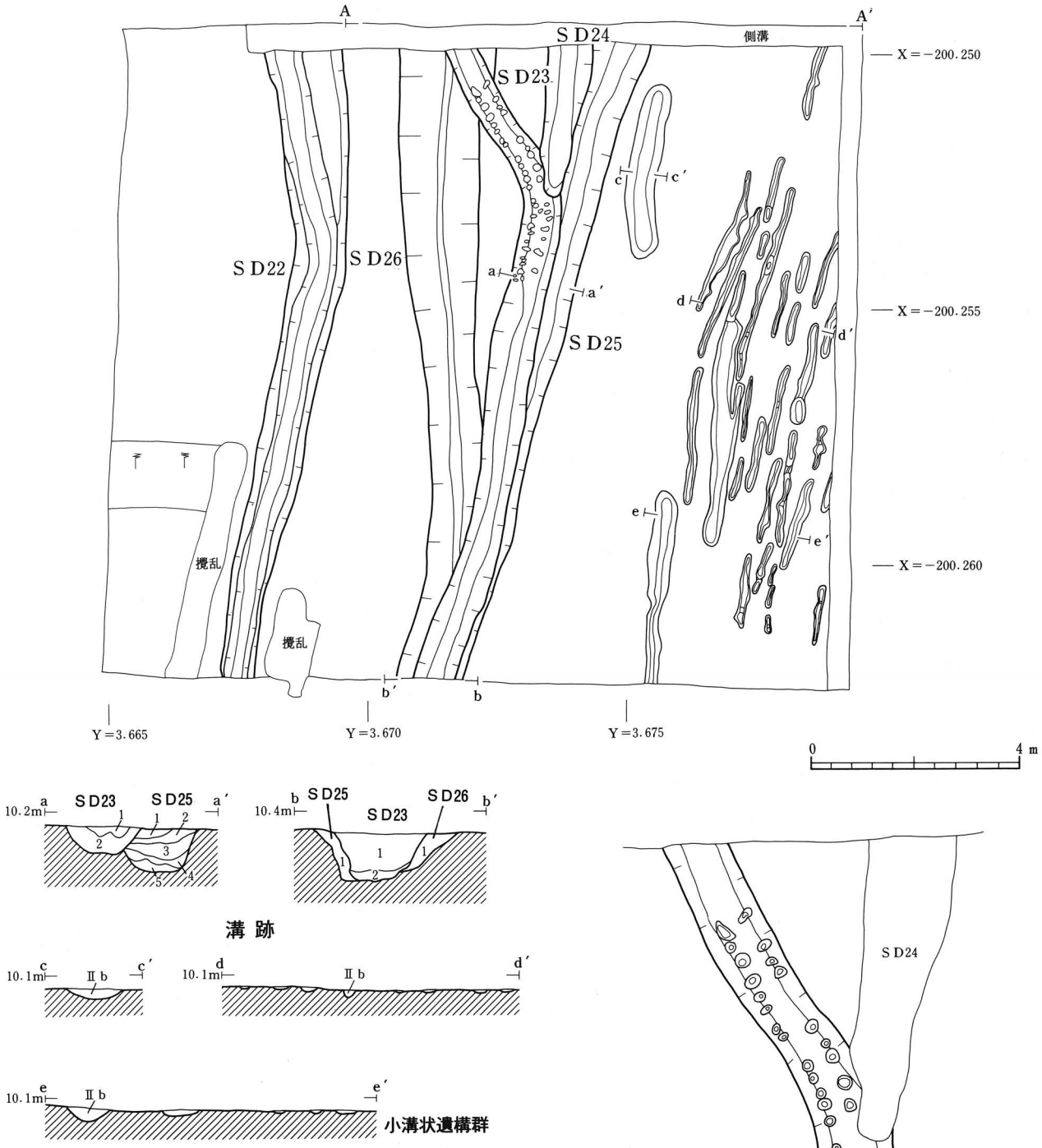
３区北端部で検出し、検出面はⅡｂ層上面である。平面プランの重複と、堆積土中に入る基本層からみて、ＳＤ24はＳＤ23に切られるが、ＳＤ25を切っていることがわかる。確認長は3.4mで、これより南側はＳＤ23・25とほぼ同位置で南下するとみられる以外に、ＳＤ23同様に堆積土中にⅡｂ′層が入ることから、ＳＤ24はＳＤ23の屈曲部に接続する溝である可能性も考えられる。溝幅は断面からみると壁面の急な部分については65cm程とさほど広くはないが、これより上半はかなり緩やかに立上り、250cmにもなる。底面はわりと平坦で、深さは35cm程である。堆積土は１層で、自然堆積とみられる。

出土遺物はロクロ土師器４点がある。

ＳＤ２５　溝跡

３区中央部で検出し、検出面はⅢａ層上面である。ＳＤ23・24に切られるが、南端部で重複するＳＤ26との関係は不明である。確認長は13.3mで、溝幅は北端部で75cm、底面幅30cm、深さ45cm程であるが、南半部は不明である。方向はＮ－16°－Ｅで、３区で検出した他の溝跡と異なり、直線的に延び、底面レベルは北側が低くなっている。堆積土は５層で、底面上にはＶ層の崩落土がみられるが、いづれも自然堆積とみられる。

出土遺物はロクロ土師器13点、須恵器２点がある。(41図１）はロクロ使用の土師器坏で、内面は黒色処理・ヘラミガキ、外面はヘラケズリ、底部は回転糸切りのち手持ちヘラケズリ調整である。



遺構	層位	土色	土性	備考
調査区南壁				
遺構	層位	土色	土性	備考
SD23	1	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	全体にマンガン斑を多量,層下面ににぶい黄橙色砂質シルトブロックを含む
	2	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	
SD25	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	全体にV層小ブロックを含む
SD26	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質土	
中央ベルト				
遺構	層位	土色	土性	備考
SD23	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	マンガン斑を少量含む
	2	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	マンガン斑を少量含む
SD25	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	酸化鉄斑を多量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	にぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量含む
	3	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質シルト	細砂層を挟む
	4	褐色 10YR4/4	シルト	
	5	黄褐色 10YR5/6	粘質シルト	V層の崩落層

第40図　3区遺構配置図・断面図

ＳＤ２６　溝跡

３区中央部で検出し、検出面はＶａ層上面である。ＳＤ23に切られる。確認長12.5ｍで、溝幅は北端部が190㎝と最も広く、中央部が100㎝と狭くなっている。底面幅は全体に狭く、深さは45㎝程である。方向はほぼ南北方向であるが、北半部は西へ、南半部は東へやや張り出し、蛇行気味である。底面レベルは北側が低くなっている。壁面は緩やかに立上がり、底面との境は不明瞭な舟底状を呈する。堆積土は砂質シルトの１層で、短期間に埋まったものとみられる。

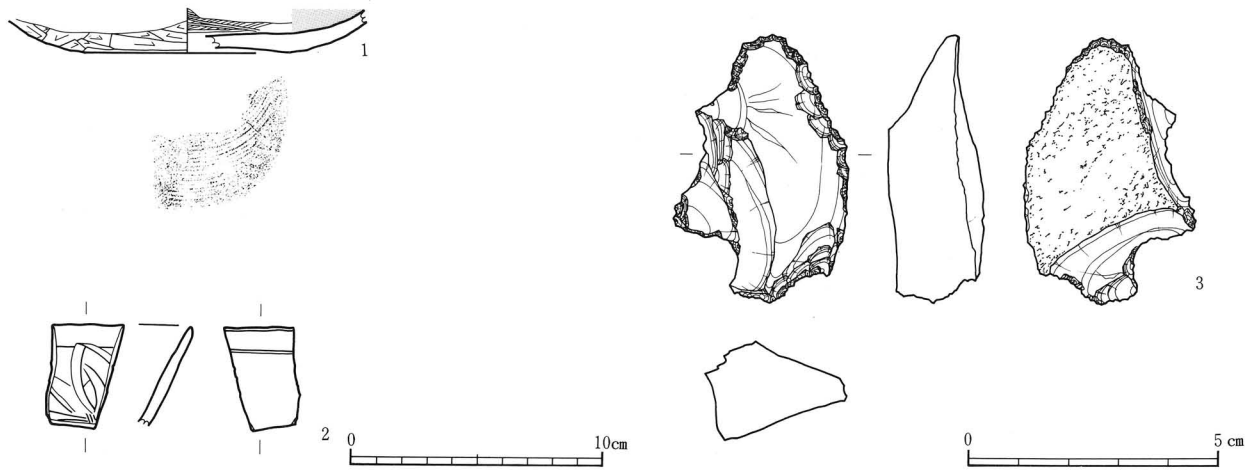
出土遺物はロクロ土師器４点がある。

（２）小溝状遺構群

３区東半部のⅢ層及びⅣ層上面で検出した。小溝は南北方向で、３区全体でみると、西半部のⅤ層面がレベルが高いのに対し、東半部は低く、ここにはⅡｂ、Ⅲａ、Ⅲｂ、Ⅳ層が堆積する状況で、小溝はこのレベルの低い地区にのみみられる。断面観察の結果、小溝はⅢａ、Ⅲｂ層上面を中心にⅡｂ層が溝状に落込んでおり、Ⅱｂ層により形成されたものと判断される。

小溝群は東半部の中でも北及び南側にはみられず、その範囲は南北約10ｍ、東西３ｍで、東側への延びは不明である。方向は一部でややカーブ気味のものはあるが、Ｎ－10°－Ｅ前後でほぼ揃っており、これと異なる方向のものはみられず、また互いが重複するものもない。小溝は長いものでは７ｍを測り、断続的に続くものが多い。溝幅は大きいもので34㎝、小さいものは10㎝にも未たず、深さも２～14㎝とばらつきがあり、概して浅いものである。底面は狭く、部分的に深くなる箇所が多数みられるなど、平坦ではない。各小溝間の幅は、広いところでは30㎝程であるが、大部分は５～20㎝で、相互が近接している印象を受ける。各小溝の南及び北端部は特に揃っている様子はない。またＳＤ25の東側には長さ340㎝、最大幅60㎝のわりには深さが10㎝の浅い溝状のものが１条みられるが、堆積土からみて、これについても小溝の一つであるものと考えられる。

小溝状遺構群の性格としては、畑における耕作痕跡の可能性が強いものと考えられ、その場合、畑の耕作土とみられるのはⅡｂ層である。しかしながら今回Ⅱｂ層上面においては畝跡など、畑跡に関するような層上面での遺構の確認はできなかった。これはさらに上層のⅡａ層の性格によるところが大きい。これら小溝状遺構群については３区の中でも低位部のみにみられること、また堆積土中にⅡｂ層類似のⅡｂ′層が入るＳＤ23、24との関係につい



図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高(㎜)	外面調整	内面調整	底部調整	備　考	類型	写真図版番号
1	27	3区 ＳＤ25	堆積土	土師器	坏	－×(82)×－	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ→黒色処理・ヘラミガキ	回転糸切り→ヘラケズリ		Ⅱ	18－17

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高(㎜)	産地	時期	備　考	写真図版番号
2	125	3区	ⅡＤ	磁器（青磁）	輪花碗	－×－×－	中国龍泉窯系	12C後半～13C前半	劃花文	26－15

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	長さ×幅×厚さ(㎜)	重量(ｇ)	石材	備　考	写真図版番号
3	4	3区	Ⅱａ	剥片石器	不定形石器	54×34×20	28.8	珪質頁岩	自然面残存　腹面を中心にほぼ全周して二次加工あり　折断面に二次加工あり	27－3

第41図　３区出土遺物

ても考える必要性がある。

Ⅱｂ層からの出土遺物はロクロ土師器13点、中国龍泉窯系の青磁輪花碗１点がある。

（３）基本層出土遺物

３区ではほぼ全ての層から遺物の出土がみられた。ほとんどはロクロ土師器で、洪水堆積層とみられるＶｃ層中から在地産の中世陶器が出土している。（41図２）は青磁の輪花碗で、劃花文の体部が直線的に立上がるものである。

４．５・６区の検出遺構と出土遺物

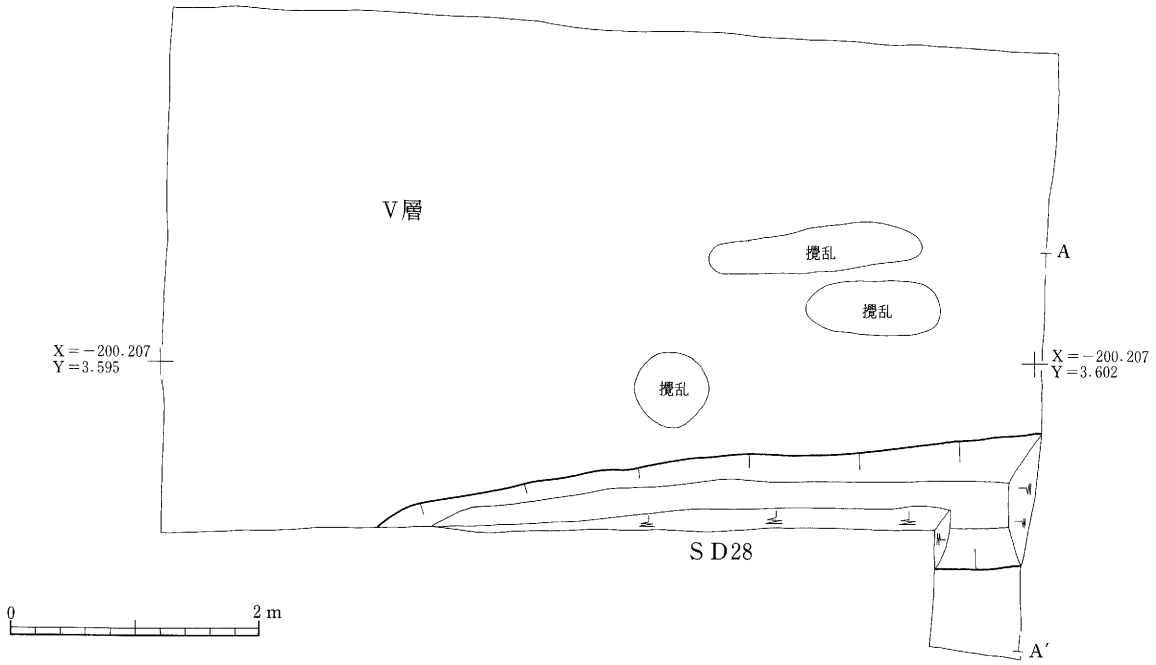
（１）溝　跡

ＳＤ２８　溝跡

５区南端部で検出し、検出面はＶａ層上面である。重複は無い。確認長は5.3ｍで、溝幅170cm、深さは50～60cmで、底面は丸みをもち、壁面はかなり緩やかに立上がる。方向は東半はほぼ東西方向であるのが、西半ではやや南寄りに向かっている。堆積土は１層で、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。ＳＤ28の東西での延びは不明で、南側に隣接するＳＤ10との関わりも不明である。

（２）基本層出土遺物

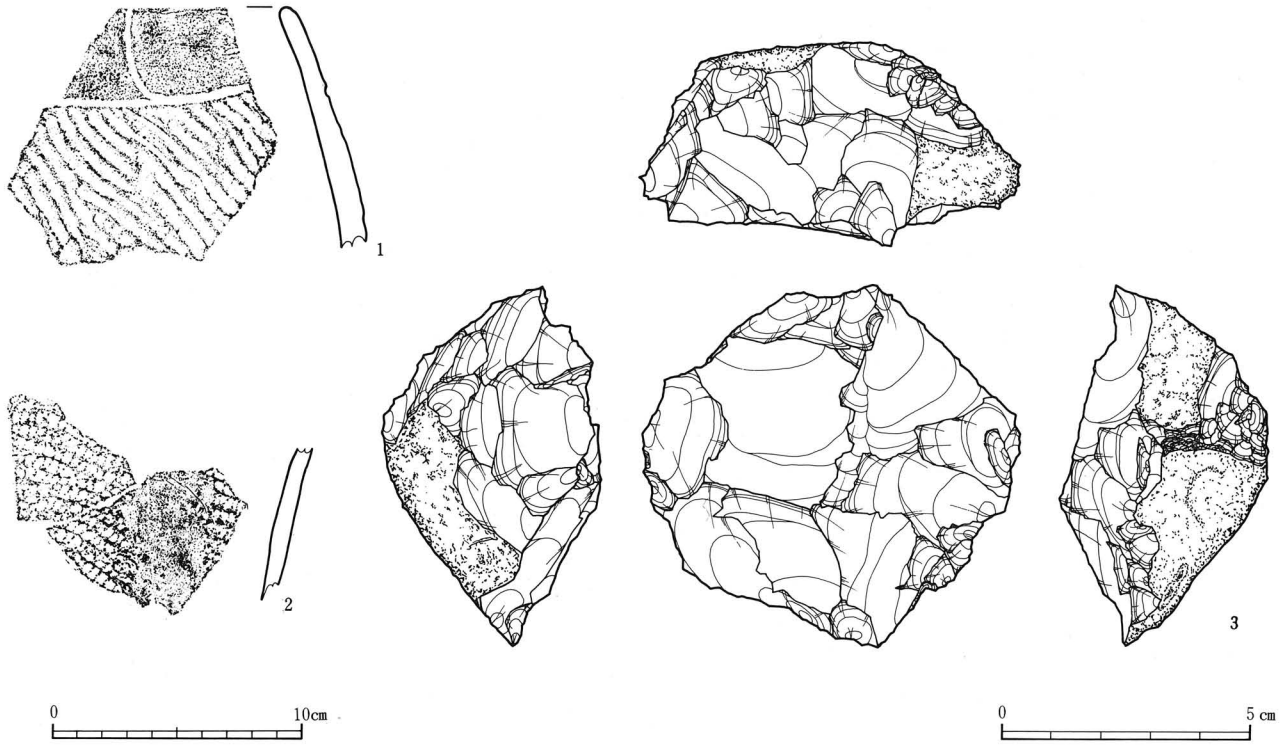
５・６区ともＶｃ・Ｖｄ層から縄文土器の出土があった。これらの層は同一層かどうかは不明であるが、量的にはいづれもＶｄ層からが多い。また５区Ｖｃ層、６区Ｖｄ層から石核が１点づつ出土している。５・６区は調査区北端に位置し、地形的には微高地上に位置することから、この地域を中心に縄文時代の遺物包含層が形成されているものと考えられる。



第42図　５区ＳＤ平面図

５．遺構確認調査

今回の調査では、本調査区１～６区や試掘トレンチとして設定した１～17の各トレンチの他に、これらの調査区で検出された主として溝跡の行方を確認するために、18～29の計12の遺構確認トレンチを設定し調査を行った。こ



図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	外面調整・文様	内面調整・文様	備　　考	写真図版番号
1	1	6区	Ｖd	縄文土器	深鉢	口縁部：絃線区画＋無文　体部：ＬＲ縄文	ミガキ		18－1
2	2	6区	Ｖd	縄文土器	深鉢	体部：隆線区画＋無文＋ＬＲ縄文	ミガキ	隆線剥落	18－2

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	石材	備　　考	写真図版番号
3	5	5区	Ｖc	剥片石器	石核	76×72×44	189.7	石英安山岩	自然面残存	27－4

第43図　基本層出土遺物

れらのトレンチでは隣接する調査区から延びる溝跡や、幾つかの土坑状プラン、自然地形などが検出されており、基本的にこれらの掘り込みは行っていない。

１８トレンチ

２トレンチと３トレンチの間に設定し、面積は10.2㎡である。Ｖ層面で南北方向の溝跡１条を検出した。幅は110～130cmで、２トレンチのＳＤ１、３トレンチのＳＤ２と同一の溝跡とみられる。出土遺物はロクロ土師器１点、土師質土器の鉢１点、中国龍泉窯系の青磁碗１点があり、（９図15）は碗の高台部周辺を打ち欠いて何かに転用したものとみられる。

１９トレンチ

９トレンチと10トレンチの間に設定し、面積は10.5㎡である。Ｖ層面で南半部に東西方向の２条の溝跡の重複、北半部にも同方向の溝跡を１条検出した。幅は南半部の新しいもので115～130cmである。この溝跡は９トレンチのＳＤ17、10トレンチのＳＤ18と同一か、また古い方の溝跡は23トレンチの南北方向の溝跡である可能性もある。出土遺物は飯坂岸窯系の擂鉢１点がある。

２０トレンチ

４トレンチ北側にその拡張区として設定し、面積は35.0㎡である。Ｖ層面で南北方向の溝跡２条、東西方向の溝跡１条と、ＳＤ３の延長部分、土坑状プラン３基を検出した。南北方向の溝跡は４トレンチのＳＤ４に取り付く同時存在の溝跡とみられ、西側のＳＤ５は幅70～110cmで、３トレンチＳＤ２の続きとみられる。また東側のＳＤ６は幅150cm前後で、ＳＤ４に接続すると同時に一部は東側に折れ、５トレンチのＳＤ８或いはＳＤ９に続くとみら

れる。

２１トレンチ

４トレンチと５トレンチの間に設定し、面積は16.6㎡である。Ⅴ層面で中央に重複する２条の東西方向の溝跡、南端に幅150㎝以上の東西方向の溝跡を検出した。中央のものは４トレンチのＳＤ３、５トレンチのＳＤ７と同一で、南端のものは４トレンチのＳＤ４、５トレンチのＳＤ８或いはＳＤ９と同一のものとみられる。

２２トレンチ

９トレンチ南側に設定し、面積は11.4㎡である。Ⅴ層面で幅40～55㎝の南北方向の溝跡を１条検出した。この溝跡は23トレンチ南端で僅かに確認できる。

２３トレンチ

９トレンチと10トレンチの間に設定し、面積は30.2㎡である。Ⅴ層面で９トレンチ検出のＳＤ17が東へ折れる部分を９・19トレンチ同様、新旧２時期をもって確認した。またこれより古い幅100～120㎝の南北方向の溝跡を１条検出したが、この北側への延びは不明である。出土遺物は土師質土器の皿１点がある。

２４トレンチ

７トレンチの西側に検出し、面積は14.3㎡である。Ⅳ・Ⅴ層面にまたがり、南北方向の２条の溝跡を検出した。西側のものは幅250㎝前後で、東側のものは前者と平行しており、幅は200㎝前後である。これらの溝跡は北側の25トレンチでもほぼ同規模の２条の溝跡がみられることから、これらとの連続性が考えられると同時に、南側では９トレンチのＳＤ17に続く可能性がある。出土遺物は在地産の中世陶器甕２点、美濃（志野）産の皿１点、肥前産の染付碗１点がある。

２５トレンチ

１トレンチと１区の間に設定し、面積は30.9㎡である。Ⅴ層上で２つの溝跡が平行しながらカーブしている箇所を検出した。幅はいづれ200㎝前後の同規模のものである。これらはトレンチ内では２つに分かれているが、東側の１区ではほとんど重複した形でＳＤ10となるものとみられ、また南側では24トレンチの２条の溝跡へ続くものと考えられる。

２６トレンチ

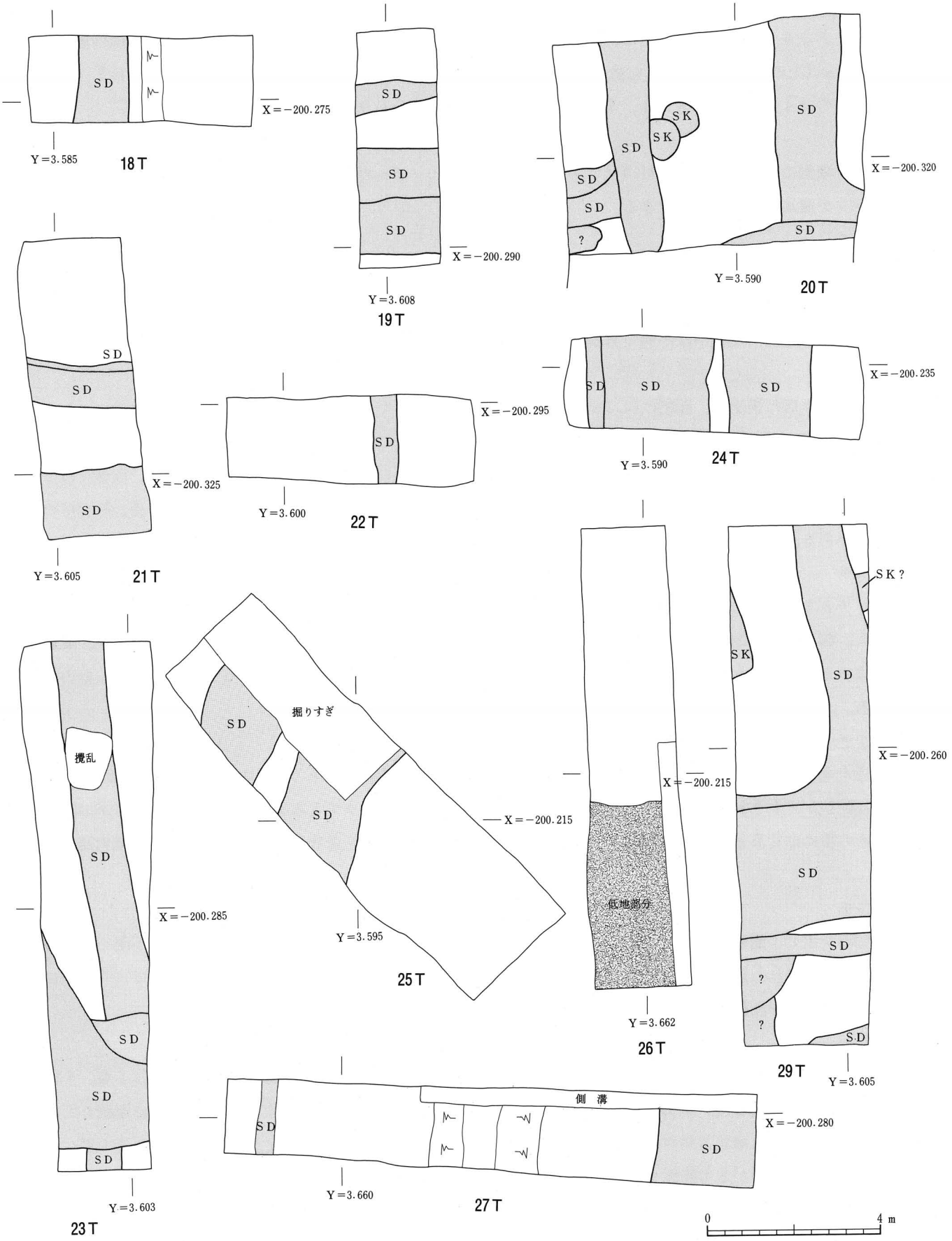
４区と13トレンチの間に設定し、面積は21.2㎡である。Ⅴ層上面で精査したところ、中央よりやや南側においてⅡ層の堆積範囲が確認されたことから、この部分については13・15トレンチでもみられるように南側半分が旧河道部分で、その境には比高差のある傾斜面となっていることが判明した。出土遺物はロクロ土師器５点、須恵器１点がある。

２７トレンチ

３区南側に設定し、面積は23.6㎡である。Ⅴ層面で、東端に南北方向の溝跡１条を検出した。幅は不明で、この溝跡は３区で検出された溝跡のいづれかに連続している可能性がある。出土遺物は堤焼の灯明皿１点で（９図14)、底部に何らかの敷物の圧痕がみられ、芯受に煤が付着している。

２９トレンチ

２区西側に設定し、面積は35.7㎡である。Ⅴ層面で東西方向の溝跡を２ないし３条、南北方向の溝跡１条、土坑条プランをいくつか検出した。中央の東西方向の溝跡は幅２～３ｍ程で、これは東側で２区のＳＤ17に連続しているものとみられる。また南北方向の溝跡は南下して一部は西側に折れる形をみせるが、同時にトレンチ外で東へ折れて、ＳＤ17の方向へ曲がる可能性もある。



第44図　遺構確認調査－遺構平面図

第3章　自然科学分析

第1節　リン酸分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

柳生台畑遺跡は、名取川により形成された自然堤防上を中心に立地する。これまでの調査により、古墳時代から平安時代の遺構・遺物が検出されている。今回の調査は遺跡の範囲の南端に当たり、中世の土坑墓群や建物跡、旧河道などが検出されている。このうち、土坑墓では古銭や陶磁器片が出土しているが、人骨は確認されていない。

そこで、土坑墓やその他の土坑に遺体埋納に関する情報を得るために、土坑覆土を対象としたリン酸分析を実施することとした。リン酸は人骨に多量に含まれる成分であり、さらには分解した遺体のリン酸成分が土壌中に含まれるアルミや鉄と結合して難溶性のリン酸化合物を形成するためにリン酸の濃集が確認しやすい。特に黒ボク土やロームのようにリン酸と結合しやすいアルミや鉄が多い土壌では遺体の痕跡を確認する成果が大きいが、還元環境下では流亡することから注意が必要である（竹迫ほか，1980など）。

1．試料

調査対象は、土坑9基（ＳＫ12、ＳＫ61、ＳＫ87、ＳＫ93、ＳＫ94、ＳＫ98、ＳＫ110、ＳＫ116、ＳＫ117）である。土坑墓とされるＳＫ12、ＳＫ61、ＳＫ87、ＳＫ93、ＳＫ110は隅丸長方形を呈する。これらの土坑墓は、微高地縁辺から低地部にかけて構築されている。重複する遺構が見られることから墓域として継続され、遺物の少ない点から一般庶民層が村落の共同墓地としていたと推定されている。なお、ＳＫ110の底部には敷物の痕跡が認められており、焼成痕のある土坑が見られないことから、むしろなどを敷いて土葬としたと考えられている。試料は、土坑底部とその直下の地山および底部に近い土坑覆土の3点をセットに採取されているが、ＳＫ110では土坑底部と直下の地山の2点が採取されている。

また、ＳＫ94とＳＫ98は土坑墓以外の可能性もある土坑とされる。ＳＫ94はＳＫ93などの土坑墓と考えられる遺構より以前に構築されたものと考えられる。また、ＳＫ98は2区西壁で確認されている。試料は、いずれも土坑底部とその直下の地山および底部に近い土坑覆土の3点をセットにして採取された。

ＳＫ116とＳＫ117は、ともに1区南壁に認められた遺構である。試料は、土坑底部とその直下の地山および底部に近い土坑覆土の3点をセットにして採取されている。

これらの対照試料として、基本土層Ⅱａ層・Ⅱｂ層・Ⅱｃ層およびⅤ層より土壌試料が採取された。
今回は、これら30点を分析試料として用いた。

2．分析方法

分析では、土壌標準分析・測定法委員会編（1986）、土壌養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学教室編（1957）、農林水産省技術会議事務局監修（1967）、ペドロジスト懇談会（1984）などを参考にした。以下に、その行程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料1.00ｇをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO_3）5㎖を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）10㎖を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100㎖に定容して、ろ過する。今回は、リン含量をリン酸（P_2O_5）濃度として測定する。ろ液の一定量を試験

管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）を求める。

3．結果

結果を表1に示す。基本土層および土坑墓は土色の色相はほとんどが2.5Y系である。基本土層のリン酸含量は、V層で2.14P_2O_5mg/g、Ⅱ層の各層で3.0mg/g前後である。

一方、土坑墓とされるものはリン酸含量が2.0P_2O_5mg/g前後であり、SK87とSK93を除いて下位ほど含量が少なくなる傾向が見られる。SK87とSK93では、地山でリン酸含量が高い。また、SK94では底部、SK98は底部上位の覆土でリン酸含量が高い。SK116とSK117は、下位ほど含量が少なくなる傾向が見られる。ただし、いずれも基本土層と比較して低い傾向にある。

表1　土坑のリン酸分析結果

試料名			土性	土色	P_2O_5（mg/g）	備考
1	基本土層	Ⅱa層	CL	2.5Y3/1　黒褐	3.01	対照試料
2		Ⅱb層	SiCL	2.5Y3/2　黒褐	3.66	
3		Ⅱc層	CL	2.5Y3/2　黒褐	2.82	
4		V層	HC	10YR4/3　にぶい黄褐	2.14	
5	SK12	1層	CL	2.5Y3/2　黒褐	2.12	土坑墓とみられるもの
6		底面	LiC	2.5Y3/1　黒褐	2.18	
7		地山	HC	10YR4/4　褐	1.96	
8	SK61	2層	LiC	2.5Y3/3　暗オリーブ褐	1.41	土坑墓とみられるもの
9		底面	CL	2.5Y3/3　暗オリーブ褐	1.35	
10		地山	LS	2.5Y4/3　オリーブ褐	0.90	
11	SK87	3層	CL	2.5Y3/3　暗オリーブ褐	1.19	土坑墓とみられるもの
12		底面	SL	2.5Y4/3　オリーブ褐	0.92	
13		地山	S	2.5Y4/3　オリーブ褐	1.15	
14	SK93	2層	SL	10YR4/4　オリーブ褐	2.16	
15		底面	HC	5Y4/1　灰	1.49	
16		地山	S	10YR4/4　褐	2.98	
17	SK94	4層	HC	2.5Y3/1　黒褐	1.24	
18		底面	HC	2.5Y3/2　黒褐	1.72	
19		地山	HC	2.5Y4/3　オリーブ褐	1.67	
20	SK98	2層	LiC	2.5Y3/3　暗オリーブ褐	1.27	
21		底面	LiC	2.5Y3.5/3　オリーブ褐	0.93	
22		地山	LS	2.5Y4/3　オリーブ褐	0.79	
23	SK110	底面	HC	2.5Y4/2　暗灰黄	1.28	土坑墓とみられるもの
24		地山	HC	2.5Y5/2　暗灰黄	0.70	（敷物の痕跡あり）
25	SK116	3層	LiC	2.5Y3/3　暗オリーブ褐	2.16	
26		底面	LiC	2.5Y4/3　オリーブ褐	1.70	
27		地山	LS	2.5Y4/3　オリーブ褐	1.20	
28	SK117	3層	LiC	2.5Y3/3　暗オリーブ褐	2.77	
29		底面	SL	2.5Y4/3　オリーブ褐	2.02	
30		地山	LS	2.5Y4/4　オリーブ褐	1.11	

注.（1）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
（2）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。
S：砂土（粘土0～5％、シルト0～5％、砂85～100％）
SL：砂壌土（粘土0～15％、シルト0～35％、砂65～85％）
LS：壌質砂土（粘土0～15％、シルト0～15％、砂85～95％）
SiCL：シルト質埴壌土（粘土15～25％、シルト45～85％、砂0～40％）
CL：埴壌土（粘土15～25％、シルト20～45％、砂3～65％）
LiC：軽埴土（粘土25～45％、シルト0～45％、砂10～55％）
HC：重埴土（粘土45～100％、シルト0～55％、砂0～55％）

4．考察

土坑試料のうち土坑墓とされるものは、ＳＫ87とＳＫ93を除いて下位ほど含量が少なくなる傾向が見られた。また、墓以外の土坑の可能性もあるとされるＳＫ94では底部、ＳＫ98は底部上位の覆土でリン酸含量が高く、ＳＫ116とＳＫ117では下位ほど含量が少なくなる傾向が見られた。また、土坑墓とそれ以外の土坑のリン酸含量に明確な差は認められないとともに基本土層と比較して低い傾向にあり、土坑墓の覆土中にはリン酸の富化は認められないと判断される。

基本土層および土坑墓の覆土および地山のほとんどが2.5Ｙ系の土色であり、非常に弱いながらも還元作用の影響を受けていることがうかがえる。また、ＳＫ93については土色の色相が５Ｙ系であることから、強還元状態下にあったことが推定される。さらに今回の分析結果では土坑底面よりもむしろその上位の試料がリン酸含量が高い傾向がみられる土坑が多い。これより、とくにＳＫ93ではリン酸成分の流亡が促進され、他の土坑墓についても流亡しやすい状態が生じたことが考えられる。そのため、遺体が埋葬された土坑でも、覆土に遺体の痕跡が残りにくかったと推定される。なお、ＳＫ93では化学成分を保持しにくい砂土により構成される地山でリン酸含量が高くなっている。直上の土坑底部より流下したリン酸成分が濃集したものと考えられるが、その要因は土壌の理化学性を調査していない現段階では明確にならない。

今回の分析調査では、中世の墓域に構築された土坑墓を含む土坑について、リン酸含量から遺体の埋葬の検証を試みたが、遺体の痕跡を確認するに至らなかった。今後、リン酸成分だけでなく、腐植の影響を考慮するための有機炭素含量測定（腐植含量測定）やリン酸吸収計数の測定も併せて実施することが有効であり、より詳細に検討できると考えられる。

＜引用文献＞

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法．354ｐ．，博友社．

土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法．440ｐ．，養賢堂．

京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書 第１巻．411ｐ．，産業図書．

農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖．

ペドロジスト懇談会（1984）野外土性の判定．ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」，156ｐ，：ｐ.39-40.

竹迫　紘・加藤哲郎・坂上寛一・黒部　隆（1980）神谷原遺跡への土壌学的アプローチ．神谷原　Ｉ，ｐ.412-416，八王子市椚田遺跡調査会．

第2節　プラント・オパール分析、花粉分析

株式会社 古環境研究所

1．はじめに

柳生台畑遺跡の発掘調査では、1区で水田耕作層とみられる土層が、3区で小溝状遺構（畑跡）が検出された。そこで、プラント・オパール分析からこれらにおける農耕の可能性について検討を行うとともに、花粉分析を行い堆積環境についても検討した。

2．プラント・オパール分析

（1）試料

調査地点は、3区の14トレンチ東壁，15トレンチ東壁，16トレンチ東壁と1区東壁のAポイント，Bポイント，Cポイントの6地点である。

分析試料は、3区の14トレンチ東壁では上位よりにぶい黄褐色シルト（Ⅱa層）、褐色シルト（Ⅱb層）、にぶい黄褐色砂質シルト（Ⅲb層）、黒褐色シルト（Ⅳ層）の4点、15トレンチ東壁では上位より灰黄褐色砂質シルト（Ⅱa層）、にぶい黄褐色砂質シルト（Ⅱb層）、灰黄褐色砂質シルトの上部と下部（Ⅱc層）の4点、16トレンチ東壁では暗褐色シルト（Ⅱa’層）の1点、1区東壁のAポイントでは、上位より灰黄褐色シルト（Ⅱa層）、灰黄褐色砂質シルト（Ⅱb層）、灰黄褐色砂質シルト（Ⅱc層）、にぶい黄褐色粘性シルト（Ⅴ層）の4点、Bポイントでは、上位より灰黄褐色砂質シルト（Ⅱb層）、黒褐色シルト（Ⅳa層）、灰黄褐色シルト（Ⅳb層）、にぶい黄褐色粘性シルト（Ⅴ層）の4点、Cポイントでは、上位よりにぶい黄褐色砂質土（Ⅲa層）、にぶい黄褐色砂質土（Ⅲb層）の2点の計19試料である。

このうち、3区14トレンチ東壁のⅢb層上面で小溝状遺構が検出されており、1区のⅡb層では水田耕作層の可能性が考えられていた。

（2）分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行った。

1）試料土の絶乾（105℃・24時間）
2）試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm，約0.02g）
　※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
3）電気炉灰化法による脱有機物処理
4）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
5）沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
6）封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成
7）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単

位：10－5ｇ）を乗じて、単位面積で層厚1㎝あたりの植物体生産量を算出した。各植物の換算係数は、イネは2.94、キビ族は8.40、ヨシ属は6.31、ウシクサ族は0.75、タケ亜科（数種の平均値）は0.48である。

（3）分析結果

同定された分類群は、イネ、キビ族（ヒエ属型）、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属型）、シバ属、タケ亜科である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1に示した。

（4）プラント・オパール分析から推定される農耕

稲作跡の検証や探査を行う場合、仙台平野ではイネのプラント・オパールが試料1ｇあたりおよそ3,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、プラント・オパール密度にピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくく、密度が基準値に満たなくても稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。以上のことを基準に各層における稲作の可能性について検討を行う。

14トレンチ東壁では、Ⅱａ層、Ⅱｂ層、Ⅲｂ層、Ⅳ層においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの層準において稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、Ⅱａ層ではプラント・オパール密度が5,000個/ｇ弱と高い値であることから、本層準については耕作層であったと判断される。なお、Ⅳ層ではヒエ属型とみられるキビ族が2,900個/ｇと比較的高い密度で検出された。ただし、ヒエ属とキビ属には珪酸体形状の近似するものがあること、また栽培種と野生種については両者を識別することはほとんど困難であることなどから、本層準においてヒエの栽培が行われていた可能性は考えられるものの、野・雑草である可能性も否定できない。仮に、ここでヒエが作付けられていたとするならば、イネも若干ながら検出されていることから、輪作の可能性が想定でき興味深い。

15トレンチ東壁では、Ⅱａ層とⅡｃ層よりイネのプラント・オパールが検出された。このうち、Ⅱａ層ではプラント・オパール密度が10,200個/ｇと非常に高い値であることから、本層準については耕作層であった可能性が極めて高いと判断される。また、Ⅱｃ層でも上部で5,300個/ｇ、下部で3,600個/ｇといずれも稲作跡の判断基準値である3,000個/ｇを上回っていることから、本層準についても稲作跡である可能性が高いと考えられる。

16トレンチ東壁では、Ⅱａ’層について分析を行った。その結果、イネのプラント・オパールが2,600個/ｇと比較的高い密度で検出された。したがって、本層準で稲作が行われていた可能性が考えられる。

1区の東壁では、Ⅱａ層、Ⅱｂ層およびⅢａ層よりイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの層準において稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、Ⅱａ層ではプラント・オパール密度が5,000個/ｇ弱と高い値であることから、耕作層であった可能性が高いと判断される。

なお、本遺跡では、全体に乾いた環境の指標となるタケ亜科が優勢であり、湿地的環境の指標となるヨシ属は1区東壁ＢポイントのⅡｂ層とⅣｂ層でわずかに検出されたのみで、他からは検出されていない。したがって、本遺跡はⅤ層堆積時からⅡａ層堆積時にかけては概ね乾いた環境であったと推定される。またこのことから、これらの層準で営まれた稲作が水田稲作であったならば、その水田は地下水位の低い乾田であった可能性が想定される。ただし、Ⅳ層ではイネの密度が低く、ヒエ属型とみられるプラント・オパールが検出されているうえ、ウシクサ族（ススキ属）も高い密度であることから、畠稲作であった可能性も考えられる。

3．花粉分析

（1）試料

試料は、柳生台畑遺跡の3区14トレンチのⅡｂ層、Ⅲｂ層、Ⅳ層の3層準であり、主に茶褐色から黒褐色を呈する粘土で構成される陸成堆積物とみなされる。

（2）方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

1）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

2）水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。

5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500ｒｐｍ、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類した。ただし、個体変化が大きいことや類似種があることなどからイネ属型とした。なお、今回はイネ属型は検出されなかった。

（3）結果

1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉３、樹木花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉４、シダ植物胞子２形態の計10である。これらの学名と和名および粒数を表２に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

ハンノキ属、クリーシイ属、ブナ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、セリ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

2）花粉群集の特徴

Ⅱｂ層、Ⅲｂ層は花粉がほとんど検出されなかった。Ⅳ層も検出数は少ないが、ヨモギ属とイネ科がやや多い傾向を示す。

（4）花粉分析から推定される植生と環境

Ⅳ層の花粉群集の特徴から、周辺はヨモギ属やイネ科の草本の優勢な植生であり、ヨモギ属の好むやや乾燥した陽当たりの良い環境であったと推定される。Ⅱｂ層、Ⅲｂ層ではほとんど花粉が検出されず、乾燥した環境下での分解が考えられる。以上から、柳生台畑遺跡一帯はやや乾燥した環境であったと判断され、Ⅳ層ではヨモギ属とイネ科の草本が主に分布していた可能性が推定された。

4．まとめ

柳生台畑遺跡においてプラント・オパール分析と花粉分析を行い、稲作をはじめとする農耕の検討ならびに堆積環境の推定を試みた。その結果、3区14トレンチの花粉分析から、Ⅳ層はヨモギ属などの生育する陽当たりの良い環境であり、Ⅲb層やⅡb層は乾燥した環境であったと推定された。プラント・オパール分析から3区のⅡa層、Ⅱb層、Ⅲb層さらにⅣ層、1区のⅡa層、Ⅱb層およびⅢa層において稲作が行われていた可能性が認められた。とくに、3区のⅡa層、1区のⅡa層については耕作層であった可能性が高いと判断された。また、3区のⅣ層については畠跡である可能性も示唆された。

参考文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追求のための基礎資料として－，考古学と自然科学，20，p81-92.

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，10，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－，考古学と自然科学，9，p15-29.

藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O.sativa L.）生産総量の推定－，考古学と自然科学，12，p29-41.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－，考古学と自然科学，17，p73-85.

表1　柳生台畑遺跡のプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群 ／ 試料	14トレンチ				15トレンチ				16トレンチ
	Ⅱa	Ⅱb	Ⅲb	Ⅳ	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc-1	Ⅱc-2	Ⅱa'
イネ	48	6	6	7	102		53	36	26
キビ族（ヒエ属型）				29					
ヨシ属									
ウシクサ族（ススキ属など）	18	12	6	65	15	7	12	14	13
シバ属					7				
タケ亜科	119	106	113	115	109	43	65	129	90

推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	1.40	0.18	0.17	0.21	3.00		1.57	1.05	0.76
（イネ籾）	0.49	0.06	0.06	0.07	1.05		0.55	0.37	0.27
キビ族（ヒエ属型）				2.41					
ヨシ属									
ウシクサ族（ススキ属など）	0.22	0.15	0.07	0.80	0.18	0.09	0.15	0.18	0.16
タケ亜科	0.57	0.51	0.54	0.55	0.53	0.21	0.31	0.62	0.43

検出密度（単位：×100個/g）

分類群 ／ 試料	Aポイント				Bポイント				Cポイント	
	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅴ	Ⅱb	Ⅳa	Ⅳb	Ⅴ	Ⅲa	Ⅲb
イネ	49	18			6				22	
キビ族（ヒエ属型）										
ヨシ属					6		7			
ウシクサ族（ススキ属など）	22	18	20		6	19		9		
シバ属										
タケ亜科	27	42	48	64	13	39	20	79	22	7

推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	1.45	0.53			0.19				0.64	
（イネ籾）	0.51	0.18			0.07				0.22	
キビ族（ヒエ属型）										
ヨシ属					0.40		0.43			
ウシクサ族（ススキ属など）	0.27	0.22	0.25		0.08	0.24		0.11		
タケ亜科	0.13	0.20	0.23	0.31	0.06	0.19	0.10	0.38	0.10	0.03

表2　柳生台畑遺跡における花粉分析結果

分類群		14トレンチ		
学名	和名	Ⅱb層	Ⅲb層	Ⅳ層
Arboreal pollen	樹木花粉			
Alnus	ハンノキ属		1	1
Castanea crenata – Castanopsis	クリ–シイ属			3
Fagus	ブナ			1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae – Urticaceae	クワ科–イラクサ科			1
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科		1	9
Apiodeae	セリ亜科			1
Asteroideae	キク亜科	1		1
Artemisia	ヨモギ属		2	16
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	1		1
Trilate type spore	三条溝胞子		1	
Arboreal pollen	樹木花粉	0	1	5
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	1	3	27
Total pollen	花粉総数	1	4	33
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	1	1	1

第４章　遺物・遺構の検討

第１節　遺物の検討

今回の調査では本調査および試掘調査で検出された遺構や基本層中から、縄文土器、弥生土器、非ロクロ土師器、ロクロ土師器、土師質土器、瓦質土器、中近世陶器、中近世磁器の土器類のほか、瓦、土製品、石製品、剥片石器、鉄製品、銅製品、木製品などの遺物が出土した。しかしながら、各時期の遺構の重複が著しいことから、遺構内出土遺物についても必ずしもそれが遺構時期を示すものとはなり得ない場合が多い。また土器類以外の遺物については時期の不明なものも多いことから、ここでは土器類を中心に時代別にみていくこととする。

１．縄文・弥生時代の遺物

縄文土器

縄文土器は合計で98点出土した。このうち北端微高地部に位置する５・６区の下層調査区からの出土は78点で、残りは後世の遺構堆積土からの出土である。下層調査での内訳は、５区Ｖｄ層が８点、６区Ｖｃ層が15点、Ｖｄ層が53点、Ｖｅ層が２点で、６区Ｖ層中からの出土が目立っている。

体部文様では隆線区画の文様が13点、沈線区画の文様が４点で、残りは地文のものである。時期は中期後半から後期初頭のものがあり、中でも中期末葉のものがやや多く見受けられる。また土器は６区のＶｃ～ｄ層の各層から出土があったが、層位別による時期の違いは特にみられなかった。

弥生土器

弥生土器は２点出土した。（33図１）は口縁部下半に交互刺突状文がみられる壺か甕で、他の体部資料と共に弥生時代後期の天王山式期のものとみられる。

２．古墳時代の遺物

ロクロ使用の土師器以外にも僅かではあるが非ロクロのものが認められる。図示したものは４ａ区ＳＸ１から出土した器台である（30図１）。これは受部、脚部は欠損しており、両部は貫通し、孔径は１㎝ほどである。全体に磨滅が著しく、受部外面にヘラケズリが認められる。脚部は円錐状に広がるとみられ、くびれ部下１㎝に円窓が認められる。器台は東北地方の土師器編年の第一段階である古墳時代前期の塩釜式にのみみられ、後続する中期の南小泉式には消失することから、この時期のものとみられる。また２区Ｖ層上面や13トレンチ各層などから甕や壺の破片が少量出土している。これらは外面にヘラナデ、内面にヘラナデやハケメがみられ、器台同様、塩釜式期のものとみられる。

３．古代の遺物

古代の遺物とみられるものには、土師器、須恵器がある。土師器は全てその製作にロクロを使用していることから、平安時代のものと考えられる。土器は２号住居跡から多く出土しているが、他に多くの土坑、溝跡、基本層などから出土している。しかしながら住居跡以外の大部分は、共に出土する中近世の遺物からみて後に流入したものとみられる。

土師器

坏　全てロクロを使用しており、内面は黒色処理の後にヘラミガキが施されている。

Ｉ類：体部はやや緩やかに内弯気味に立上がり、口縁端部が僅かに外反する。器厚は体部中位が薄く、口縁部付近がやや厚くなるもの（17図１～８）、（33図２）、（９図１）。

口縁径は134～166㎜、底径60～72㎜、器高41～48㎜で、底／口＝0.39～0.46、高／口＝0.27～0.34である。これらには口縁径がやや大きいもの（17図１・６）がある。底部切離しは回転糸切りとみられ、のち無調整のもの（17図３～６・８）、ヘラケズリ調整を施すもの（17図１・２）（９図１）がある。また（33図２）は外面にヘラミガキ

が施されている。

Ⅱ類：底径が82㎜と大きく、口縁径、器高は不明であるが、体部がやや緩やかに立上がる大型の坏（41図１）。

底部切離しは回転糸切りで、後に体部下端と共に手持ちヘラケズリが施される。

Ⅲ類：体部が直線的にやや急角度で立上がるもの（36図１）（39図３）。

口縁径、底径、器高ともⅠ類に比べて大きく、（39図３）は器高69㎜で、高／口＝0.43、底／口＝0.47と、口縁径に対する底径の割合が大きい。いづれも底部切離しは不明で、（36図１）は後に外面下端と共に回転ヘラケズリ、（39図３）は手持ちヘラケズリが施される。

登録番号	出土地		法量（㎜）			比率		再調整・底部切離し		類型
	遺構・区	層位	口縁径	底径	器高	底径／口径	器高／口径	体部	底部	
1	ＳＩ２	１層	142	64	48	0.45	0.34		回転糸切り	Ⅰ
2	ＳＩ２	１層	166	72	48	0.43	0.29		不明→手持ヘラケズリ	Ⅰ
8	ＳＩ２	３層	134							Ⅰ
9	ＳＩ２	床面	145	62	45	0.43	0.31		回転糸切り	Ⅰ
10	ＳＩ２	カマド	143	60	48	0.42	0.34		回転糸切り→周縁ヘラケズリ？	Ⅰ
15	ＳＩ２	１号土坑		60					回転糸切り	Ⅰ
17	ＳＩ２	Ｐ１	152	60	41	0.39	0.27		回転糸切り	Ⅰ
18	ＳＩ２	Ｐ１	140	64	45	0.46	0.32		回転糸切り	Ⅰ
21	ＳＤ12	１層	140					外面ヘラミガキ		Ⅰ
27	ＳＤ25	埋土		82				外面下端手持ヘラケズリ	回転糸切り→手持ヘラケズリ	Ⅱ
28	２区	Ｐ582		70				外面下端回転ヘラケズリ	不明→回転ヘラケズリ	Ⅲ
33	２区	Ⅴ層上面	162	76	69	0.47	0.43		不明→手持ヘラケズリ	Ⅲ
34	15Ｔ	ⅡＣ層		64					不明→手持ヘラケズリ	Ⅰ

第２表　土師器坏　（法量は破片復元値も含む）

高台付坏　１点のみ図示した（39図２）。

ロクロを使用し、内面は黒色処理後ヘラミガキ、底面は回転糸切りの後に高台を取付けている。体部上半が欠損しているが、坏Ⅰ類同様の形状、法量のものと推定される。

甕　全てロクロを使用している。

Ⅰ類：口縁径に比べ、器高が大きい長胴形の大型のもの（17図９・10）（18図１～３）。

全体の法量のわかるものは少ないが、口縁径190～230㎜程度、器高250～310㎜程度のものである。口縁径と体部最大径はほぼ同じか僅かに口縁径が大きいが、（18図１）は体部径の方が大きい。調整は外面が体部中位から下が主に縦位のヘラケズリ、内面がヘラナデを施しているが、（17図10）は回転力を利用したハケメ状のものの後にヘラナデがみられ、（17図９）は体部下半に横位のヘラナデがみられる他、ヘラナデを施さないものもある。

Ⅱ類：口縁径に比べ、器高が小さいか、ほぼ同じのやや小型のもの（18図４～８）。

口縁径141～162㎜、器高126～128㎜で、Ⅰ類に比べ器厚が薄く、（18図８）は口縁部が受口状となっている。調整はロクロナデの後にほとんどは無調整であるが、（18図４）は外面体部下端にヘラケズリが施される。また（18図６・７）は底部切離しが回転糸切り無調整である。

Ⅲ類：小型の甕（33図３）。

口縁部形状、径、器高は不明で、底径は58㎜である。調整はロクロナデの後、外面下端や底部に回転ヘラケズリが施される。

本遺跡出土の土師器のほとんどは、その製作時にロクロを使用していることから、前述の土師器編年の表杉ノ入式に位置づけられる。以下では当形式の中でも器形や製作技法上の変遷が把握できる坏について、坏・甕がまとまって出土した２号住居跡出土資料についてみていく。

２号住居跡出土の土師器坏で図示したものは８点あり、これらは全てⅠ類である。出土した土師器はロクロ調整

を行っており、非ロクロのものは含まれない。表杉ノ入式の変遷を考える上で重要な要素となる底部切離しや再調整については、回転糸切りで無調整が5点、底部周縁にヘラケズリを施すものが1点、切離し不明で底部全体に手持ちヘラケズリを施すものが1点ある。また体部外面下半にヘラケズリを施すものはみられない。法量の計測可能なものの平均をみると、口縁径は146㎜、底径63㎜、器高45㎜、底径／口径は0.43、器高／口径は0.31である。なお2号住居跡では土師器甕で図示したものは11点あり、これらも全てロクロを使用している。その他に共伴するものとして須恵器甕（39図14）があるが、須恵器の出土は僅かで、坏類で全体をうかがうものは無く、また赤焼土器はみられない。

2号住居跡の堆積土中には10世紀前半頃に降下したとみられる灰白色火山灰が一部層状に堆積するのが確認された。周辺の遺跡で住居跡内にこの火山灰が確認されたものには中田畑中遺跡1・2号住居跡、元袋Ⅲ遺跡19号住居跡、松木遺跡1・2号住居跡、四郎丸館跡1号住居跡などがあり、いづれもその年代を10世紀前半かそれ以前のものとしている。中田畑中、元袋Ⅲ遺跡では坏底部の切離しが確認できるもの全てが回転糸切りで、再調整されるものに比べ無調整のものが主体を占める点はⅠ類と同様であるが、口縁径に大きな違いはないが、底径が小さく、口縁径に対する底径の割合が小さく、器高が大きいことがわかる。またこれらの遺跡では一定量の赤焼土器が共伴している。以上の特徴から、本遺跡2号住居跡のものは中田畑中遺跡1・2号住居跡、元袋Ⅲ遺跡19号住居跡出土土器より古い要素をもつものと考えられる。松木遺跡1号住居跡は坏の全てに再調整が加えられ、非ロクロの甕が共伴しており、2号住居跡では再調整と無調整の両者がみられ、甕は全てロクロのものであることから、両者には時期差があるものとみられ、1号住居跡は本遺跡2号住居跡より古く、2号住居跡はほぼ同様の時期のものとみられる。両住居跡とも赤焼土器はみられない。

この他の遺跡で土師器坏に同様の特徴をもつものとしては、中田南遺跡Ⅳ群土器は底部切離しが回転糸切りで無調整のものを主体とし、共伴する須恵器坏では回転ヘラ切りが僅かに残ることから、これらは多賀城のD群土器に含まれ、9世紀後葉のものとしている。伊古田遺跡では2号住居跡出土の再調整のあるものをⅢa群土器、ほか多数を占め、底径／口径の平均が0.39で再調整の無いものをⅢb群土器として、前者を9世紀後半、後者を10世紀初頭としているが、再調整や法量でみるならば、本遺跡は両群の中間に位置するものとみられる。

2号住居跡出土土器については共伴する須恵器や赤焼土器などがほとんどなかったことから、土師器坏のみでの検討となったが、平安期の一般集落においては土師器、須恵器、赤焼土器の出土比率がその遺跡の立地、性格により様相を異にするといわれることから、本遺跡2号住居跡で土師器が大部分を占め、赤焼土器が含まれない状況は、時期差のみに起因するものではないものとみられる。2号住居跡出土の土器群の年代は火山灰が降下した10世紀前半を下限として、火山灰の堆積状況に加え、遺跡の立地からみて、降下時期と大きな時期差を設定することには多少無理があるものと考えられることから、その時期については10世紀初めを中心とする時期に求めることが適当であると考えられる。

2号住居跡以外の坏はⅠ類（9図1）、Ⅱ類（41図1）、Ⅲ類（36図1）（39図3）の全てが底部に再調整がみられ、（41図1）が回転糸切りによるものとわかる以外は切離しは不明である。全体形がわかるものが少ないため詳細は不明であるが、（41図1）（36図1）は底部同様に体部下端にもヘラケズリ調整がみられ、再調整からみるならば、これらの坏については2号住居跡出土のものよりは古い傾向を示す。しかしながらⅡ類は大型、Ⅲ類は器高のあるものとしてⅠ類と区別したことから、再調整の違いが時期差によるものか或いは器形に関係するのかは不明である。

須恵器

土師器に比べ出土量が少なく、全体形が復元可能なものは限られる。計8点を図化したが、2号住居跡出土のものは1点のみであった。

坏（33図４・５）（39図５）

（33図４）は口縁径に対する器高が低いもので、底部は回転糸切り無調整、（39図５）は器高が高いものである。（33図５）は体部外面下端にヘラケズリが施され、底部は回転糸切り無調整である。

高台付坏（33図６）

口縁部径、器高は不明で、高台部径は80㎜である。坏底部は回転ヘラケズリの後に高台部を貼付けている。

甕（33図７・８）（39図４）

（33図７）（39図４）は全体が大きく膨らむ球胴形を呈する。（33図７）は大型のもので、口縁部から体部上半の残存であるが、外面全体に縄目の叩きによる成形、調整作業が行われている。（39図４）は中型のもので、体部外面下半に縦位のヘラケズリが施されている。

蓋（39図６）

１点のみの出土である。器径は不明で、リング状のつまみを有する。つまみ部径は70㎜程度である。

４．中・近世の遺物

（１）土師質土器

19点出土している。内訳は皿が17点、鉢が１点、不明１点である。ほとんどがロクロ成形によるもので、手づくねと判別できるものは無い。皿で底部切り離しが回転糸切りのものが６点あり、再調整はみられない。全てが小破片のため、全体形のわかるものが無いことから、これらの時期を特定することはできない。

（２）瓦質土器

４ＴのＳＤ４ａから器種不明品、15ＴのⅡａ層から鉢が出土しており、いづれも16世紀かそれ以降のものとみられる。

（３）陶　器

中世陶器が116点、近世陶器が24点出土している。

在地（白石窯系）

県南部白石市周辺の窯のものとみられる在地産の小壺がＳＤ10・14ａから２点出土している。いづれも色調は黒色系で、（33図11）は内面に鉄分が広く付着し、外面にはヘラ記号のようなものが描かれている。時期は13世紀後半から14世紀前半のものとみられる。

在地（その他）

ほぼ県内の窯で生産されたとみられる無釉陶器で、調査で出土した中世陶器の半数以上を占めている。器種は甕が50点、鉢が28点、不明３点で、出土地区はＳＤ４・10・11など溝跡からの出土が多く、特にＳＤ10・11からの出土が目立っている。全てが小破片で全体形を復元できるものは少ないが、甕は口縁部が受口状を呈し、大型のものは無く、中型が主である。鉢は体部から口縁部にかけての形状がほぼまっすぐに立ち上がるものと、口縁部付近で内傾するものがあるが、いづれも口唇部は平坦面を形成している。前者の中には口唇部に沈線状のくぼみが巡っているものも３点ほどみられる。

鉢については内面が摩耗しているものがほとんどであるが、甕においても内面が摩耗し、平滑となっているものが12点ほどみられる。また鉢の底部に断面が低平な二等辺三角形を呈する高台が取り付くものが２点みられる。これらは体部下半に回転ヘラケズリを施し、鉄分の噴出しがみられるものがある。宮城県と境を接する福島県梁川町の八郎窯跡群では片口鉢で高台のあるものと無いものが同一の窯で焼かれており、片口鉢は高台のあるⅡ類から無高台のⅢ類への変遷がみられるとしている。この流れは常滑と同様な形式的変遷を辿るとみられることから、本遺跡のものについても無高台の鉢に先行するものである可能性が強い。またこれらの窯跡については八郎窯跡群を中心とする地域に求めることも可能であるが、定かではない。

在地産の甕や鉢の年代についてはこれまでの年代観の通り、13世紀後半から14世紀前半と考えられ、高台を持つ鉢については13世紀前半頃の年代を与えることができるものとみられる。

この他には甕の体部破片周縁を打ち欠き、成形したとみられる陶製円盤とみられるものが２点出土している。

常　滑

常滑産とみられるものは９点あり、内訳は甕が４点、不明４点である。（30図３）は体部の小破片であるが、側面が全周して摩耗していることから、砥石に転用されたものとみられる。時期についてはほとんどが体部破片であることから不明である。

渥　美

渥美産とみられるものは９点あるが、全て体部小破片である。内訳は甕が２点、壺が５点、不明２点である。時期については多くは12世紀から13世紀前半あたりのものとみられる。

瀬　戸

古瀬戸とみられるものは８点あり、内訳は皿２点、瓶子２点、碗２点、不明２点である。全て灰釉で、皿は折縁の深皿で14～15世紀のものとみられる。碗は平碗で、（36図２）は１区Ｐ４７からの出土である。底部は削り出し輪高台で、体部下半にヘラケズリを施している。時期は15世紀あたりのものとみられる。

瓶子は２点出土しているが、不明のものの中にも瓶子である可能性のものもある。（39図９）は１区Ⅱａ整地層のもので、肩部のみの残存であるが、３条の沈線が巡っており、13～14世紀のものとみられる。

（31図１）は１区Ｐ34から出土したほぼ完形の瓶子である。器高28㎝、体部最大径は18㎝で、口縁部、頸部径とも５㎝程度で、高さは2.5㎝と低めである。肩部の張りはあるが全体にまるみを帯び、体部は直線的である。頸部には隆帯が巡っている。外面はロクロ調整されるが、内面は粗くナデられているのみである。体部は無文で、外面全体と底部、頸部内面に灰釉が厚くかけられ、釉は浅黄色で、全体に貫入が著しい。口唇部が数か所で剥落し、全周して摩耗している。この瓶子は古瀬戸編年で前期様式に位置づけられ、年代は13世紀後半のものとみられる。(注１)

瀬戸・美濃

瀬戸・美濃産とみられるものは７点あり、内訳は皿４点、鉢１点、碗１点、小坏１点である。（９図８）はＳＤ４ａの２層から出土した小皿で、全面施釉の碁笥底で、16世紀前半のものとみられる。（34図６）は１区ＳＤ10の２層から出土した小型丸皿で、灰釉とみられるものの高台部分を拭きとっており、16世紀中頃のものとみられる。（34図７）は２区ＳＤ15堆積土中から出土した天目茶碗で、底部は削り出し輪高台で、16世紀後半のものとみられる。（９図９）は15ＴのＩ層出土の皿で、やや時期が下って17世紀代のものとみられる。

美濃（志野）

志野とみられるものは５点あり、全て皿である。内訳は菊皿２点、丸皿３点で、出土遺構は２ＴのＳＫ１、４ＴのＳＤ４ａ、５ＴのＳＤ７、４Ａ区のＳＤ10の上半層からのものがある。時期はいづれも16世紀末から17世紀初めにかけてのものとみられる。

唐　津

唐津とみられるものは15ＴのＩ層から碗か鉢の小片が１点出土しているのみで、16～17世紀にかけてのものとみられる。

岸窯系

福島市飯坂に所在する窯跡で焼かれたとみられるもので、３ＴのＩ層から香炉、19ＴのＩ層から擂鉢とみられるものが出土している。いづれも17世紀のものとみられる。

大堀相馬

大堀相馬は７点出土しており、内訳は碗が５点、小坏１点、不明１点である。遺構からの出土品は４Ａ区のＳＤ11

上半層から小坏と筒形碗が出土しており、これらを含めた遺物の時期は18世紀かそれ以降の年代が与えられる。

堤

堤焼は6点出土しており、全て基本層Ⅰ層からのものである。内訳は灯明皿1点、擂鉢1点、不明4点で、時期は18～19世紀のものとみられる。

（4）磁　器

中世とみられる磁器が13点、近世とみられる磁器が5点出土しており、前者は全て中国産である。

中国龍泉窯系

中国の龍泉窯系のものとみられる青磁が12点出土している。全て小破片で、碗類が11点、不明1点である。碗類の文様は劃花文が3点、蓮弁文が3点、無文とみられるものが1点で、時期は劃花文のものが12世紀後半から13世紀前半、蓮弁文のものが13～14世紀のものとみられる。（9図15）は体部を打ち欠いた露胎の高台部で、別の何かに転用したものとみられる。

中国白磁

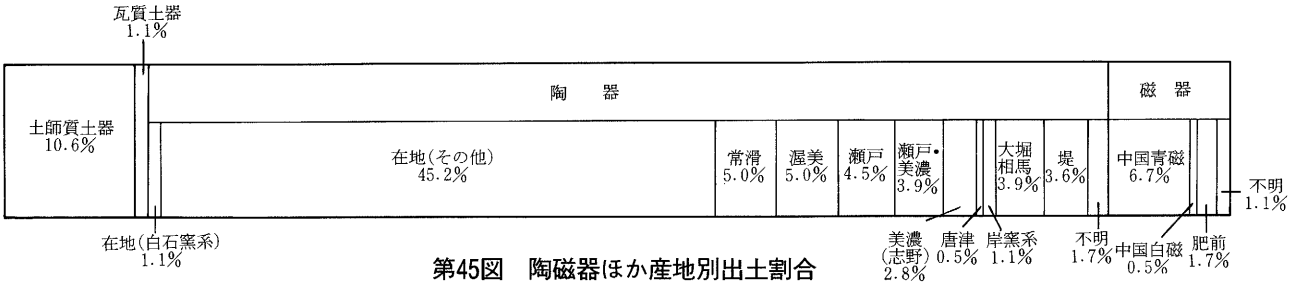
中国産の白磁の皿の小片が1点出土している。これは2区SD12の1層からのもので、15世紀のものとみられる。

肥　前

肥前磁器は3点出土している。いづれも表土層からのもので、青磁の香炉1点、染付皿1点、菊花文の染付碗1点で、いづれも17～18世紀のものとみられる。

産地不明

産地不明のものが2点出土している。いづれも中国産の白磁の可能性もあるが定かでない。1点は1区SD11の堆積土下半から出土した器種不明のもので、時期は15世紀の可能性も考えられる。



第45図　陶磁器ほか産地別出土割合

		産　地		皿	甕	鉢	壺	小壺	瓶子	碗	小坏	香炉	擂鉢	灯明皿	不明	合計
		土師質土器		17		1									1	19
		瓦質土器				1									1	2
陶器	中世	在地（白石窯系）						2								2
		在地（その他）			50	28									3	81
		常　滑			4		1								4	9
		渥　美			2		5								2	9
		瀬　戸		2					2	2					2	8
		瀬戸・美濃		4		1				1	1					7
	近世	美濃（志野）		5												5
		唐　津													1	1
		岸窯系										1	1			2
		大堀相馬								5	1				1	7
		堤											1	1	4	6
		不　明			1	1	1									3
磁器	中世	中国龍泉窯系青磁								11					1	12
		中国白磁		1												1
	近世	肥　前	青　磁									1				1
			染　付	1						1						2
		不　明		1											1	2
合計				31	57	32	7	2	2	20	2	2	2	1	21	179

第3表　陶磁器ほか器種別集計

第45図は陶磁器ほかの中近世土器の産地別出土割合を示したもので、また第３表はそれらを器種別に示したものである。これらの遺物はⅢＡ期からⅣ期にかけてのものである。この中で中世前半段階のⅢＡ期を中心とする時期の陶磁器をみると、合計129点のうち在地産のものが７割を占め、常滑、渥美が７％、古瀬戸が僅か、中国磁器が９％で、在地産の占める割合が高く、これは市内の鎌倉期とされる城館、屋敷跡での割合と比較しても極めて高い値といえる。松木遺跡Ⅱ期は鎌倉時代の有力農民層の屋敷跡と考えられており、ここでは在地産のものが６割と最も多いのは本遺跡と同様の傾向を示すが、これに次いで常滑が３割近くの出土を見せ、これに対し古瀬戸や中国磁

出土地区	出土層位	土師質土器	瓦質土器	陶器												磁器					合計
				在地(白石窯系)	在地(その他)	常滑	渥美	瀬戸	瀬戸・美濃	美濃(志野)	唐津	岸窯系	大堀相馬	堤	不明	中国龍泉窯系青磁	中国白磁	肥前 青磁	肥前 染付	不明	
SK1										1											1
SK11							1														1
SK16															1						1
SK17		1																			1
SK22																1					1
SK30					1	1	1														3
SK31							1														1
SK32		1						1													2
SK41																1					1
SK49					1																1
SK50		2																			2
SK58					1																1
SK62		1																			1
SK71					1																1
SK72					1																1
SK75																1					1
SK90						1															1
SK101						1															1
SK107		1																			1
SK126					1																1
SK128																1					1
SX1					1																1
SD3					2																2
SD4a			1		6				1	1											9
SD5					1																1
SD7										1											1
SD10		1		1	26				1	1			2			3					35
SD11		3			12		4	1												1	21
SD12		1			1			1									1			1	5
SD14a				1		2									1						4
SD14c								1													1
SD15									1												1
SD17a					1																1
P34								1													1
P47								1													1
1区	Ⅰ	1			1				2				1	1		1					7
1区	Ⅱa	1						1													2
1区	Ⅱb						1														1
2区	Ⅰ				2	1								1				1			5
3区	Ⅱa					1										1					2
3区	Ⅱb															1					1
3区	Ⅴc				1																1
4区	Ⅱa				2																2
4区	Ⅱb				1																1
2トレンチ	Ⅰ				1									1					1		3
3トレンチ	Ⅰ											1									1
5トレンチ	Ⅰ	1																			1
6トレンチ	Ⅰ						1									1					2
7トレンチ	Ⅰ	1											1								2
8トレンチ	Ⅰ													1							1
11トレンチ	Ⅰ				2																2
13トレンチ	Ⅰ				2			1						1	1						5
14トレンチ	Ⅰ												1								1
15トレンチ	Ⅰ								2		1		1								4
15トレンチ	Ⅱb	2			1	1							1								5
15トレンチ	Ⅱc		1		7																8
16トレンチ	Ⅱa				1																1
17トレンチ	Ⅰ				1																1
17トレンチ	Ⅱc				1																1
17トレンチ	Ⅱd					1															1
18トレンチ	Ⅰ	1														1					2
19トレンチ	Ⅰ											1									1
23トレンチ	Ⅰ	1																			1
24トレンチ	Ⅰ				2					1									1		4
27トレンチ	Ⅰ													1							1
合計		19	2	2	81	9	9	8	7	5	1	2	7	6	3	12	1	1	2	2	179

第４表　陶磁器ほか出土地別集計

器の割合が小さいことから、常滑産陶器の流通度合の高さが指摘されている。また非日常性をもつとされる土師質土器はそのほとんどが時期不明であるが、中近世土器の１割程度で、14～15世紀の城館跡が発見された南小泉遺跡第16次調査での土師質土器の突出した出土割合とは様相を異にするものといえる。

ⅢＣ期、Ⅳ期の中世後半から近世初頭にかけての遺物としては、瀬戸・美濃産のⅢを中心とした７点と、美濃（志野）産のⅢ５点のほか、15世紀代の古瀬戸、唐津、岸窯系のものが僅かにみられるにすぎない。この時期の屋敷は堀跡以外の遺構が不明確であることもあってか、出土量からみる限り、ⅢＡ期に比べ極めて少ないものとなっている。

（５）瓦

燻し瓦が４点出土している。平瓦２点、丸瓦１点、不明１点である。出土遺構は３ＴのＳＤ２、４ＴのＳＤ３、４ａで、近世のものとみられる。

（６）土製品

ＳＫ30と88より土錘片が１点づつ出土したが、古代のものである可能性もある。

（７）石製品

ＳＩ２で砥石１点が出土した以外では、砥石６点、石臼１点、茶臼の下臼１点、台石１点が出土した。石臼と茶臼はＳＤ10から出土しており中世のものと考えられるが、砥石については古代に含まれる可能性のあるものもある。

遺構 区、トレンチ	出土層位	瓦	土製品		石製品				剥片石器			鉄製品ほか					銅製品	木製品
			土錘	不明	砥石	石臼	茶臼	台石	不定形石器	石核	剥片	刀子	釘	鍋	不明	鉄滓	古銭	漆器椀
ＳＩ２					1													
ＳＫ16																11		
ＳＫ17																4		
ＳＫ18																5		
ＳＫ19												1						
ＳＫ27													1					
ＳＫ30			1							1						1		
ＳＫ37					2													
ＳＫ40																	1	
ＳＫ41																	1	
ＳＫ43																1		
ＳＫ44																	2	
ＳＫ46												1						
ＳＫ48																	3	
ＳＫ71													1				1	
ＳＫ72																1	1	
ＳＫ80															1			
ＳＫ88			1													1		
ＳＫ91																1	1	1
ＳＫ107												1						
ＳＫ115																1		
ＳＫ116																1		
ＳＸ１					1												1	
ＳＤ２		1																
ＳＤ３		1																
ＳＤ４ａ		1																
ＳＤ７																	1	
ＳＤ10						1	1											
ＳＤ11					1									1				
ＳＤ14ｃ								1										
Ｐ277				1														
Ｐ565															1			
１区	Ⅱａ				1											4		
１区	Ⅱｂ			1												4		
１区	Ⅳ										1		2					
１区	Ⅴｂ										1							
３区	Ⅱａ								1									
５区	Ⅴｃ									1								
６区	Ⅴｄ									1								
３トレンチ	Ⅰ															1		
11トレンチ	Ⅰ				1													
13トレンチ	Ⅰ	1																
14トレンチ	Ⅱａ																4	
16トレンチ	Ⅱａ																1	
合計		4	2	2	7	1	1	1	1	3	2	3	4	1	2	35	17	1

第５表　出土遺物集計（土器類を除く）

（8）鉄製品

刀子３点、釘４点、鍋１点、不明２点が出土しており、これらは中世のものとみられる。また１区のうち10基の土坑とＩ区Ⅱａ・Ⅱｂ層、３ＴのＩ層から鉄滓が少量出土している。これらは後に流入したものとみられ、古代のものである可能性もある。

（9）銅製品

銅銭が17点出土した。銭貨名のわかるものは11点で、これらはいづれも北宋銭である。出土数の多いところはＳＫ48が３点、ＳＫ44が２点、14ＴのⅡａ層が４点であるが、14Ｔ出土のものは４枚が貼りついた形で出土している。

（10）木製品

ＳＫ91堆積土中より漆器椀が出土した。木質部は腐食し無く、漆の被膜部分のみの残存で、内面の赤色漆と外面の黒色漆が密着した状態での出土であったことから、時期等については不明であるが、土坑の堆積土中のものであることから、中世の遺物とみられる。

（注１）㈶瀬戸市埋蔵文化財センター設立５周年記念シンポジウム『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』により提示された編年による

第２節　遺構の検討

１．竪穴住居跡・竪穴建物跡

竪穴住居跡（ＳＩ２）

１区、Ｖｂ層上面で平安時代で10世紀初め頃の竪穴住居跡を１軒検出した。規模等は前述の通りであるが、東壁にカマドや煙道が付設され、土坑、ピットが各１基みられた以外は床面上に明確な柱穴、周溝はなく、貼床も確認されなかった。カマドは袖部分に円礫を合計７つ立て並べ芯材とし、この上を粘土により被覆したものとみられる。周辺の遺跡で同期の住居跡の幾つかにおいても、河原石を袖内に埋め込んだものがあるが、特に大型の礫を数個並べたものは名取川を挟んだ北岸の船渡前遺跡や赤石地区の相ノ原遺跡などにみられる。

検出面であるＶｂ層は洪水堆積層で、住居内にも同様の層が10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰を層状に挟んだ状態でみられた。住居の立地としては北側に広がる微高地下の低地部にあたり、この場所は洪水の際にはよく水を被る状況にあったとみられる。また住居が自然堆積による砂質層により覆われているにもかかわらず、検出面であるＶｂ層での残存が極めて悪いのは、後の洪水等による作用の可能性も考えられる。

今回検出された竪穴住居跡は１軒のみで、１区以外でやや微高地となっている２・３区や多くのトレンチにおいても検出されていない。加えて住居跡以外の遺構で同期と断定できるものは皆無に等しい。昭和57年の当地区の区画整理工事の際には本調査区北側の微高地上で平安時代とみられる数軒の住居跡が発見されていることから、集落の中心はこの微高地上で、ＳＩ２はその南端部に位置するものと考えられる。このことからもこの住居が何故に低位部側につくられたのかは不明である。

竪穴建物跡（ＳＩ１）

ＳＩ１は削平が著しく、存在していたであろう掘り方はおろか、床面も旧状をとどめていないとみられ、検出は周溝と幾つかの柱穴で行われた。これは構造的にみて竪穴住居跡とは異なり、中世の竪穴建物跡と考えられる。

柱穴は四隅と東西壁の中程にあり、全て壁面に接している。検出段階での周溝との新旧関係は不明瞭であった。これは柱穴埋土と周溝埋土が同時に埋められている可能性も考えられ、周溝が柱穴に分断される状況からみて、この周溝は壁面を板状の材などにより押さえるためのものとみられる。

仙台市内で同様の構造をもった竪穴建物跡は養種園遺跡、富沢遺跡、王ノ壇遺跡などで発見されている。養種園遺跡ＳＩ01は一部のみの検出であったが、柱穴が西辺側４個がみられ、端部のものは深く、中間部が浅くなっている。側壁は裏込め土とみられるものがあり、貼床がみられた。遺構の性格としては鍛冶工房跡とみられるＳＢ01と

同時存在し、16世紀のものと考えられている。富沢遺跡第66次調査では貼床のある浅い竪穴を伴う掘立柱建物跡（ＳＢ２）が発見され、一部に周溝状のものがみられた。年代は16世紀とみられるが、性格は不明である。王ノ壇遺跡では４棟確認され、このうち２棟が規模的にも本遺跡のものに類似している。これらに周溝はみられないが、壁面に接するように配置された柱によって側板などをおさえていたものと考えられる。またここでは張出し部があるやや大きめの建物跡床面に鍛冶にかかわるとみられる焼け面がみられ、他の建物跡も何らかの工房的な性格を有していたものと考えられており、12～13世紀の年代が与えられている。

これらの検出例からみてＳＩ１はこの調査で発見された中世の屋敷跡を構成するものの一つと考えられ、ⅢＡ期とみられるＳＡ２の柱穴に切られることから、ＳＡ２と関連するＳＢ９より古いとみられるが、これについてはⅢＡ期内での変遷と考えられる。ＳＩ１の用途を連想させる遺物の出土はなかったが、隣接する掘立柱建物跡とは異なる性格を有していたものと考えられる。

２．土　坑

（１）土坑の分類

土坑は130基が検出された。これらはほとんどが１・２区に集中してみられるものであるが、その他には４区や幾つかのトレンチにおいて散在する状況であった。これらの土坑は規模、形状、堆積土の状況から次のように分類される。（分類は全体規模のわかる土坑のみを行っている）

Ⅰ類：堆積土が人為堆積か人為堆積の可能性のあるもの（この中には人為堆積か不明なものも含まれるが、ブロック土が混入することからここに含んだものもある）

Ａ類－小型のもの

Ｂ類－中型のもの

Ｃ類－大型のもの

これらはさらに形態により次のように細分される。

１類－円形、方形など　２類－長方形、楕円形

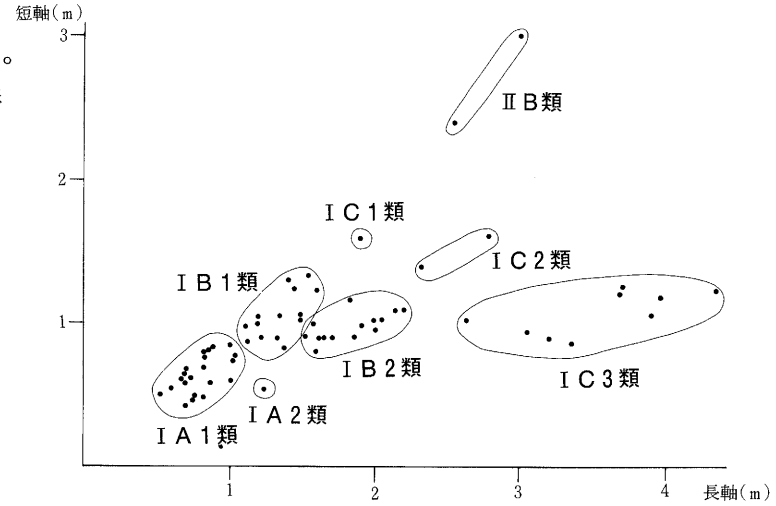
３類－短軸に対し長軸の割合の大きい長方形、楕円形

Ⅱ類：堆積土が自然堆積とみられるもの

Ａ類－小型のもの

Ｂ類－大型のもの

Ⅲ類：その他



類型	長軸(cm)	短軸(cm)	長軸／短軸	土　　坑
ＩＡ１	53～103	43～85	1.00～1.66	23・24・25・26・27・28・31・34・35・44・47・68・78・84・101・104・114・130
ＩＡ２	123	55	2.15	14
ＩＢ１	111～160	83～134	1.07～1.65	32・42・54・57・70・79・82・90・94・99・120・125・126
ＩＢ２	150～220	81～117	1.56～2.10	13・15・39・40・41・45・71・74・81・83・89・91・93・95
ＩＣ１	190	160	1.21	48
ＩＣ２	232～279	140～161	1.65～1.73	46・62・85
ＩＣ３	263～435	86～126	2.55～3.90	16・19・22・37・63・64・65・86・100
ⅡＡ	68～137	61～175	1.02	18・20・21・43・98・109・119・127・128
ⅡＢ	255～300	240～300	1.00～1.06	30・105
Ⅲ				102・103・123

第46図、第６表　土坑の規模（１、２、４区計測可能なもの）

Ⅰ類

計測が可能な土坑以外のものも加えると、検出した土坑の多くはⅠ類に属する。

A類－小型のものであることから、検出したもの以外にも他の土坑により失われているものもあるとみられる。規模はほとんどが1ｍ以内で、形状は円形、楕円形を主体とする。壁面は直立することなく、底面は舟底状のものが多い。1区では密集せず、特に南東部では中・大型の土坑はなく、1類が6基程度みられる状況である。主な重複はＳＫ47がＣ2類のＳＫ46を切り、ＳＫ114がＳＫ46に切られている。2区ではA類は少なく、南半部に幾つかみられるにすぎない。

B類－全体形がわかるもの以外にも、調査区際に一部のみが検出されたものも多く含まれる可能性がある。Ｂ1類は正方形を基調としている全て隅丸のものである。Ｂ2類は隅丸の長方形基調で、楕円形のものはない。いづれもほとんどが壁面がほぼ直立し、底面は平坦である。特にＢ2類は底面と壁面の境が明瞭で、角張ったコーナー部をみせる。またいくつかのものは壁面がオーバーハングしている。ＩＢ類についてはその形状に強い規格性がみられ、特にＢ2類は長軸／短軸比率が1.5～2.0の長方形でまとまっている。分布は1区ではいづれとも北端部と南東部を除く地区に近接、重複してみられ、特に溝跡に壊されているものも考えると、本来はより多く存在していたものとみられる。2区ではＢ2類が中央部にいくつかまとまる以外は散在している。他の土坑との重複はＳＫ32・54・99のＢ1類がそれぞれ形態的に特徴のあるＣ3類を切っている。Ｂ2類はＳＫ39・91がＣ3類に切られる。またＳＫ40が自然堆積層と人為堆積層により構成される大型のⅢ類土坑を切っているのが注目される。

C類－1区南半部と2区全体にみられるが、Ａ・Ｂ類に比べ検出数は少ない。ＳＫ46・62・85はＣ2類で、かなり隅丸の形状を呈するが、壁面は直線的で、長方形を基調としている。ＳＫ46はＣ1類のＳＫ48に切られている。Ｃ3類はＢ2類と共に形状の規格性が強いもので、長軸は長いもので4ｍを越えるのに対し、短軸は狭い隅丸の長方形である。分布は1区では南半部に3基、2区では全体に7基ほどがみられ、長軸方向は東西或いは南北方向を向いている。Ｃ3類間での重複はなく、ＳＫ33は大型のＳＫ107やⅢＡ期の井戸とみられるＳＫ105を切っている。

Ⅱ類

この中にはⅡａ層より下層で検出したものも含まれている。

A類－形状、規模とも様々で、その用途も特定できない土坑である。

B類－ＳＫ30・105は他の土坑に比べて大型で、深さや形状からみて井戸の可能性が考えられる。ＳＫ105はⅡａ層面検出の遺構で最も古く、ＩＢ2類のＳＫ40やＩＣ3類のＳＫ33に切られている。ＳＫ30・105は井戸としての機能が果たせなくなった後に埋められ、後にこの地区に多数の土坑が作られている。

Ⅲ類

Ⅲ類としたものはＳＫ102・103・123の3基がある。ＳＫ102は2区でほとんどの土坑より新しいＳＤ14を切る焼土土坑で、1基のみの検出であり、遺物もないことから何を焼成したのかは不明である。ＳＫ123は堆積土中に焼土や小廃滓、鍛造剥片が多数みられることから、鍛冶に関わる遺構とみられる。また検出面は異なるが、近接してなにかしらの炉跡の可能性のあるＳＫ103がみられるが、性格は不明である。

（2）土坑墓について

［土坑墓の特徴］

調査で検出された130基の土坑のうち、そのほとんどが1・2区に密集している。1区ではⅤ～Ⅲ層面で確認された土坑を除いたものは、Ⅱａ層あるいはその堆積範囲の及ばないⅤ層上面でのもので、2区では上層が削平されていることもあり、Ⅴ層上面での検出である。土坑の多くは明瞭な人為堆積層かその可能性のあるもので、これら

の土坑は以下のような共通した特徴がみられる。

1．堆積土中に地山層（Ⅴ層）を主としたブロックが多量混入している。

2．堆積土下部（土坑底面）に自然堆積層がほとんどみられず、土坑を掘った直後に埋め戻している。

3．土坑の平面形の多くは方形を基調としており、中でも長方形のものが主体を占める。

4．壁面が直立し、底面が平坦で、後世の削平を考慮すると本来深いものが多い。

このような特徴以外にもいくつかの土坑では底面に土を入れ、平坦にしているものがある他、ＳＫ110では底面に筵状の敷き物の痕跡が確認されている。

以上のような特徴がみられる土坑は墓とみられ、土葬の埋葬形態をとった土坑墓と考えられる。墓坑内からの骨片などの出土はみられず、堆積土壌と周辺土壌のリン酸分析の結果からもこれらを墓と裏付けることはできなかったが、この地区の土質からみて骨などが残存する環境になかったものとみられる。また以上の要件を満たす土坑の全てが土坑墓と断定することはできない。これらの中にはⅢＡ、ⅢＣ、Ⅳ期の屋敷跡に伴い、屋敷の変遷により埋め戻された土坑の存在も十分考えられる。そして土坑の形状や規模等から考えるならば、Ｉ類の中でも土坑墓の可能性の強いのはＳＫ40、41、71、74、91などに代表される中型のＢ類とＳＫ46に代表される大型のＣ類の一部と考えられる。またこれらの中でも全体形がわかるもの以外に、一部のみの検出の土坑が数多くあることから、土坑墓と認定し得る基数はあくまでも主観的判断の域を出ない。

短軸長に比べ長軸長が極めて長いのが特徴であるＣ３類土坑は１区で３基、２区で７基ほどが検出されている。このような土坑は福島県の早稲田古墳群や近年数多くの墓坑が発見された栃木県の田間東道北遺跡や横倉宮ノ内遺跡などでも多くみられ、墓の一形態とされている。本遺跡のＣ３類についても上記のような特徴が認められることから墓の可能性がある。またこの土坑はＳＫ16と64で一方の長軸側端部に１段のみであるが階段状の段がみられるが、削平状況からみて、段数はこれより多かった可能性もある。土坑墓との切り合いは、１区ＳＫ16はＢ２類のＳＫ38・39・91を切っている以外、土坑墓の可能性の強い土坑との切り合いはみられない。このことから長方形・楕円形のＢ２類はＣ３類に先行するものである可能性もあり得るが、これが墓域全体の傾向性を示すかは不明である。

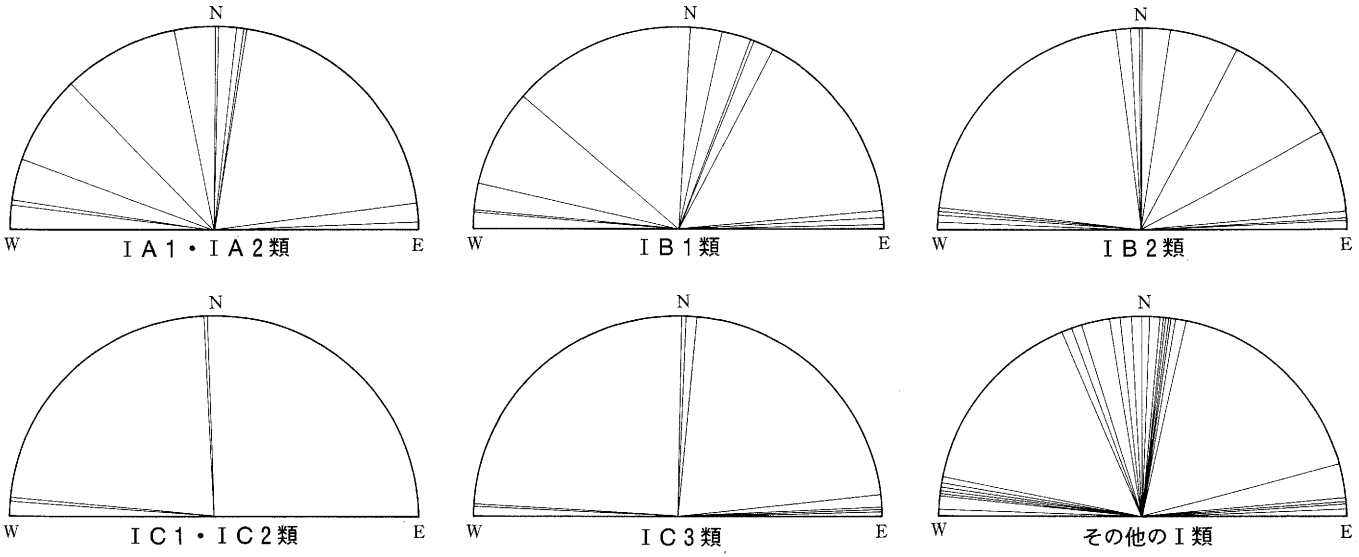
［出土遺物］

いくつかの土坑からは中世陶磁器の小破片が出土しているが、これらは底面近くからのものではなく、土坑墓群が中世前半の屋敷を構成する遺構群を壊して造られていることを考慮すると、土坑墓内に副葬されたものかは疑わしい。但し陶磁器類以外では１区ＳＫ46、91より刀子、ＳＫ71より釘が出土し、ＳＫ40、41、44、48、71、72、90からは渡来銭である北宋銭が出土しており、特に銭については全出土数に対する土坑墓内出土割合が極めて高いことからみて副葬品である可能性は高いといえる。北宋銭のうち出土数が多いのは「皇宋通寶」が４枚で、「元豊通寶」と「嘉祐通寶」が２枚のほかは１枚づつの出土である。県内で発見された一括出土の渡来銭の内訳をみると、「皇宋通寶」と「元豊通寶」についてはほとんどの出土地で多くの枚数が認められており、これは全国的傾向と一致するものといえる。

［方向性］

土坑の長軸方向でみた方向性はＩ類のほとんどのものが、東西あるいは南北方向を向いており、それから外れるものは少ない。ＩＢ類では東西と南北方向のものはほぼ同じ割合であるが、ＳＫ45・95は北東を向いている。また大型で楕円形のＣ２類は２基が東西、１基が南北方向で、Ｃ３類は６基が東西、５基が南北方向と、同等の割合でみられる。ＳＫ45・95をはじめ、ＳＫ69・110などの方向性の傾くものは全て土坑墓の密集する１区にあり、散在する２区ではみられない。このことから土坑墓を造るにあたっての方向決めは本来、東西あるいは南北を基準とし、当初造られるものはこれによるものとみられるが、これに続くものについては先行するものとの位置的関係からこの限りではなかったと考えられる。墓坑の方向性については隣接する館や道と密接な関係をもつ例があることも指

摘されているが、本遺跡の場合は先行する屋敷との間にこのような関係を認めることはできなかった。



第47図　土坑（Ｉ類）の主軸方向

［立地と分布］

土坑墓は１区に最も集中しており、これに比べ２区ではやや密度は薄いことから、墓域の中心はこの１区を中心とする地域であったものと考えられる。他には２・３・７Ｔや４区において土坑が検出され、このうち３Ｔの土坑は全てが人為堆積であることから墓である可能性が強い。これらの立地は１区北半部が最も高い微高地上に位置するのに対し、それ以外はやや低く、中には旧河道上に立地するものもあるなど、墓を造るにあたっては特に微地形にとらわれなかったものとみられる。土坑墓をまとまりとしてみた場合、１区では北半部と南西部においてまとまる箇所がみられるが、２区ではそのような状況は認められない。このような１区の状況はこの墓域の中でも家族や血縁によって結ばれた人々により構成された墓群である可能性がある。また墓域全体をみて、土坑墓の規模や形態の違いによる分布に違いは認められず、形態的に特徴のある細長いＣ３類と長方形のＢ２類との位置関係に規則性を認めることはできなかった。

１区南東部には土坑墓が全くみられない。ここには小型で円形の土坑が数基存在する以外は、ⅢＡ期の掘立柱建物跡と古瀬戸瓶子を納めた小穴があり、墓が造られ始めた頃にはこれらの遺構はすでに目に見ることはできない状況にあったとみられるが、墓域の中心近くにあるこの空白域は、前代の情景が何らかの形で造墓作業を行った人々の意識の中に残された結果生じた故のことと理解することもできる。

［時　期］

土坑墓の時期を決め得る陶磁器類の出土は皆無といって良い状況である。但し出土した銭貨は全て北宋銭であり、「永楽通寶」など一般に15世紀に多く流通する明銭の出土はみられなかった。土坑墓群が造られる前のⅢＡ期屋敷跡の下限が14世紀中頃で、この地が墓域としての機能を失った後に造られたⅢＣ期屋敷跡が15世紀を中心とする時期に求められることから、土坑墓は14世紀後半から15世紀前半にかけて営まれ続けたものと考えられる。

［土坑墓の性格］

被葬者を考えるにあたっては、墓の構造に加え、副葬されるものから判断するのが一般的であるが、前述の通り、検出された土坑墓からの陶磁器類の出土は基本的に皆無といって良く、数基において北宋銭の副葬が認められたにすぎず、墓の副葬品としてはかなり貧弱な感じを受ける。埋葬形態をみても幾つかの土坑底面に筵状のものを敷いたり、底面に土を入れ直し平坦にする作業を行ったものもみられるが、基本的には素掘りの土坑内に遺体をそのま

ま埋葬していたとみられ、今回発見されたものの中には西隣の松木遺跡や名取川を挟んだ北岸の王ノ壇遺跡にみられる火葬墓や同じ土坑墓でも中に棺を納めたものが１基もみられない。したがって本遺跡のような土坑内直葬で、副葬品が少ない状況を考えるなら、この被葬者は階層の低い一般庶民で、墓地は村落内における地区単位の共同墓地的性格のものであったろうと考えられる。

次に先行する中世前半段階の屋敷跡（ⅢＡ期）との関わりをみると、前述の通り、土坑墓の一部において屋敷を構成した遺構があった地区を故意に避けて造っている可能性があることを考えると、墓全体の選地においては屋敷の廃絶後に、この地を十分に意識した上で行われた可能性が強いといえる。このことは聖なるものと結縁するという人々の意識を反映しているともいえ、その地がある意味での聖地である必要性があったとの考え方もできる。事実、このような土坑墓群が成立する以前には城館や寺院、武士や寺院の墓地が営まれていた例が数多くみられるとされている。仙台市内をみても南小泉遺跡では溝跡に区画された14世紀前半の屋敷が廃絶した後に墓地が造られ、その後、16世紀前半にその屋敷を再び改修し利用した後に再度、地下式坑を伴う墓地が成立したという変遷が考えられている。これも上記のような屋敷と墓地の関係を示す例かもしれない。

古代にあっては庶民の葬送は野山や河原に遺棄する方法が一般的であったが、中世になると造墓層が拡大し、定まった地区に集団的に墓地を営むようになったとされている。東国においてこれが一般化するのは14世紀に入ってからのこととされ、関東ではこの時期の大規模な集団墓地が数多く発見されている。宮城県内で中世のものとされる土坑墓の検出は少なからず認められるが、これがまとまって共同墓地の形態をみせる調査例はほとんど無い。このことから、14世紀後半から15世紀前半を中心とした本遺跡の例は珍しく、それがかつ、この地域の有力者層の屋敷跡との関わりをもって検出されたことで、当時の一般庶民とその上に立つ階層との関係をうかがい知ることができるものとして貴重な例といえる。

３．陶器埋設遺構

１区Ⅱａ層上面で検出したＰ34は、直径が30cmほどの小穴の中に古瀬戸の瓶子が埋設された遺構である。中世において陶器は経塚や墳墓において経や火葬骨を入れる容器として使用される例が多く、中でも常滑や渥美産の三筋壺などは全国から出土し、宗教用具としての性格が強いとされている。福島県桑折町大樋遺跡では古瀬戸瓶子が蔵骨器として使用され、13～14世紀の伊達氏に関わりのある墓とみられている。また本遺跡の西約2.5kmに位置する大門山地区は熊野信仰に関わる中世の墓所、供養所として知られ、近年、石組集石墓群や常滑産の甕を石組で囲んだ埋経施設が発見されている。このような状況の中、遺構の周囲には多くの土坑墓が発見されたことから、当初、埋設された瓶子は墓地の一角にあった土坑墓とは異なった墓に納められた蔵骨器などの可能性が考えられた。

しかしながら、取り上げた瓶子の内部に骨片などはみられず、蔵骨器に使用される壺類は口縁部が打ち欠かれる例が多いとされるが、出土瓶子についてはそのような事は無かった。また瓶子自体の年代は13世紀後半とみられ、伝世品が埋設された可能性も否定できないが、土坑墓により構成された墓地の年代はこれより下るものである。遺構の周辺をみると、この遺構より東側に位置するものは少なく、時期、性格とも不明な小型の円型土坑が数基や、埋設遺構と重複してＳＢ４と５、それに幾つかのピットがあるにすぎず、この地区に土坑墓はみられない。ＳＢ４と５はⅢＡ期の屋敷跡を構成していた遺構で、鎌倉時代のものと考えられる。出土した瓶子についてもまた同様の時期のものであることから、この遺構はⅢＡ期の屋敷跡に関わるものとみられる。

瓶子の出土状況は、屋敷内で使われたであろう壺や甕など、日常品としての本来の用いられ方をしたものではなく、非日常的な用具として土中に納められたものとみられる。このような状況から、その性格として考えられるものの一つに土中に埋設した地鎮具など、祭祀的性格をもつものが考えられる。この遺構は単独で存在したと考えられると同時に、ＳＢ４や５の柱穴になったり、柱列線上に位置するものではないが、両建物内に位置していることから、これらの建物跡との関連性も考えられるところである。但し調査地が狭く、埋設遺構を含む遺構全体の状況

が明らかでないことから、この周辺に別の建物跡や埋設遺構に関係する別遺構が存在する可能性も否定出来ないため、その性格について断言することはできない。

当時、瀬戸産の瓶子などは在地産の陶器とは異なり、一部の富裕者層しか入手できなかったとみられる。このようなものを墳墓や経塚以外の目的で埋設したとみられる例はあまり無く、このことは屋敷の居住者層を考える重要であると同時に、当時の信仰や、信仰の用具としての役割を担った陶磁器という観点から考える上で貴重な資料といえる。

4．溝　跡

本調査区や多くの試掘トレンチから溝跡が検出された。この中には各調査区間で異なった溝跡名を付けたものがあるが、同一の溝跡であるものも含まれている。これらの溝跡については幅が広く、堀と呼ぶにふさわしいものもあるのに対し、小規模なものもある。以下では各溝跡間に時期の違いがみられるのはもちろんのこと、その性格においても違いがみられることから、複数の調査区にわたり確認されたまとまりのある溝跡ごとに、その時期、性格等について考えていく。

（1）平安時代の溝跡

２区北半部で検出した東西方向のＳＤ21は他の溝跡がほとんどの遺構より新しいのとは対照的に、ＳＤ12をはじめ、土坑や多くのピットに切られている。出土遺物はロクロ土師器と須恵器のみで、これより新しいものを含まないことから、Ｉ期の平安時代の溝跡と考えられる。堆積土中にはＳＩ２にみられる灰白色火山灰は確認できず、住居跡との関係は不明である。

（2）中世後半の屋敷を区画する溝跡

中世後半段階の屋敷の外側を巡るとみられる溝跡にＳＤ11・12・14ｂ・14ｃが考えられる。ＳＤ11は１区で東へ延びたものが、４Ａ区において南側に折れ曲がる部分を僅かではあるが確認している。これが南進してどの溝跡につながるかが問題としてあったが、ＳＤ14の南側に並行して走るＳＤ15の存在や出土遺物の検討から、ＳＤ11はＳＤ14と同一時期のものと考えられる。但し１区でみる限りＳＤ11は掘り直しなどの改修による溝内での時期的な変遷がみられないのに対し、ＳＤ14はａ～ｃの３条の新旧関係をもち、各々の規模もＳＤ11に比べ、幅が狭く浅いものである。また１・２区で確認されたＳＤ12は規模的には小さいが、１区においては北側でＳＤ11の南側で止まり、２区ではコーナー部をもつ区画溝と考えられる。２区東側での延びは不明であるが、１区ＳＤ11との位置的な関係からみて、この時期の屋敷内をさらに区画する溝跡である可能性が考えられる。

溝跡の出土遺物で量的に多いのは在地産の中世陶器であるが、その他には渥美や常滑の製品もいくつかみられる。しかしながら最も新しい遺物をみると、ＳＤ11では１区の下半層より15世紀の中国産白磁の可能性のあるものが１点出土しており、ＳＤ12では同様の皿や14～15世紀とみられる古瀬戸の折縁深皿が出土している。またＳＤ14の中でも古い14ｃから15世紀の可能性のある古瀬戸の平碗が出土している。したがって量的には多くを占める13世紀後半から14世紀前半の在地産のものについては、この溝跡を伴った屋敷の時期のものではなく、これより古い遺構に所在していたものが後に流入したものと考えられる。

（3）中世後半～近世初頭の屋敷を区画する溝跡

中世後半から近世初頭段階の屋敷の外側を巡るとみられる溝跡はＳＤ10・15・17・18が考えられ、ＳＤ16はＳＤ15に付随する溝跡とみられる。ＳＤ10は１区でＳＤ11の外側を東西方向に延び、これが東側では４Ａ区において南へ折れ、４Ｂ区を経て西側へ方向を変える大溝である。ＳＤ10は２区におけるＳＤ15に続き、さらに西進するものと考えられる。また１区西側での状況は25Ｔにおいて並行して南へ折れる２条の溝跡が確認され、その南側でも同様の状況が24Ｔで確認されている。１区では確認できなかったが、ＳＤ10は４区において大きく２時期の重複が認められることから、25・24Ｔの溝跡についてはＳＤ10の西辺部分であるものと考えられる。全体を通し、ＳＤ10と11

の直接的な重複関係はみられないが、両者の位置的関係から、この２つの溝跡は同時期のものとは考え難く、出土遺物や１区ＳＤ11の堆積土上半層にはブロック土混じりの人為堆積土がみられることから、ＳＤ10はＳＤ11が完全に埋まり切る前に掘られたものである可能性がある。さらに17Ｔで南へ向かう溝跡が23Ｔで方向を東へ変え、19Ｔを経て18Ｔへ至ることが確認されている。このように溝跡が他の溝跡に接続することなく折れ曲がる状況は、後述する水利関係の溝跡とは異なり、これらもまたこの時期の屋敷のさらに南側を区画する南辺の堀跡の可能性が強い。しかし今回の調査では17Ｔの溝跡の北側でのＳＤ15や24Ｔ検出のＳＤ10との関係や、18Ｔより東側での状況を把握することはできなかった。ＳＤ16はＳＤ15と同様の堆積土で、ＳＤ15に取り付く形をとり、ＳＤ14の手前で止まっている。また２区西側の29Ｔでは東西方向の新しい溝跡に切られる形で北側へ延びる溝跡が確認されている。これらの状況からＳＤ14ａについてはこの時期のもので、ＳＤ16はＳＤ15と14ａの間の通路状の部分を仕切るものと考えることも可能であるが、３時期の変遷をもつＳＤ14の東への延びが不明なことから、断定はできない。

ＳＤ10の出土遺物で最も多いのはＳＤ11同様に在地産の陶器で、中国産の青磁もいくつかみられるが、これもまた溝跡の時期を示しているものではない。堆積土の上半部には16世紀中頃の瀬戸・美濃産の小型丸皿や、16世紀末～17世紀初めの志野の菊皿、さらに４Ａ区で18世紀以降の大堀相馬の小坏と筒形碗が出土している。またＳＤ15からは瀬戸・美濃産の天目茶碗がみられ、これは16世紀後半のものである。

文政年間につくられた『名取郡北方柳生村繪図』では１区から４Ａ区にかけてとみられる地区において、畑地の中に東西方向の細長い水田区画が描かれているのがわかる。このことから、ＳＤ11は近世初頭にはほぼ埋まり、堀としての機能は失っていたが、江戸後期にはその僅かに残った窪地を利用して水田が営まれていたことがわかり、ＳＤ10出土の16世紀以降の遺物についてはこのような状況の元で混入したものと考えられる。

（４）水利に関わるとみられる溝跡

調査区西辺には南北方向のＳＤ１・２・５・６があり、これらは南辺で東西方向に走るＳＤ４に取り付いている。ＳＤ４は２時期の重複をもち、ＳＤ３と共に東側の５ＴでＳＤ７～９につながるとみられる。出土遺物はＳＤ４ａでは16世紀以降とみられる瓦質土器や、16世紀前半とみられる瀬戸・美濃産の小皿がある。またＳＤ７では志野の丸皿がみられ、これらより下るものはみられない。前述の柳生村繪図には南北方向の溝跡は描かれてないが、東西方向のものについては南側の「雷囲」と本遺跡の所在する「臺囲」との字界の堀としての記載がある。以上のことから、これら一連の溝跡については掘られた時期は明らかでないが、ＳＤ４にみられるように改修を行いながら西辺の南北方向のものは19世紀初めまでには埋まり、南辺の東西方向のものは幾度の変遷をみせながらも現在調査区南辺に位置する整理された水路になったことがわかる。

５．掘立柱建物跡・柱列跡

（１）１区

１区の掘立柱建物跡はＳＢ１～５で、これらはいづれもⅢＣ期のＳＤ11に切られる形で北側と南側に分かれて位置している。各柱穴からの遺物は全く無い。ＳＢ１と３は桁行３間、ＳＢ２は４間で、柱穴の重複は無く、方向も多少異なるが、互いが重複し、微高地から南側低地の整地作業が行われた地区へ展開している点で一致しており、同時期内での建替えと考えられる。またＳＢ４は南側に廂が取り付く点がＳＢ５とは異なるが、両者はやはり同位置を保っていることから、これらもまたいづれかが建て直されているものとみられる。

他の遺構との重複はＳＢ１がＳＫ68・70に、ＳＢ３がＳＫ70に切られており、これらの土坑はⅢＢ期に属するとみられることから、ＳＢ１～３はⅢＡ期のものと考えられる。またＳＢ５はＳＫ107を切っている。ＳＫ107はいづれもⅢＡ期の井戸とみられるＳＫ105を切り、ＳＫ30に切られる人為堆積の土坑であるが、ＳＢ４・５とＳＤ11の関係をみた場合、両建物跡ともⅢＡ期の中での変遷と考えられる。１区においてはⅢＡ期の遺構はⅢＢ期の土坑群をはじめ、ⅢＣ・Ⅳ期の溝跡群により多く壊されていることから、遺構の構成を把握することは難しいといえる。

（2）2区

2区の掘立柱建物跡はＳＢ６～10、柱列跡はＳＡ１～５である。この中でⅢＢ期とみられる土坑との重複をみると、ＳＢ６がＳＫ55・56に、ＳＢ８と９がＳＫ63に切られ、ＳＡ１と２もＳＫ63に切られる。ＳＢ６はＳＤ12と重複しており、ＳＢ８・９は切られることから、これらの遺構はⅢＡ期のものと考えられる。またＳＡ１・２はＳＢ８・９の西側に位置し、建物に付随する可能性があり、ＳＡ２についてはＳＢ９の西側廂の可能性もある。ＳＡ２の南端の柱穴は中世の竪穴建物跡とみられるＳＩ１の柱穴と周溝を切っており、ⅢＡ期内での変遷として、ＳＡ２を伴ったＳＢ９や８の後にＳＩ１が作られたものとみられる。

6．水田跡・畑跡

（1）水田跡

水田土壌の可能性のあるものは、１区Ⅱｂ層、Ⅱｃ層、４区Ⅱ層があり、このうち１区ではいづれも層上面で段差、４区では擬似畦畔が検出された。

１区Ⅱｂ層水田跡は１区北側微高地の南の旧低地部に広がるものとみられるが、２区においては後世の天地返しにより失われているものとみられる。４区Ⅱ層水田跡はＳＤ10堆積土の上半にみられる洪水堆積による砂質土層を耕作しており、北側の４Ａ区には確認できない。出土遺物は１区Ⅱｂ層より土師器のほか、渥美産の甕が出土しているのみで、４区Ⅱ層中からの出土は無い。１区Ⅱｂ層も砂質土壌であることから、１区Ⅱｂ層と４区Ⅱ層は同一時期に堆積したもので、水田跡についても同時期の可能性がある。これらの時期は１区Ⅱｂ層が中世前半ⅢＡ期の整地により埋められていることから、これより以前の中世前半段階（ⅡＢ期）のものと考えられる。　この他、プラント・オパール分析結果から水田土壌の可能性のあるものとして、14ＴⅡａ層、15ＴⅡａ層・Ⅱｃ層、16ＴⅡａ′層などがある。ここでは水田遺構は検出されなかったが、区画整理前の水田耕作により畦畔等が失われたとみられる。これらの時期は15ＴⅡｂ層から18世紀以降の大堀相馬の碗、Ⅱｃ層から16世紀の瓦質土器とみられる鉢が出土しており、中世後半以降のものとみられる。

（2）畑　跡

３区東半部と16Ｔにおいて小溝状遺構群が検出されている。これらは畑を耕作する際に生じた耕作痕と考えられることから、両区Ⅱｂ層がかつての耕作土であったものと考えられる。３区Ⅱａ層からは12世紀後半から13世紀前半とみられる中国産青磁碗が出土しているが、下層のⅤｃ層より在地産の中世陶器が出土していることから、畑跡の時期は13世紀以降で、近世の遺物が無いことから、中世の畑跡と考えられる。

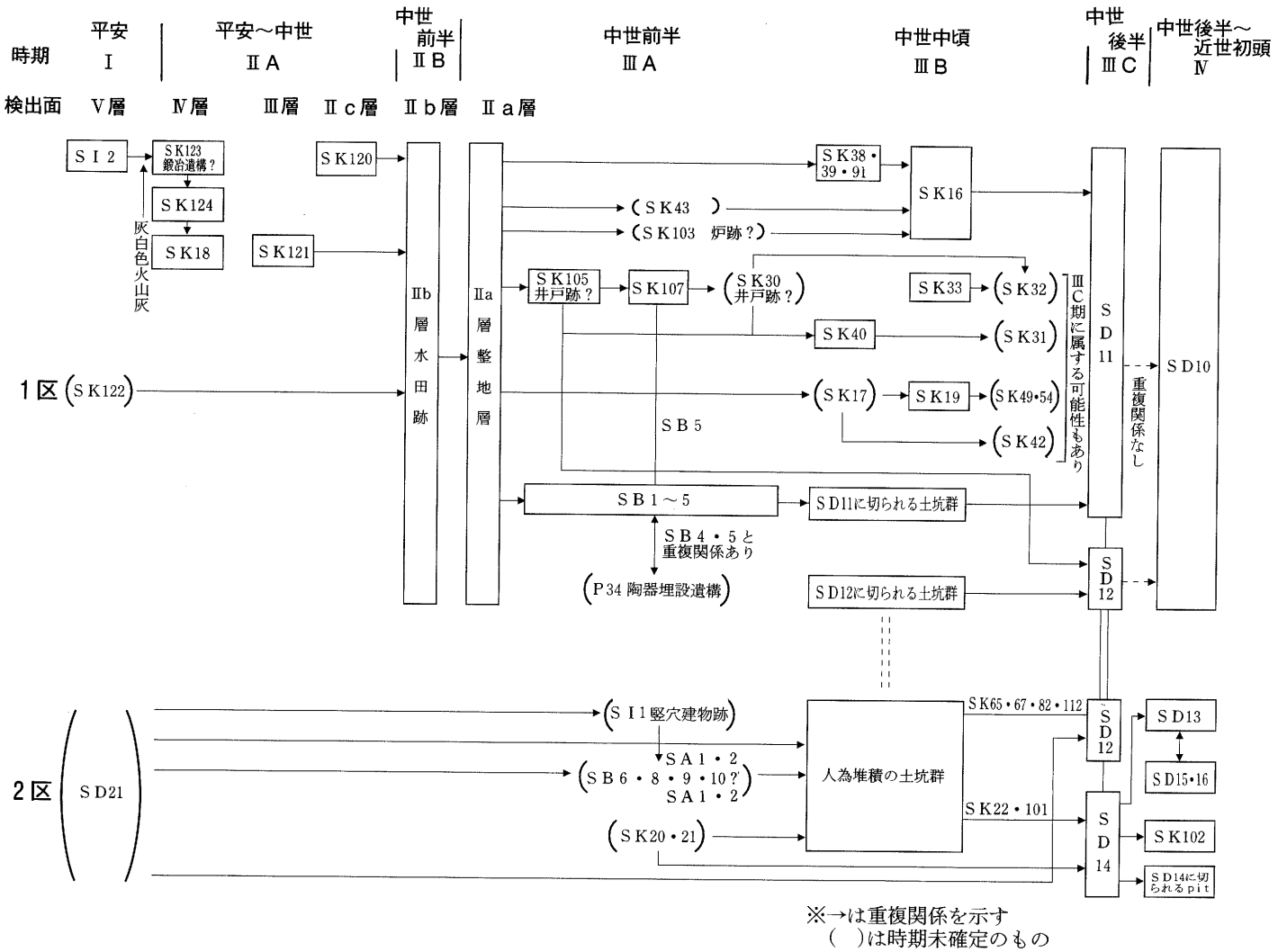
小溝状遺構群のみつかった３区、16Ｔはその北側で僅かに地形が低くなり、調査区北端部ほどではないが南に広がる微高地上に位置し、低地部には広がらないとみられる。３区では数条の溝跡を境に西側の標高が高くなるが、西側に位置する屋敷跡や墓地跡との位置的、時期的関係は不明である。

第３節　遺構の変遷

調査で出土した遺物の中には縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器なども含まれている。これらの時期の遺構は今回確認できず、主に調査区北側の微高地を中心に展開しているものとみられる。ここでは遺構の確認された平安時代から近世初頭にかけての本地区の遺構の変遷を考えていくこととする。時期の区分にあたっては時代を追ってⅠ～Ⅳ期の大きな変遷があったものと理解し、その中でも遺構の種別に違いがみられたⅡ・Ⅲ期については細分している。

1．Ⅰ期（平安時代）

１区はⅤ層上面検出のＳＩ２竪穴住居跡とＳＫ122、２区はＳＤ21がこの時期のものと考えられる。ＳＩ２は出土土師器や堆積土中の灰白色火山灰からみて10世紀初め頃とみられるが、ＳＤ21との関連は不明である。過去の調



第48図　遺構変遷図（１・２区）

査例から北側に同期の集落跡が存在する可能性が高く、ＳＩ２はその南端部に位置するものとみられる。名取川南岸の柳生・西中田地区で10世紀前半の住居跡が発見された遺跡に松木遺跡や安久東遺跡があり、本遺跡を含めた住居跡はかつての中小河川による浸食を免れた微高地上に立地しており、周辺地区にはこれらの遺跡以外にも同期の居住域が点在しているものとみられる。

２．ⅡＡ期（平安時代～中世前半）

灰白色火山灰降下後に堆積したⅣ～Ⅱｃ層上面で検出された土坑がある。遺構・基本層中から中世の遺物はみられないが、３区Ⅴ層中より在地産の中世陶器が出土しており、この上層のⅣ層と１区Ⅳ層が同一層かが不明なことから、以上の土坑群の時期を限定することができなかった。ＳＫ123は鍛冶遺構とみられ、出土した鍛造剥片や鍛冶滓からみて、鍛練鍛冶である可能性があるが定かではない。また周囲に竪穴や建物跡は検出されておらず、他に鍛冶に関わるよう遺構は無いことから、ⅡＡ期構成上での鍛冶遺構の性格は不明である。

３．ⅡＢ期　水田跡（中世前半）

１区Ⅱｂ層水田跡や４Ｂ区Ⅱ層水田跡がある。水田域の広がりは明らかでないが、おそらくは北側微高地と14・16Ｔの位置する南側微高地に挟まれた地区に展開していたものと考えられる。１区Ⅱｂ層からは渥美産の甕が出土しており、ⅢＡ期屋敷跡との関係からみて鎌倉時代前半に埋められたものと考えられる。

４．ⅢＡ期　屋敷跡（中世前半）

当該期の主な遺構は、１区ではＳＫ105、107、30、ＳＢ１～５、Ｐ34と、これらをつくる際の基礎作業となる

整地層があり、２区ではＳＩ１竪穴建物跡、ＳＢ６・８～10、ＳＡ１・２などがある。

１区南半部は旧河道上とみられる低地部で、ＳＫ105、107、30はそこに盛られた整地層上から掘り込まれている。ＳＫ105、30は土坑の形状、堆積土からみて井戸であった可能性があり、いづれも堆積層上半が埋め戻されている。またこれらと重複するＳＫ107もやや大型で底面が平坦で浅いものだが、やはり人為的に埋められたものとみられる。ＳＢ１～３は南半部はＳＤ11に壊されており、検出面はＶ層で、微高地から低地部の整地層上にまたがって展開している。ＳＢ１～３には３時期の変遷がある。ＳＢ４・５、Ｐ34は直接の重複はみられない。瓶子を埋設した小穴が単独で存在したと考える他に、掘立柱建物跡内に埋設したものとも考えられる。１区同様に２区においても掘立柱建物跡、柱列跡の重複に加え、その前に竪穴建物跡が存在したとみられる。

遺構群の重複関係をみると、これらは全て３時期程度の変遷があったものと考えられる。しかしながらこれらが同様の小変遷を辿ったかは不明で、特に２区においては後世の削平によってか、整地層が確認できなかったことから、１区遺構群と共に機能していたかは断定できない。

以上のことから、これらの遺構群は中世前半にあったとみられる屋敷を構成するものと考えられ、溝跡などの区画施設は検出されなかったことから、周囲に堀を巡らせたものではないと考えられる。また屋敷の範囲や中心部分の特定はできなかった。但し屋敷の立地を考えた場合、少なくとも北側微高地上側が適地とみられることから、本来、屋敷の中心部分は北側にあり、遺構群はその南側を構成していた可能性もある。

調査ではⅢｃ・Ⅳ期の屋敷に伴う溝跡から中世陶磁器が出土している。中でも最も多い、在地産の甕や鉢は13世紀後半から14世紀前半のもので、これらは本来、このⅢＡ期の屋敷跡に伴う遺物と理解される。他にも13世紀後半の古瀬戸の瓶子をはじめ、13世紀前半の在地のもの、12～13世紀前半の渥美産の壺や甕、中国産青磁などの遺物が出土しており、これらもまたこの時期に帰属する遺物であると考えられる。以上のことから、屋敷はその始まりを鎌倉時代前半に求めることが可能で、数度の変遷をしながら14世紀中頃までは存続したものと考えられる。

５．ⅢＢ期　墓地跡（中世中頃）

土坑墓群を構成する土坑は人為堆積によるＩ類土坑の中でもＢ類とＣ類のほとんどと考えられ、一部のＡ類もこれに含まれる可能性がある。

墓域の中心は１区周辺とみられるが、これより北側と西側の未調査部分、特に北側は居住域としても良好な地形であることから、屋敷跡同様に今後注目すべき地区といえる。西・南側への広がりは１区より南西へ70ｍ離れた３Ｔで土坑墓の可能性のある土坑群が検出されていることから、これが墓域の端なのか、或いは別群なのかは不明である。

土坑墓という埋葬形態や副葬品が極めて少ないことからみて、これらの墓に葬られた人々はこの地域に居住した一般庶民と考えられ、墓地は14世紀後半から15世紀前半を中心に営まれたものとみられる。墓地は後にほぼ位置を同じくして造られたⅢＣ期屋敷跡によりほぼ全域が壊され、以後、これに続くⅣ期屋敷跡が廃絶した後も、江戸後期の絵図中に墓を確認することができないことから、この地が再び墓地となることは無かったとみられる。

６．ⅢＣ期　屋敷跡（中世後半）

当該期の主な遺構はＳＤ11・12・14があげられる。但しＳＤ14については３時期の重複があり、このうち古い14ｂ・14ｃについてはⅢＣ期、14ａについてはⅣ期の遺構としてＳＤ10につながる可能性のあることは前述の通りである。１区でのＳＤ11・12はこれと重複する全ての土坑、ピットを切るものであり、これより新しいものは認められない。ⅢＣ期の屋敷跡の存続時期は溝跡出土の遺物から16世紀までは下らないとみられる。

屋敷は北辺をＳＤ11、南辺をＳＤ14により区画されているものとみられるが、西辺は不明瞭である。これらの溝跡からみた屋敷の規模は南北約45ｍで、東西は29Ｔ検出の南北方向の溝跡が関係するものであれば40ｍほどのものとなる。この中はＳＤ12によりさらに区画されており、その配置状況から屋敷の中心はＳＤ11と12に囲まれた北東

部にあるものと考えられる。

溝跡以外でこの屋敷跡を構成する遺構の可能性のあるものは、1区南半部にあり重複する土坑群の中でも新しく、形態、堆積土からみてⅢB期の土坑墓とは異なる数基にすぎない。しかしこれらもまた、Ⅳ期遺構との区別が困難で、残念ながら時期を限定することができないものである。

7．Ⅳ期　屋敷跡（中世後半～近世初頭）

当該期の主な遺構はＳＤ10・15・16とＳＤ14の新しい時期のものがあげられる他、ＳＤ17・18がある。これらにより区画された屋敷跡の年代は、始まりがⅢｃ期の廃絶と同時か間もない頃とみられ、16世紀代を中心として、17世紀初めまで続いたとみられる。

屋敷は北辺、東辺、西辺の北半をＳＤ10、西辺の南半をＳＤ17により区画され、南辺はＳＤ17より続くＳＤ18が巡っている。これらにより区画された屋敷の範囲は南北約80ｍ、東西は北半の幅の広いところで約60ｍとなり、南端部はやや狭くなるものとみられる。またこの中がＳＤ14ａ、15により南北に二分される形となり、北辺よりＳＤ15までは約55ｍであることから、北半部の区画はほぼ半町四方の方形を呈するものとなっている。

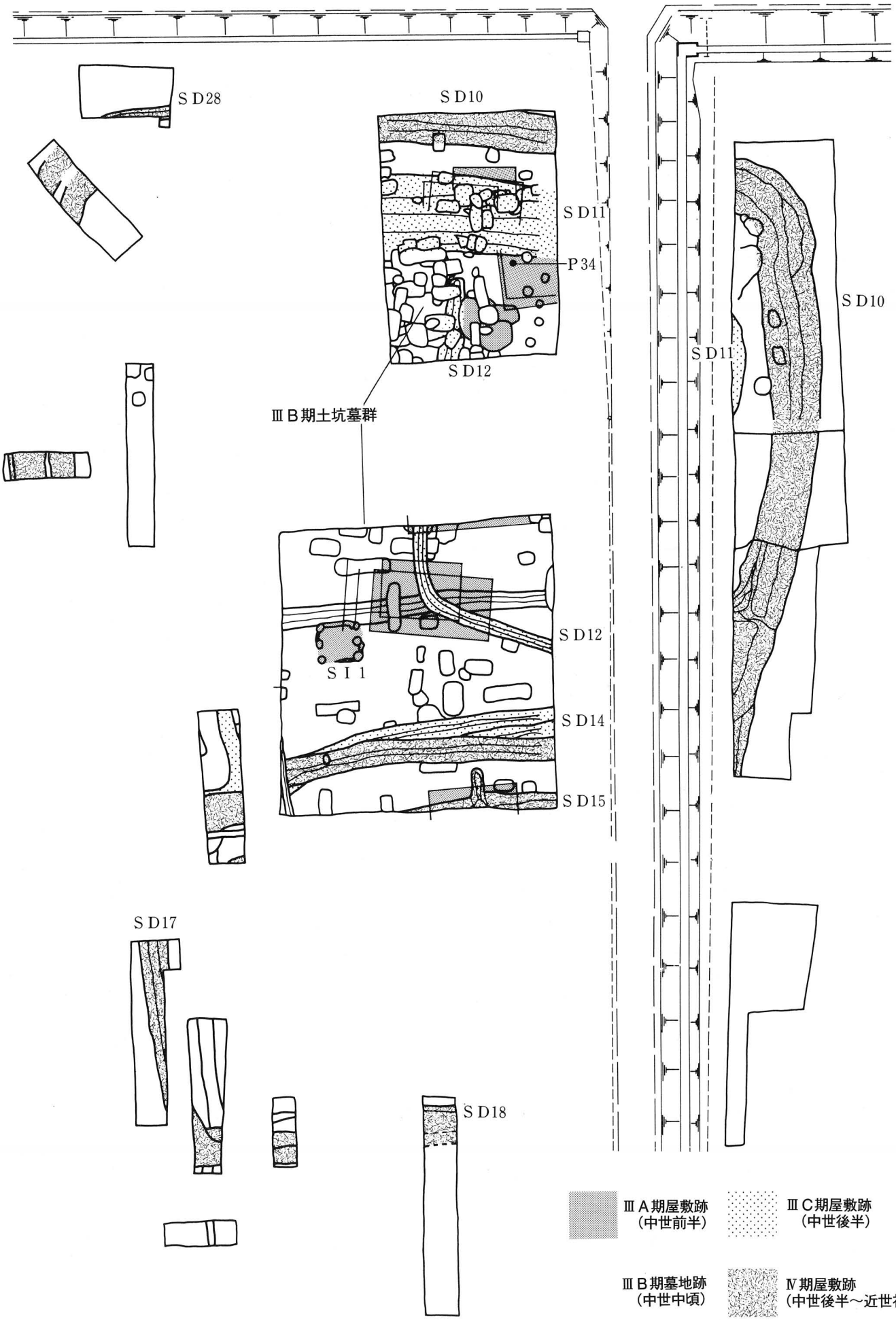
溝跡以外でこの屋敷跡を構成する遺構はⅢＣ期同様の理由で判別が難しく、前述の土坑をはじめ、ＳＢ10やＳＤ14と並行するＳＡ５などもあげられるが、明確な判断材料を持たない。

屋敷の立地はＳＤ10による北辺がⅢＣ期のＳＤ11のさらに外側の微高地上に位置しており、東および西辺の北半部では東へ向かって低くなる旧地形の変換点に沿った配置がみられる。またＳＤ14・15は東から延びる旧河道がこの地区で狭くなる帯状の地区にあたり、この屋敷は地形を利用した選地がなされていることがうかがえる。但しこの屋敷跡についてもⅢＣ期同様に、旧河道を挟んだ立地は適切とは言い難く、あくまでも溝跡の配置からみるならば、Ⅳ期の屋敷跡はⅢＣ期の屋敷跡の存在を意識した上で造られた拡張的性格のものである可能性が強いといえる。

墓地の被葬者については前述の通りであるが、各期の屋敷跡の居住者を考えた場合、これを示す直接的資料の出土や文献はみられない。ⅢＡ期屋敷跡は掘立柱建物跡、井戸跡、竪穴建物跡などで構成され、出土には在地産の陶器の量の多さが目立つが、地鎮具とされたとみられる古瀬戸瓶子の存在や中国磁器が一定割合みられる。またⅢＣ期、Ⅳ期の屋敷跡は周囲に大きな堀を巡らし、遺物量は多くはないが、中には茶器である瀬戸・美濃産の天目茶碗なども出土していることを考えると、これらの屋敷の居住者は、いづれも一般庶民層とは異なった有力者層であったと考えられる。

以上みてきたような中世段階での、ⅡＢ期水田跡→ⅢＡ期屋敷跡→ⅢＢ期墓地跡→ⅢＣ期屋敷跡→Ⅳ期屋敷跡という変遷は、中世前半段階と後半段階の屋敷の構造や、社会の底辺を構成したであろう人々の土坑墓による共同墓地での葬送の在り方をうかがい知ることのみならず、これら全ての生活基盤である中世村落の在り方を考える上で、極めて貴重な資料といえる。

柳生・中田地区は市内では岩切地区と並び、数多くの板碑が存在し、特に柳生地区は名取の熊野三山に近いことから、その影響下にあったとみられ、遺跡西側には多くの板碑が残っている。仙台市域の板碑の造立は13世紀後半から14世紀の中頃までの間に集中している。これは本遺跡のⅢＡ期屋敷跡や松木遺跡Ⅱ期と時期を同じくしており、板碑の造立が下火となった頃、当地区では土坑墓による共同墓地が営まれ始めたと考えられる。このような現象については、当時の人々の信仰面に加え、より広域的な当時の社会背景を考慮した上での検討が必要とされるところである。



第49図　時期別遺構配置図

参考・引用文献

藤沼　邦彦：1977　「宮城県出土の中世陶器について」『東北歴史資料館研究紀要３』

加藤・阿部：1980　「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第72集

白鳥　良一：1980　「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要Ⅶ』

大河・安田ほか：1982　「早稲田古墳群」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅸ』福島県文化財調査報告書第107集

渡部　弘美：1983　『南小泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第55集

高橋　勝也：1983　「柳生台畑遺跡」『年報４』仙台市文化財調査報告書第57集

東北歴史資料館：1983　『東北の中世陶器』

佐藤　甲二：1985　『中田畑中遺跡－第２次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第78集

工藤　哲司ほか：1986　「松木遺跡」『柳生』仙台市文化財調査報告書第95集

木下　密運：1986　「中世の墳墓」『日本歴史考古学を学ぶ（中）』有斐閣

渡部　弘美：1987　『元袋Ⅲ遺跡』仙台市文化財調査報告書第103集

寺島・飯村：1987　『八郎窯跡群』梁川町文化財調査報告書12集

恵美　昌之ほか：1988　『大門山遺跡発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第22集

佐藤　　洋：1990　『南小泉遺跡－第16～18次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第140集

荒井　　格：1991　『鴻ノ巣遺跡－第６次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第148集

中富　　洋：1991　『山口遺跡－第９・10次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第151集

佐藤　　洋：1991　「富沢遺跡第66次」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（３）』仙台市文化財調査報告書第152集

藤沼・神宮寺：1992　「宮城県における一括出土の渡来銭」『東北歴史資料館研究紀要18』

木皿・早川：1992　「新谷地北遺跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第146集

佐藤　甲二：1993　『下ノ内浦遺跡－第４次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第173集

恵美　昌之：1993　『名取熊野三山遺跡群』名取市文化財調査報告書32集

佐々木・藤田・大野：1993　『根城』八戸市埋蔵文化財調査報告書第54集

太田　昭夫：1994　『中田南遺跡』仙台市文化財調査報告書第182集

斉藤　　弘ほか：1994　『田間東道北遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第149集

村田　晃一：1994　「土器からみた官衙の終末」『第３回東日本埋蔵文化財研究会資料』

斉藤　　弘：1994　「中世墓地景観の一事例」『栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター研究紀要２』

渡部・吉岡ほか：1995　「伊古田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第193集

竹田・渡部：1995　『四郎丸館跡』仙台市文化財調査報告書第200集

佐藤　貴志：1995　『安藤前遺跡』三本木町文化財調査報告書第６集

斉藤　　弘ほか：1995　『横倉宮ノ内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第161集

笹生　　衛：1995　「東国における中世墓地の諸相」『千葉県文化財センター研究紀要16』

斉藤　　弘：1996　「中世後期の墓地」『栃木県考古学会誌第18集』

兵庫埋蔵銭調査会：1996　『日本出土銭総覧　1996年版』

佐藤　　洋：1997　『養種園遺跡』仙台市文化財調査報告書第214集

佐藤　　淳：1997　「相ノ原遺跡」『相ノ原・大貝中・川添東遺跡』仙台市文化財調査報告書第217集

平間　亮輔：1997　『四郎丸館跡－第２次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第218集

瀬戸市埋蔵文化財センター：1997　『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要５』

津野　　仁ほか：1997　『金山遺跡Ⅴ』栃木県埋蔵文化財調査報告第187集

工藤信一郎ほか：1998　『南小泉遺跡－第30・31次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第226集

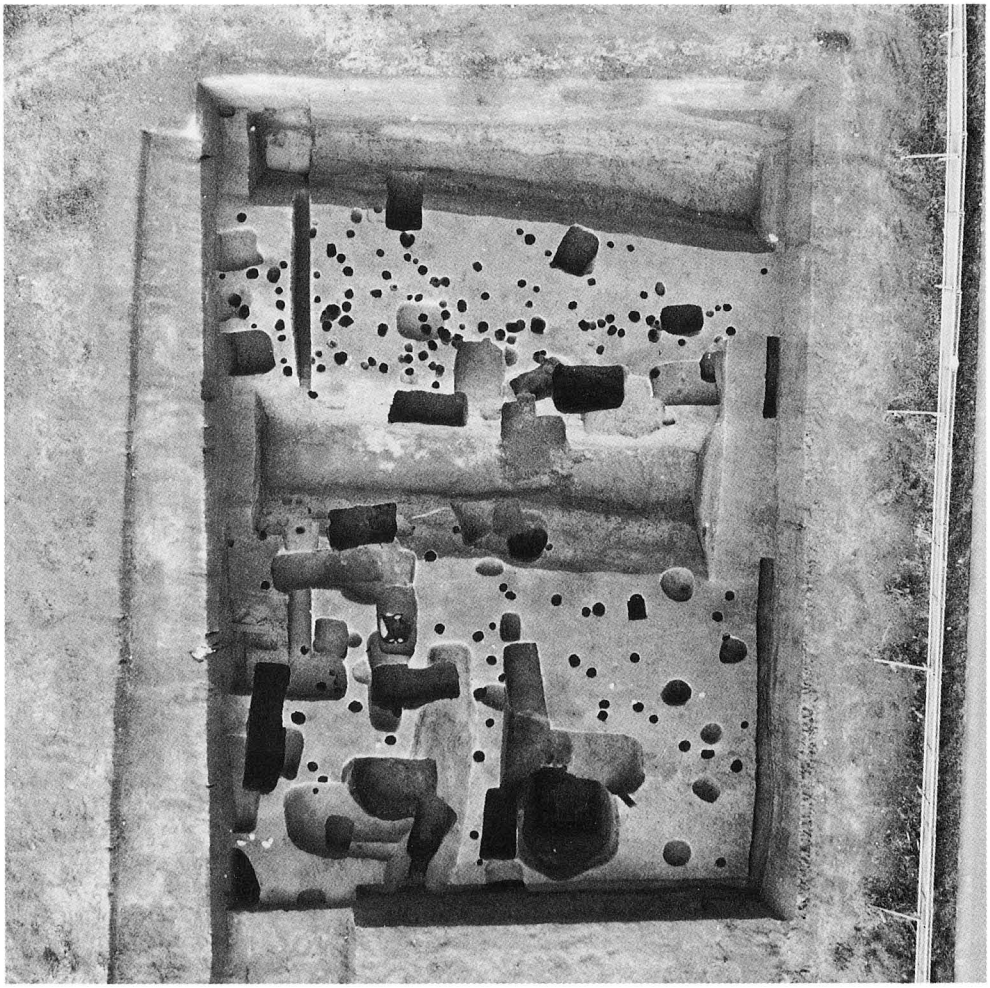
仙台市史編さん委員会：1998　『仙台市史　特別編５　板碑』

写　真　図　版

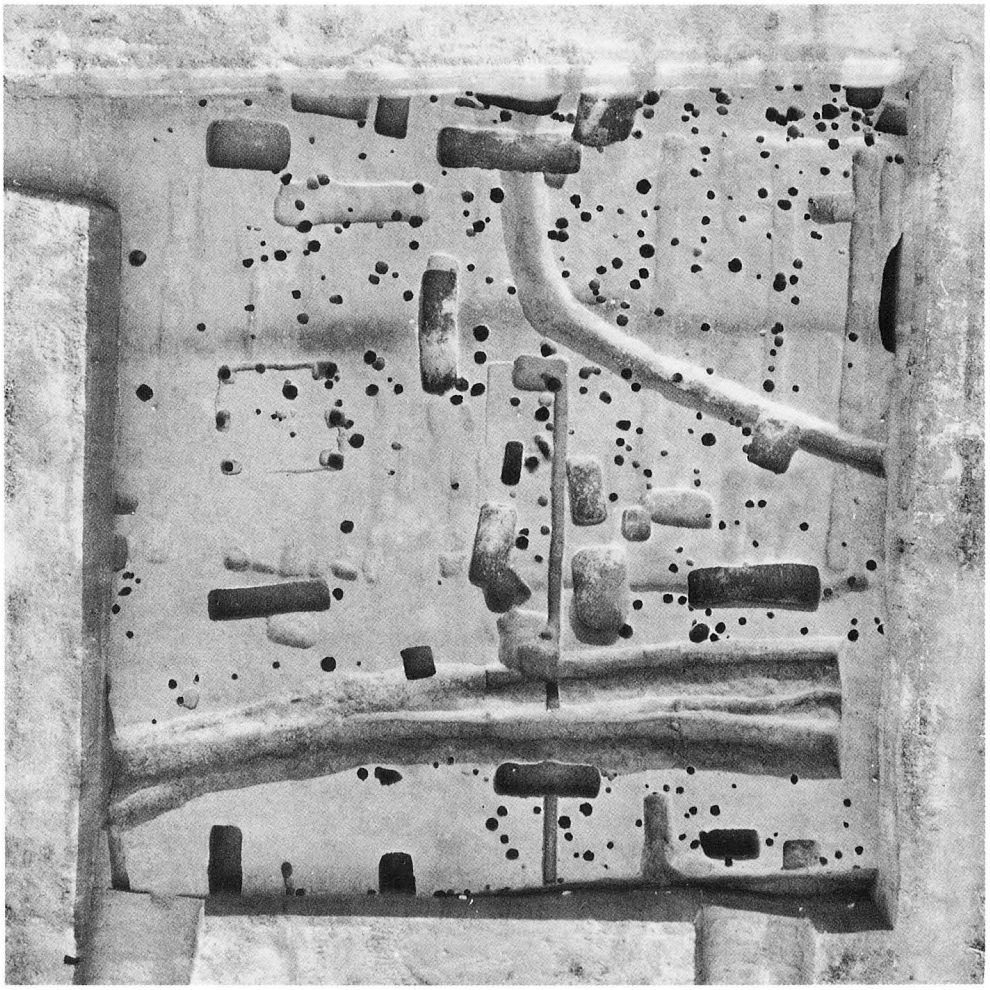
柳生台畑遺跡周辺の空中写真
（昭和31年　米軍撮影）

『名取郡北方柳生村絵図』（部分）（文政年間）柳生寺蔵

写真図版 1

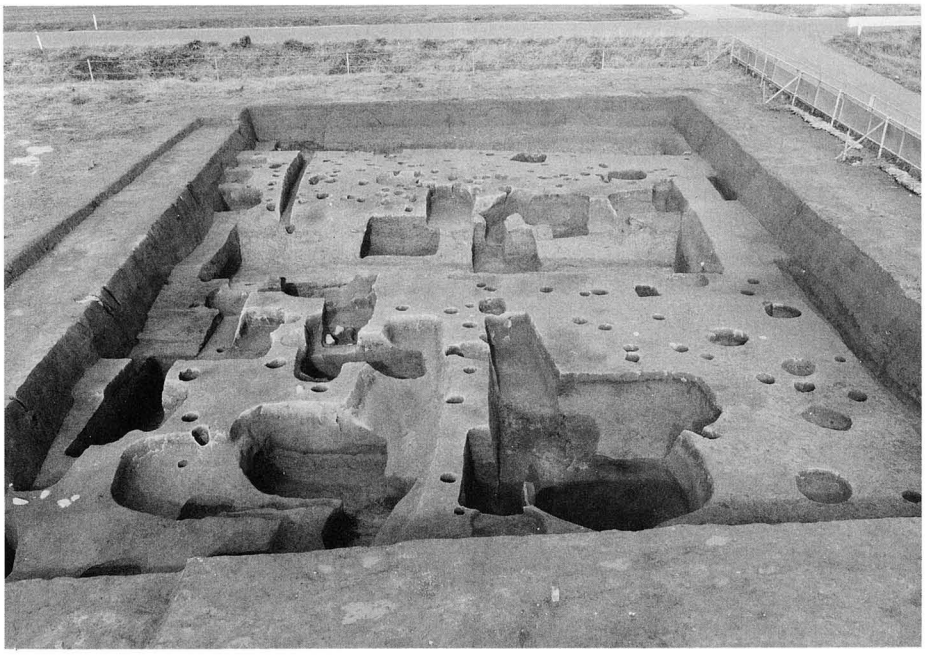


1区全景

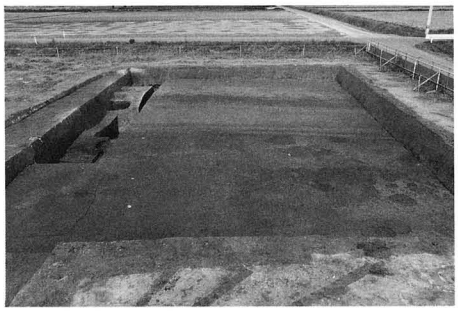


2区全景

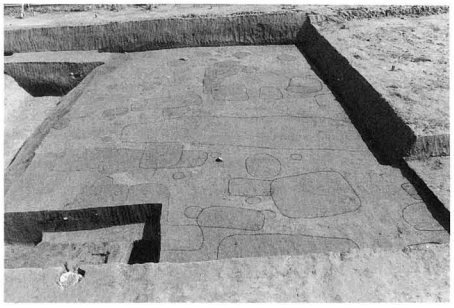
写真図版 2



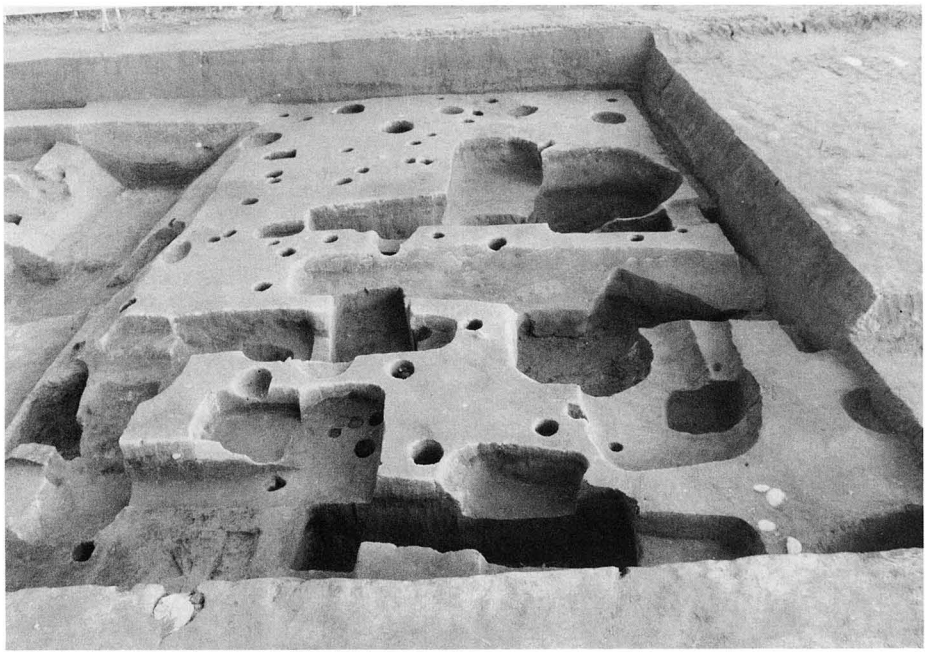
1．１区全景（南より）



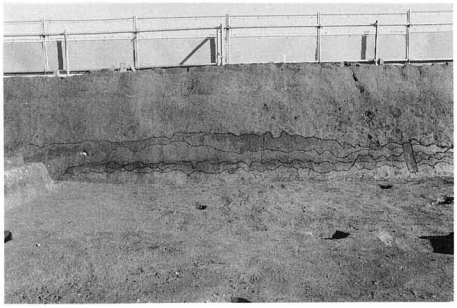
2．１区遺構検出状況（南より）



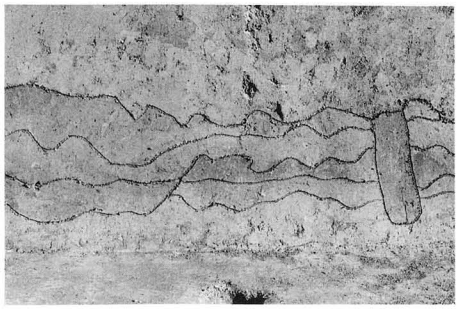
3．１区南半部遺構検出状況（西より）



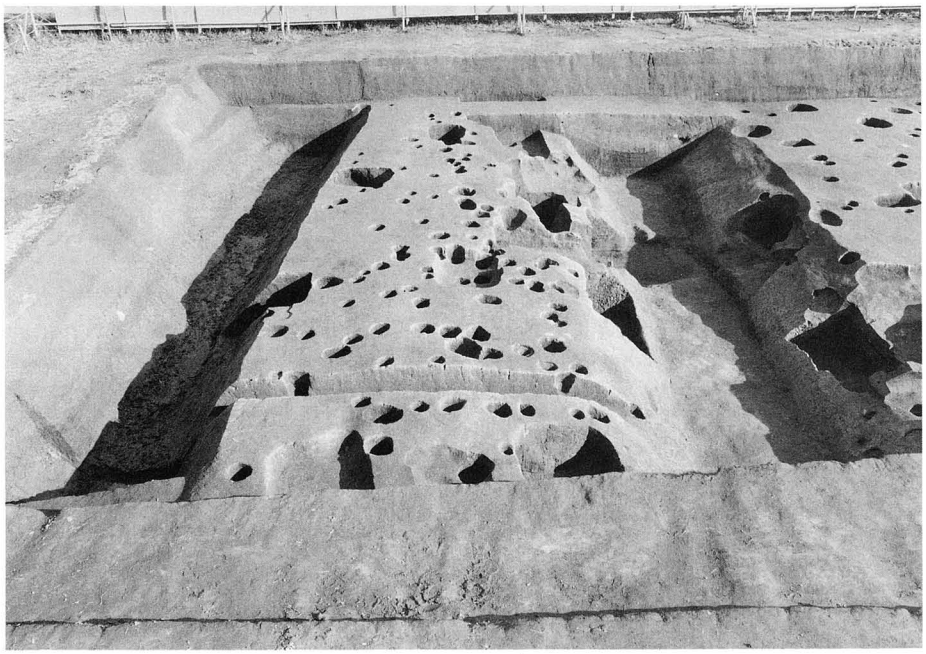
4．１区南半部全景（西より）



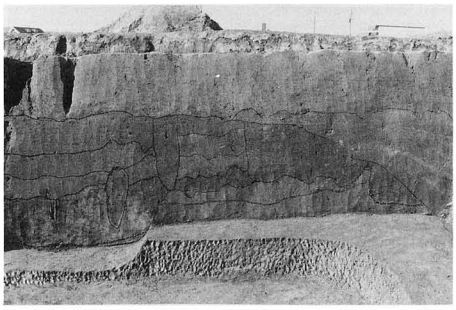
5．１区東壁断面状況（西より）



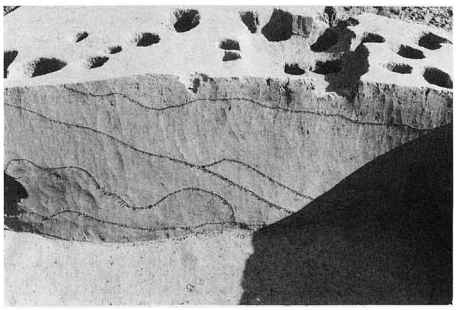
6．１区東壁断面状況（西より）



7．１区北半部全景（西より）



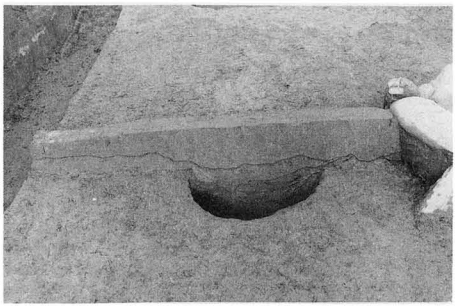
8．１区（６トレンチ）西壁断面状況（東より）



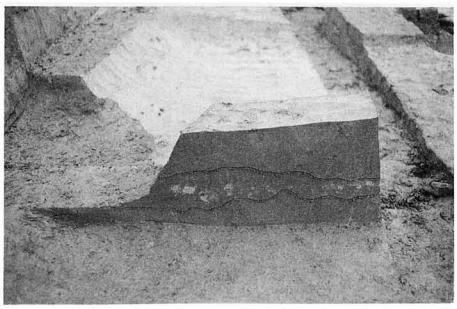
9．１区深掘り東壁断面状況（西より）

写真図版３（１区）

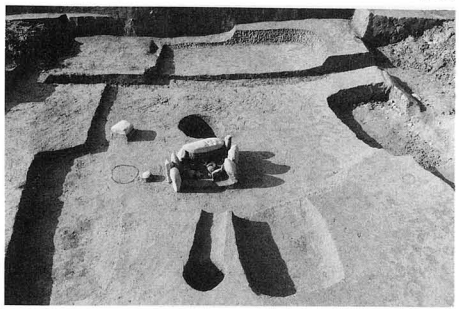
1．ＳＩ２完掘状況（西より）



2．ＳＩ２断面状況（南より）

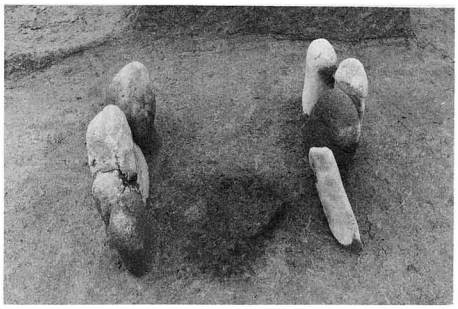


3．ＳＩ２断面状況（南より）

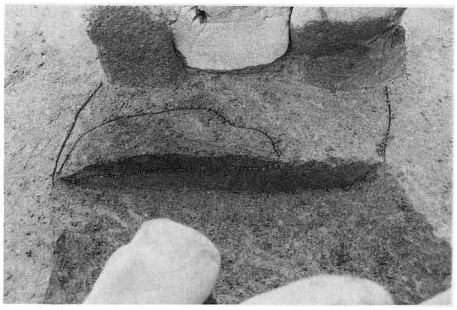


4．ＳＩ２完掘状況（東より）

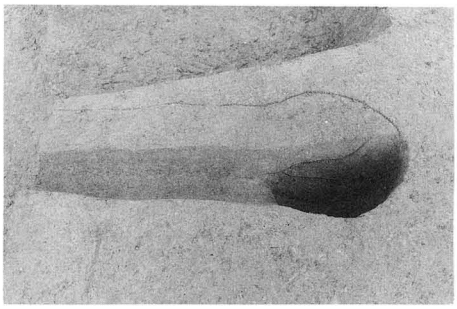
5．ＳＩ２カマド内遺物出土状況（東より）



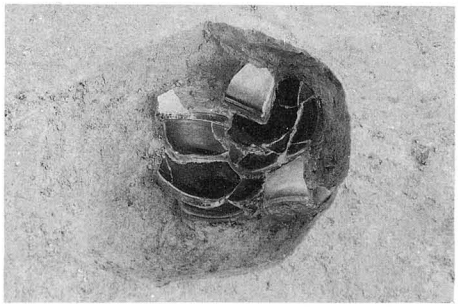
6．ＳＩ２カマド完掘状況（西より）



7．ＳＩ２カマド掘り方断面状況（南より）



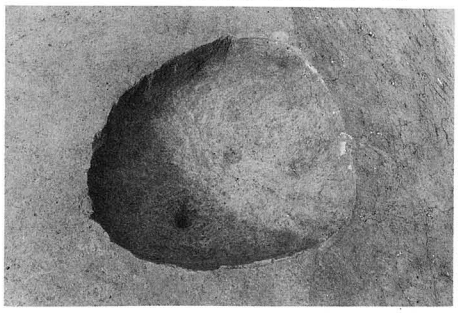
8．ＳＩ２煙道断面状況（南より）



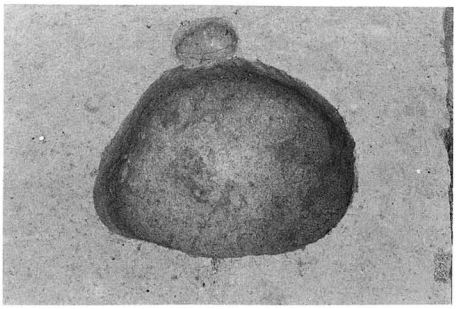
9．ＳＩ２Ｐ１遺物出土状況（西より）

10．ＳＫ16完掘状況（西より）

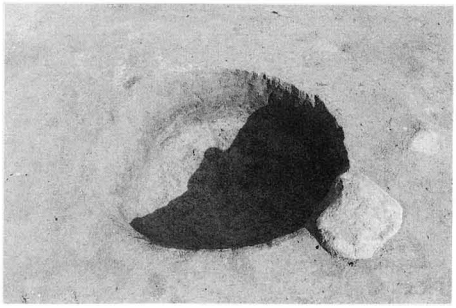
11．ＳＫ17完掘状況（北より）



12．ＳＫ23完掘状況（東より）

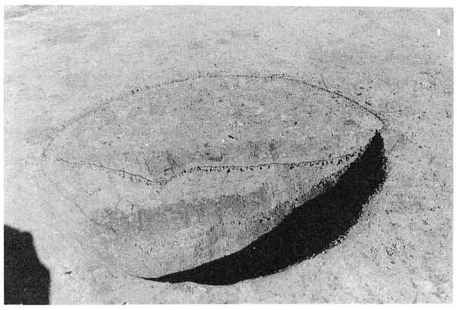


13．ＳＫ24完掘状況（南より）

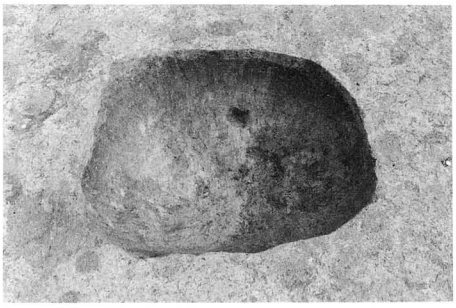


14．ＳＫ25完掘状況（南より）

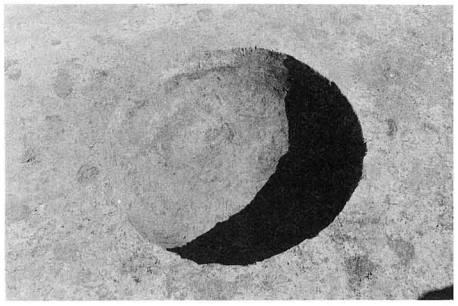
写真図版４（１区）



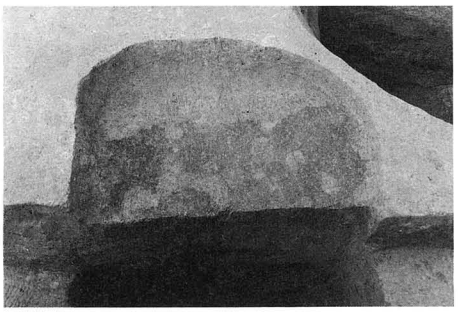
1．ＳＫ26断面状況（南より）



2．ＳＫ27完掘状況（南西より）

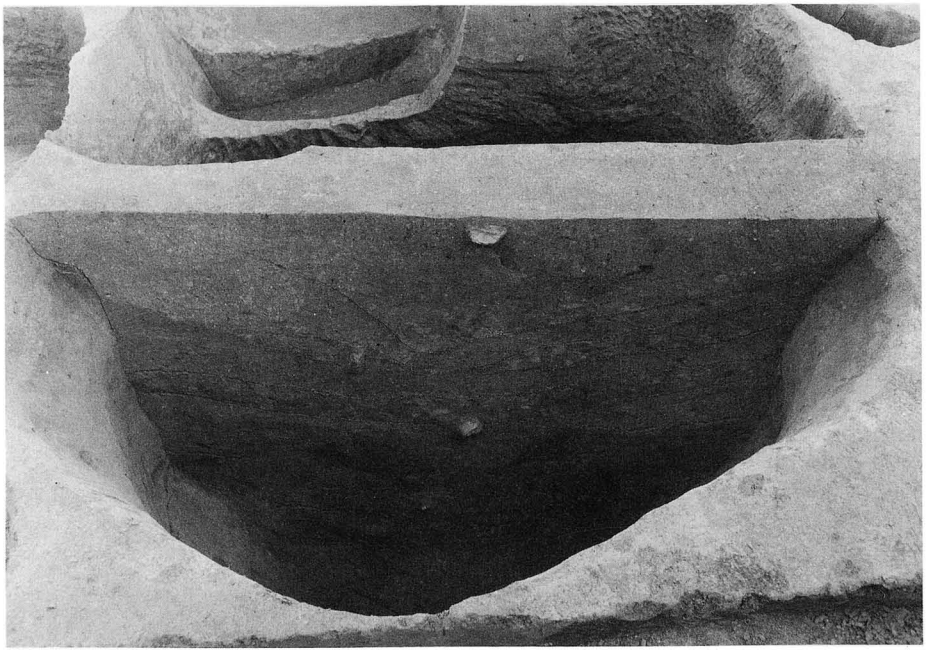


3．ＳＫ28完掘状況（南より）

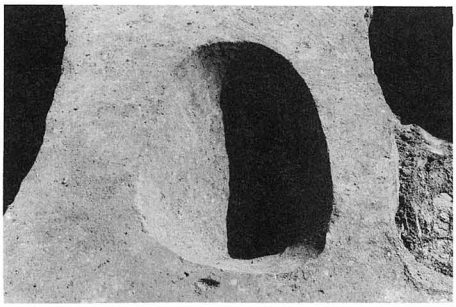


4．ＳＫ29完掘状況（南より）

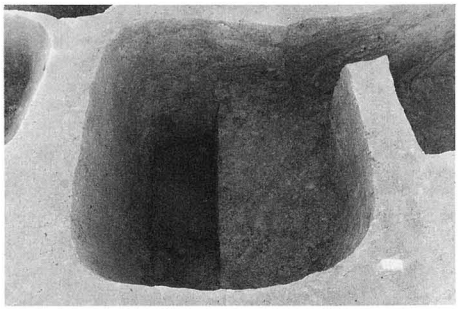
5．ＳＫ30完掘状況（東より）



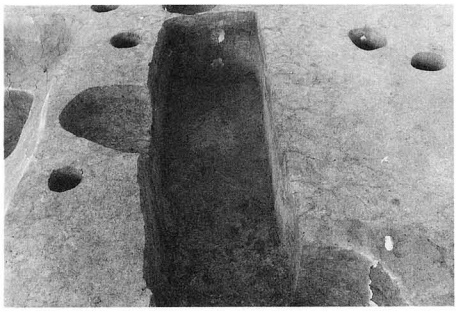
6．ＳＫ30断面状況（南より）



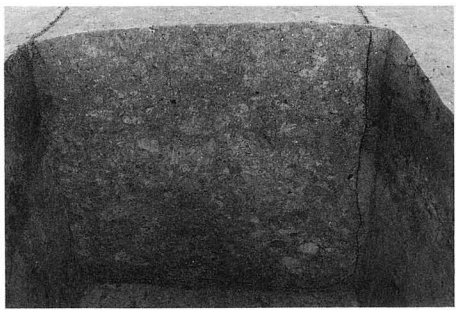
7．ＳＫ31完掘状況（西より）



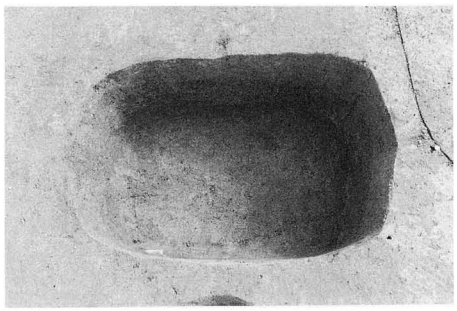
8．ＳＫ32完掘状況（東より）



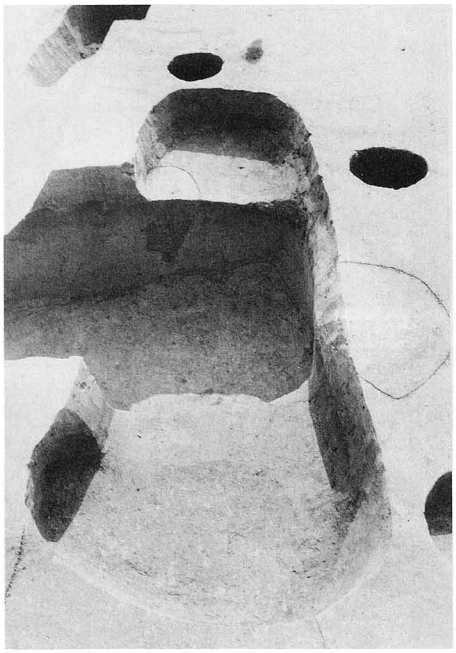
9．ＳＫ33完掘状況（南より）



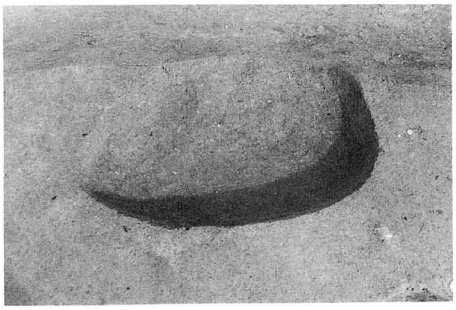
10．ＳＫ33断面状況（南より）



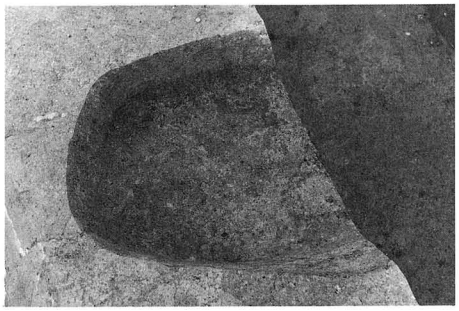
11．ＳＫ34完掘状況（西より）



14．ＳＫ37完掘状況（北より）



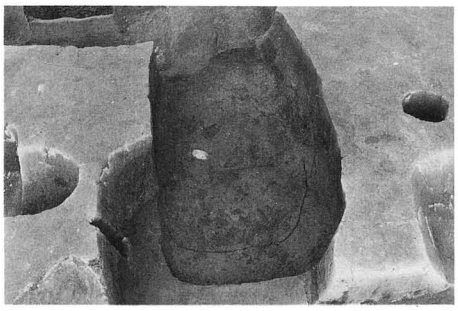
12．ＳＫ35完掘状況（南より）



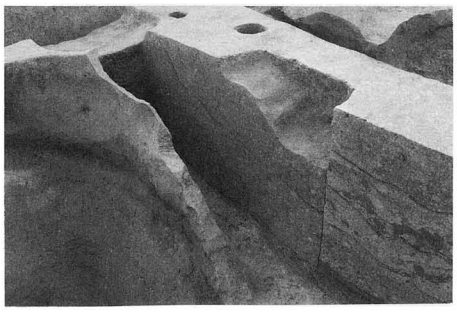
13．ＳＫ36完掘状況（南より）

写真図版５（１区）

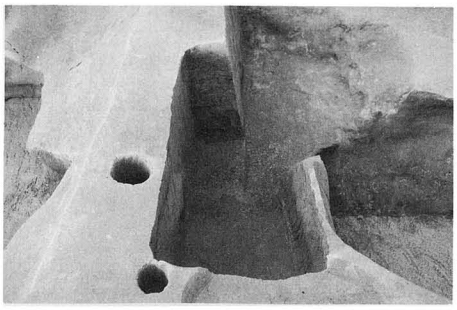
1．ＳＫ38完掘状況（西より）



2．ＳＫ39完掘状況（南より）

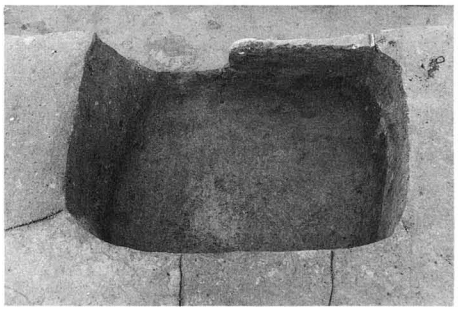


3．ＳＫ40断面状況（北東より）

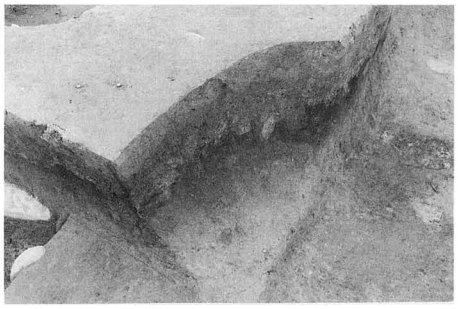


4．ＳＫ40完掘状況（南より）

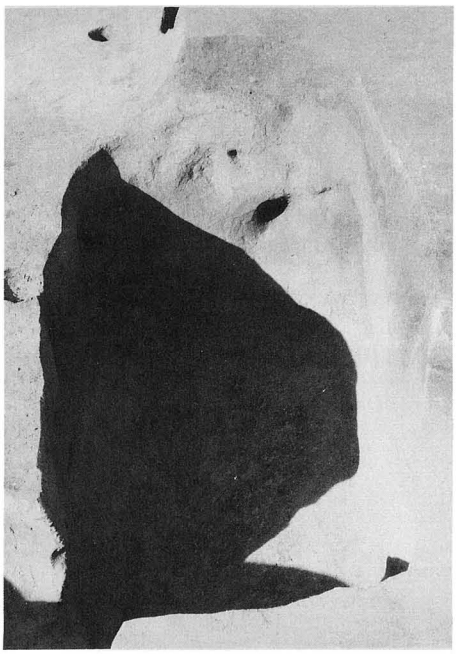
5．ＳＫ41完掘状況（東より）

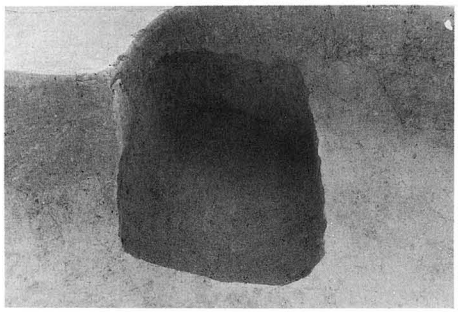


6．ＳＫ42完掘状況（東より）

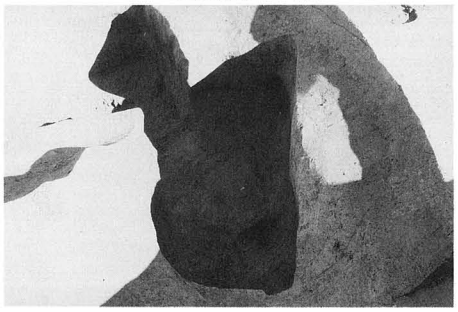


7．ＳＫ43完掘状況（北東より）



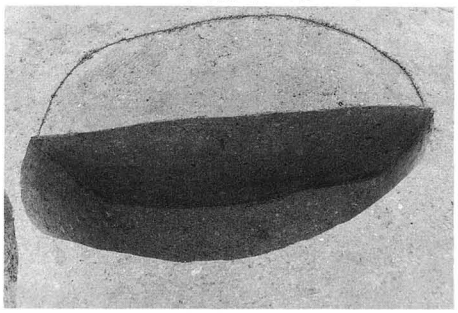


8．ＳＫ44完掘状況（北より）

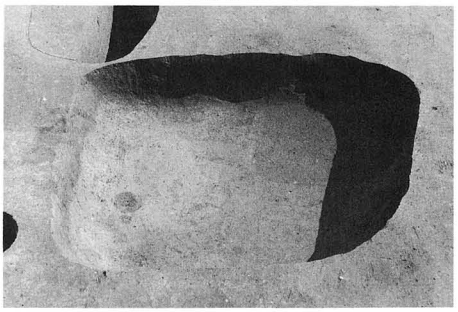


9．ＳＫ45完掘状況（南より）

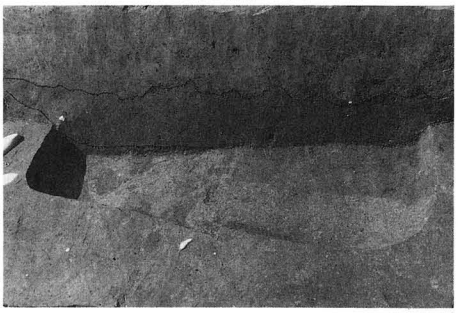
10．ＳＫ46完掘状況（東より）



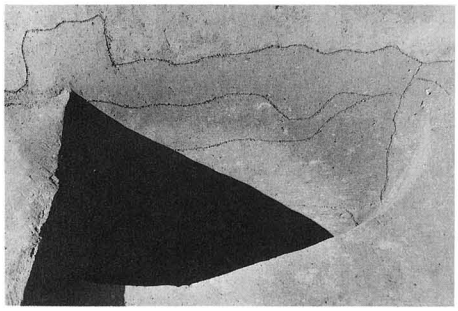
11．ＳＫ47断面状況（南より）



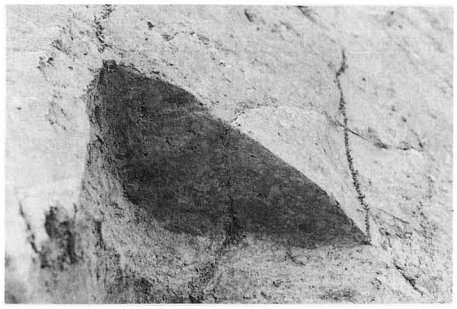
12．ＳＫ48完掘状況（西より）



13．ＳＫ49断面状況（東より）



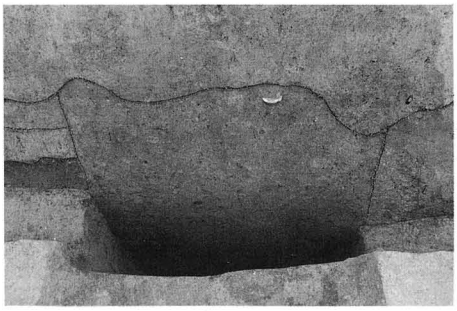
14．ＳＫ50断面状況（東より）



15．ＳＫ51断面状況（西より）

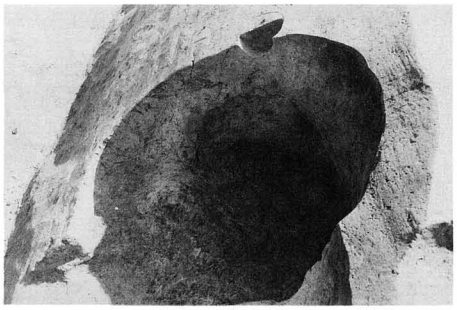
16．調査風景

写真図版６（１区）

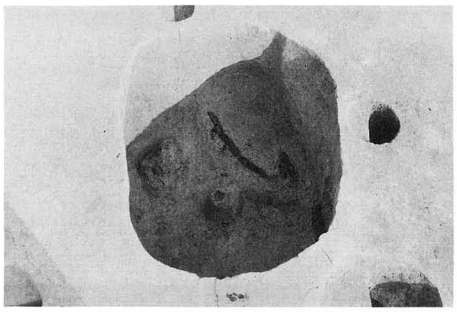


1．ＳＫ53断面状況（北より）

2．ＳＫ54完掘状況（西より）

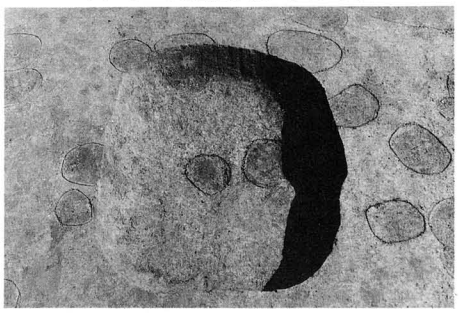


3．ＳＫ66完掘状況（西より）



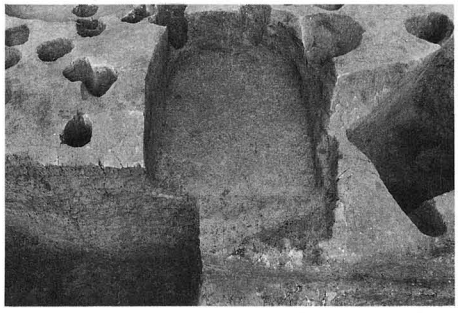
4．ＳＫ68完掘状況（西より）

5．ＳＫ69断面状況（西より）



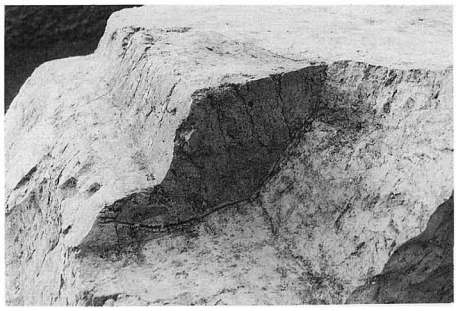
6．ＳＫ70完掘状況（西より）

7．ＳＫ71断面状況（東より）



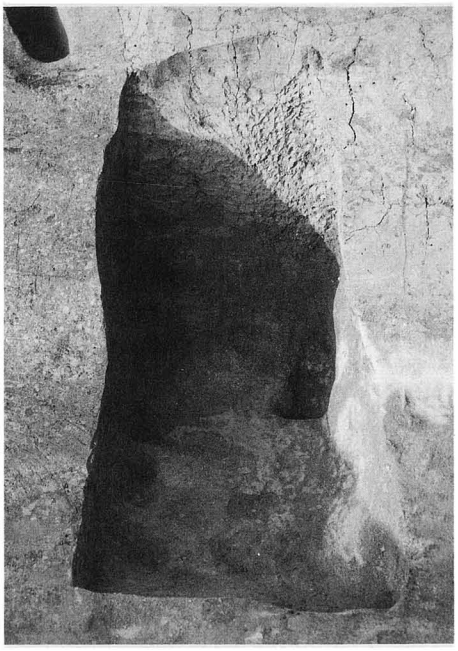
8．ＳＫ72完掘状況（南より）

9．ＳＫ71完掘状況（南西より）

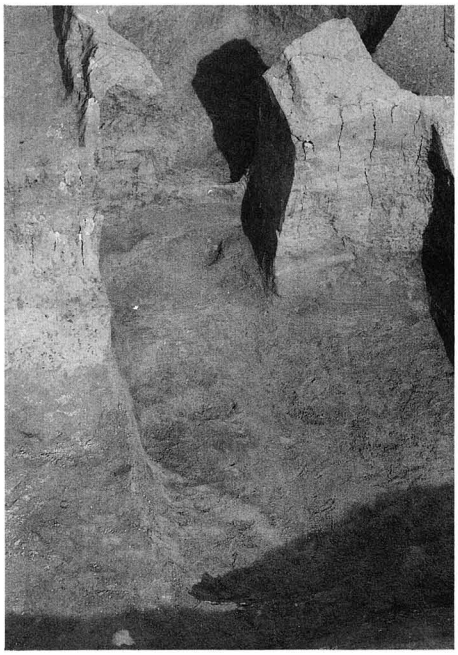


10．ＳＫ73断面状況（東より）

11．ＳＫ75完掘状況（南東より）

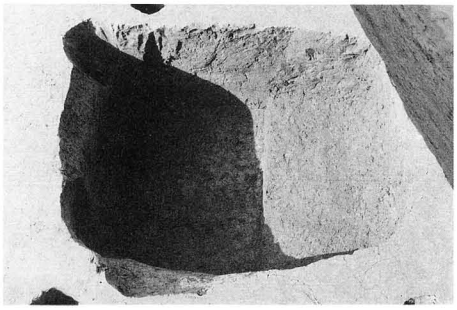


12．ＳＫ74完掘状況（南より）

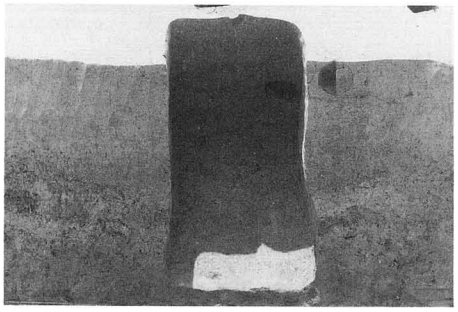


13．ＳＫ76完掘状況（南より）

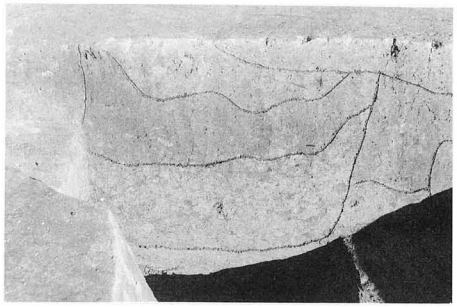
写真図版７（１区）



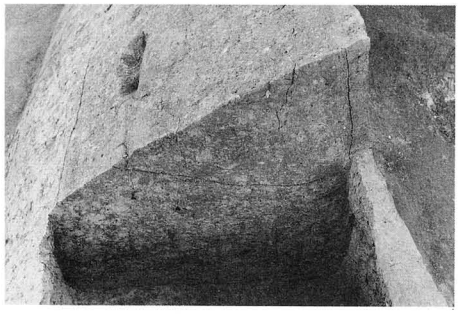
1．ＳＫ79完掘状況（東より）



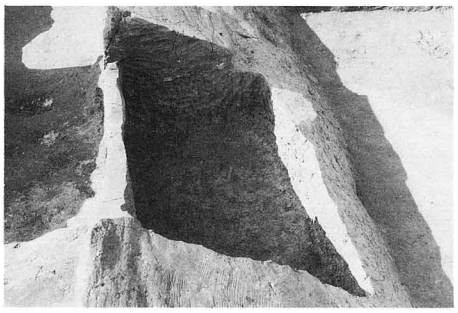
2．ＳＫ80完掘状況（北より）



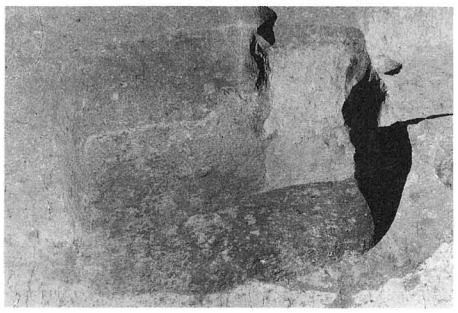
3．ＳＫ88断面状況（西より）



4．ＳＫ91断面状況（西より）

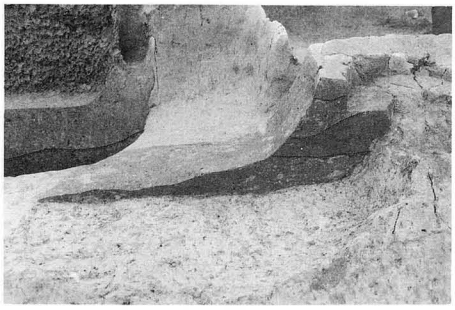


5．ＳＫ91完掘状況（北より）



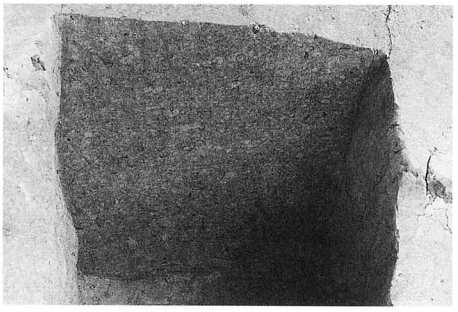
6．ＳＫ92完掘状況（南より）

7．ＳＫ92完掘状況（東より）

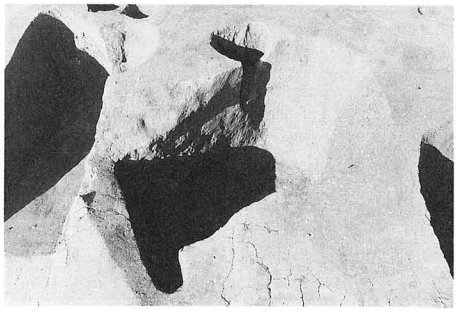


8．ＳＫ94断面状況（南より）

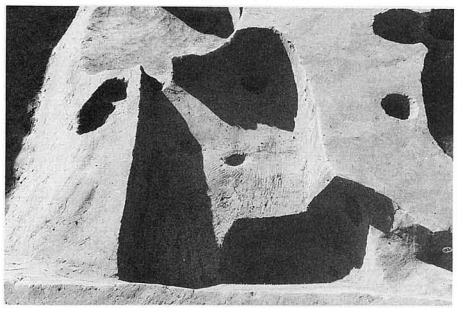
9．ＳＫ93完掘状況（東より）



10．ＳＫ95断面（西より）

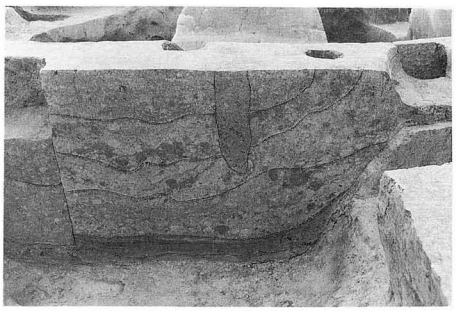


11．ＳＫ95完掘状況（南より）

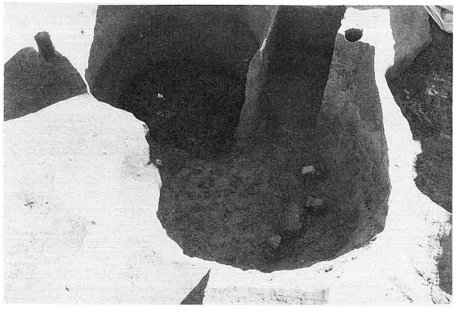


12．ＳＫ96完掘状況（東より）

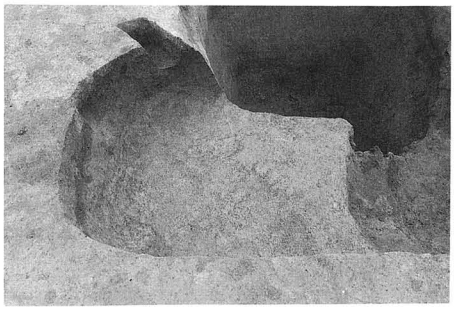
13．ＳＫ103完掘状況（北西より）



14．ＳＫ105断面状況（東より）



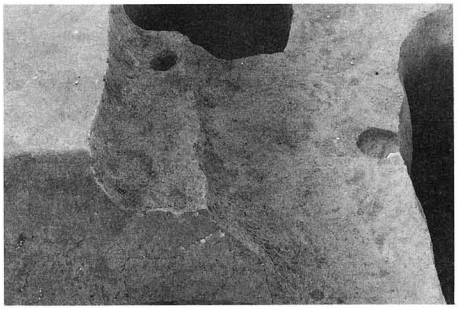
15．ＳＫ105完掘状況（北より）



16．ＳＫ107完掘状況（北より）

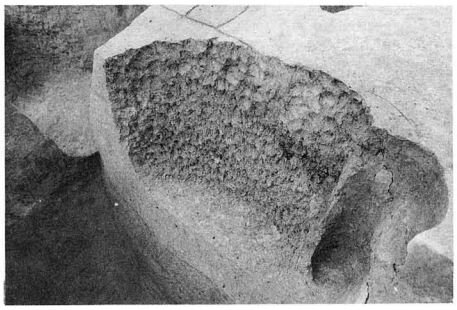
17．調査風景

写真図版８（１区）

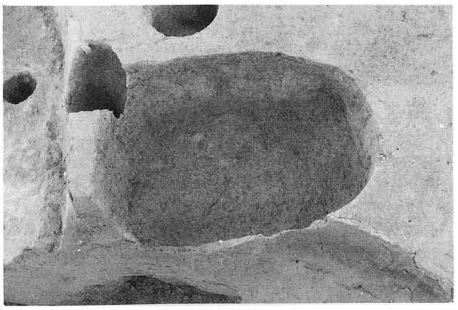


1．ＳＫ108・109完掘状況（東より）

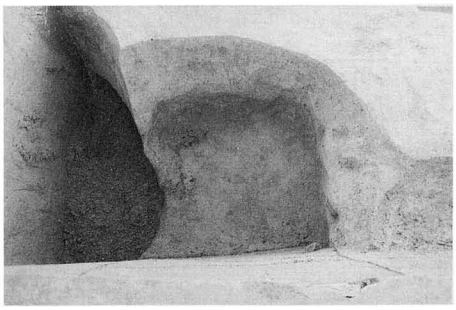
2．ＳＫ110完掘状況（北東より）



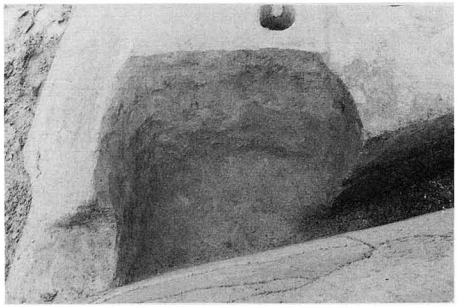
3．ＳＫ113完掘状況（南東より）



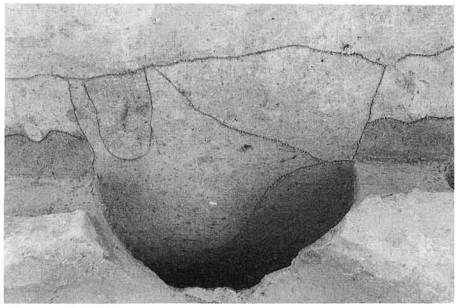
4．ＳＫ114完掘状況（東より）



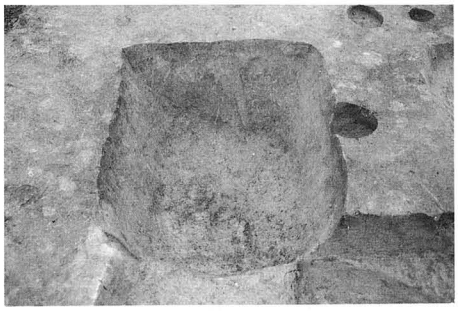
5．ＳＫ115完掘状況（南より）



6．ＳＫ116完掘状況（南より）

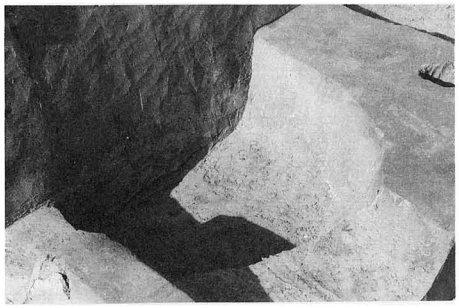


7．ＳＫ117断面状況（北より）

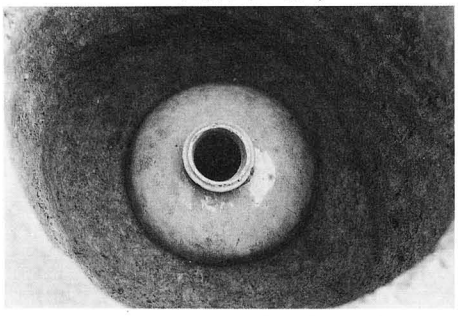


8．ＳＫ120完掘状況（西より）

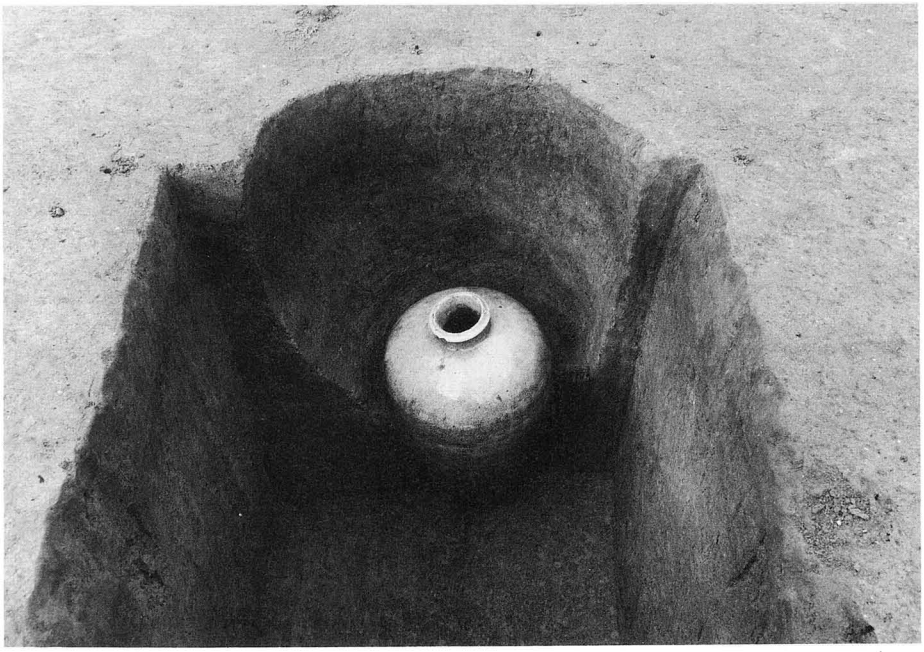
9．ＳＫ122断面状況（北より）



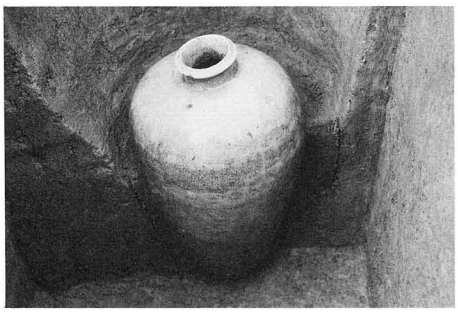
10．ＳＫ124完掘状況（南東より）



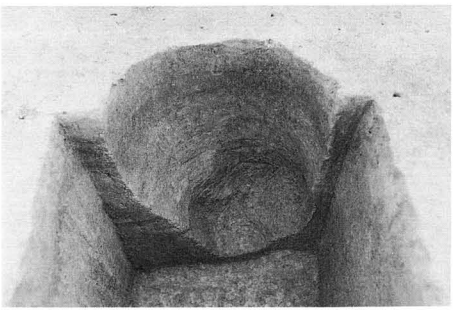
11．Ｐ34　瓶子出土状況（西より）



12．Ｐ34　瓶子出土状況（南より）



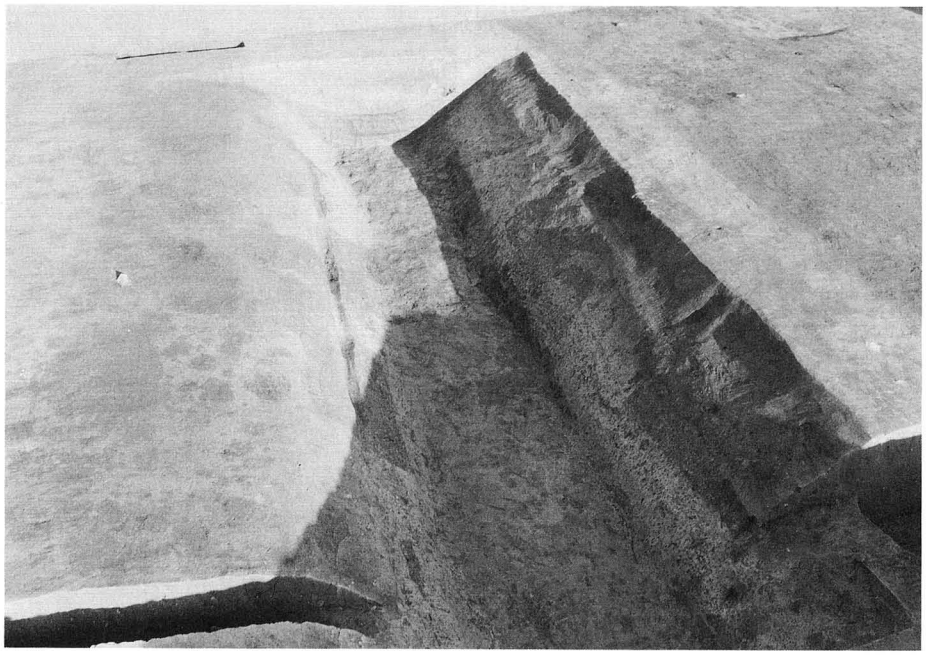
13．Ｐ34　瓶子出土状況（南より）



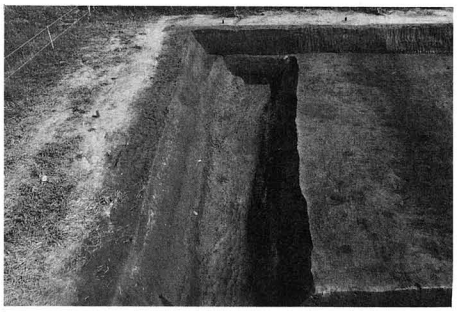
14．Ｐ34　掘り方完掘状況（南より）

15．調査風景

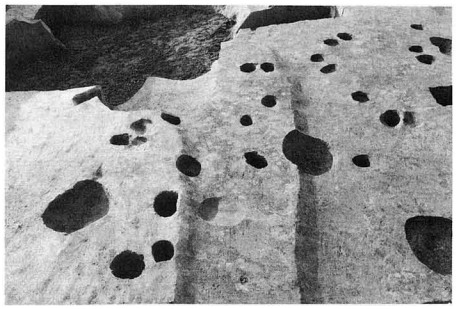
写真図版９（１区）



1．１区ＳＤ11完掘状況（西より）

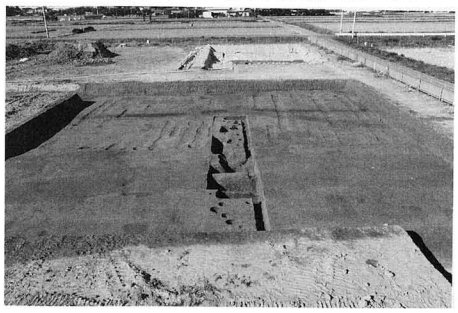


2．１区ＳＤ10完掘状況（西より）

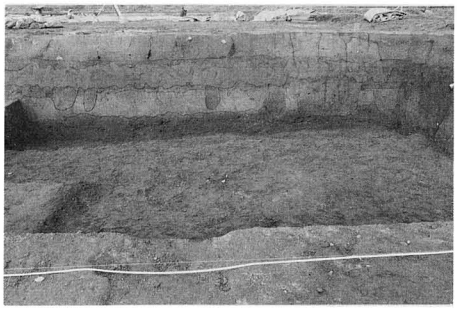


3．１区南東部Ⅱｂ層下面状況（東より）

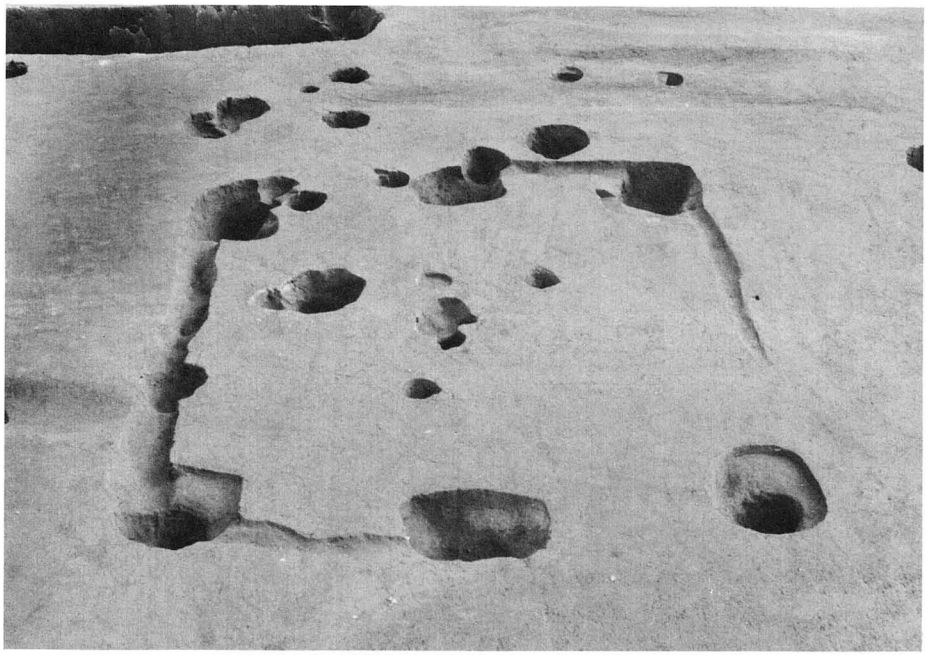
4．２区全景（南より）



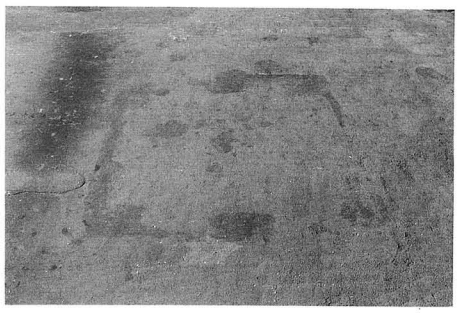
5．２区遺構検出状況（南より）



6．２区北壁断面状況（南より）



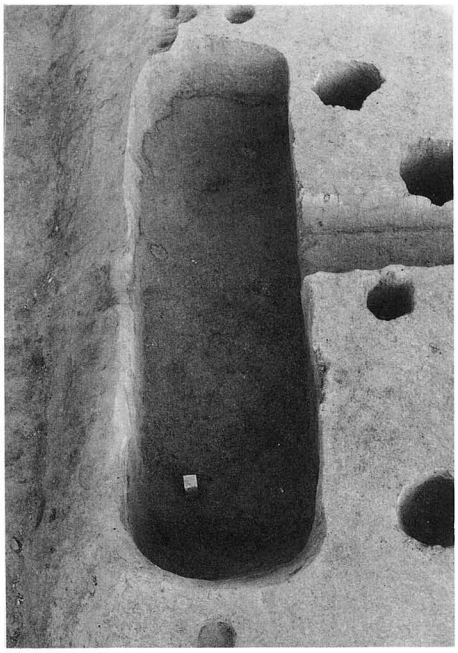
7．ＳＩ１竪穴建物跡完掘状況（西より）



8．ＳＩ１竪穴建物跡検出状況（西より）

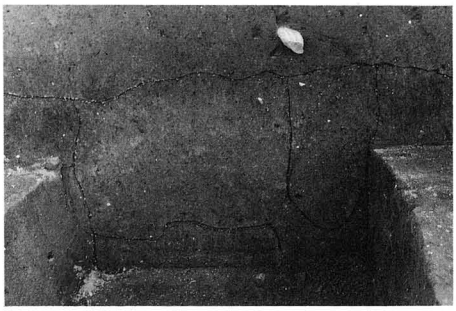
9．調査風景（２区）

写真図版10（１・２区）

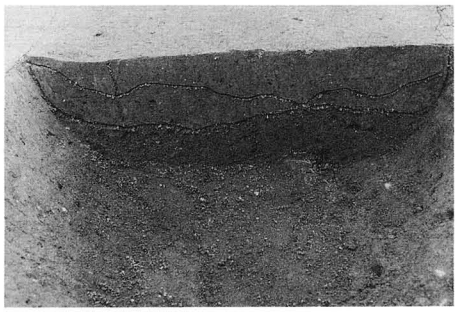


1．ＳＫ22完掘状況（西より）

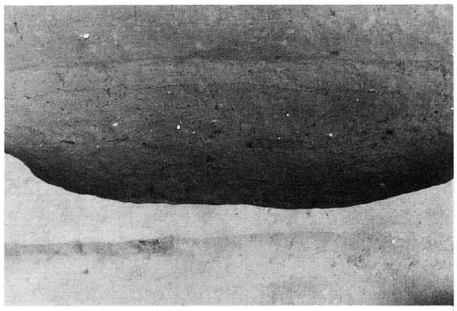
2．ＳＫ55断面状況（南より）



3．ＳＫ56断面状況（西より）

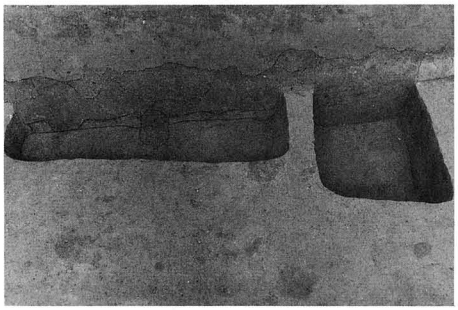


4．ＳＫ57断面状況（西より）

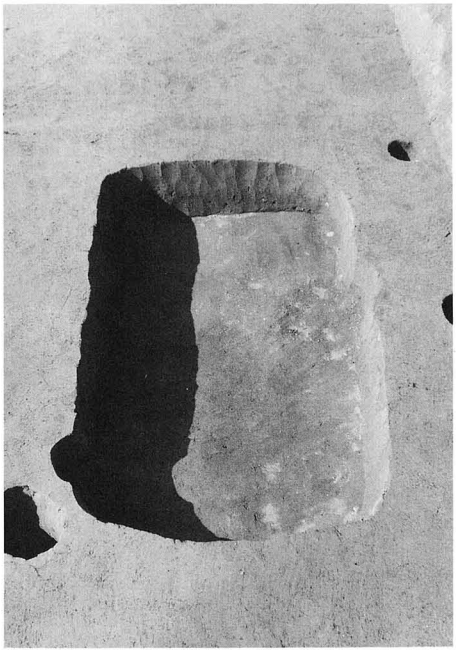


5．ＳＫ58断面状況（西より）

6．ＳＫ59完掘状況（南より）

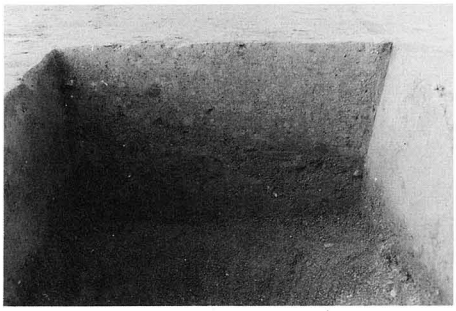


7．ＳＫ60・61完掘状況（南より）

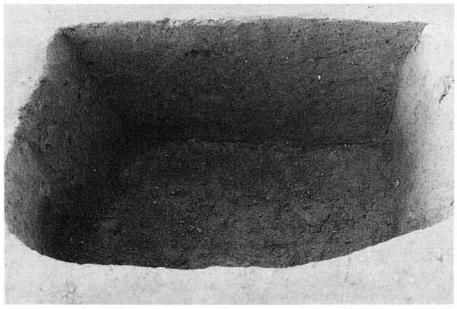


8．ＳＫ62完掘状況（東より）

9．ＳＫ63完掘状況（東より）

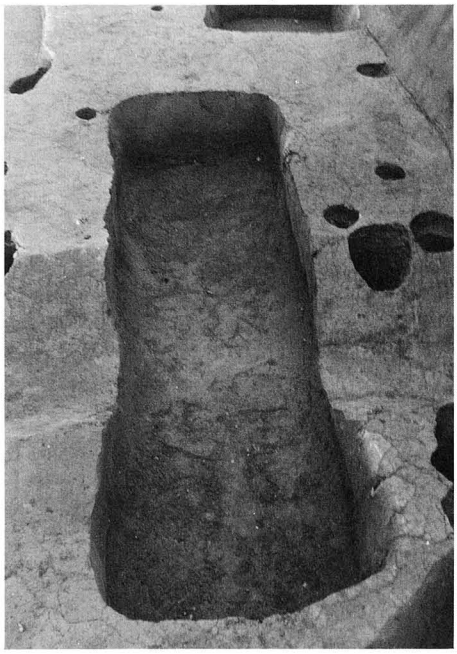


10．ＳＫ64断面状況（南より）



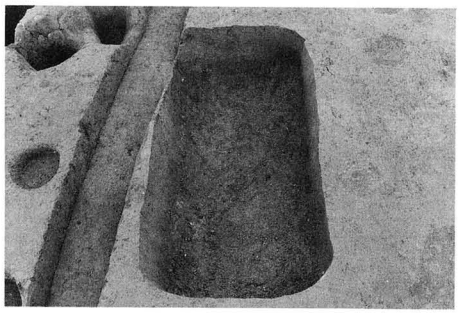
11．ＳＫ67断面状況（東より）

12．ＳＫ64完掘状況（南より）

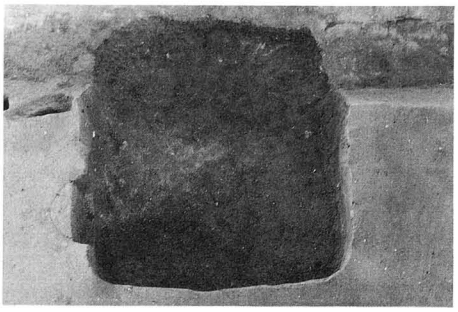


13．ＳＫ65完掘状況（東より）

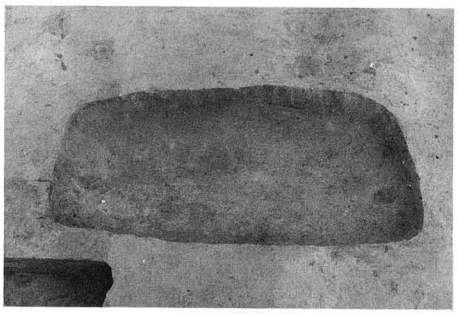
写真図版11（２区）



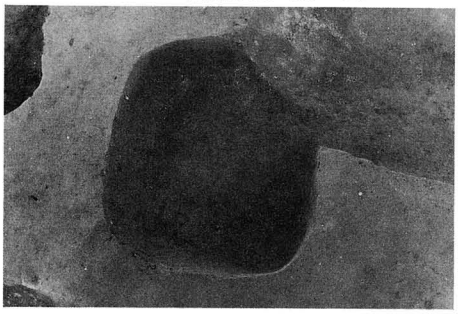
1．ＳＫ81完掘状況（南より）



2．ＳＫ82完掘状況（南より）

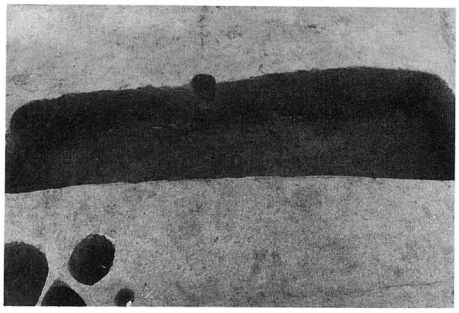


3．ＳＫ83完掘状況（南より）

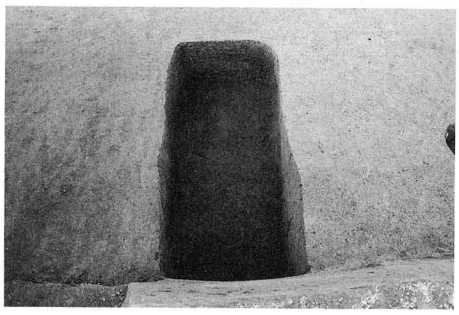


4．ＳＫ84完掘状況（南より）

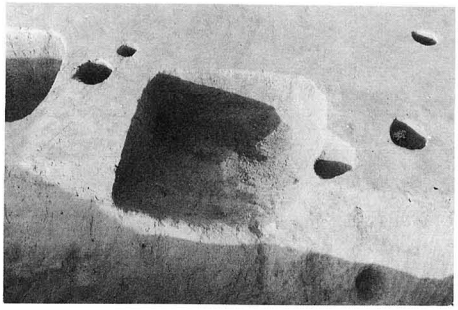
5．ＳＫ85完掘状況（南より）



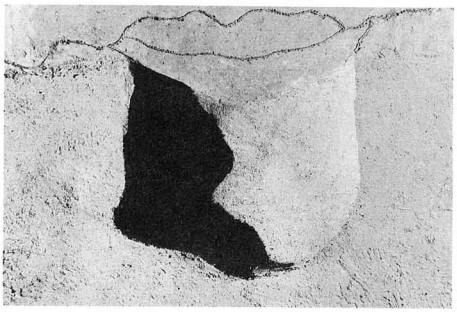
6．ＳＫ86完掘状況（南より）



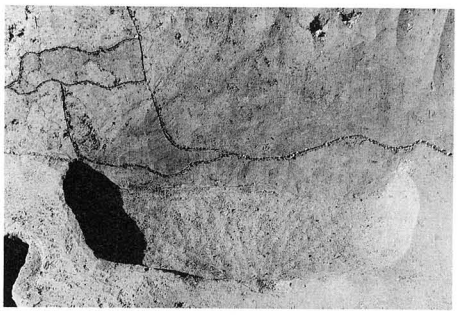
7．ＳＫ87完掘状況（南より）



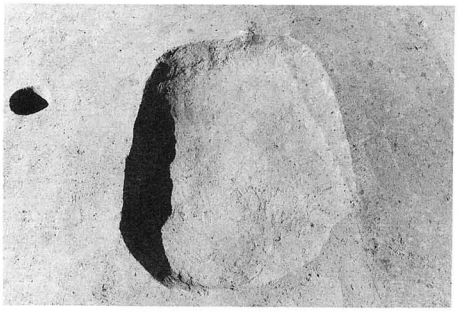
8．ＳＫ90完掘状況（南より）



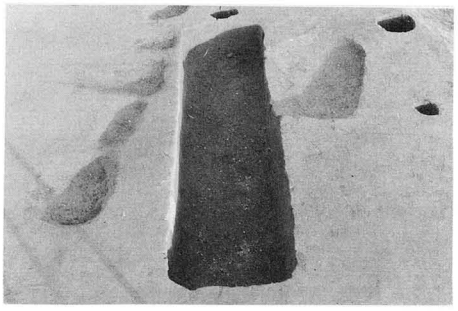
9．ＳＫ97断面・完掘状況（東より）



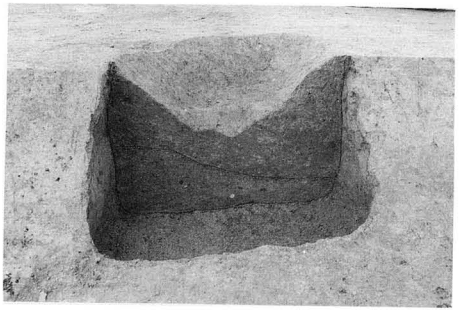
10．ＳＫ98断面・完掘状況（東より）



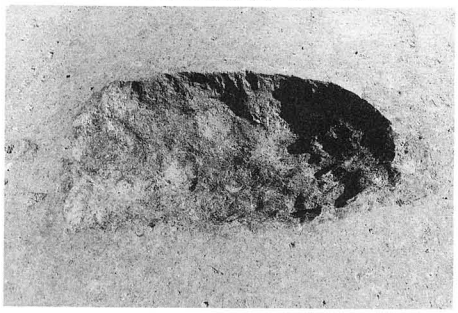
11．ＳＫ99完掘状況（東より）



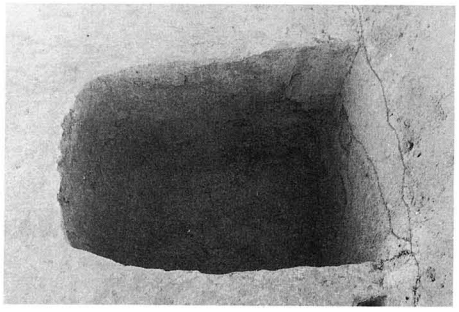
12．ＳＫ100完掘状況（西より）



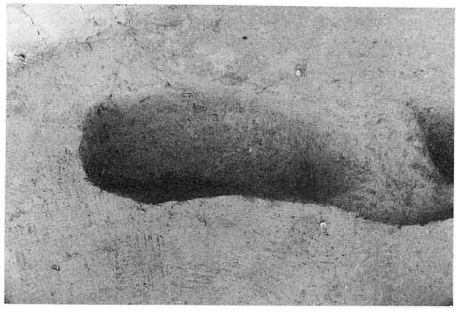
13．ＳＫ101断面状況（南より）



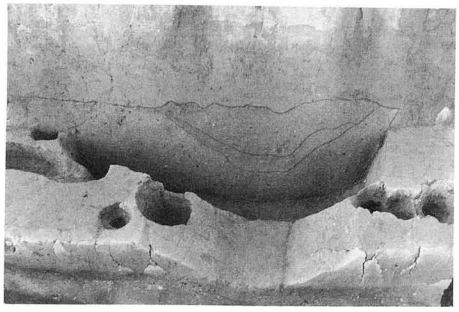
14．ＳＫ102完掘状況（西より）



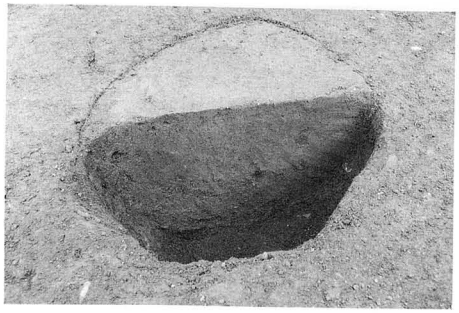
15．ＳＫ106完掘状況（西より）



16．ＳＫ111完掘状況（南より）

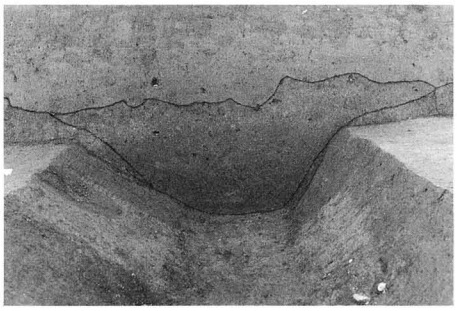


17．ＳＫ112断面状況（南より）

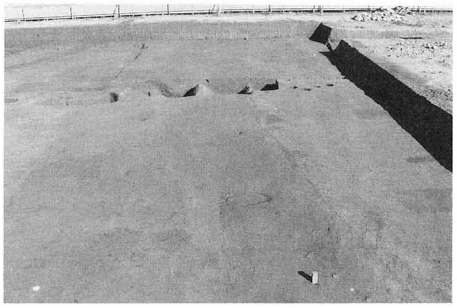


18．ＳＫ119断面状況（南西より）

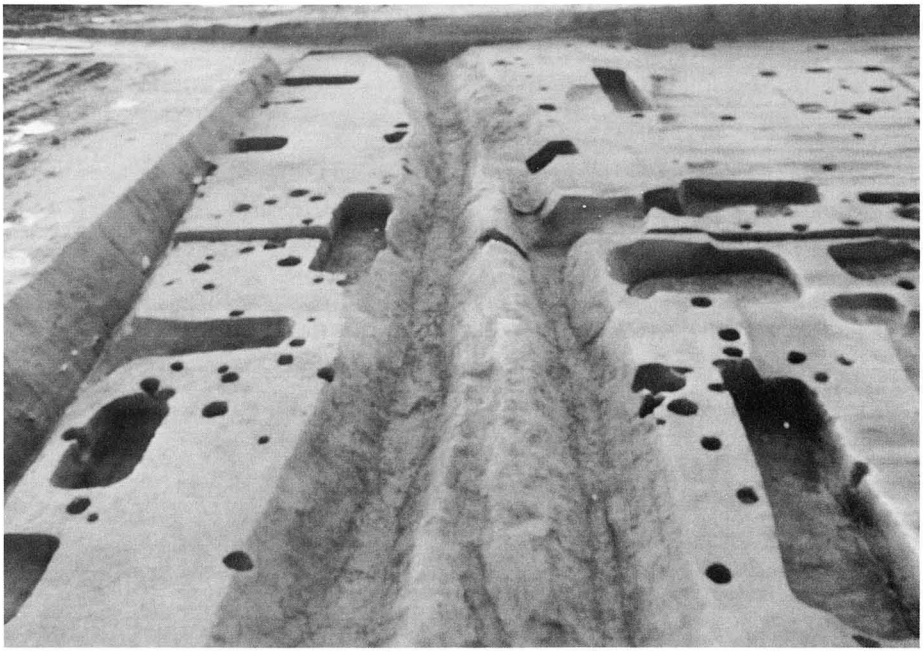
写真図版12（２区）



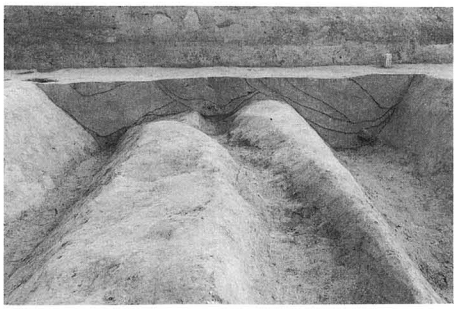
1．２区ＳＤ12断面状況（南より）



2．２区ＳＤ14ａ・ｂ・ｃ検出状況（西より）

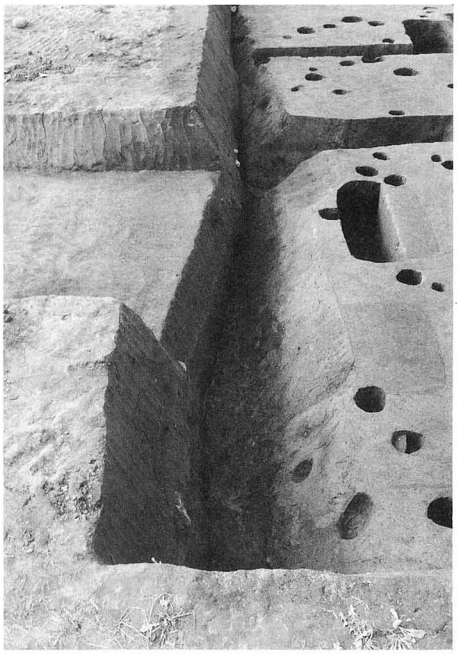


3．２区ＳＤ13～16完掘状況（東より）

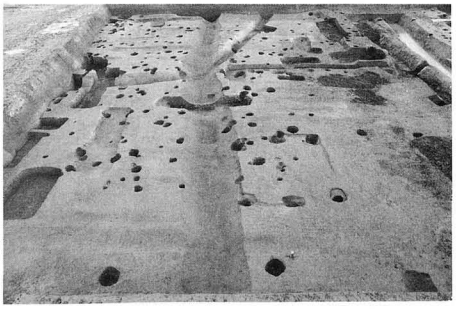


4．ＳＤ14ａ・ｂ・ｃ断面状況（西より）

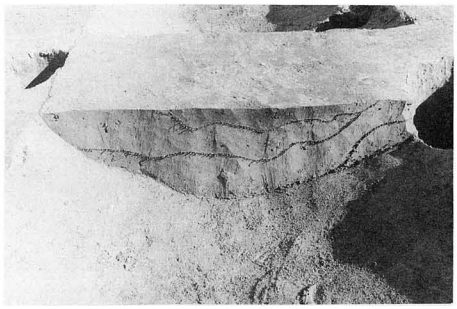
5．２区ＳＤ15断面状況（西より）



6．２区ＳＤ15完掘状況（東より）

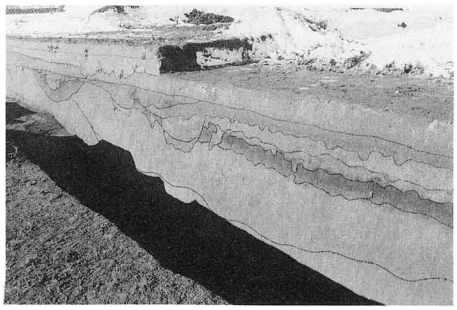


7．２区ＳＤ21完掘状況（西より）

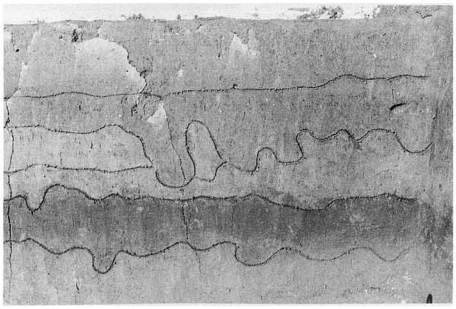


8．２区ＳＤ21断面状況（西より）

9．３区全景（南より）



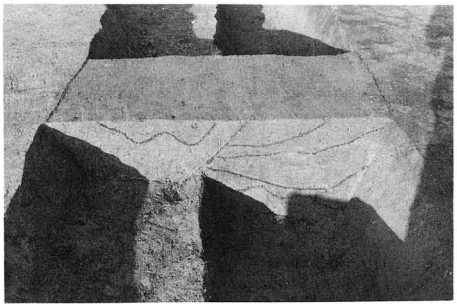
10．３区北壁断面状況（南東より）



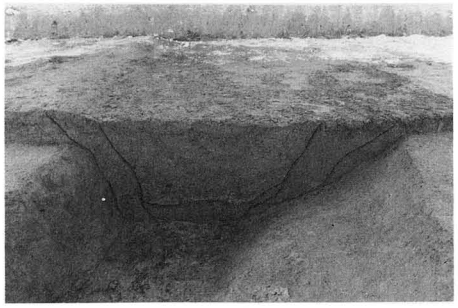
11．３区北壁東端部断面状況（南より）

写真図版13（２・３区）

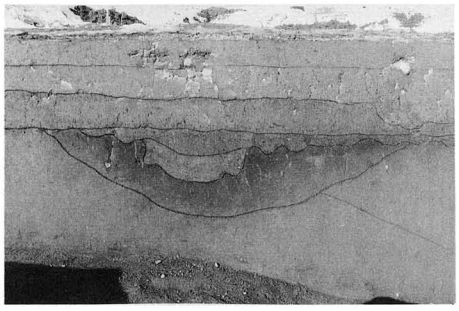
1．小溝状遺構群完掘状況（南より）



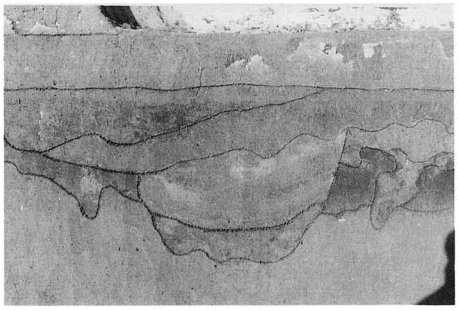
2．３区ＳＤ23・25断面状況（南より）



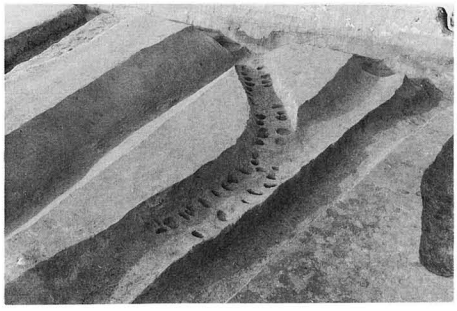
3．３区ＳＤ23・25・26断面状況（北より）



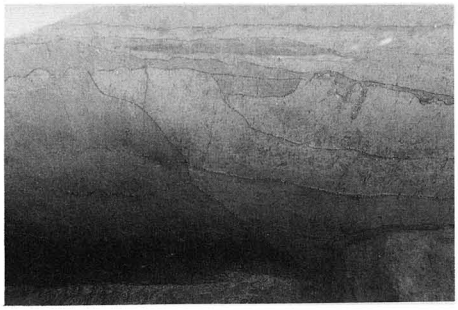
4．３区ＳＤ23・26断面状況（南より）



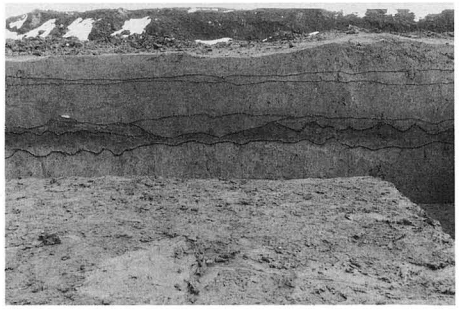
5．３区ＳＤ25断面状況（南より）



6．３区ＳＤ23底面状況（南東より）



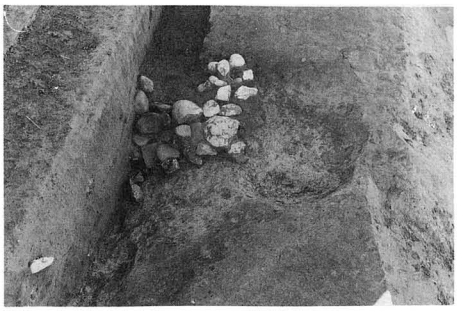
7．４Ａ区東壁断面状況（西より）



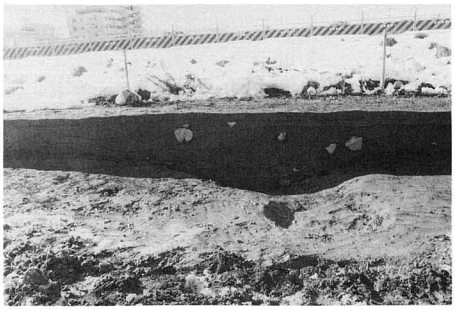
8．４Ａ区東壁断面状況（西より）

9．４Ａ区ＳＫ125断面状況（南より）

10．４Ａ区ＳＫ126完掘状況（南より）



11．４Ａ区ＳＸ１礫出土状況（南より）



12．４Ａ区ＳＸ１断面状況（東より）

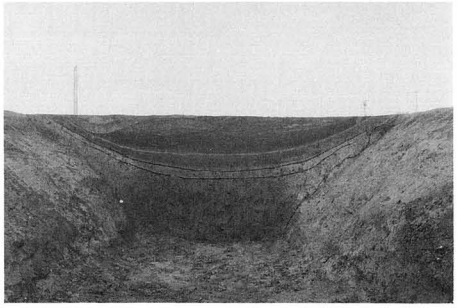
13．４区ＳＤ10完掘状況（南より）

14．４Ａ区ＳＤ10完掘状況（南より）

15．４区北半部ＳＤ10検出状況（南より）

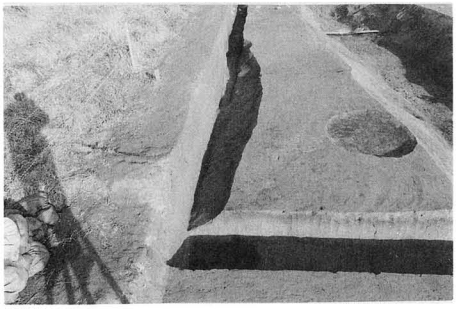
写真図版14（３・４区）

1．４Ａ区ＳＤ10断面状況（南より）



2．４Ｂ区ＳＤ10断面状況（南より）

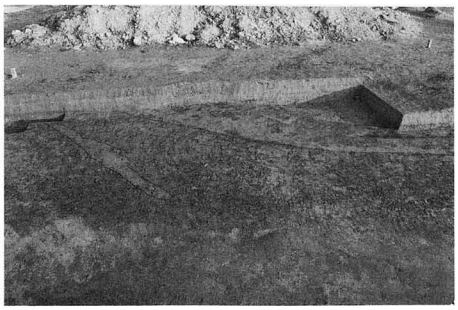
3．４Ｂ区ＳＤ10底面状況（東より）



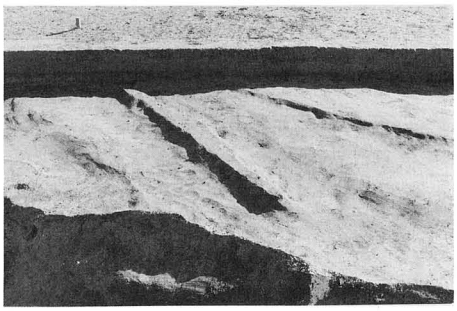
4．４Ａ区ＳＤ11完掘状況（南より）

5．４Ａ区ＳＤ11断面状況（南より）

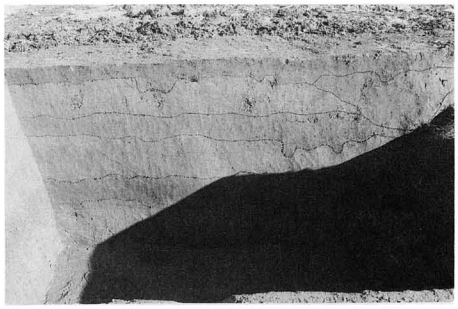
6．４Ａ区小溝状遺構群完掘状況（南より）



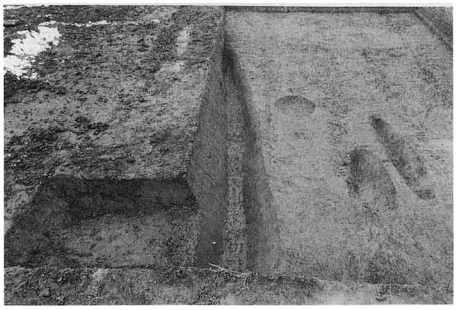
7．４Ｂ区Ⅱ層水田跡擬似畦畔完掘状況（西より）



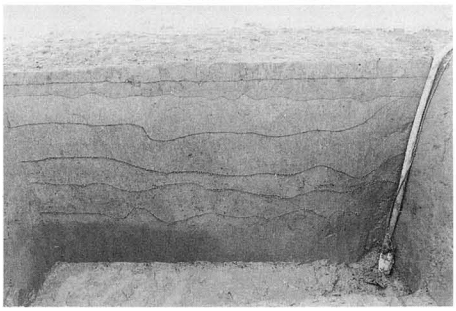
8．４Ｂ区Ⅱ層水田跡擬似畦畔完掘状況（西より）



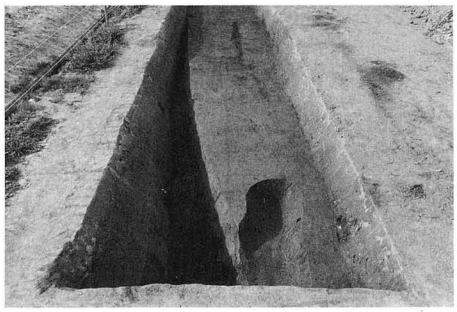
9．５区東壁断面状況（西より）



10．５区ＳＤ29完掘状況（東より）

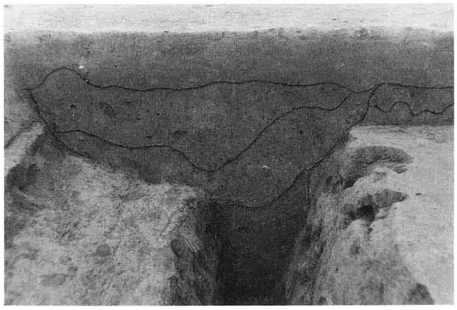


11．６区西壁断面状況（東より）



12．２トレンチＳＤ１・ＳＫ１完掘状況（南より）

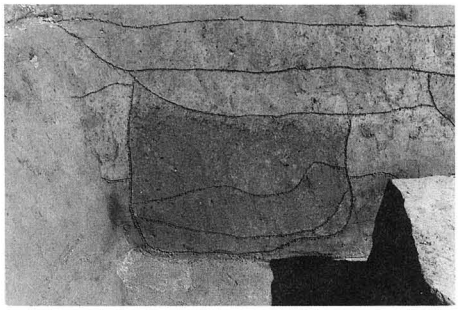
13．３トレンチ全景（南より）



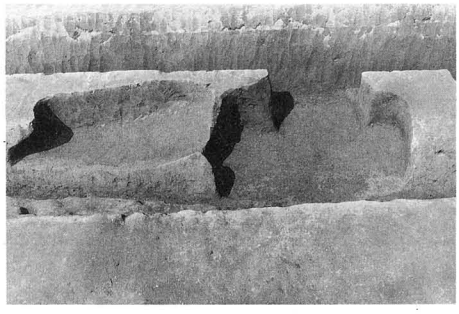
14．３トレンチＳＤ２断面状況（北より）

15．調査風景（12トレンチ）

写真図版15（４～６区・試掘トレンチ）

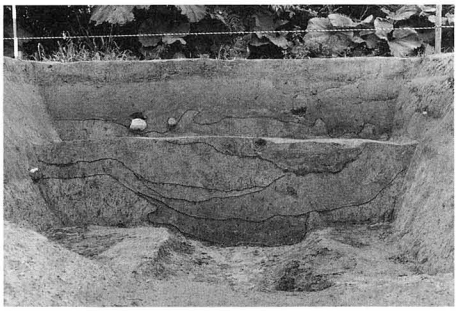


1．3トレンチＳＫ５断面状況（南より）

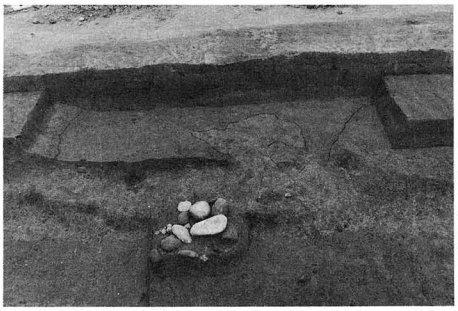


2．3トレンチＳＫ７・８完掘状況（東より）

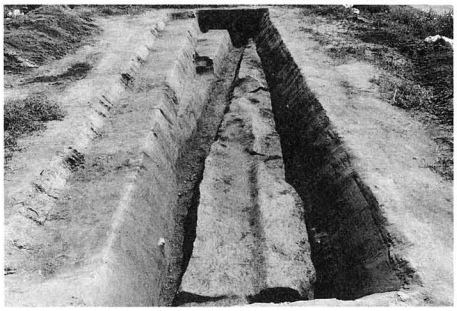
3．4トレンチSD3・4a・5・6完掘状況（西より）



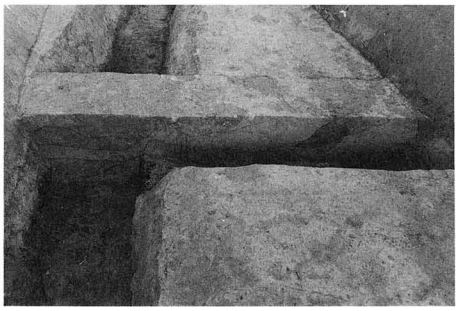
4．4トレンチＳＤ４ａ・ｂ断面状況（東より）



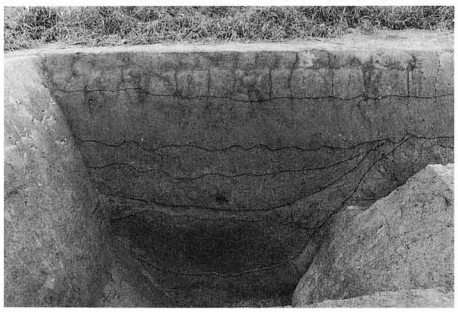
5．4トレンチ拡張区ＳＤ５・６検出状況（南より）



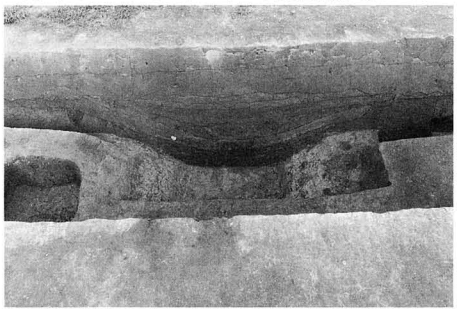
6．5トレンチＳＤ７・８・９完掘状況（西より）



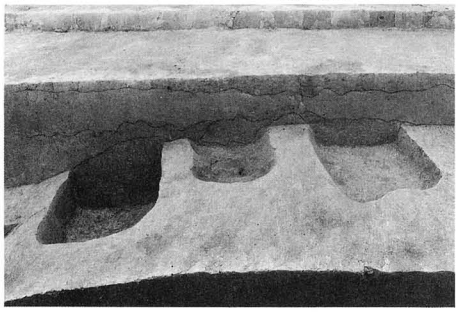
7．5トレンチSD7・8・9断面状況（西より）



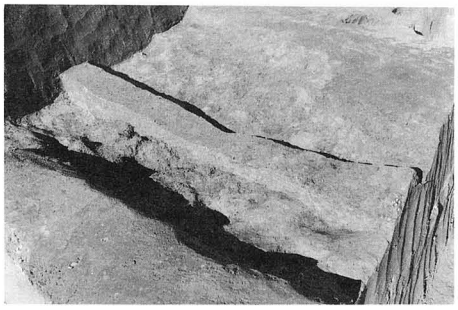
8．6トレンチＳＤ10断面状況（西より）



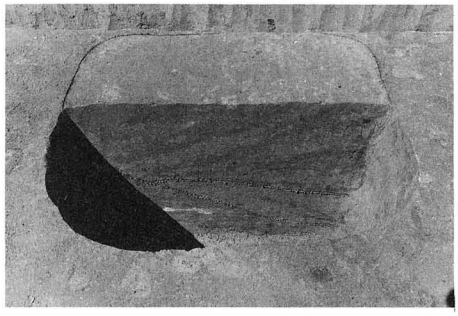
9．6トレンチＳＤ11完掘状況（西より）



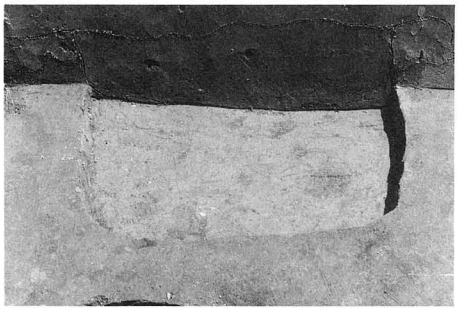
10．6トレンチＳＫ10・11・12断面状況（東より）



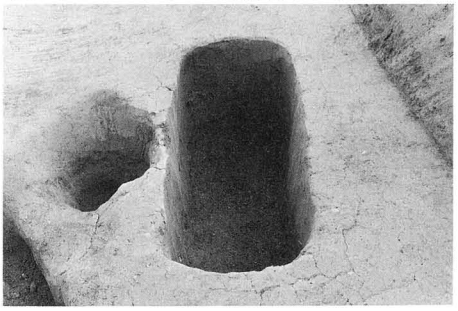
11．6トレンチＳＫ123断面状況（南東より）



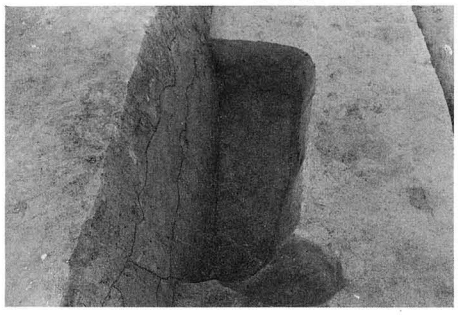
12．7トレンチＳＫ２断面状況（東より）



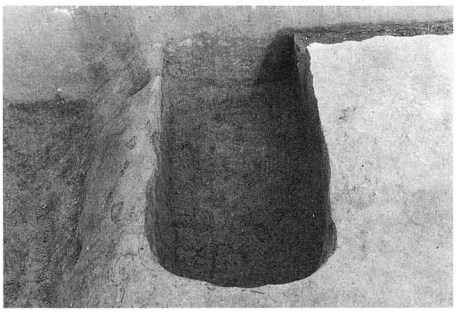
13．7トレンチＳＫ３完掘状況（西より）



14．8トレンチＳＫ14完掘状況（北より）



15．8トレンチＳＫ15完掘状況（南より）



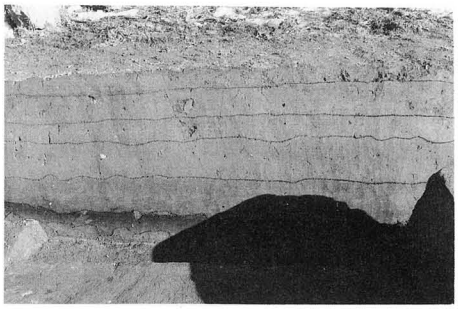
16．8トレンチＳＫ22完掘状況（西より）

17．9トレンチＳＤ17完掘状況（南より）

18．調査風景（５トレンチ）

写真図版16（試掘トレンチ）

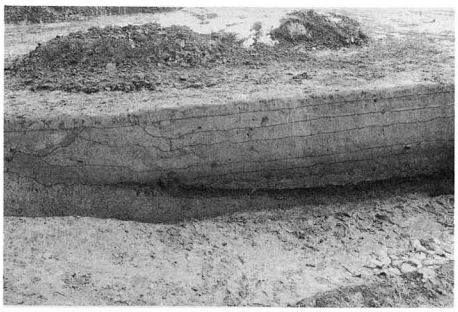
1．10トレンチＳＤ18完掘状況（東より）



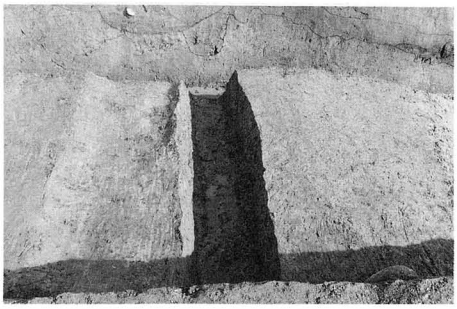
2．13トレンチ東壁断面状況（西より）

3．13トレンチＳＤ19完掘状況（南より）

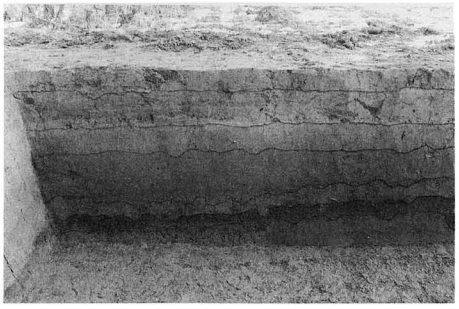
4．14トレンチⅢ層上面小溝状遺構群検出状況（南より）



5．15トレンチ東壁断面状況（西より）

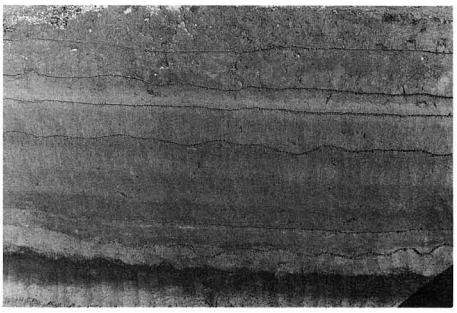


6．15トレンチＳＤ20・29完掘状況（西より）



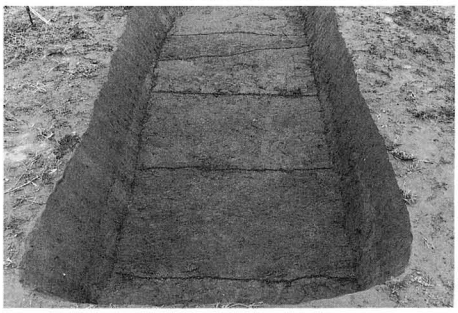
7．16トレンチ東壁断面状況（西より）

8．16トレンチ小溝状遺構完掘状況（南より）

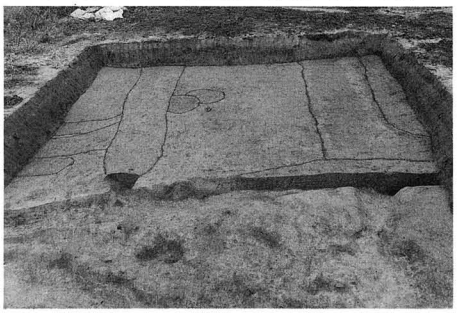


9．17トレンチ東壁断面状況（西より）

10．18トレンチ溝跡検出状況（南より）



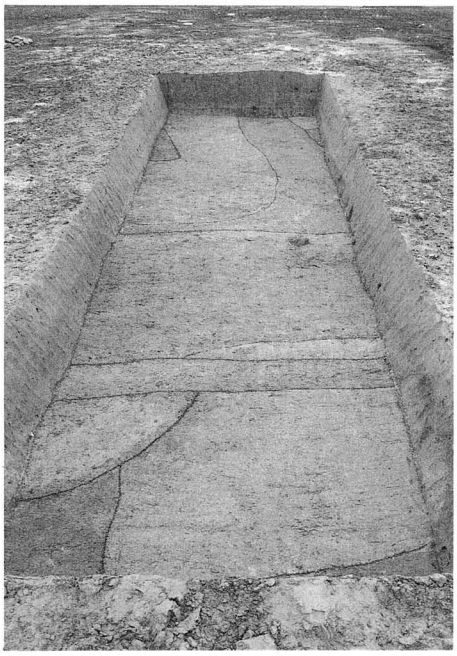
11．19トレンチ溝跡検出状況（南より）



12．20トレンチ溝跡・土坑検出状況（南より）

13．21トレンチ溝跡検出状況（西より）

14．23トレンチ溝跡検出状況（南より）



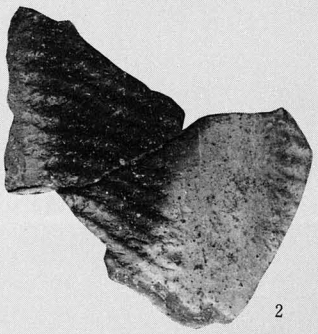
15．24トレンチ溝跡検出状況（東より）

16．25トレンチ溝跡検出状況（南東より）

17．29トレンチ溝跡・土坑検出状況（南より）

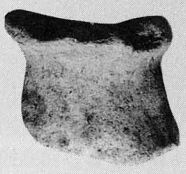
写真図版17（試掘トレンチ）

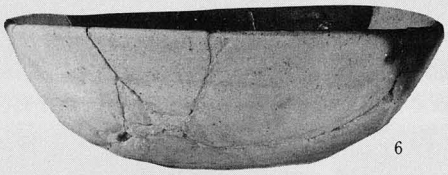
1
（第43図１）


2
（第43図２）

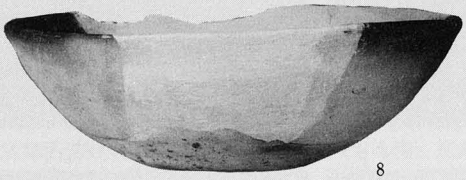
3
（第33図１）

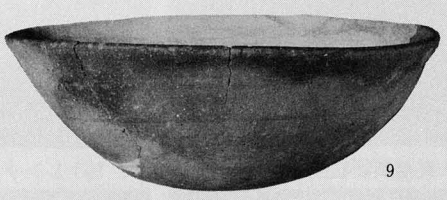
4
（第39図１）

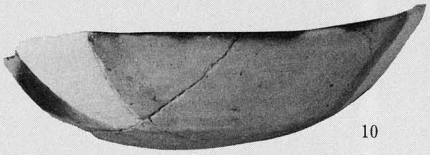

5
（第30図１）


6
（第17図３）

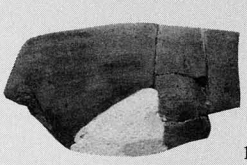
7
（第17図１）

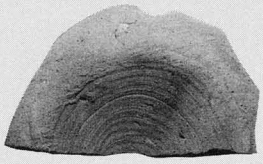

8
（第17図４）

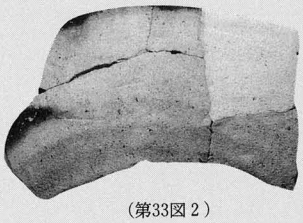

9
（第17図２）

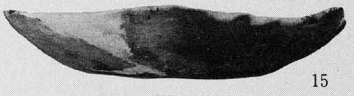

10
（第17図６）

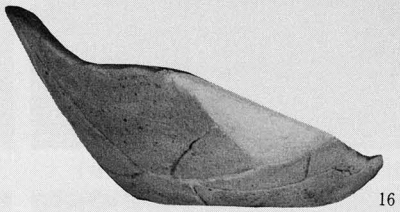
11
（第17図５）

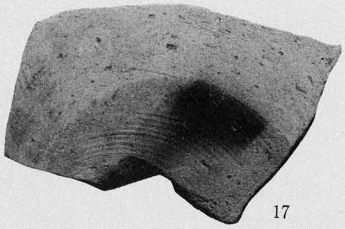

12
（第17図７）

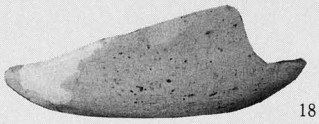

13
（第17図８）

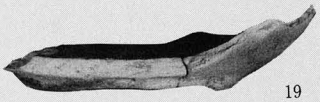

14
（第33図２）


15
（第９図１）


16
（第39図３）


17
（第41図１）


18
（第36図１）

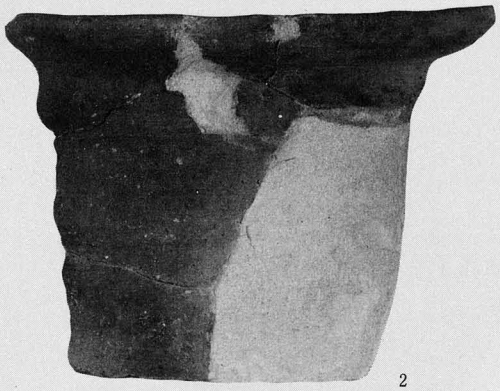

19
（第39図２）

１・２．縄文土器　３・４．弥生土器　５～19．土師器（５．器台　６～18．坏　19．高台付坏）

写真図版18

1

（第17図10）

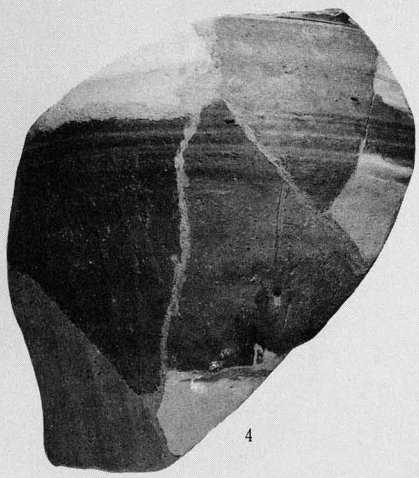


2

（第18図２）

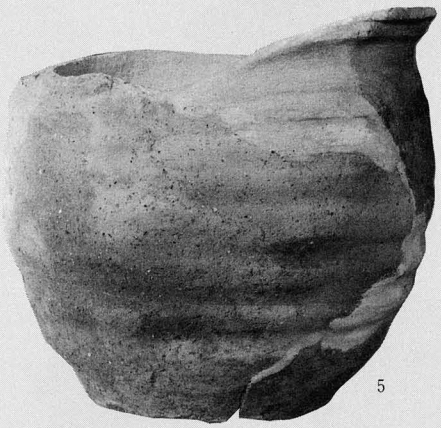
3

（第18図１）



4

（第17図９）

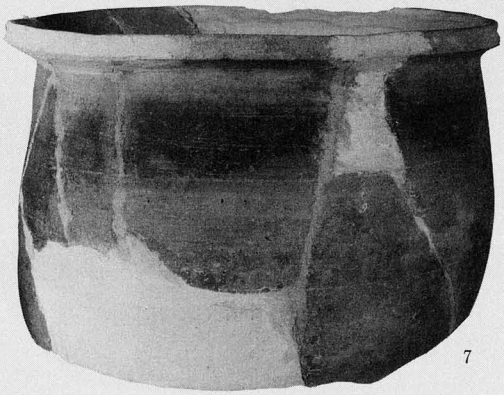


5

（第18図６）

6

（第18図４）

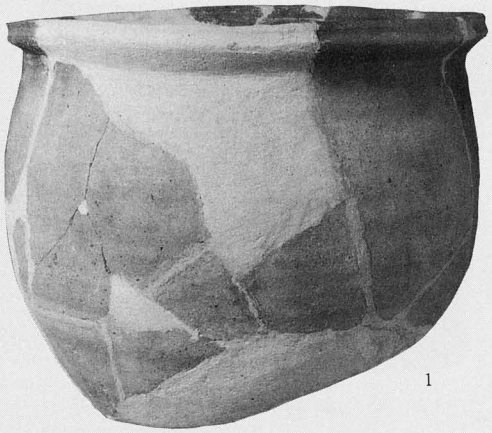


7

（第18図５）

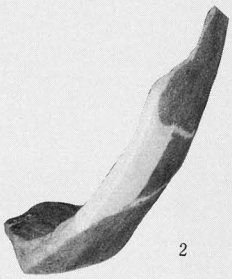
１～７．土師器甕

写真図版19



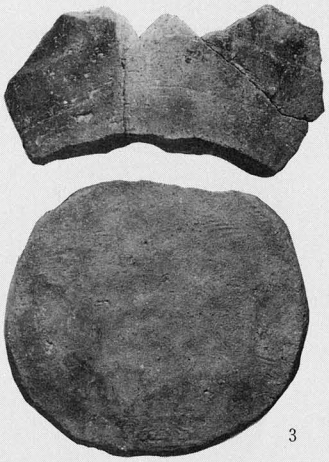
1

（第18図８）



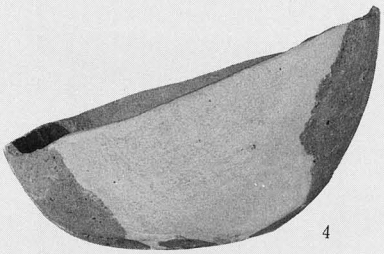
2

（第18図３）



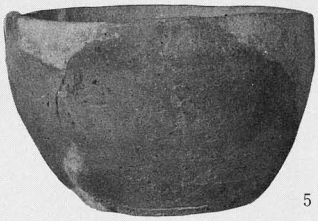
3

（第18図９）



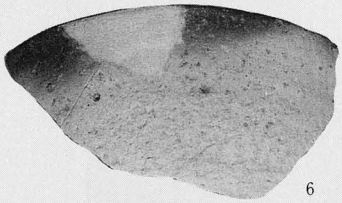
4

（第18図７）



5

（第33図３）



6

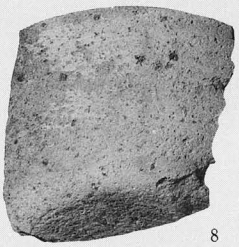
（第39図５）

7

（第33図５）

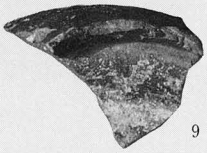
11

（第39図４）



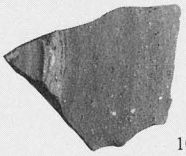
8

（第33図４）



9

（第33図６）

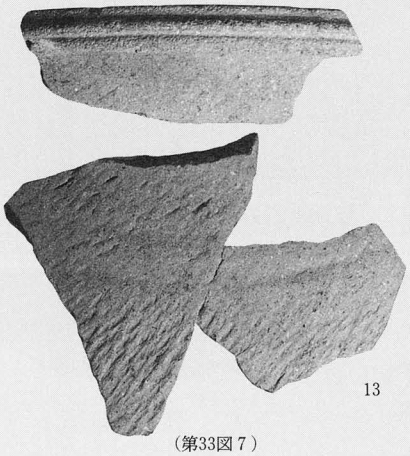


10

（第39図６）

12

（第33図８）

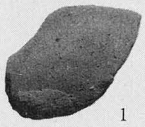


13

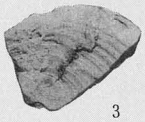
（第33図７）

1～5．土師器甕　6～13．須恵器（6～8．杯　9．高台付坏　10．蓋　11～13．甕）

写真図版20

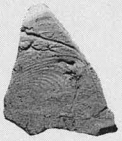

1
（第30図４）

2
（第33図９）

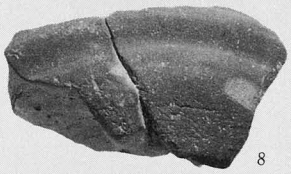

3
（第９図２）

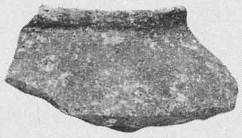
4
（23ＴＩ層）

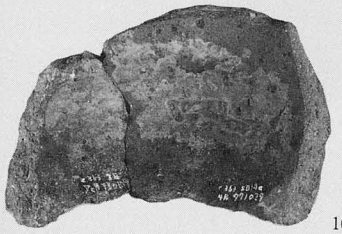
5
（ＳＤ12）

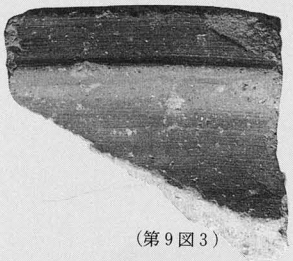

6
（ＳＫ32）

7
（ＳＫ107）

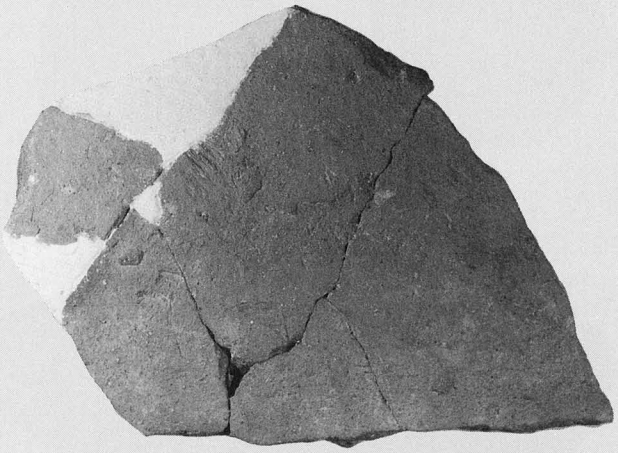

8
（ＳＤ４ａ）


9
（第33図10）

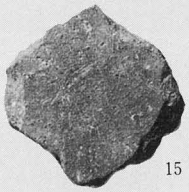

10
（第33図11）

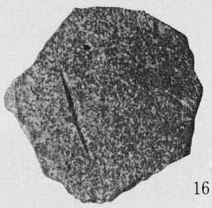

11
（第９図３）

12
（第33図13）


13
（第34図１）

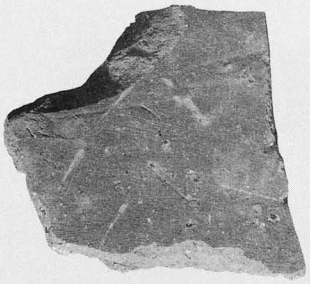
14
（第33図14）


15
（第33図12）


16
（第９図７）

１～７．土師質土器皿　８．瓦質土器鉢　９～16．中世陶器（９・10．在地－白石窯系小壺　11～16．在地甕）

写真図版21

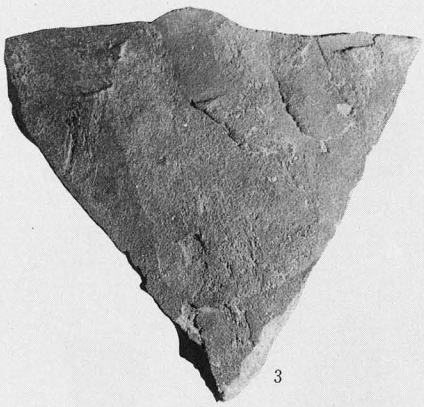


1

(SK30)

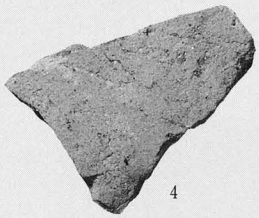
2

(SD4a)



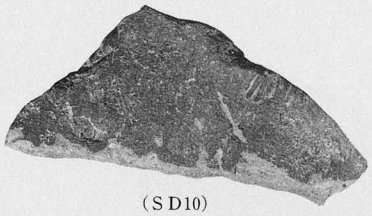
3

(SD4a)



4

(SD5)

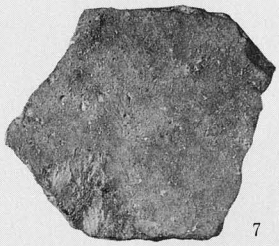


5

(SD10)

6

(SD10)



7

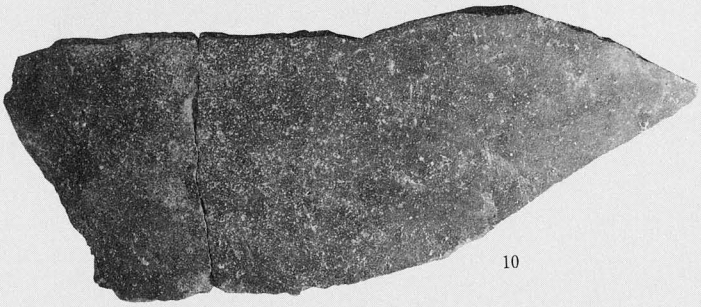
(SD10)

8

(SD10)

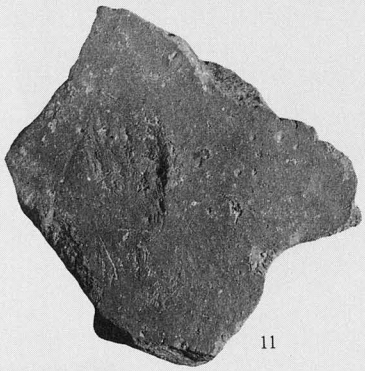
9

(SD10)



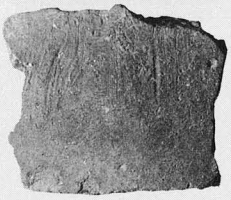
10

(SD10)



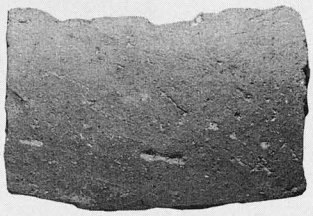
11

(SD10)



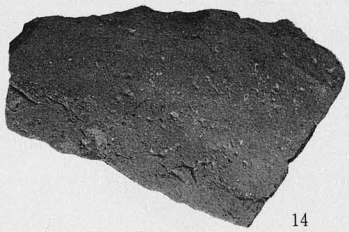
12

(SD10)



13

(SD11)

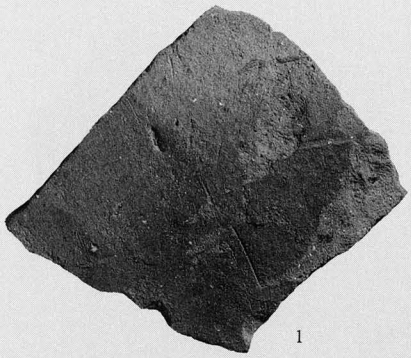


14

(SD11)

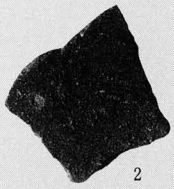
1～14. 中世陶器（在地甕）

写真図版22



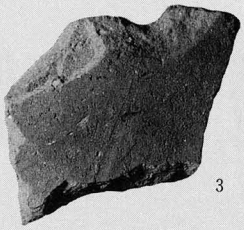
1

（ＳＤ11）



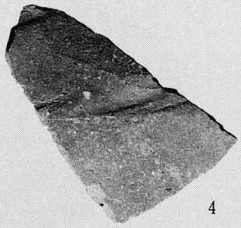
2

（ＳＤ11）



3

（ＳＤ17ａ）



4

（４区Ⅱｂ層）

5

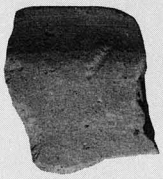
（第34図４）

6

（第39図８）

7

（第39図７）

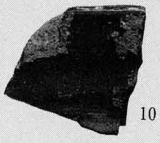


8

（第９図５）

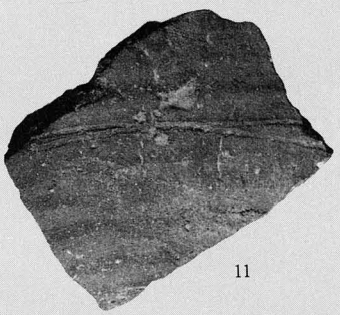
9

（第34図３）



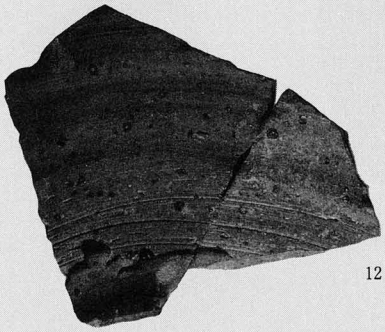
10

（第９図４）



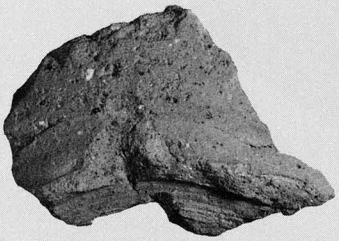
11

（第34図５）



12

（第34図２）



13

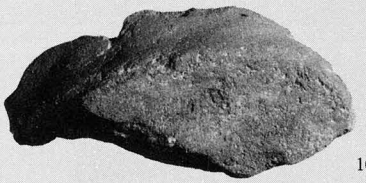
（第９図６）

14

（15ＴⅡｃ層）

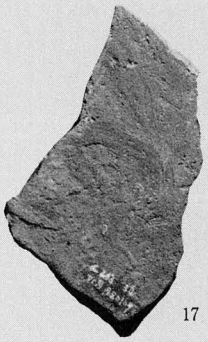
15

（16ＴⅡａ層）



16

（ＳＸ１）

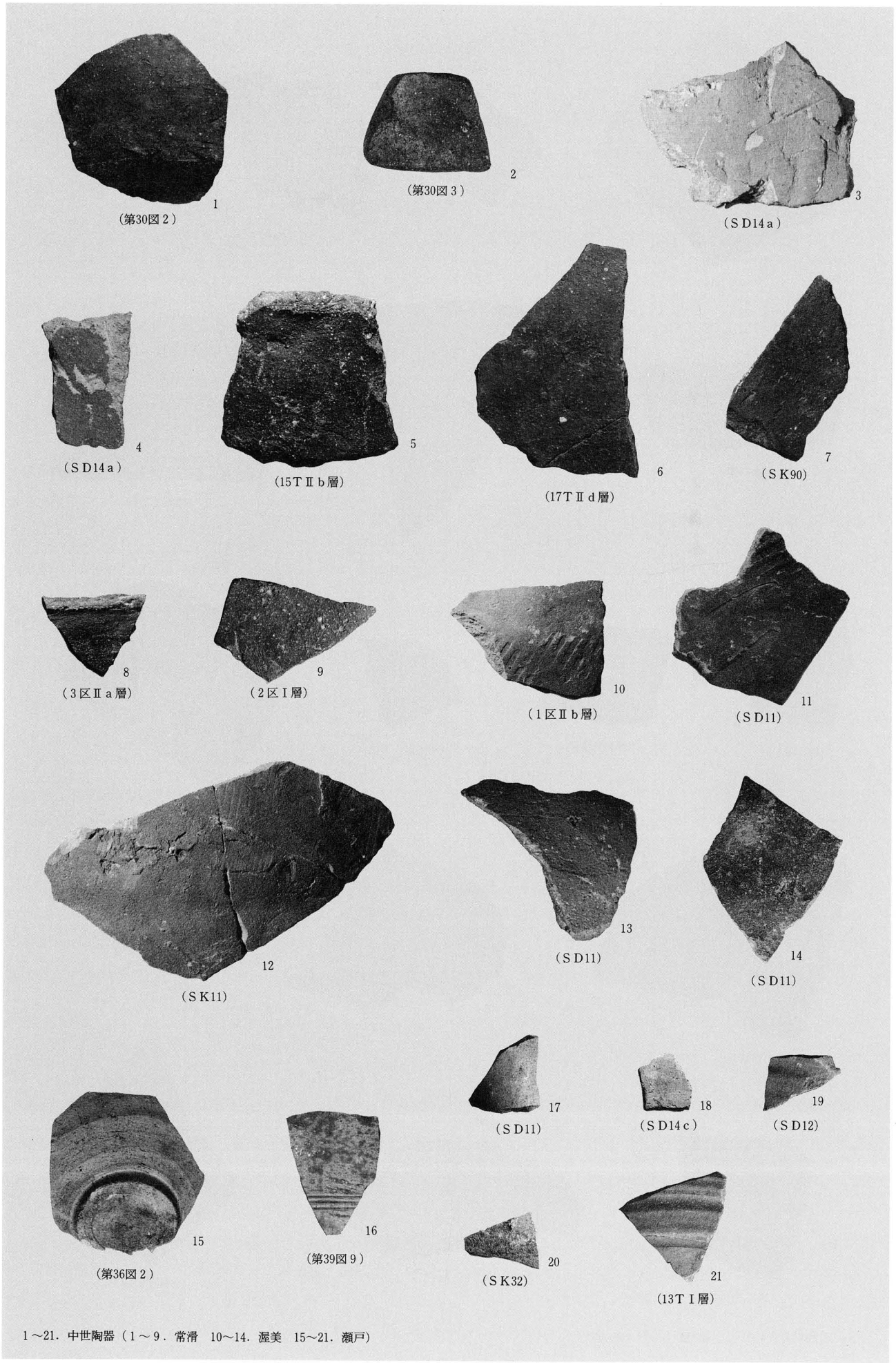


17

（３区Ｖｃ層）

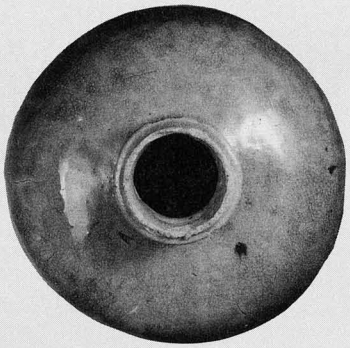
1～17．中世陶器（1～4．在地甕　5～17．在地鉢）

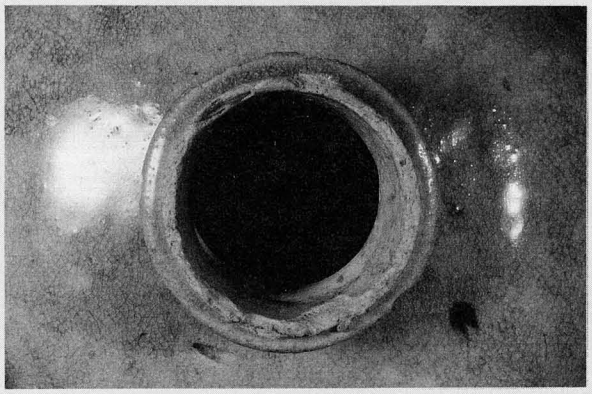
写真図版23



1～21．中世陶器（1～9．常滑　10～14．渥美　15～21．瀬戸）

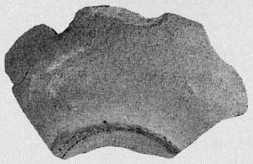
写真図版24

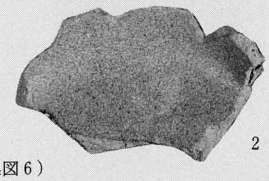




1

（第31図１）



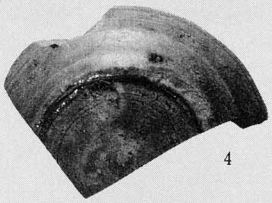


2

（第34図６）

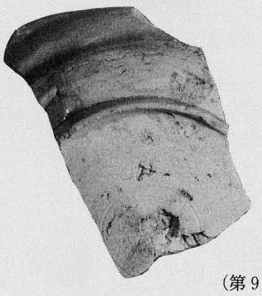
3

（第39図10）



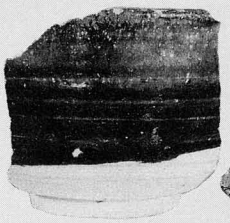
4

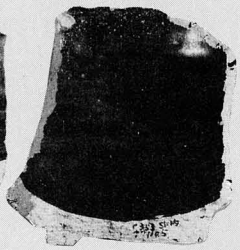
（第９図８）



5

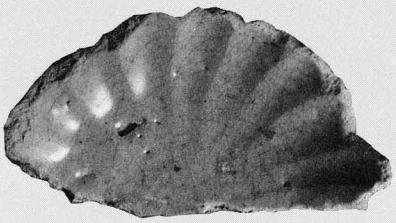
（第９図９）





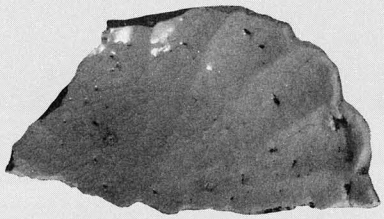
6

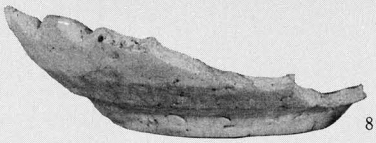
（第34図７）



7

（第９図10）





8

（第34図８）

9

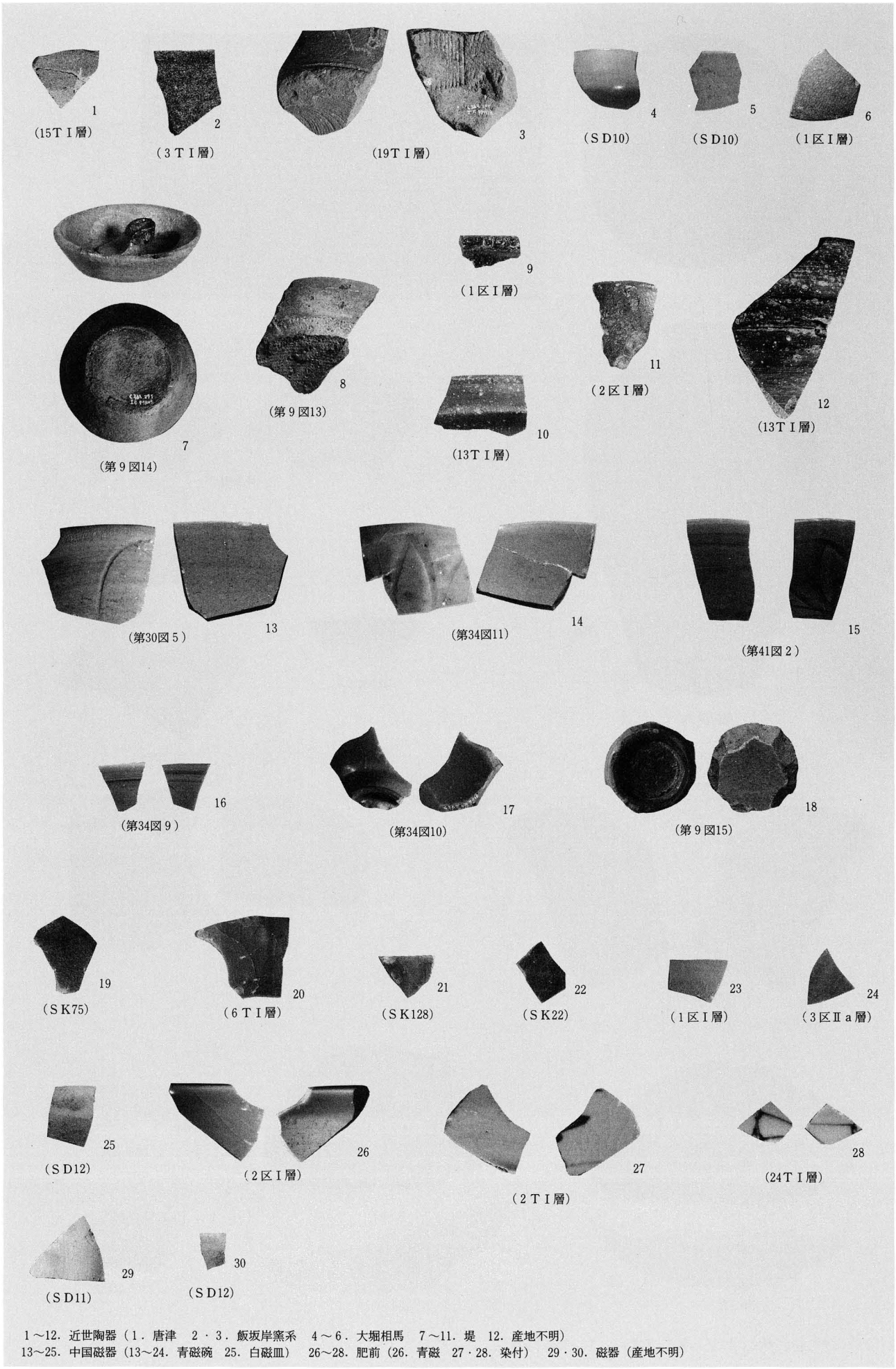
（第９図11）

10

（第９図12）

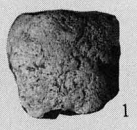
１～10．陶器（１．瀬戸　２～６．瀬戸・美濃　７～10．美濃－志野）

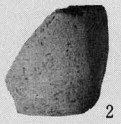
写真図版25



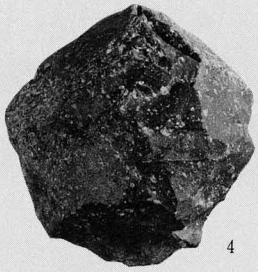
1～12. 近世陶器（1. 唐津　2・3. 飯坂岸窯系　4～6. 大堀相馬　7～11. 堤　12. 産地不明）
13～25. 中国磁器（13～24. 青磁碗　25. 白磁皿）　26～28. 肥前（26. 青磁　27・28. 染付）　29・30. 磁器（産地不明）

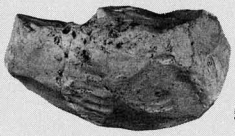
写真図版26


1
(第30図９)


2
(第30図10)

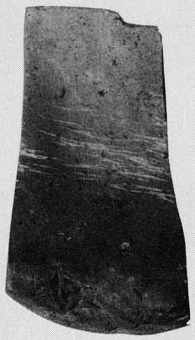
3
(第41図３)


4
(第43図３)

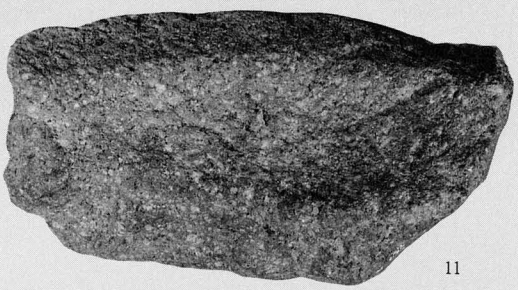

5
(第30図11)

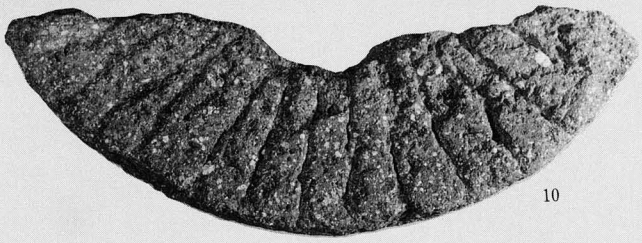
6
(第18図10)

7
(第30図６)


8
(第39図12)

9
(第35図２)

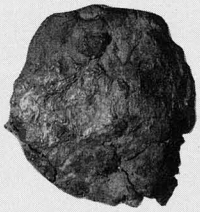

11
(第35図３)

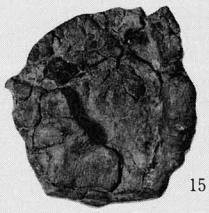

10
(第35図４)

12
(第30図８)

13
(第30図７)

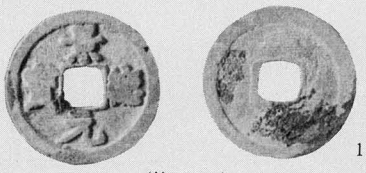
14
(第39図11)

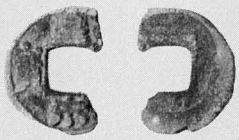


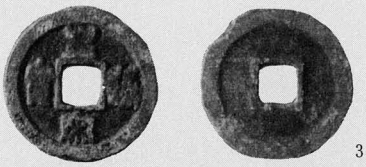

15
(第35図１)

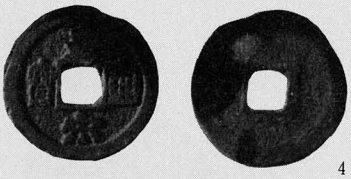
1・2．土錘　3～5．石器（3．不定形石器　4・5．石核）　6～11．石製品（6～8．砥石　9．台石　10．石臼　11．茶臼）
12～15．鉄製品（12．刀子　13・14．釘　15．鍋）

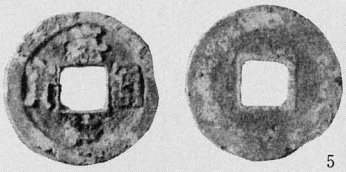
写真図版27

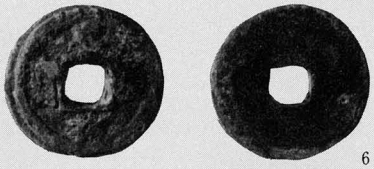

1
（第９図16）

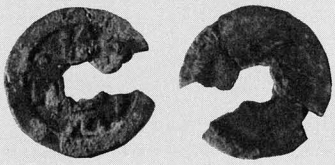

2
（第30図12）

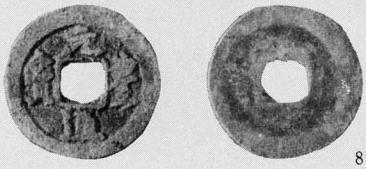

3
（第30図18）

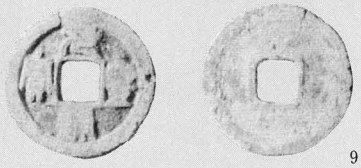

4
（第30図19）

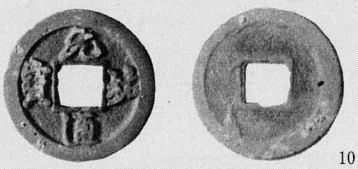

5
（第30図17）

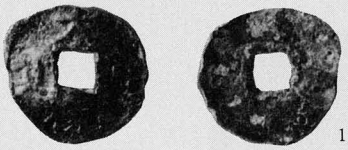

6
（第39図14）

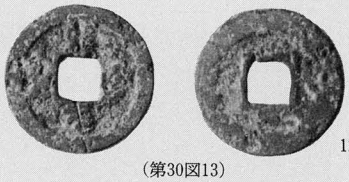

7
（第30図15）


8
（第30図14）


9
（第30図20）


10
（第30図16）


11
（第39図13）


12
（第30図13）

1～12．北宋銭

写真図版28

報告書抄録

ふりがな	やなぎゅうだいはたけいせき
書名	柳生台畑遺跡
副書名	（仮称）柳生小学校建設関係発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第230集
編集者名	佐藤　淳
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目７番１号　ＴＥＬ022－214－8893～8894
発行年月日	1998年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やなぎゅうだいはたけいせき 柳生台畑遺跡	せんだいしたいはくく 仙台市太白区 やなぎゅうあざだいはたけ 柳生字台畑	04100	01363	38°11′50″	140°52′30″	1997.08.01 ～ 1998.01.20	2,200㎡	小学校建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柳生台畑遺跡	屋敷跡 墓跡 水田跡 畑跡	縄文 平安 中世	堀跡、溝跡 掘立柱建物跡 土坑・竪穴建物跡 竪穴住居跡	縄文土器・土師器 須恵器・土師質土器 陶器・磁器 古銭・石製品	さまざまな形態の土坑墓が密集している。小穴に納められた古瀬戸の瓶子が完全な形で出土した

仙台市文化財調査報告書第230集

柳生台畑遺跡

―（仮称）柳生小学校建設関係発掘調査報告書―

平成10年３月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目７番１号
文化財課　TEL 022(214)8893・8894

印刷　針生印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町1-38
TEL 022(288)5011